

辛未、御史大夫崔光遠、賊を駱谷に破る。光遠の行軍司馬王伯倫、判官李椿、二千人を將ゐて、中渭橋を攻め、賊の橋を守る者千人を殺し、勝に乗じて苑門に至る。賊、先に武功に屯する者有り、之を聞きて奔り歸る。苑北に遇ひ、合戦し、伯倫を殺し、椿を擒にし、洛陽に送る。然れども是より、賊、復た武功に屯せず。

賊屢上黨を攻め、常に節度使程千里の敗る所と爲る。蔡希德、復た兵を引き、上黨を圍む。

〔四〕 苑門。長安の苑門。
〔五〕 上黨郡は潞州。

卷の第二百二十

唐紀三十六

肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝中の下

〔一〕 至徳二載、九月丁丑、希德、輕騎を以て城下に至りて戰を挑む。千里、百騎を帥ゐ、門を開きて突出し、之を擒にせんと欲す。會、救至る。騎を收めて退き還る。橋壞れて塹中に墜ち、反つて希德の擒にする所と爲る。仰ぎて從騎に謂つて曰はく、「吾不幸にして此に至るは、天なり。歸りて諸將に語れ、善く守備を爲せ。寧ろ帥を失ふとも、城を失ふ可からず」と。希德、城を攻め、竟に克たず。千里を洛陽に送る。安慶緒、以て特進と爲し、之を客省に囚ふ。

〔二〕 至徳二載。西紀七五七年なり。

郭子儀、回紇の兵の精なるを以て、上に勧め、益其の兵を徴し、以て賊を撃たしむ。懷仁可汗、其子葉護及び將軍帝德等を遣はし、精兵四千餘人を將ゐ、來りて鳳翔に至る。上、葉護を引見し、宴勞賜賚、惟だ其の欲する所のままにす。丁亥、元帥廣平王俶、朔方等の軍及び回紇・西域の衆十五萬を將ゐ、二十萬と號し、鳳翔を發す。俶、葉護を見、約して兄弟と爲る。

葉護大に喜び、倂を謂つて兄と爲す。回紇、扶風に至る。郭子儀、留まりて宴すること三日。葉護曰はく、「國家、急有り、遠く來りて相助く。何ぞ食を以て爲さん」と。宴畢りて即ち行く。日に其軍に羊二百口・牛二十頭・米四十斛を給す。庚子、諸軍俱に發す。壬寅、長安の西に至り、香積寺の北、灃水の東に陳す。李嗣業、前軍と爲り、郭子儀、中軍と爲り、王思禮、後軍と爲る。賊衆十萬、其北に陳す。李歸仁出でて戰を挑む。官軍、之を逐ひ、其陳に逼る。賊軍齊しく進む。官軍却つて賊の乘する所と爲り、軍中驚き亂る。賊争うて輜重に趣く。李嗣業曰はく、「今日、身を以て賊に餌せずんば、軍、才遺無からん」と。乃ち肉袒して長刀を執り、陳前に立ち、大呼して奮撃す。其刀に當る者、人馬俱に碎く。數十人を殺し、陳乃ち稍定まる。是に於て嗣業、前軍を帥る、各長刀を執り、牆の如くにして進み、身、士卒に先だつ。向ふ所摧靡す。都知兵馬使王難得、其裨將を救ふ。賊、之を射て眉に中つ。皮垂れて目を羈る。難得自ら箭を抜き、其皮を掣去す。血流れて面に被る。前み戰うて、已ます。賊、精騎を陳東に伏せ、官軍の後を襲はんと欲す。偵者、之を知る。朔方左廂兵馬使僕固懷恩、回紇を引き、就きて之を撃ち、翦滅して殆んど盡す。賊是に由りて氣索く。李嗣業、又、回紇と與に、賊の陳の後にいで、大軍と夾撃す。午より酉に及び、斬首六萬級、溝壑に填じ、死する者甚だ衆し。賊遂に大に潰ゆ。餘衆走りて城に入る。夜に追ふまで、鼙聲、止まず。僕固懷恩、廣

【一】 香積寺・灃水。此れ皆漢の上林苑の地なり。
 【二】 王難得は鳳翔都知兵馬使たり、時に上、鳳翔に在り、蓋し御營の大將なり。

平王倂に言つて曰はく、「賊、城を棄てて走る。請ふ二百騎を以て之を追ひ、安守忠・李歸仁等を縛取せん」と。倂曰はく、「將軍戰ひ亦疲る。且く休息し、明旦を俟ちて之を圖れ」と。懷恩曰はく、「歸仁・守忠は賊の驍將なり。驟勝ちて而も敗る。此れ天、我に賜ふなり。奈何ぞ之を縱さん。復た衆を得しめば、還つて我が患を爲さん。之を悔ゆとも及ぶ無からん。戰は神速を尙ぶ。何ぞ明旦にせんや」と。倂固く之を止め、營に還らしむ。懷恩固く請ひ、往きて復た反り、一夕に四五たび起つ。遲明に課至る、「守忠・歸仁、張通儒・田乾真と、皆已に通る」と。癸卯、大軍、西京に入る。初め上、速かに京師を得んと欲し、回紇と約して曰はく、「城に克つの日、土地士庶は唐に歸し、金帛子女は皆回紇に歸せん」と。是に至りて、葉護、約の如くせんと欲す。廣平王倂、葉護の馬前に拜して曰はく、「今始めて西京を得たり。若し遽に俘掠せば、則ち東京の人、皆賊の爲めに固守し、復た取る可からざらん。願はくは東京に至り、乃ち約の如くせん」と。葉護・驚躍し、馬を下りて答拜し、跪きて王の足を捧げて曰はく、「當に殿下の爲めに徑に東京に往くべし」と。即ち僕固懷恩と與に、回紇・西域の兵を引き、城南より過ぎ、灃水の東に營す。百姓・軍士・胡虜、倂を見て拜し、皆泣きて曰はく、「廣平王は眞に華夷の主なり」と。上、之を聞き、喜びて曰はく、「朕、及ばざるなり」と。倂、衆を整へて城に

【四】 胡三省曰はく、廣平王若し僕固懷恩の言を用ひしならば、固より新店の戰を假らず、以て徑に東京を取る可かりしならんと。
 【五】 夷の禮、拜跪して足を捧ぐるを以て敬と爲す。
 【六】 灃水。藍田縣境の西北に出で、行きて白鹿原の西を過ぎ、又北して灃水に入る。

入る。百姓老幼、道を夾み、歡呼悲泣す。假、長安に留まり、鎮撫すること三日、大軍を引ききて、東に出で、太子少傅虢王巨を以て西京の留守と爲す。甲辰、捷書、鳳翔に至る。百寮入りて賀す。上、涕泗、頤に交はる。即日、中使啖庭瑤を遣はし、蜀に入り、上皇に奏せしめ、左僕射裴冕に命じ、京師に入り、郊廟に告げ、及び百姓を宣慰せしむ。上、駿馬を以て李泌を長安より召す。既に至り、上曰はく、「朕已に表して上皇に、東歸せんことを請へり。朕當に東宮に還りて復た臣子の職を脩むべし」と。泌曰はく、「表、追ふ可きか」と。上曰はく、「已に遠し」と。泌曰はく、「上皇、來らざらん」と。上驚きて故を問ふ。泌曰はく、「理勢自ら然り」と。上曰はく、「之を爲すこと奈何せん」と。泌曰はく、「今請ふ、更に羣臣の賀表を爲り、馬輓にて留まらんことを請ひ、靈武にて勸進せしより、今功を成すに及ぶまで、聖上、晨昏を思戀す。請ふ速かに京に還り、以て孝養の意を就さしめよ」と言へば則ち可ならん」と。上即ち泌をして表を草せしむ。上、之を読み、泣きて曰はく、「朕始め至誠を以て、萬機を歸さんことを願へり。今、先生の言を聞き、乃ち其失を寤れり」と。立ちどころに中使に命じ、表を奉じて蜀に入らしむ。因つて泌に就きて酒を飲み、榻を同じくして寝ぬ。而して李輔國、契鑰を取りて泌に付せんと請ふ。泌、輔國をして之を掌らしめんと

【七】 東のかた京城の門を出で洛陽に向ふ。

【八】 啖は姓なり。

【九】 李泌、時に軍に従つて長安に在り。

【一〇】 馬輓に留まらんことを請ひ、靈武に勸進せしこと、竝に二百十八卷至德元載に見ゆ。

【一一】 泌が契鑰を掌ること、二百十八卷前年九月に見ゆ。今輔國に付し、宮禁の權、盡く之に歸す。

請ふ。上、之を許す。泌曰はく、「臣、今、徳に報ゆること足れり。復た間人と爲らば、何の樂か之に如かん」と。上曰はく、「朕、先生と、累年、憂患を同じくし、今方めて娛樂を相同じくす。奈何ぞ遽に去らんと欲するか」と。泌曰はく、「臣に五つの留まる可からざる有り。願はくは陛下、臣が去るを聽し、臣を死より免れしめよ」と。上曰はく、「何の謂ぞや」と。對へて曰はく、「臣、陛下に遇ふこと太だ早く、陛下、臣に任すること太だ重く、臣を寵すること太だ深く、臣の功太だ高く、迹太だ奇なり。此れ其の留まる可からざる所以なり」と。上曰はく、「且く眠れ。異日、之を議せん」と。對へて曰はく、「陛下、今、臣の榻に就きて臥するすら、猶ほ請を得ず。況んや異日、香案の前をや。陛下、臣が去るを聽さずんば、是れ臣を殺すなり」と。上曰はく、「意はざりき、卿が朕を疑ふこと此の如くならんとは。豈に朕の如くにして卿を辨殺する有らんや。是れ直に朕を以て、句踐と爲すなり」と。對へて曰はく、「陛下、臣を辨殺せず。故に、臣歸らんことを求む。若し其れ既に辨せば、臣安んぞ敢て復た言はんや。且つ臣を殺す者は、陛下に非ざるなり。乃ち五不可なり。陛下、曩日臣を待つこと此の如くなれども、臣、事に於て、猶ほ敢て言はざりし者有り。況んや天下既に安きをや。臣敢て言はんや」と。上、良久しくして曰

【一三】 唐の制、凡そ朝日、殿上に、鋪展躡席熏爐香案を設け、皇帝、御座に升り、宰執、香案の前に當りて事を奏す。

【一四】 范蠡、既に越王句踐と、吳の恥を報ず。蠡乃ち五湖に扁舟し、大夫文種に書を遣りて曰く、句踐は長頸烏喙、與に患難を同じくす可く、與に安樂を同じくす可からずと。文種、書を見、遂に疾と稱す。句踐、文種に死を賜ふ。

【一五】 北伐の謀云云。建寧王をして嬖檀より范陽を取らしむるの策に従はざるを謂ふ。肅

はく、「卿、朕が卿の北伐の謀に従はざるを以てか」と。對へて曰はく、「非なり。敢て言はざりし所の者は、乃ち建寧なるのみ」と。上曰はく、「建寧は朕の愛子、性英果にして、艱難の時、功有りき。朕豈に之を知らざらんや。但だ此に因りて小人の教ふる所と爲り、其兄を害し繼嗣を圖らんと欲す。朕、社稷の大計を以て、已むを得ずして之を除けり。卿、細に其故を知らざるか」と。對へて曰はく、「若し此心有らば、廣平當に之を怨むべし。廣平、毎に臣と其冤を言ひ、輒ち流涕嗚咽す。臣今必ず陛下を辭して去らんとし、始めて敢て之を言ふのみ」と。上曰はく、「渠、嘗て夜、廣平を捫り、意、害を加へんと欲せり」と。對へて曰はく、「此れ皆讒人の口に出づ。豈に建寧の孝友聰明にして肯て此を爲す有らんや。且つ陛下、昔、建寧を用ひて元帥と爲さんと欲す。臣、廣平を用ひんことを請へり。建寧若し此心有らば、當に深く臣を憾むべし。而るに臣を以て忠と爲し、益、相親善せり。陛下、此を以て、其心を察す可し」と。上乃ち泣下りて曰はく、「先生の言、是なり。既往は咎めず。朕、之を聞くを欲せず」と。泌曰はく、「臣が之を言ふ所以は、既往を咎むるに非ず、乃ち陛下をして將來を慎ましめんと欲するのみ。昔、天后、四子有り。長は太子弘と曰ふ。天后方に制を稱せんことを圖り、其の聰明なるを惡み、之を醜殺し、次子

宗、意を以て之を言ふ。
 〔一五〕 艱難の時云云。馬嵬にて留らんことを勧め、及び北のかた靈武に赴き、血戦して以て上を衛りしをいふ。事、二百十八卷元載六月に見ゆ。
 〔一六〕 事、前卷本年正月に見ゆ。
 〔一七〕 事、二百十八卷元載九月に見ゆ。
 〔一八〕 論語八佾篇の孔子の言を引く。
 〔一九〕 二百二卷高宗上元二年に見ゆ。

雍王賢を立てぬ。賢、内に憂へ懼れ、黃臺瓜の辭を作り、以て天后を感悟せんことを冀へり。天后、聽かず。賢、卒に黔中に死せり。其辭に曰はく、「瓜を黃臺の下に種ゑ、瓜熟して子離離たり。一たび摘みて瓜をして好からしめ、再び摘みて瓜をして稀ならしむ。三たび摘むは猶ほ可と爲す。四たび摘みて蔓を抱きて歸る」と。今、陛下已に一たび摘めり、慎みて、再び摘む無かれ」と。上、愕然として曰はく、「安んぞ是れ有らんや。卿、是辭を録せよ。朕當に紳に書すべし」と。對へて曰はく、「陛下但だ之を心に識せ。何ぞ必ずしも外に形はさんや」と。是時、廣平王、大功有り。良娣、之を忌み、潛に流言を構ふ。故に泌の言、之に及ぶ。

〔二〇〕 賢廢せらるること、二百二卷永隆元年に見ゆ。死すること二百三卷武后光宅元年に見ゆ。
 〔二一〕 李泌、肅・代・德三朝に歷事し、皆、能く人の言ひ難き所を言ふ、奇士なり。
 〔二二〕 興平軍。時に王難得領す。

郭子儀、蕃漢の兵を引き、賊を追うて潼關に至る。斬首五千級。華陰・弘農二郡に克つ。關東、俘百餘人を獻す。赦して皆之を斬らしむ。監察御史李勉、上に言つて曰はく、「今、元惡未だ除かず、賊の汚す所と爲る者、天下に半す。陛下の龍興せるを聞き、威、心を洗うて以て聖化を承けんことを思ふ。今悉く之を誅せば、是れ之を驅りて、賊に従はしむるなり」と。上、遽に之を赦さしむ。
 冬十月丁未、啖庭瑤、蜀に至る。
 壬子、興平軍・奏す、「賊を武關に破り、上洛郡に克てり」と。

吐蕃、西平を陷る。

尹子奇、久しく睢陽を圍む。城中、食盡き、城を棄てて東に走らんと議す。張巡・許遠謀りて以爲

はく、「睢陽は江淮の保障なり。若し之を棄てて去らば、賊必ず勝に乗じて長驅せん。是れ江淮無き

なり。且つ我が衆饑羸す。走るとも必ず達せざらん。古者、戦國の諸侯すら、尙ほ相救恤せり。況ん

や密邇せる羣帥をや。如かじ堅守して以て之を待たんにば」と。茶紙既に盡き、遂に馬を食ふ。馬

盡き、雀を羅し、鼠を掘る。雀鼠又盡く。巡、愛妾を出し、殺して以て士

に食はしむ。遠も亦其奴を殺す。然る後、城中の婦人を括して之を食ふ。

繼ぐに男子の老弱なるを以てす。人、必ず死せんことを知れども、叛く

者有る莫し。餘す所纔に四百人。癸丑、賊、城に登る。將士病みて、戦ふ

能はず。巡、西に向ひ再拜して曰はく、「臣、力竭きたり。城を全くする能

はず。生きて既に以て陛下に報ゆる無し。死して當に厲鬼と爲りて以て賊を殺すべし」と。城遂に

陥り、巡・遠俱に執へらる。尹子奇、巡に問うて曰はく、「聞く、君、戦ふ毎に、皆裂け齒碎くと。何

ぞや」と。巡曰はく、「吾が志、逆賊を呑む。但だ力、能はざるのみ」と。子奇、刀を以て其口を扶り

て之を見る。餘す所纔に三四。子奇、其の爲す所を義とし、之を活かさんと欲す。其徒曰はく、「彼

は節を守る者なり。終に、用を爲さざらん。且つ士の心を得たり。之を存せば、將に後の患と爲らん

【三】西平郡は鄯州。
【四】春秋の列國同盟し、急有るときは相救恤するを謂ふ。
【五】羣帥とは、張鎬・尙衡・許叔冀等をいふ。
【六】厲。鬼の歸する所無き者を厲と爲す。

とす」と。乃ち南霽雲・雷萬春等三十六人を并せて、皆之を斬る。巡且に死せんとし、顔色、亂れず、

揚揚として常の如し。許遠を洛陽に生致す。巡初め睢陽を守るや、時に卒僅に萬人。城中の居人、亦

且に數萬ならんとす。巡、一見して姓名を問ひ、其後、識らざる者無し。前後大小の戦、凡そ四百餘、

賊卒を殺すこと十二萬人。巡、兵を行るに、古法に依らず、戦陳を教ふるに、

を以て之を教へしむ。人或は其故を問ふ。巡曰はく、「今、胡虜と戦ふ。雲

合鳥散し、變態、恒ならず。數歩の間に、勢、同異有り。機に臨み猝に應

ずること、呼吸の間に在り。而るに動もすれば大將に詢へば、事、相及ば

ず。兵の變を知る者に非ざるなり。故に吾、兵をして將の意を識り、將を

して士の情を識らしむ。之に投じて往き、手の指を使ふが如く、兵將相習

ひ、人、自ら戦を爲す。亦可ならずや」と。兵を興してより、器械甲仗、

皆之を敵に取り、未だ嘗て自ら修めず。戦ふ毎に、將士或は退き散すれば、

巡、戦所に立ち、將士に謂つて曰はく、「我、此を離れず。汝、我が爲めに

還りて之を決せよ」と。將士、敢て還りて死戦せざるは莫く、卒に敵を破る。又、誠を推して人を待ち、

疑隠する所無し。敵に臨み變に應じ、奇を出すこと窮り無し。號令明かに、賞罰信に、衆と甘苦寒暑

を共にす。故に下争うて死力を致す。張鎬、睢陽の圍急なるを聞き、道を倍して亟かに進み、

浙

【七】本將。本部の將をいふ。
【八】張鎬が賀蘭進明に代ること前卷八月に見ゆ。
【九】崔渙、浙東に在り。李希言、浙西に在り。李成式、淮南に在り。北海は尙ほ賊將能元皓の據る所と爲る。然れども去年、已に北海節度使を置く。是れ未だ北海を復せずとも、已に北海の帥を置きしなり。

東・浙西・淮南・北海の諸節度及び譙郡の太守閻丘曉に檄し、共に之を救はしむ。曉素より傲狠にして、鎬の命を受けず。鎬至るに比びて、睢陽城已に陥りて三日なり。鎬、曉を召し、之を杖殺す。

張通儒等、餘衆を收め、(三)走りて陝を保つ。安慶緒、悉く洛陽の兵を發し、其御史大夫嚴莊をして、之を將ゐて通儒に就き、以て官軍を拒がしむ。

(三)舊兵を并せて歩騎猶ほ十五萬。己未、廣平王、(三)曲沃に至る。回紇の葉護、其將軍鼻施吐撥裴羅等をして、軍を引き、南山に旁うて伏を搜らしめ、因つて軍を嶺北に駐む。郭子儀等、賊と(三)新店に遇ふ。賊、山に依りて陳す。子儀等初め之と戦ひ、利あらず。賊、之を逐うて山を下る。回紇、南山より其背を襲ひ、黃埃の中に於て十餘矢を發す。賊驚き顧みて曰はく、

『回紇至る』と。遂に潰ゆ。官軍、回紇と、夾みて之を撃つ。賊大に敗れ、僇尸、野を蔽ふ。嚴莊、張通儒等、陝を棄てて東に走る。廣平王俶・郭子儀、陝城に入る。僕固懷恩等、道を分ちて之を追ふ。嚴莊先づ洛陽に入り、安慶緒に告ぐ。庚申夜、慶緒、其黨を帥ゐ、苑門より出で、河北に走る。獲る所の唐の將哥舒翰・程千里等三十餘人を殺して去る。許遠、偃師に死す。壬戌、廣平王俶、東京に入る。回紇の意猶ほ未だ厭かず。俶、之を患ふ。父老、羅錦萬匹を(三)率して以て回紇に賂はん

と請ふ。回紇乃ち止む。

(三)成都の使還る。上皇の詔に曰はく、『當に我に劍南一道を與へ、自ら奉ずべし。復た來らじ』と。上・憂懼し、爲す所を知らず、(三)後の使者至る。言ふ、『上皇、初め、上の・東宮に歸らんことを請ふの表を得、彷徨として・食する能はず、歸らざらんと欲す。羣臣の表至るに及び、乃ち大に喜び、食を命じ樂を作し、(三)行日を定めき』と。上、李泌を召し、之に告げて曰はく、『皆、卿の力なり』と。泌、山に歸らんことを求めて・已ます。上固く之を留むれども、得る能はず。乃ち(三)衡山に歸るを聽す。郡縣に敕して、之が爲めに室を山中に築き、三品の料を給せしむ。

癸亥、上、鳳翔を發し、太子太師韋見素を遣はし、蜀に入り、上皇を奉迎せしむ。

乙丑、郭子儀、左兵馬使張用濟・右武鋒使渾釋之を遣はし、兵を將ゐて河陽及び河内を取らしむ。嚴莊來り降る。陳留の人、尹子奇を殺し、郡を擧げて降る。田承嗣、來瑱を潁川に圍み、亦使を遣はして來り降る。郭子儀、之に應ずること緩なり。承嗣復た叛き、武令珣と、皆河北に走る。制して瑒を以て(三)河南節度使と爲す。

丙寅、上、(三)望賢宮に至り、東京の捷奏を得たり。丁卯、上、西京に入る。百姓、國門を出でて奉

【三】長安より東に走つて陝を保つ。

【三】舊兵。張通儒等が領する所の西京より東に走る兵をいふ。

【三】曲沃。此れ春秋の晉の莊叔の封ぜらる所の曲沃に非ず。弘農・靈寶二縣の間に在るべし。水經注に、弘農縣の東十三里に好陽亭あり、又、東に曲沃城有りと。今の河南省河洛道陝縣の曲沃鎮。

【三】新店。陝城の西に在り。

【三】苑門。東都の苑門。

【三】率。一本には田に作る。新唐書傳には以に作る。

【三六】成都の使。啖庭瑤なり。

【三七】羣臣の賀表を奉する中使。繼ぎて還るなり。

【三八】行日を定む。東行して京に歸るの日を定むるなり。

【三九】衡山。衡陽郡衡山縣の西三十里に在り。南嶽なり。

【四〇】一本には河南を淮南に作る。新舊唐書本傳及び紀事本末同じ。

【四一】望賢宮。咸陽縣の東數里に在り。

迎す。二十里、絶えず。舞躍して萬歳と呼び、泣く者有り。上入りて大明宮に居る。御史中丞崔器、百官の賊の官爵を受くる者をして、皆、巾を脱し徒跣し、含元殿の前に立ち、膺を搏ち頓首して罪を請はしめ、之を環らすに兵を以てし、百官をして臨みて之を視しむ。

太廟、賊の焚く所と爲る。上、素服して廟に向つて哭すること三日。是日、上皇、蜀郡を發す。安慶緒走りて鄴郡に保す。鄴郡を改めて安成府と爲し、天成と改元す。

從騎、三百に過ぎず、歩卒、千人に過ぎず。諸將阿史那承慶等、散じて常山・趙郡・范陽に投ず。旬日の間に、蔡希德は上黨より、田承嗣は潁川より、武令珣は南陽より、各所部の兵を帥りて之に歸す。又、河北の諸郡の人を召募し、衆、六萬に至る。軍聲復た振ふ。

廣平王俶が東京に入るや、百官、安祿山父子の官を受くる者、陳希烈等三百餘人、皆素服し悲泣して罪を請ふ。俶、上の旨を以て之を釋し、尋ぎて勅して西京に赴く。己巳、崔器、朝堂に詣りて罪を請はしむること、西京の百官の儀の如くし、然る後收へて大理京兆の獄に繋ぐ。其府縣の由る所、祇承人等、賊の驅使追捕を受くる者、皆收へて之を繋ぐ。初め汲郡の甄濟、操行有り、青巖山に隱居す。安祿山、采訪使と爲るや、奏

【四二】高宗の咸亨元年、蓬萊宮を改めて大明宮と爲す。即ち東内なり。

【四三】含元殿。東内の前殿なり。丹鳳門の内に當る。

【四四】朝堂。此れ東内の朝堂なり。含元殿の左右に在り、左なるを東朝堂、右なるを西朝堂と曰ふ。

【四五】由る所の人は監典する所あり、祇承人は指呼を聽き、使令に給するのみ。

【四六】青巖山。汲郡隋興縣に蒼巖山有り。隋興縣は唐の時に當に省きて汲縣に入れしなるべし。

して書記を掌らしむ。濟、安祿山が異志有るを察し、詐りて風疾を得、昇して家に歸る。祿山、反するや、蔡希德をして、行刑者二人を引き、刀を封じて之を召さしむ。濟、首を引きて刀を待つ。希德、實病を以て祿山に白す。後、安慶緒も亦人をして強ひて昇して東京に至らしむ。月餘にして、會、廣平王俶、東京を平ぐ。濟起ちて軍門に詣りて諷を上る。俶遣りて京師に詣らしむ。上、命じて之を三司に館せしめ、賊の官爵を受くる者をして列拜せしめ、以て其心を愧ぢしむ。濟を以て祕書郎と爲す。國子司業蘇源明、病と稱し、祿山の官を受けず。上、擢て考功郎中・知制誥と爲す。壬申、上、丹鳳門に御し、制を下し、士庶の賊の官爵を受け、賊の用を爲す者は、三司をして條件聞奏せしめ、其の戰に因つて虜にせられ、或は居る所密近し、因つて賊と往來する者は、皆、自首して罪を除くを聽し、其子女の賊の汚す所と爲る者は、問ふ勿からしむ。癸酉、回紇の葉護、東京より還る。上、百官に命じ、之を長樂驛に迎へしむ。上、與に宣政殿に宴す。葉護、奏して以はく、「軍中、馬少し。請ふ其兵を沙苑に留め、自ら歸りて馬を取り、還りて陛下の爲めに范陽の餘孽を掃除せん」と。上賜うて之を遣る。

【四七】此れ天寶年間のこと。

【四八】時に三司をして賊の官爵を受くる者を按ぜしむ。因つて濟を三司署舎に館し、賊の官爵を受くる者をして之を羅拜せしむ。

【四九】賊の官爵を受くる者の心を愧ぢしむ。

【五〇】丹鳳門。東内の端門なり。樓を丹鳳樓と曰ふ。

【五一】長樂驛。滻東長樂坡に在り。

【五二】宣政殿。含元殿より宣政門に入り、宣政殿と爲す。東内の中朝なり。

【五三】沙苑。馮翊の渭曲に在り。

十一月、廣平王俶・郭子儀、東京より來る。上、子儀を勞ひて曰はく、『吾の家國は、卿に由りて再造せり』と。

張鎰、魯吳・來瑱・吳王祗・李嗣業・李奂の五節度を帥み、河南・河東の郡縣を徇へ、皆之を下す。惟だ能元皓、北海に據り、高秀巖、大同に據り、未だ下らず。

己丑、回紇の葉護を以て司空・忠義王と爲し、歲ごとに回紇に絹二萬匹を遣り、朔方軍に就きて之を受けしむ。

嚴莊を以て司農卿と爲す。

上の・彭原に在るや、更めて粟を以て九廟主を爲る。庚寅、長樂殿に朝享す。

丙申、上皇、鳳翔に至る。從兵六百餘人。上皇・命じて、悉く甲兵を以て郡庫に輸せしむ。上、精騎三千を發して奉迎す。十二月丙午、上皇、咸陽に至る。上、法駕を備へて、望賢宮に迎ふ。上皇、宮南の樓に在り。上、黃袍を釋き、紫袍を著、樓を望みて馬より下り、趨り進みて樓下に拜舞す。上皇、樓を降り、上を撫して泣く。上、上皇の足を捧げ、嗚咽して・自ら勝へず。上皇、黃袍を索め、自ら上の爲めに之を著す。上、地に伏し頓首して固辭す。上皇曰はく、『天數・人心、皆汝に歸す。朕をして餘齒を保養するを得

【五四】北海。河南道に屬す。
【五五】大同。河東道に屬す。
【五六】粟を以て云云。禮に、虞主は桑を用ひ、練主は栗を用ふ。栗主を作るときは桑主を埋む。上皇、蜀に幸し、九廟の主、之を賊手に委め、故に彭原に更めて粟を以て之を爲る。
【五七】長樂殿は大明宮の中に在り。

しめば、汝の孝なり』と。上、已むを得ずして之を受く。父老、仗外に在り、歡呼し且つ拜す。上、仗を開かしめ、千餘人を縱す。入りて上皇に謁して曰はく、『臣等、今日復た二聖相見るを睹る。死すとも恨無し』と。上皇、肯て正殿に居らずして曰はく、『此れ天子の位なり』と。上、固く請ひ、自ら上皇を扶けて殿に登る。尙食、食を進むるや、上、品嘗して之を薦む。丁未、將に行宮を發せんとす。上、親ら上皇の爲めに馬を習はせ、而して之を上皇に進む。上皇、馬に上る。上、親ら鞍を執り行くこと數歩。上皇、之を止む。上、馬に乗りて前引し、敢て馳道に當らず。上皇、左右に謂つて曰はく、『吾、天子たること五十年、未だ貴しと爲さず。今、天子の父と爲り、乃ち貴きのみ』と。左右、皆、萬歳と呼ぶ。上皇、開遠門より、大明宮に入り、含元殿に御し、百官を慰撫し、乃ち長樂殿に詣り、九廟主に謝し、慟哭すること之を久しくす。即日、興慶宮に幸し、遂に之に居る。

【五八】車駕の在る所、衛士、仗を立つ。
【五九】此れ行宮の正殿なり。
【六〇】品品必ず嘗めて而る後之を進む。
【六一】開遠門。長安城の西面北來の第一門。
【六二】獄を按ずるに因りて、特に此官を置く。

上・累表し、位を避けて東宮に還らんと請ふ。上皇、許さず。

辛亥、禮部尙書李峴・兵部侍郎呂誼を以て詳理使と爲し、御史大夫崔器と、共に陳希烈等の獄を按せしむ。峴、殿中侍御史李栖筠を以て詳理判官と爲す。栖筠多く平恕を務む。故に人、皆、誼・器の刻深なるを怨み、而して峴獨り美譽を得たり。

戊午、上、丹鳳樓に御し、天下に赦す。惟だ安祿山と同じく反し、及び李林甫・王鉞・楊國忠の子孫は、免例に在らず。廣平王俶を立てて楚王と爲し、郭子儀に司徒を、李光弼に司空を加ふ。自餘の蜀郡・靈武の扈從して功を立てたるの臣、皆、階を進め爵を賜ひ、食邑を加ふること差有り。李愔・盧奔・顏杲卿・袁履謙・許遠・張巡・張介然・蔣清・龐堅等、皆、贈官を加へらる。其子孫、

戦亡の家に、復二載を給す。郡縣、來載の租庸、三分して一を蠲く。近ごろ改むる所の郡名、官名、一に故事に依る。蜀郡を以て南京と爲し、鳳翔を西京と爲し、西京を中京と爲す。張良娣を以て淑妃と爲し、皇子南陽王係を立てて趙王と爲し、新城王僊を彭王と爲し、潁川王儁を兗王と爲し、東陽王侑を涇王と爲し、横を襄王と爲し、倕を杞王と爲し、偲を召王と爲し、佖を興王と爲し、侗を定王と爲す。議者、或は張巡を罪するに、睢陽を守りて去らざるを以てし、「其人を食ふよりは、曷ぞ人を全くするに若かん」といふ。其友人李翰、之が爲めに傳を作り、表して之を上りて以爲はく、「巡、寡を以て衆を撃ち、弱を以て強を制し、江淮を保ち、以て陛下の師を待てり。」

- 【三】 李愔・盧奔・蔣清。洛を守りて死す。
- 【四】 顏杲卿・袁履謙。常山を守りて死す。
- 【五】 許遠・張巡。睢陽を守りて死す。
- 【六】 張介然。滎陽を守りて死す。
- 【七】 龐堅。潁川を守りて死す。
- 【八】 天寶元年、兩省の長官を改めて左右相と爲し、州を郡と爲す。
- 【九】 長安は洛陽・鳳翔・蜀郡・太原の中に在るを以て、故に中京と爲す。
- 【十】 張籍の師至りたる時、睢陽の城已に陥りて三日なりしを謂ふ。

師至れば巡死せり。巡の功、大なり。而るに議者或は巡を罪するに人を食ふを以てし、巡を愚とするに死を守るを以てし、善は過め悪は揚げ、瑕を録し用を棄つ。臣竊に之を痛む。巡が固く守る所以は、以て諸軍の救を待つなり。救に至らずして食盡き、食既に盡きて人に及び、其素志に乖く。設巡をして城を守るの初め、已に人を食ふの心有り、數百の衆を損し、以て天下を全くせば、臣猶ほ曰はん、「功過相掩ふ」と。況んや其素志に非ざるをや。今、巡、大難に死し、休明を睹す。唯だ令名有り、是れ其榮祿なり。若し時に紀錄せずんば、恐らく遠くして傳はらざらん。巡をして生死・不遇ならしむるは、誠に悲む可し。臣敢て傳一卷を撰して獻上す。乞ふ史官に編列せよ」と。衆議、是に由りて始めて息む。是後、赦令、李愔等に及ばざる無し。而して程千里獨り、生きながら賊庭に執へらるるを以て、褒贈に沾はず。

- 【一】 史、唐の褒忠の典に遺恨有るを言ふ。
- 【二】 上敢て傳國寶を受けざることを、二百八十八卷元載九月に見ゆ。
- 【三】 東京より北に走りて河を度りしを謂ふ。

甲子、上皇、宣政殿に御し、傳國寶を以て上に授く、上、始めて涕泣して之を受く。安慶緒が北走するや、其大將北平王李歸仁及び精兵・曳落河・同羅・六州の胡數萬人、皆潰えて范陽に歸り、過ぐる所俘掠し、人物、遺る無し。史思明、厚く之が備を爲し、且つ使を遣はし、逆へて之を招く。范陽の境曳落河・六州の胡皆降る。同羅、從はず。思明、兵を縦ちて之を撃つ。同羅大に敗れ、悉く其の掠むる所の餘衆を奪ひ、走りて其國に歸る。慶緒、思明の彊きを忌み、阿史那承慶・安守

忠を遣はし、往きて兵を徴し、因つて密に之を圖らしむ。〔善〕判官耿仁智、思明に説きて曰はく、「大
 夫は崇重にして、人、敢て言ふもの莫し。仁智願はくは一言して死せん」と。思明曰はく、「何ぞや」
 と。仁智曰はく、「大夫が力を安氏に盡す所以は、凶威に迫らるればなるのみ。今、唐室・中興し、天
 子・仁聖なり。大夫誠に所部を帥ゐて之に歸せば、此れ禍を轉じて福を爲すの計なり」と。裨將
 烏承玘も亦思明に説きて曰はく、「今、唐室・再造し、慶緒は〔善〕葉上の露
 なるのみ。大夫奈何ぞ之と俱に亡びんや。若し欸を朝廷に歸し、以て自ら
〔七〇〕湔洗せば、掌を反すよりも易からんのみ」と。思明、以て然りと爲す。
 承慶・守忠、五千の勁騎を以て自ら隨へ、范陽に至る。思明、衆數萬を
 悉して之を逆ふ。相距ること一里所。人をして承慶等に謂つて曰はしむ、
〔七二〕「相公及び王遠く至り、將士、其喜に勝へず。然れども邊兵怯懦にして、
 相公の衆を懼れ、敢て進まず。願はくは弓を弛めて以て之を安んせよ」と。
 承慶等、之に従ふ。思明、承慶を引き、内應に入りて樂飲す。別に人を遣はし、其甲兵を收めしむ。
 諸郡の兵は皆糧を給して之を縱遣し、留まらんことを願ふ者は、厚く賜ひ、諸營に分ち隸す。明日、
 承慶等を囚へ、其將寶子昂を遣はし、表を奉じ、〔七三〕所部十三郡及び兵八萬を以て來り降り、并せて其
 河東節度使高秀巖を帥ゐ、亦、所部を以て來り降る。乙丑、子昂、京師に至る。上大に喜び、思明

【七四】 耿仁智は蓋し范陽節度判官たり。
 【七五】 葉上の露。朝日一たび出づれば、葉上の露即ち晞く。故に以て喩と爲す。
 【七六】 湔洗。すすぎ、あらふ。
 【七七】 十三郡。范陽・北平・薊川・密雲・漁陽・柳城・文安・河間・上谷・博陵・勃海・饒陽・常山。

を以て歸義王・范陽節度使と爲し、子七人、皆、顯官に除す。内侍李思敬を遣はし、烏承恩と與に、
 往きて宣慰せしめ、所部の兵を將ゐて慶緒を討たしむ。是より先、慶緒、張忠志を以て常山の太守と
 爲す。思明、忠志を召し、范陽に還らしめ、其將薛萼を以て恒州の刺史を攝せしめ、〔七五〕井陘の路を開
 き、趙郡の太守陸濟を招きて之を降し、其子朝義に命じ、兵五千人を將ゐ、冀州の刺史を攝せしめ、
 其將令狐彰を以て博州の刺史と爲す。烏承恩、至る所、詔旨を宣布す。滄・
〔七六〕瀛・安・深・德・棣等の州皆降る。〔七八〕相州未だ下らずと雖も、河北率ね唐
 の有と爲る。

【七五】 井陘の路を開く。太原の兵が井陘より常山に出づるの路を開く。
 【七六】 安州。後魏、安州を置き、方城に治す。唐の檀州は即ち其地なり。唐、河北に安州無し。或は安史、冀州文安郡を以て安州と爲すか。
 【七八】 安慶緒、鄴に據るをいふ。
 【八二】 書經風征の辭。

上皇、上に尊號を加へて光天文武大聖孝感皇帝と曰ふ。
 郭子儀、東都に還り、河北を經營す。
 崔器・呂誼、上言す、「諸の・賊に陥る官は、國に背き僞に従ふ。律に準
 ずれば皆應に死に處すべし」と。上、之に従はんと欲す。李峴以爲はく、
〔七九〕「賊、兩京を陥れ、天子・南巡し、人自ら逃生す。此屬は皆陛下の親戚、或は勳舊の子孫なり。今
 一槩に叛法を以て死に處せば、恐らくは仁恕の道に乖かん。且つ河北未だ平がず、羣臣の・賊に陥る
 者尙ほ多し。若し之を寛くせば、自ら新にするの路を開くに足らん。若し盡く誅せば、是れ其の賊
 に附くの心を堅くするなり。〔八一〕書に曰はく、「厥渠魁を殲し、脅從をば理むる罔れ」と。誼・器、文を

守り、大體に達せず。惟だ陛下、之を圖れ」と。之を争ふこと累日、上、峴の議に従ひ、六等を以て罪を定む。重き者は之を市に刑し、次は自盡を賜ひ、次は重杖一百、次の三等は流貶す。壬申、達奚珣等十八人を城西の獨柳樹下に斬り、陳希烈等七人は、自盡を大理事に賜ひ、應に杖を受くべき者は、京兆府門に於てす。上、張均・張垺の死を免さんと欲す。上皇曰はく、「均・垺、賊に事へ、皆權要に任ず。均仍は賊の爲めに、吾が家の事を毀る。罪、赦す可からず」と。上、叩頭再拜して曰はく、「臣、張説父子に非ざりせば、今日有る無かりしならん。臣、均・垺を活かす能はず、死者をして知る有らしめば、何の面目ありてか説を九泉に見ん」と。因つて俯伏して涕を流す。上皇、左右に命じ、上を扶けて起さしめて曰はく、「張垺は汝が爲めに嶺表に長流せん。張均は必ず活かす可からず。汝、更に救ふ勿れ」と。上泣きて命に従ふ。安祿山が署する所の河南の尹張萬頃、獨り、賊中に在りて能く百姓を庇するを以て、坐せず。之を頃くして、賊中より來る者有り、言はく、「唐の羣臣、安慶緒に従つて鄴に在る者、廣平王が陳希烈等を赦せるを聞き、

【八二】 獨柳樹。長安の子城の西南隅に在り。
 【八三】 張説父子に非りせば、云。上皇の太子たるや、太平公主、之を忌み、東宮の左右、兩端を持し、織悉必ず主に聞す。元獻楊后方に嫉む。上皇、自ら安んぜず、密に侍讀張説に語りて曰はく、事を用ふる者、吾が子多きを欲せず、奈何せんと、説に命じ、

劑を挾みて入りしむ。上皇、曲室に於て自ら之を煮る。夢に、介して支する者有り、鼎を環ること三たび、而して三煮盡く覆ると。以て説に告ぐ。説曰はく、天命なりと。乃ち止む。遂に帝を生む。帝、東宮に在るに及び、李林甫動搖すること數なり。均・垺、保護し、免るるを得たり。

皆自ら・身を賊庭に失ひしを悼恨せり。希烈等が誅せらるるを聞くに及び、乃ち止みぬ」と。上甚だ之を悔ゆ。

臣光曰はく、人臣たる者、名を策し質を委ね、死する有るも貳する無し。希烈等、或は貴きこと卿相と爲り、或は親しきこと肺腑に連なり、承平の日に於ては、一言の以て人主の失を規し・社稷の危きを救ふ無く、迎合して苟くも容れられ、以て富貴を竊み、四海横潰し・乘輿播越するに及びては、生を偷みて苟くも免れ、妻子を顧戀し、賊に媚び臣と稱し、之が爲めに力を陳ぶ。此れ乃ち屠酷の差づる所、犬馬に如かず。儻し各其首領を全くし、其官爵を復せば、是れ諂諛の臣、往くとして計を得ざる無きなり。彼の顔杲卿・張巡の徒は、世治まれば則ち外方に擯斥せられ、下僚に沈抑し、世亂るれば、則ち孤城に委棄せられ、寇手に壘粉せらる。何ぞ善を爲す者の不幸にして、惡を爲す者の幸に、朝廷、忠義を待つ薄くして、姦邪を保つの厚きや。微賤の臣・巡徴の隸に至りては、謀議には預らず、號令は及ばず、朝に親征の詔を聞き、夕に警蹕の所を失へば、乃ち復た其の扈從する能はざるを責む。亦難からずや。六等、刑を議する、斯れ亦可なり。又何ぞこれを悔いん。

【八四】 事、二百十八卷至德元載に見ゆ。
 【八五】 韋氏廢せらるること、二百十五卷天寶六載に見ゆ。

故の妃 韋氏既に廢せられて尼と爲り、禁中に居る。是歳、卒す。

左右神武軍を置き、元從の子弟を取りて充つ。其制、皆、四軍の如し。總べて之を北牙六軍と謂ふ。又、善く騎射する者千人を擇び、殿前射生手と爲し、左右廂に分ち、號して英武軍と曰ふ。

河中防禦使を升せて節度と爲し、蒲絳等七州を領し、劍南を分ちて東西川節度と爲し、東川は梓遂等十二州を領し、又、荆澧節度を置き、荆澧等五州を領し、夔峽節度は、夔峽等五州を領し、安西を更めて鎮西と曰ふ。

乾元元年、春正月戊寅、上皇、宣政殿に御し、冊を授けて上に尊號を加ふ。上固く大聖の號を辭す。上皇、許さず。上、上皇を尊びて太上至道聖皇帝と曰ふ。是より先、官軍既に京城に克ち、宗廟の器及び府庫の資財、多く散じて民間に在り。使を遣はして檢括せしむ。頗る煩擾有り。乙酉、敕して、盡く之を停む。乃ち京兆の尹李峴に命じ、坊市を安撫せしむ。

二月癸卯朔、殿中監李輔國を以て太僕卿を兼ねしむ。輔國、張淑妃に依附し、元帥府行軍司馬に

判たり、勢、朝野を傾く。

安慶緒が署する所の北海節度使能元皓、所部を擧げて來り降る。以て鴻臚卿と爲し、河北招討使に充つ。

丁未、上、明鳳門に御し、天下に赦し、改元す。盡く百姓の今載の租庸を免じ、復た載を以て年と爲す。

庚午、安東副大都護王玄志を以て營州の刺史と爲し、平盧節度使に充つ。

三月甲戌、楚王俶を徙して成王と爲す。

戊寅、張淑妃を立てて皇后と爲す。

鎮西北庭行營節度使李嗣業、河内に屯す。癸巳、北庭兵馬使王惟良、亂を作さんと謀る。嗣業、裨將荔非元禮と與に、討ちて之を誅す。

安慶緒が北に走るや、其平原の太守王暕、清河の太守宇文寬、皆、其使者を殺して來り降る。慶緒、其將蔡希德、安太清をして、攻めしめて之

を拔き、生擒して以て歸り、鄴市に高す。凡て(一)國歸らんと謀る者有れば、(二)誅、種族に及ぶ。乃ち部曲州縣の官屬に至るまで、連坐して死する者甚だ衆し。又、其羣臣と、血を敵りて鄴の南に盟ふ。而して人心益離る。慶緒、李嗣業が河内に在るを聞き、夏四月、蔡希德、崔乾祐と與に、步騎二萬を

- 【三】 明鳳門。至德三載、丹鳳門を改めて明鳳門と曰ふ。
- 【四】 乾元と改元す。
- 【五】 年を改めて載と爲すは上皇天寶三載より始まる。今、年と改む。
- 【六】 行營節度使、此に始まる。
- 【七】 荔非。唐の複姓。
- 【八】 誅、種族に及ぶ。胡人は之を種誅し、華人は之を族誅す。

將の、沁水を涉りて之を攻む。勝たずして還る。

癸卯、太子少師魏王巨を以て河南の尹と爲し、東京の留守に充つ。

辛卯、(一)新主、太廟に入る。甲寅、上、太廟に享し、遂に昊天上帝を祀る。乙卯、明鳳門に御し、

天下に赦す。

五月壬午、制し、采訪使を停め、黜陟使を

改めて(二)觀察使と爲す。

張鎰、性簡澹にして、(三)中要に事へず。史思

明が降を請ふを聞き、上言す、(四)「思明・凶險に

して、亂に因りて位を竊む。力強ければ則ち衆

附き、勢奪はるれば則ち人離る。彼、人面な

りと雖も、心は野獸の如く、徳を以て懷け難し。

願はくは假すに威權を以てする勿れ」と。又言ふ、(五)「滑州防禦使許叔冀、狡猾にして詐多し。難に

臨まば必ず變せん。請ふ徴して入りて宿衛せしめよ」と。時に上、(六)以に思明を寵納す。會、中使、

范陽及び白馬より來り、皆言ふ、「思明・叔冀、忠懇にして信す可し」と。上、鎰を以て事機に切な

らすと爲し、戊子、罷めて荊州防禦使と爲し、禮部尙書崔光遠を以て河南節度使と爲す。

〔九〕沁水。沁州沁源縣の東南

に出で、山を出でて東流し、

河内縣の北を過ぐ。慶緒、鄴

より河内を攻む、須く沁水を

渡るべし。

〔一〇〕辛卯。當に辛亥に作るべ

し。傳寫の誤なり。

〔一一〕粟主を奉じて長樂殿より

太廟に入る。

〔一二〕觀察使、此に始まる。

〔一三〕中要。中人の、權要に居

る者、李輔國の如きの類を謂

ふ。

〔一四〕思明・叔冀、後、皆、鎰の

言の如し。

〔一五〕滑州。靈昌郡。

〔一六〕以。已なり。唐人、多く

以已二字を通用す。

〔一七〕思明は范陽に在り。滑州

は白馬縣に治す。漢の古縣ナ

リ。今の河南省河北道滑縣の

東二十里に在り。

張后、興王偁を生む。纒に數歳。以て嗣と爲さんと欲す。上疑うて未だ決せず。從容として考功

郎中知制誥李揆に謂つて曰はく、「成王は長且つ功有り。朕、立てて太子と爲さんと欲す。卿の意何

如」と。揆、再拜して賀して曰はく、「此れ社稷の福なり。臣、大慶に勝へず」と。上喜びて曰は

く、「朕が意・決せり」と。庚寅、成王偁を立てて皇太子と爲す。揆は(一)玄道の玄孫なり。

乙未、崔圓を以て太子少師と爲し、李麟を少傅と爲し、皆、政事を罷む。

上頗る鬼神を好む。太常少卿王璵、専ら鬼神に依り、以て媚を求む。禮

儀を議する毎に、多く難ふるに巫祝俚俗を以てす。上、之を悦ぶ。璵を以

て中書侍郎・同平章事と爲す。故の常山の太守顏杲卿に太子太保を贈り、

諡して忠節と曰ふ。其子威明を以て太僕丞と爲す。(二)杲卿が死するや、

楊國忠、張通幽の譖を用ひ、竟に褒贈無し。上、鳳翔に在るや、顏真卿、

御史大夫と爲り、泣きて上に訴ふ。上、乃ち通幽を出して(三)普安の太守

と爲し、具に其状を上皇に奏す。上皇、通幽を杖殺せしむ。杲卿の子泉明、王承業の留むる所と爲

り、因つて(四)壽陽に寓居す。(五)史思明の虜にする所と爲り、裏むに牛革を以てし、范陽に送らる。

會、安慶緒初めて立ち、赦有り。免るを得。思明降り、乃ち歸るを得。其父の尸を東京に求めて

之を得、遂に袁履謙の尸を并せ、棺斂して以て歸る。杲卿の姉妹の女及び泉明の子、皆、河北に流

〔一〕李玄道は、武德中、天策

府學士と爲る。

〔二〕顏杲卿が死すること、二

百十七卷至德元載に見ゆ。

〔三〕普安郡は劍州。

〔四〕壽陽。今の山西省冀寧道

壽陽縣。

〔五〕去年、史思明、太原を攻

め、因つて泉明を虜にす。

落す。眞卿時に蒲州の刺史たり、泉明をして往きて之を求めしむ。泉明、號泣して求訪し、哀、路人を感せしむ。久しくして乃ち之を得たり。泉明、親故に詣りて乞索し、得る所の多少に隨つて之を贖ふ。姑姊妹を先にし、而して其子を後にす。姑の女、賊の掠むる所と爲る。泉明、錢二百緡有り。己の女を贖はんと欲す。其姑の愁悴せるを閔み、先づ姑の女を贖ふ。更に錢を得るに比びて、其女を求むるに、已に所在を失ふ。羣從姉妹及び父の時の將吏袁履謙等の妻子の流落する者に遇ひ、皆之と與に歸る。凡そ五十餘家、三百餘口。資糧を均減し、一に親戚の如くす。蒲州に至り、眞卿、悉く贍給を加ふ。之を久しくして、其の適する所に隨つて之を資送す。袁履謙の妻、履謙の衣衾の儉薄なるを疑ひ、棺を發きて之を視れば、泉卿と異なる無し。乃ち始めて慙服す。

六月己酉、太一の壇を南郊の東に立つ。王璵の請に従ふなり。上嘗て不豫なり。トして云はく、「山川、祟を爲す」と。璵請うて中使を遣はし、女巫と與に驛に乗じ、分ちて天下の名山大川に禱らしむ。巫、勢を恃み、過ぐる所、州縣を煩擾し、干求して贓を受く。黃州に巫有り、盛年にして美色あり。無頼の少年數十を従へ、蠱を爲すこと尤も甚だし。黃州に至り、驛舎に宿す。刺史左震、晨に驛門に至る。局鎖

【一】均減。資糧は均しく之を分ち、其の或は足らざる有るときは、常數を減じて之を均しくす。
 【二】胡三省曰はく、顔泉卿の忠節は、固より千古に照映す。而して其子の孝義も亦人の及ぶ所に非ざるなりと。
 【三】太一。漢の武帝始めて太一を祀る。唐に至りて復た之を祀る。蓋し九宮貴神の説を參用する也。項安世曰はく、中宮は天極一星、其神は太一、列宿の中最も尊し。臨む所の方は則ち嘉應海に臻ると。
 【四】祟。神の禍なり。

して、啓く可からず。震怒り、鎖を破りて入り、巫を階下に曳きて之を斬り、從ふ所の少年、悉く之を斃す。其贓數十萬を籍し、具に狀を以て聞し、且つ、其贓を以て貧民の租に代へんと請ひ、中使を遣りて京師に還す。上、以て罪する無きなり。

開府儀同三司李嗣業を以て懷州の刺史と爲し、鎮西北庭行營節度使に充つ。

山人韓穎、新曆を改造す。丁巳、初めて穎の曆を行ふ。

戊午、敕し、兩京の・賊に陥りし官の、三司推究して未だ畢らざる者は、皆之を釋し、貶降する者は續ぎて處分す。

太子少師房瑄、既に職を失ひ、頗る怏怏たり。多く疾と稱して、朝せず。而るに賓客、朝夕、門に盈つ。其黨、之が爲めに朝に揚言して云はく、「瑄は文武の才有り。宜しく大に用ふべし」と。上聞きて之を惡み、制を下し、瑄の罪を數め、幽州の刺史に貶す。前の祭酒劉秩は、閬州の刺史に貶せられ、京兆の尹嚴武は、巴州の刺史に貶せらる。皆、瑄の黨なり。

初め史思明、列將を以て、平盧軍使烏知義に事ふ。知義善く之を待つ。知義の子承恩、信都の太守たり、郡を以て思明に降る。思明、舊恩を思ふて之を全くす。安慶緒が

【一】李嗣業、鎮西北庭の兵を以て懷州に屯す。就きて用ひて刺史と爲す。
 【二】時に韓穎上言す、大衍曆或は誤ると。帝、之を疑ひ、穎を以て司天臺に直せしむ。其術を損益し、節毎に二日を増し、更めて至德曆と名づく。
 【三】去年十二月、始めて三司に命じて、賊に陥りし官を推究せしむ。
 【四】相を罷むるを謂ふ。
 【五】閬州。閬中郡。
 【六】巴州。清化郡。漢の巴郡宕渠縣の地。
 【七】承恩が思明に降ること、前卷至德元載に見ゆ。
 【八】去年十二月の事。

敗るるに及び、承恩、思明に勸めて唐に降らしむ。李光弼以へらく、「思明は終に當に叛亂すべし。而して承恩、思明の親信する所と爲る」と。陰に之を圖らしむ。又、上に勸めて、承恩を以て范陽節度副使と爲し、阿史那承慶に鐵券を賜ひ、共に思明を圖らしむ。上、之に従ふ。承恩、多く私財を以て部曲を募り、又、數、婦人の服を衣、諸將の營に詣り、之を説誘す。諸將、以て思明に白す。思明疑うて未だ察せず。會、承恩、京師に入る。上、内侍李思敬をして、之と俱に范陽に至りて宣慰せしむ。承恩既に旨を宣す。思明、承恩を留め、府中に館し、其床に帷し、二人を床下に伏す。承恩の少子、范陽に在り。思明、其父を省せしむ。夜中、承恩、密に其子に謂つて曰はく、「吾、命を受けて此逆胡を除かんとす。當に吾を以て節度使と爲すべし」と。二人、牀下に於て大呼して出づ。思明乃ち承恩を執へ、其裝囊を索り、鐵券及び光弼の牒を得たり。牒に云はく、「承慶、事成らば、則ち鐵券を付せん。然らずんば、付す可からざるなり」と。又、簿書數百紙を得たり。皆、先に思明に従うて反する者の將士の名なり。思明、之を責めて曰はく、「我何ぞ汝に負きて、此を爲す」と。承恩、謝して曰はく、「死罪。此れ皆李光弼の謀なり」と。思明乃ち將佐吏民を集め、西に向つて大に哭して曰はく、「臣、十三萬の衆を以て朝廷に降れり。何ぞ陛下に負きて、臣を殺さんと欲する」と。遂に承恩父子を榜殺す。連坐して死する者二百餘

【三】 胡三省曰はく、思明、二人を伏して以て承恩を察せしむと雖も、然れども其子をして父と共に處らしめずんば、則ち謀、自りて露はるる無からん。姦雄の智數、固に人の及ぶ所に非ざるなりと。

【三】 裝囊。旅裝の囊。

人。承恩の弟承玘走りて免る。思明、思敬を囚へ、其狀を表上す。上、中使を遣はし、思明を慰諭して曰はく、「此れ朝廷と光弼との意に非ず。皆、承恩が爲す所なり。之を殺すは甚だ善し」と。會、三司、賊に陥りし官の罪狀を議し、范陽に至る。思明、諸將に謂つて曰はく、「陳希烈の輩は、皆、朝廷の大臣にして、上皇自ら之を棄てて蜀に幸せり。今猶ほ死を免れず。況んや吾が屬は、本安祿山に従つて反せるをや」と。諸將、思明に請ふ、「表して、光弼を誅するを求めよ」と。思明、之に従ひ、判官耿仁智に命じ、其僚張不矜と與に、表を爲りて云はしむ、「陛下、臣が爲めに光弼を誅せずんば、臣當に自ら兵を引き、太原に就きて之を誅すべし」と。不矜、表を草し、以て思明に示す。將に函に入れんとするに及び、仁智悉く之を削り去る。表を寫す者、以て思明に白す。思明、命じて二人を執へて之を斬らしむ。仁智、思明に事ふること久し。思明、憐みて、之を活かさんと欲し、復た召し入れ、謂つて曰はく、「我、汝を任使すること、三十年に垂なんとす。今日、我、汝に負くに非ず」と。仁智、大呼して曰はく、「人生、會す一死有り。忠義を盡すを得るは、死の善なる者なり。今、大夫に従つて反すとも、歲月を延ばすに過ぎじ。豈に速かに死するの愈れるに若かんや」と。思明怒り、之を亂捶す。腦、地に流る。烏承玘、太原に奔る。李光弼、表して昌化郡王と爲し、石嶺軍使に充つ。

【三】 思明、又、此を以て其將士を激怒す。

【三】 石嶺軍。忻州秀容縣に在り。

秋七月丙戌、初めて十に當る大錢を鑄る。文を乾元重寶と曰ふ。御史中丞第五琦の謀に従ふなり。

丁亥、回紇の可汗を冊命して英武威遠毗伽闕可汗と曰ひ、上の幼女寧國公主を以て之に妻はす。殿中監漢中王瑀を以て冊禮使と爲し、右司郎中李巽を之に副とし、左僕射裴冕に命じ、公主を送りて境上に至らしむ。戊子、又、司勳員外郎鮮于叔明を以て瑀の副と爲す。叔明は仲通の弟なり。甲午、上、寧國公主を送りて咸陽に至る。公主・辭訣して曰はく、『國家の事重し。死すとも且つ恨み無し』と。上、流涕して還る。瑀等、回紇の牙帳に至る。可汗、赭袍・胡帽を衣、帳中の榻上に坐し、儀衛甚だ盛なり。瑀等を引ききて、帳外に立たしむ。瑀、拜せずして立つ。可汗曰はく、『我、天可汗と與に、兩國の君たり。君臣、禮有り。何を拜せざるを得ん』と。瑀、叔明と與に、對へて曰はく、『曩者、唐、諸國と昏を爲すに、皆、宗室の女を以て公主と爲せり。今、天子、可汗が功有るを以て、自ら・生む所の女を以て可汗に妻はす。恩禮至つて重し。可汗奈何ぞ子婿を以て婦翁に傲り、榻上に坐して冊命を受くるか』と。可汗、容を改め、起ちて冊命を受く。明日、公主を立てて可敦と爲す。國を擧げて皆喜ぶ。

【三】 乾元重寶。徑一寸、緡毎に重さ十斤、開元通寶と並び行はる。
【四】 鮮于仲通は、天寶中、楊國忠に黨附し、位を通顯に致す。
【五】 赭袍。あかきうはぎ。
【六】 可敦。突厥、國を有してより以來、可汗、其正室を號して可賀敦と曰ふ。

乙未、郭子儀・入朝す。

八月壬寅、青登等五州節度使許叔冀を以て滑濮等六州節度使と爲す。

庚戌、李光弼・入朝す。丙辰、郭子儀を以て中書令と爲し、光弼を侍中と爲す。丁巳、子儀、行營に詣る。

回紇、其臣骨啜特勒及び帝德を遣はし、驍騎三千を將ゐ、安慶緒を討つを助けしむ。上、朔方左武鋒使僕固懷恩に命じて、之を領せしむ。

九月庚午朔、右羽林大將軍趙泚を以て蒲同虢三州節度使と爲す。

丙子、招討党項使王仲昇、党項の酋長拓拔戎德を斬り、首を傳ふ。

安慶緒が初めて鄴に至るや、枝黨離析すと雖も、猶ほ七郡六十餘城に據り、甲兵資糧豐備なり。慶緒、政事を親らせず。専ら臺沼樓船を繕め、酣飲するを以て事と爲す。其大臣高尚・張通儒等、權を争うて、叶はず、復た綱紀無し。蔡希德、才略有り、部兵精銳なり。而して性剛にして直言を好む。通儒、諂して之を殺す。麾下數千人、皆逃げ散す。諸將怨み怒り、用を爲さず。崔乾祐を以て天下兵馬使と爲し、中外の兵を總べしむ。乾祐、復戻にして殺を好む。士卒、附かず。庚寅、朔方の郭子儀・淮西の魯炅・興平の李奂・滑濮の許叔冀・鎮西北庭の李嗣業・鄭蔡の季廣琛・河南の崔光遠の七節度使及び平盧兵馬使董

【三】 去年、河中節度使を置き、蒲鋒等七州を領せしむ。今、趙泚、蒲同虢三州を領するのみ。蓋し兵興るの際、節帥に分ち命じて以て險要を扼せしむ。其の統ぶる所の増減離合、時に隨つて宜を制するのみ。
【四】 七郡。汲・鄴・魏・平原・清河・博平、凡そ七郡。
【五】 復戻。性質の我儘なること。

秦に命じ、步騎二十萬を將ゐて慶緒を討たしむ。又、河東の李光弼、關内澤潞の王思禮の二節度使に命じ、所部の兵を將ゐて之を助けしむ。上、子儀・光弼が皆元勳にして、相統屬し難きを以て、故に元帥を置かず、但だ宦官開府儀同三司魚朝恩を以て觀軍容宣慰處置使と爲す。觀軍容の名、此より始まる。

癸巳、廣州・奏す、「大食・波斯、州城を圍み、刺史韋利見、城を踰えて走り、二國の兵、倉庫を掠め、廬舍を焚き、海に浮びて去る」と。

冬十月甲辰、太子を冊し、名を更めて豫と曰ふ。中興より以來、羣下、復た賜物無し。是に至りて、始めて新鑄の大錢有り、百官・六軍、需資すること差有り。

郭子儀、兵を引き、杏園より河を濟り、東して獲嘉に至り、安太清を破り、斬首四千級、捕虜五百人。太清走りて衛州を保つ。子儀進みて之を圍む。丙午、使を遣はして捷を告ぐ。魯炅、陽武より濟り、季廣琛・崔光遠、酸棗より濟り、李嗣業の兵と、皆子儀に衛州に會す。慶緒、悉く鄴中の衆七萬を擧げて、衛州を救ひ、三軍に分ち、崔乾祐を以て上軍に將とし、田承嗣を下軍に將とし、慶緒自ら中軍を帥ゐる。子儀、善く射る者

三千人をして、壘垣の内に伏せしめ、令して曰はく、「我退かば、賊必ず我を逐はん。汝乃ち壘に登り、鼓譟して之を射よ」と。既にして慶緒と戦ひ、偽り退く。賊、之を逐うて壘下に至る。伏兵起りて之を射る。矢、雨の注ぐが如し。賊還り走る。子儀復た兵を引きて之を逐ふ。慶緒大に敗る。其弟慶和を獲て之を殺し、遂に衛州を抜く。慶緒走る。子儀等、之を追うて鄴に至る。許叔冀・董秦・王思禮及び河東兵馬使薛兼訓、皆、兵を引きて繼ぎ至る。慶緒、餘兵を收め、愁思岡に拒戦す。又敗る。前後斬首三萬級、捕虜千人。慶緒乃ち城に入りて固守す。子儀等、之を圍む。慶緒、窘急し、薛嵩を遣はし、救を史思明に求め、且つ位を以て之に譲らんと請ふ。思明、范陽の兵十三萬を發し、鄴を救はんと欲し、觀望して未だ敢て進まず。先づ李歸仁を遣はし、步騎一萬を將ゐて滏陽に軍し、遙に慶緒の聲勢を爲さしむ。

甲寅、上皇、華清宮に幸す。十一月丁丑、京師に還る。

崔光遠、魏州を抜く。丙戌、前の兵部侍郎蕭華を以て魏州防禦使と爲す。會、史思明、軍を分ちて三と爲し、一は邢洛に出で、一は冀貝に出で、一は洹水より魏州に趣く。郭子儀、奏す、「崔光

縣に杏園鎮有り。

【五二】獲嘉縣は、本、汲縣の新中郷。漢の武帝、行幸して此に至り、呂嘉を獲たりと聞き、因つて獲嘉縣を置く。唐には懷州に屬す。衛州の西九十里に在り。

【五三】陽武縣は鄴州に屬す。今の河南省河北道陽武縣。

【五四】愁思岡、鄴城の西に在り。【五五】磁州は滏陽に治す。南のかた鄴城に至るまで六十里。今の直隸省大名道磁縣。

【五六】魏州。漢の元城縣に治す。今の直隸省大名道大名縣。

【五七】洹水縣は、周の建德六年、臨漳縣の東北を分ち、洹水縣を置く。今の直隸省大名道大名縣の西六十里。

遠を代て華に代へん」と。十二月癸卯、敕して、光遠を以て魏州の刺史を領せしむ。

甲辰、〔五〕浙江西道節度使を置き、蘇潤等十州を領し、昇州の刺史韋黃裳を以て之と爲す、庚戌、浙

江東道節度使を置き、〔五〕越睦等八州を領し、戸部尚書李暉を以て之と爲し、淮南節度使を兼ねしむ。

己未、羣臣、尊號を上り、乾元大聖光天文武孝感皇帝と曰はんと請ふ。光遠、將軍

史思明、崔光遠が初めて至るに乘じ、兵を引き大に下る。光遠、將軍

李處崙をして之を拒がしむ。賊勢盛にして、處崙、連戦して、利あらず。

還りて城に趣く。賊追うて城下に至り、揚言して曰はく、「處崙、我を召し

て來らしむ。何爲れぞ出でざる」と。光遠、之を信じ、處崙を腰斬す。處

崙は驍將にして、衆の恃む所なり。既に死し、衆、鬪志無し。光遠、身を

脱して走り、汴州に還る。丁卯、思明、魏州を陥れ、殺す所三萬人。

平盧節度使王玄志、薨す。上、中使を遣はし、往きて將士を撫し、且つ

就きて軍中の立てんと欲する所の者を察し、授くるに旌節を以てせしむ。

高麗の人李懷玉、裨將たり、玄志の子を殺し、侯希逸を推して平盧軍使と爲す。希逸の母は懷玉の

姑なり。故に〔六〕懷玉、之を立つ。朝廷因つて希逸を以て節度副使と爲す。節度使、軍士の廢立に由

ること、此より始まる。

〔五〕 浙西道節度使兼江寧軍使は昇・潤・宣・歙・饒・江・蘇・常・杭・湖の十州を領し、昇州に治す。

〔五〕 浙東道節度使は越・睦・衢・婺・台・明・處・溫の八州を領し、越州に治す。

〔六〕 侯希逸を立つる者は李懷玉、而して侯希逸を逐ふ者も亦李懷玉なり。懷玉、後、名を正己と賜ふ。

臣光曰はく、夫れ〔六〕民生れて欲有り、主無ければ則ち亂る。是故に、聖人、禮を制して以て之

を治む。天子・諸侯より、卿・大夫・士・庶人に至るまで、尊卑、分有り、大小、倫有り、〔七〕綱條の相

維ぎ、〔八〕臂指の相使ふ若し。是を以て民、其上に服事して、下、覬覦する無し。其れ周易に在りて

は、上天下澤は履なり。象に曰はく、君子、以て上下を辨じ、民志を定むと。此の謂なり。

凡そ人君、能く其臣民を有つ所以は、〔九〕八柄己に存するを以てなり。苟くも或は之を

捨つるときは、則ち彼此の勢均し。何を以て其下を使はんや。肅宗、唐の中ごろ衰ふる

に遭ひ、幸にして國を復す。是れ宜しく上下の禮を正しくし、以て四方を綱紀すべし。而

るに一時の安きを偷取し、永久の患を思はず。彼の・將帥を命じ藩維を統ふるは、國の大事なり。

乃ち一介の使に委ね、行伍の情に徇ひ、賢不肖を問ふ無く、惟だ其の與へんと欲する所に則ち

之を授く。是よりの後、積習して常と爲し、君臣・循ひ守り、以て得策と爲す。之を〔一〇〕姑息と謂ふ。

乃ち偏裨士卒が主帥を殺逐するに至るまで、亦、其罪を治せず。因つて其位任を以て之に授く。然れ

〔六〕 書經仲虺之誥の言。

〔七〕 書經盤庚に曰はく、綱の網に在り條有りて紊れざるが若しと。

〔八〕 賈誼曰はく、身の臂を使ひ、臂の指を使ふが如く、制從せざるは莫しと。

〔九〕 八柄。周禮、玉、八柄を以て羣臣を取す。一に曰はく爵以て其貴を取す、二に曰はく祿以て其富を取す、三に曰はく

はく予以て其幸を取す、四に曰はく置以て其行を取す、五に曰はく生以て其福を取す、六に曰はく奪以て其貧を取す、七に曰はく廢以て其罪を取す、八に曰はく誅以て其過を取すと。

〔一〇〕 姑息。姑は且く也。息は安なり。しばらく目前の安きを求むる也。

ば則ち（六六）爵祿廢置・殺生與奪、皆、上に出でずして下に出づ。亂の生ずるや、庸ぞ極り有らんや。且つ夫れ國家を有つ者、善を賞して惡を誅す。故に善を爲す者は勸み、惡を爲す者は懲る。彼の人の下と爲りて其上を殺逐するは、惡孰れか焉よりも大ならん。乃ち之をして旄を擁し鉞を乗り、一方に師長たらしむ。是れ之を賞するなり。賞以て惡を勸む。惡其れ何ぞ至らざる所あらんや。書に云はく、（六七）乃の猷を遠くすと。詩に云はく、（六八）猷の未だ遠からざる、是を大諫と謂ふ」と。孔子曰はく、（六九）人、遠き慮り無ければ、必ず近き憂有り」と。天下の政を爲し、而して専ら姑息を事とす。其憂患、校るに勝ふ可けんや。是に由りて、下たる者常に（七〇）眈眈焉として其上を伺ひ、苟くも間を得れば、則ち攻めて之を族し、上たる者常に（七一）惴惴焉として其下を畏れ、苟くも間を得れば則ち掩うて之を屠り、争うて、先づ發するを務め、以て其志を逞しくす。相保養して、俱に利し久しく存するの計を爲す有るに非ざるなり。是の如くして、天下の安きを求むとも、其れ得可けんや。（七二）其厲階を迹ぬるに、此に肇まる。蓋し古者軍を治むるは、必ず禮に本づく。故に晉の文公、（七三）城濮の戰に、其師の少長に禮有るを見て、其の用ふ可きを知

【六六】 此れ即ち周禮の所謂八柄なり。

【六七】 書經康誥の言、猷は謀なり。

【六八】 詩經大雅板の辭。

【六九】 論語衛靈公篇に見ゆ。

【七〇】 眈眈、目徧く合うて邪視するなり。

【七一】 惴惴、憂懼の貌。

【七二】 厲階、禍をまねく階梯、其禍、侯希逸に命じて平盧に帥たらしむるに肇まるを言ふ。

【七三】 城濮の戰。左傳に、晉・楚、城濮に戰ふ、晉侯、有莘の虛に登り、以て師を觀て曰はく、少長、禮有り、其れ用ふ可きなりと、遂に戰ふ。楚の師敗績す。

る。今、唐、軍を治むるに、禮を顧みず、士卒をして以て偏裨を陵ぐを得、偏裨をして以て將帥を陵ぐを得しむ。則ち將帥の天子を陵ぐは、自然の勢なり。是に由りて、禍亂繼ぎて起り、兵革息まず、民、塗炭に墜ち、控訴する所無きこと、凡そ二百餘年、然る後、大宋、命を受け、太祖始めて軍法を制し、階級を以て相承けしめ、小しく違犯有れば、咸斧質に伏す。是を以て上下、叙有り、令すれば行はれ禁すれば止み、四たび（七四）不庭を征し、思うて服せざる無く、宇内又安に、兆民允に殖し、以て今に迄る。皆、軍を治むるに禮を以てするに由るが故なり。豈に謀を詒すの遠きに非ずや。

是歲、（七五）振武節度使を置き、鎮北大都護府・麟勝二州を領し、又、陝虢華及び豫許汝の二節度使を置き、（七六）安南經略使を節度使と爲し、交陸等の十一州を領す。吐蕃、河源軍を陷る。

【七四】 不庭、庭は直なり。不庭は諸侯の不直なる者、近世の儒者、不朝を以て不庭と爲す。其の來庭せざるを謂ふなり。

【七五】 振武節度使、單于都護府に治し、舊振武軍に因つて節鎮を建て、押蕃落使を兼ね。

【七六】 鎮北大都護府は、大同、長寧二縣を領す。

【七七】 安南節度使は、交・陸・峰・愛・驩・長・福・祿・芝・武・莪・演・武・安の十一州を領し、交州に治す。陸州は玉山郡。本と玉州。上元二年、改めて陸州と爲す。

卷の第二百二十一

唐紀三十七

肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝下の上

乾元二年、春正月己巳朔、史思明、壇を魏州の城北に築き、自ら大聖燕王と稱し、周摯を以て行軍司馬と爲す。李光弼曰はく、『思明、魏州を得、而して兵を按じて進まず。此れ我をして懈惰せしめ、而して精銳を以て吾が不備を掩はんと欲するなり。請ふ朔方軍と、同じ魏城に逼り、之と戦はんことを求めん。彼、嘉山の敗に懲り、必ず敢て輕しく出でざらん。日を曠しくし久しきを引くを得ば、則ち鄴城必ず拔けん。慶緒已に死せば、彼則ち辭の以て其衆を用ふる無からん』と。魚朝恩、以て不可と爲し、乃ち止む。戊寅、上、九宮貴神を祀る。王璵の言を用ふるなり。乙卯、籍田を耕す。

- 【一】 乾元二年、西紀七五九年なり。
- 【二】 嘉山の敗。事、二百八十卷至德元載に見ゆ。
- 【三】 胡三省曰はく、光弼の計を用ひしめば、安んぞ溢水の潰有らんやと。

- 【四】 九宮貴神。太一・攝提・權主・招搖・天符・青龍・咸池・太陰・天一。其説、黃帝九宮經・蕭吉の五行大義に本づく。
- 【五】 乙卯。當に己卯に作るべし。

唐肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝乾元二年

鎮西節度使李嗣業、鄴城を攻め、流矢の中たる所と爲り、丙申、薨す。兵馬使荔非元禮、代りて其衆に將たり。初め、嗣業、段秀實を表して懷州の長史と爲し、留後の事に知たらしむ。時に諸軍、屯戍すること日久しく、財竭き糧盡く。秀實獨り芻粟を運び、兵を募り馬を市ひ、以て鎮西行營に奉ずること、道に相繼ぐ。

二月壬子、月食し既く。是より先、百官、皇后に尊號を加へて輔聖と曰はんと請ふ。上、以て中書舍人李揆に問ふ。對へて曰はく、「古より、皇后には尊號無し。惟だ、韋后のみ之れ有り。豈に法と爲すに足らんや」と。上驚きて曰はく、「庸人幾ど我を誤らんとせり」と。會、月食し、事遂に寢む。后、李輔國と相表裏し、禁中に横にして、政事に干豫し、請託、窮り無し。上、頗る悦ばず。而も之を如何ともする無し。

郭子儀等の九節度使、鄴城を圍み、壘を築くこと再重、塹を穿つこと三重、漳水を壅ぎて之に灌ぐ。城中の井泉皆溢れ、棧を構へて居り、冬より春に涉る。安慶緒、堅く守り、以て史思明を待つ。食盡き、一鼠、錢四千に直る。牆數及び馬矢を洶げ、以て馬を食ふ。人皆以爲へらく、克たんこと朝夕に在りと。而るに諸軍既に統帥無く、進退、棄くる所無し。城

【六】李嗣業、鎮西北庭の兵を以て懷州に屯し、師に會して鄴を攻め、段秀實を以て留後の事に知たらしむ。

【七】春秋の法、日食を書し、月食を書せず。日は君の象なり。此れ張后の專横に因つて月食を書す。記に曰はく、男教脩まらず、陽事得ざれば、滴、天に見はれ、日之が爲めに食す。婦順脩まらず、陰事得ざれば、滴、天に見はれ、月之が爲めに食す。是故に日食すれば、天子素服して六官の職を脩め、天下の陽事を蕩す。月食すれば后素服して六官の職を脩め、天下の陰事を蕩す。天子と后とは猶ほ日と

中の人、降らんと欲する者、水の深きに礙へられて、出づるを得ず。城久しく下らず。上下解體す。思明乃ち魏州より兵を引きて鄴に趣き、諸將をして城を去ること各五十里にして營を爲らしむ。營毎に鼓三百面を撃ち、遙に之を齎す。又、營毎に精騎五百を選び、日に城下に於て抄掠せしむ。官軍出づれば、輒ち散じて其營に歸る。諸軍の人馬半車、日に失ふ所有り。樵採甚だ艱む。晝之に備ふれば則ち夜至り、夜之に備ふれば則ち晝至る。時に天下饑饉し、轉餉する者、南は江淮より、西は并汾より、舟車相繼ぐ。思明、多く壯士を遣はし、官軍の裝號を竊み、運者を督趣し、其稽緩を責め、妄に人を殺戮せしむ。運者駭き懼る。舟車聚まる所は、則ち密に火を縱ちて之を焚く。往復聚散、自ら相辨識す。而るに官軍の邏捕、察する能はざるなり。是に由りて諸軍、食乏しく、人、自ら潰えんことを思ふ。思明乃ち大軍を引き、直に城下に抵る。官軍、之と日を刻して決戦す。三月壬申、官軍の歩騎六十萬、安陽河の北に陳す。思明、自ら精兵五萬を將りて之に敵す。諸軍、之を望み、以て遊軍と爲し、未だ意に介せず。思明、直に前みて奮撃す。李光弼、王思禮、許叔冀、魯炅、先づ之と戦ひ、殺傷相半す。魯炅、流矢に中る。郭子儀、其後を承け、未だ陳を

月と、陰と陽とのごとく、相須ちて成る者なりと。

【八】韋后の事、二百八卷中宗景龍元年に見ゆ。

【九】牆數。先に麥數を以て土に雜へて牆を築く。今、圍急にして芻乏し、故に數を洶げて以て馬を飼ふ。

【一〇】稟。令を稟くるなり。行軍の進退は、必ず令を主帥に稟く。今、諸軍、令を稟くる所無きなり。

【一一】師老い勢屈したるが故に解體する也。

【一二】果して李光弼の言の如し【一三】安陽河。滏水、安陽縣を逕て東流す、之を安陽河と謂ふ。

布くに及ばず。大風忽ち起り、沙を吹き木を抜き、天地晝晦く、咫尺も相辨せず。兩軍大に驚き、官軍潰えて南し、賊潰えて北す。甲仗輜重を棄て、路に委積す。子儀、朔方軍を以て河陽橋を斷ち、東京を保つ。戰馬萬匹、惟だ三千を存し、甲仗十萬、遺棄して殆ど盡く。東京の士民驚駭し、散じて山谷に奔る。留守崔圓・河南の尹蘇震等の官吏、南して襄鄧に奔る。諸節度各潰えて本鎮に歸る。士卒、過ぐる所剽掠す。吏、止むる能はず。旬日にして、方に定まる。

惟だ李光弼・王思禮のみ、部伍を整勅し、軍を全くして以て歸る。子儀、河陽に至り、將に城守せんと謀らんとす。師人相驚き、又、缺門に奔る。諸將繼ぎて至り、衆、數萬に及ぶ。東京を捐て退きて蒲陝を保たんと議す。都虞候張用濟曰はく、「蒲陝荐に飢う。如かじ河陽を守り、賊至らば力を併せて之を拒がんには」と。子儀、之に従ふ。都游奕使靈武の韓遊瓌をして、五百騎を將ゐ、前みて河陽に趣かしむ。用濟、歩卒五千を以て之に繼ぐ。周摯、兵を引ききて河陽を争ふ。後れて至り、入るを得ずして去る。用濟、所部の兵を役し、南北の兩城を築きて之を守る。段秀實、將士の妻子及び公私の輜重を帥ゐ、野戍より河を渡り、命を河清の南岸に待つ。荔非元禮至りて焉に軍す。諸將各表を上りて罪を謝す。上、皆、

〔一四〕襄鄧二州は山南東道に屬す。
 〔一五〕缺門。水經注にいはく、穀水は弘農澠池縣の南に出で又、東して新安縣の故城の南を逕、又、東して千秋亭の南を逕、又、東して缺門山を逕。山阜の接せざる者里餘、故に是名を得たりと。
 〔一六〕蒲陝二州は河を夾み、潼關、其險を控へ、以て敵を禦ぐ可し、故に退きて之を保たんと議す。
 〔一七〕野戍。即ち野水渡なり。戍を置きて之を守る、因つて野戍と謂ふ。

問はず。惟だ崔圓の階封を削り、蘇震を貶して濟王府の長史と爲し、銀青階を削る。史思明、審かに官軍の潰え去れるを知り、沙河より、士衆を收整し、還りて鄴城の南に屯す。安慶緒、子儀の營中の糧を收め、六七萬石を得、孫孝哲・崔乾祐と謀り、門を閉ぢて更に思明を拒ぐ。諸將曰はく、「今日豈に復た史王に背く可けんや」と。思明、慶緒と相聞せず、又、南して官軍を追はず、但だ日に軍中に於て士を饗す。張通儒・高尚等、慶緒に言つて曰はく、「史王遠く來る。臣等皆應に迎へ謝すべし」と。慶緒曰はく、「公が薨れ往くに任す」と。思明、之を見て涕泣し、禮を厚くして之を歸す。三日を経れども、慶緒、至らず。思明密に安太清を召し、之を誘はしむ。慶緒、寤覺し、爲す所を知らず。乃ち太清を遣はし、上表し、臣と思明に稱し、「請ふ甲を解きて城に入れ。璽綬を奉上せん」といふ。思明、表を省て曰はく、「何ぞ此の如きに至らん」と。因つて表を出し、徧く將士に示す。咸、萬歲と稱す。乃ち手疏して慶緒を信ふ。而も臣と稱せず、且つ曰はく、「願はくは兄弟の國と爲り、更に藩籬の援と作らん。鼎足して立つは、猶ほ或は庶幾からん。北面の禮は、固より敢て受けず」と。併せて表を封じて之を還す。慶緒大に悦び、因つて血を献りて同盟せんと請ふ。思明、之を許す。慶緒、三百騎を以て思明の營に

〔一八〕河清縣は、本、河南の尹に屬す。本、大基線。今の河南省河北道孟縣の西南五十里。
 〔一九〕崔圓、先に趙國公に封ぜられ、實封五百戶。國公は從一品の階、開府儀同三司に比す。
 〔二〇〕濟王環は上の弟なり。
 〔二一〕沙河縣は鄴城の西北二百里に在り。今の直隸省大名道沙河縣。
 〔二二〕思明が慶緒の表を出し、徧く將士に示すは、以て其情の向背を觀んとするなり。
 〔二三〕生者を弔ふを唁と曰ふ。

詣る。思明、軍士をして、甲を擯し兵を執り、以て之を待たしめ、慶緒及び諸弟を引き、入りて庭下に至る。慶緒、再拜稽首して曰はく、「臣、荷負する克はず、兩都を棄失し、久しく重圍に陥る。意はざりき、大王、太上皇の故を以て、遠く救援を垂れ、臣をして應に死すべくして復た生さしめんとは、頂を摩して踵に至るも、以て徳に報ゆる無し」と。思明忽ち震怒して曰はく、「兩都を棄失するは、亦何ぞ言ふに足らん。爾、人の子と爲り、父を殺して其位を奪ふ。天地の容れざる所なり。吾、太上皇の爲めに賊を討つ。豈に爾の佞媚を受けんや」と。即ち左右に命じて牽き出さしめ、其四弟及び高尙・孫孝哲・崔乾祐を并せて、皆之を殺す。張通儒・李庭望等に、悉く授くるに官を以てす。思明、兵を勅して鄴城に入り、其士馬を收め、府庫を以て將士を賞す。慶緒が先に有する所の州縣及び兵、皆思明に歸す。安太清を遣はし、兵五千を將ゐて懷州を取り、因つて留まりて之に鎮せしむ。思明、遂に西略せんと欲すれども、根本未だ固からざるを慮り、乃ち其子朝義を留めて相州を守らしめ、兵を引きて范陽に還る。

甲申、回紇の骨噶特勒帝德等十五人、相州より、奔りて西京に還る。上、之を紫宸殿に宴し、賞賜、差有り。庚寅、骨噶特勒等、辭して行營に還る。

辛卯、荔非元禮を以て懷州の刺史と爲し、鎮西北庭行營節度使を權知せしむ。元禮復た段秀實を以

〔四〕 太上皇、慶緒、祿山を尊びて太上皇と爲すこと、二百十九卷至德元載に見ゆ。

〔五〕 宋敏求の長安志に、宣政殿の北なるを紫宸殿と曰ふ。門内に紫宸殿有り、即ち内衙の正殿なりと。

て節度判官と爲す。

甲午、兵部侍郎呂誼を以て同平章事とす。乙未、中書侍郎同平章事苗晉卿を以て太子太傅と爲し、王瓌を刑部尚書と爲し、皆政事を罷む。京兆の尹李峴を以て吏部尚書を行はしめ、中書舍人兼禮部侍郎李揆を中書侍郎と爲し、及び戶部侍郎第五琦を、竝に同平章事とす。上、峴に於て恩意尤も厚し。峴も亦經濟を以て己が任と爲す。軍國の大事、多く獨り峴に決す。是に於て京師、盜多し。李輔國、羽林の騎士五百を選びて以て巡邏に備へんと請ふ。李揆・上疏して曰はく、「昔、西漢、南軍を以て相制す。故に周勃、南軍に因つて北軍に入り、遂に劉氏を安んせり。皇朝、南北牙を置き、文武區分し、以て相伺察す。今、羽林を以て金吾に代りて夜を警めしめば、忽ち非常の變有らんには、將た何を以て之を制せん」と。乃ち止む。

〔三〕 周勃が劉を安んずること漢の高后紀に見ゆ。李揆、勃が南軍に因つて北軍に入ると謂へども、其本末を考ふるに、此の如くならざるに似たり。

〔四〕 羽林金吾云云。金吾衛は南牙に屬し、羽林衛は北牙に屬す。金吾は巡邏を掌る。李輔國、羽林軍を以て其職を奪はんと欲す、故に李揆、以て

言を爲す。

〔五〕 東畿は東京畿を謂ふ。山東は河南河北を謂ふ。河東は蒲絳より北のかた并代に至る

〔六〕 來瑱、河西に徙り、未だ行かざるに相州の帥潰ゆ。因つて之をして陝に鎮して以て關を守らしむ。尋ぎて襄陽に徙さる。

丙申、郭子儀を以て東畿山東河東諸道元帥と爲し、東京留守を權知せしめ、河西節度使來瑱を以て陝州の刺史を行はしめ、陝虢華州節度使に充つ。

夏四月庚子、澤潞節度使王思禮、史思明の將楊旻を〔三〇〕潞城の東に破る。太子詹事李輔國、上が靈武に在りしときより、元帥行軍司馬の事を判し、帷幄に侍直し、詔命を宣傳し、四方の文奏、寶印符契、晨夕の軍號、一に以て之に委ぬ。京師に還るに及び、専ら禁兵を掌り、常に〔三一〕内宅に居り、制勅必ず輔國の押署を經、然る後施行す。宰相百司、非時に事を奏するには、皆輔國に因る。關白し旨を承け、常に〔三二〕銀臺門に於て、天下の事を決す。事、大小と無く、輔國口づから制勅を爲り、寫して外に付して施行し、事畢りて聞奏す。又、察事數十人を置き、潛に〔三三〕人間に於て細事を聽察せしめ、即ち推案を行ふ。追索する所有れば、諸司、敢て拒む者無し。御史臺・大理寺の重囚、或は推斷すること未だ畢らざるに、輔國追うて銀臺に詣り、一時に之を縱す。三司府縣の鞫獄、皆先づ輔國に詣りて咨稟す。輕重、意に隨ひ、制勅と稱して之を行ふ。敢て違ふ者莫し。宦官、敢て其官を斥さず、皆之を〔三四〕五郎と謂ふ。李揆は〔三五〕山東の甲族なり。輔國を見、子弟の禮を執り、之を五父と謂ふ。李峴が相と爲るに及び、上の前に於て叩頭して論ず、「制勅は皆應に中書に由りて出づべし」と。具に輔國が權を専らにし、政を亂るの狀を陳ぶ。上、感寤し、其の正直なるを賞す。〔三六〕輔國の行事、變更する所多く、

- 〔三〇〕 潞城縣は潞州に屬す。隋の開皇十六年、置く。潞州の東北四十里に在り。今の山西省冀寧道潞城縣。
- 〔三一〕 内宅。蓋し禁中に在り、輔國の止宿の署舎なり。
- 〔三二〕 左銀臺門は紫宸殿の東に直り、右銀臺門は紫宸殿の西に直る。
- 〔三三〕 五郎。李輔國は第五なり。
- 〔三四〕 山東の甲族。李揆の裔は隴西に出で、其先、滎陽に客居し、遂に山東の甲族と爲る。
- 〔三五〕 一本には行の上に所の字有り。

其察事を罷む。輔國、是を由りて行軍司馬を讓り、〔三六〕本官に歸らんと請ふ。上、許さず。制す、「比、軍國の務め殷なるに緣り、或は口勅を宣して處分し、諸色取索し、及び囚徒を杖配せり。今より、一切竝に停む。如し〔三七〕正宣に非ざれば、竝に行ふを得ず。中外の諸務、各有司に歸す。〔三八〕英武軍虞候及び〔三九〕六軍・諸使・諸司等、比來或は因つて論競し、懸に自ら追攝す。今より、須く一切、臺府を經べし。如し由る所の處斷平かならざれば、狀を具して奏聞するを聽す。諸の律令、十惡・人を殺し・姦盜・造偽を除くの外、餘の煩冗は、一切削除す」と仍ほ中書門下に委ね、法官と詳定して聞奏せしむ。輔國、是に由りて峴を忌む。

甲辰、〔四〇〕陳鄭毫節度使を置き、鄧州の刺史魯昚を以て之と爲し、徐州の刺史尙衡を以て〔四一〕青密七州節度使と爲し、興平軍節度使李奐を以て豫許汝三州節度使を兼ね、仍ほ各境上に於て守捉防禦せしむ。九節度が相州に潰ゆるや、魯昚が部する所の兵、剽掠尤も甚だし。郭子儀が退きて河上に屯し、李光弼が太原に還るを聞き、昚慙ち懼れ、

- 〔三六〕 本官は太子詹事なり。
- 〔三七〕 正宣。中書に在りて檢覆して然る後宣布したる詔勅を云ふ。
- 〔三八〕 英武軍。殿前の射生手なり。虞候を置き、以て之を統ぶ。
- 〔三九〕 六軍。北門の六軍なり。
- 〔四〇〕 諸使。内諸使なり。
- 〔四一〕 諸司。内諸司なり。
- 〔四二〕 臺府。臺は御史臺、府は京兆府。
- 〔四三〕 陳鄭毫には、此より前、未だ嘗て節鎮を置かず。魯昚、南陽より之と爲る。青密等の七州は、尙衡、彭城より升りて之を統ぶ。興平軍は、本、雍州始平縣(今の陝西省關中道興平縣)に置く。李奐、時に行營に在り、豫許汝三州を統べしむ。此れ皆時に臨みて分鎮す。一定の規模有るに非ざるなり。
- 〔四四〕 七州。青・密・登・萊・淄・沂・海の七州。

藥を飲みて死す。

史思明、自ら大燕皇帝と稱し、順天と改元す。其妻辛氏を立てて皇后と爲し、子朝義を懷王と爲す。周摯を以て相と爲し、李歸仁を將と爲す。范陽を改めて燕京と爲し、諸州を郡と爲す。

戊申、鴻臚卿李抱玉を以て鄭陳穎毫節度使と爲す。抱玉は、安興貴の後なり。李光弼の裨將と爲り、屢、戰功有り。自ら「安祿山と同姓なるを恥づ」と陳す。故に姓を李氏と賜ふ。

回紇の毗伽闕可汗・卒す。長子葉護、先に殺に遇ふ。國人、其少子を立つ。是を登里可汗と爲す。回紇、寧國公主を以て殉と爲さんと欲す。公主曰はく、「回紇、中國の俗を慕ふ、故に中國の女を娶りて婦と爲せり。若し其本俗に従はんと欲せば、何ぞ必ずしも昏を萬里の外に結ばんや」と。然れども亦之が爲めに、面を髻して哭す。

鳳翔の馬坊押官、劫を爲す。天興の尉謝夷甫、捕へて之を殺す。其妻、冤を訴ふ。李輔國、素、飛龍殿より出づ。監察御史孫鑿に勅して之を鞠せしむ。冤無し。又、御史中丞崔伯陽・刑部侍郎李暉・大理卿權獻をして之を鞠せしむ。鑿と同じ。猶ほ服せず。又、侍御史太平の毛若虛

【四六】安興貴。一百八十七卷高祖武德二年に見ゆ。

【四七】面を髻して哭す。漢北の俗、死者、屍を帳に停め、子孫及び親屬男女、各、牛馬を殺し、帳前に陳して之を祭り、帳を遮り馬を走らして七匝し帳門に詣り、刀を以て面を髻し且つ哭し、血涙俱に流る、此の如くすること七度にして止む。

【四八】押官。馬坊を管押するの官。

【四九】天興縣は、本、古の雍縣、至德二載、改めて鳳翔と曰ひ、仍ほ分ちて天興縣を置き、鳳翔府を帶ぶ。

【五〇】太平縣は絳州に屬す、今の山西省河東道汾城縣。

【五一】桂陽は漢の縣、隋・唐、連州を帶ぶ。今の廣東省嶺南道連縣。

【五二】嶺下。嶺を度りて南下する諸縣を謂ふ。史、暉・向が貶せらるる所の縣の名を失す、故に皆、嶺下の尉に貶せらると云ふ。

【五三】新唐書方鎮表に、汴滑節度使は滑州に治し、滑・濮・汴・曹・宋の五州を領すとあり。

【五四】涇・原・寧・慶・坊・鄜・丹・延を以て邠寧節度に隸す。

をして之を鞠せしむ。若虚は傾巧の士にして、輔國の意を希ひ、罪を夷甫に歸す。伯陽怒り、若虚を召して詰責し、之を劾奏せんと欲す。若虚、先づ自ら上に歸す。上、若虚を簾下に匿す。伯陽尋ぎて至り、「若虚、中人に附會し、獄を鞠すること直ならず」と言ふ。上怒り、叱して之を出す。伯陽は高要の尉に貶せられ、獻を桂陽の尉に貶し、暉と鳳翔の尹嚴、向と皆、嶺下の尉に貶せられ、鑿は名を除き、播州に長流せらる。吏部尙書同平章事李峴、奏す、「伯陽、罪無し。之を責むること太だ重し」と。上、以て朋黨と爲し、五月辛巳、峴を蜀州の刺史に貶す。右散騎常侍韓擇木、入りて對す。上、之に謂つて曰はく、「李峴、權を専らにせんと欲す。今、蜀州に貶す。朕、自ら、法を用ふること太だ寛なるを覺ゆ」と。對へて曰はく、「李峴の言は直なり。權を専らにするに非ず。陛下、之を寛にせば、祇に聖德を益さんのみ」と。若虚尋ぎて御史中丞に除せられ、威、朝廷に振ふ。壬午、滑濮節度使許叔冀を以て汴州の刺史と爲し、滑汴等七州節度使に充つ。試汝州刺史劉展を以て滑州の刺史と爲し、副使に充つ。

六月丁巳、朔方を分ちて、邠寧等九州節度使を置く。

觀軍容使魚朝恩、郭子儀を惡み、其敗に因り、之を上に短る。秋七月、上、子儀を召して京師に還らしめ、李光弼を以て代りて朔方節度使・兵馬元帥と爲す。士卒・涕泣し、中使を遮り、子儀を留めんと請ふ。子儀、之を給きて曰はく、「我、中使を餞するのみ。未だ行かざるなり」と。因つて馬を躍らして去る。光弼、親王を得て之が副と爲らんことを願ふ。辛巳、趙王係を以て天下兵馬元帥と爲す。光弼、之に副たり。仍ほ光弼を以て諸節度行營に知たらしむ。光弼、河東の騎五百を以て、馳せて東都に赴き、夜、其軍に入る。光弼、軍を治むること嚴整なり。始めて至り、號令一たび施せば、士卒壁壘、旌旗精采、皆變ず。是時、朔方の將士、子儀の寬なるを樂しみ、光弼の嚴なるを憚る。左廂兵馬使張用濟、河陽に屯す。光弼、檄を以て之を召す。用濟曰はく、「朔方は叛軍に非ざるなり。夜に乘じて入る。何を疑はるるの甚だしきや」と。諸將と謀り、精銳を以て東京に突入し、光弼を逐ひ、子儀を請はんとし、其士に命じ、皆、甲を被り馬に上り枚を銜みて以て待たしむ。都知兵馬使僕固懷恩曰はく、「鄴城の潰ゆるや、郭公先づ去れり。朝廷、帥を責む、故に其兵柄を罷む。今、李公を逐うて疆ひて之を請はば、是れ反するなり。其れ可ならんや」と。右武鋒康元寶曰はく、「君、兵を以て郭公を請はば、朝廷必ず郭公を諷して之を爲さしむと疑はん。是れ其家を破るなり。郭公百口、何ぞ君に負かんや」と。用濟乃ち止む。光弼、數千騎を以て、東して汜水に出づ。用濟、單騎にて來り謁す。光弼、用濟が召せども時に至らざるを責め、之を斬り、部將辛京杲に命じ、代りて其衆を領せ

しむ。僕固懷恩繼ぎて至る。〔五〕光弼引きて坐せしめて與に語る。須臾にして闇者白す、〔五〕蕃渾の五百騎至る」と。光弼、色を變ず。懷恩走り出で、麾下の將を召し、陽りて之を責めて曰はく、「汝に語りて來る勿からしむ。何ぞ固く違ふを得る」と。光弼曰はく、「士卒は將に隨ふ。亦復た何の罪あらん」と。命じて牛酒を給せしむ。〔五〕潞沁節度使王思禮を以て太原の尹を兼ねしめ、北京留守・河東節度使に充つ。初め、潼關の敗るるや、思禮の馬、矢に中りて斃る。騎卒整屋の張光晟といふもの有り、馬を下りて之に授く。其姓名を問ふ。告げずして去る。思禮、陰に其狀貌を識り、之を求むれども獲ず。河東に至るに及び、或るひと代州の刺史〔六〕河西の辛雲京を諳す。思禮、之を怒る。雲京懼れ、出づる所を知らず。光晟、時に雲京の麾下に在り、曰はく、「光晟嘗て〔六〕王公に徳有り。從來、敢て言はざりしは、此を以て賞を取るを恥づればなるのみ。今、使君、急有り。光晟、請ふ往きて王公を見、必ず使君の爲めに之を解かん」と。雲京喜びて之を遣る。光晟、思禮に謁し、未だ言ふに及ばざるに、思禮、之を識りて曰はく、「噫、子は吾が故人に非ずや、何ぞ相見るの晩きや」と。光晟、實を以て告ぐ。思禮大に喜び、其手を執り流涕して曰はく、「吾の今日有るは、皆子の力

〔五〕 李光弼、僕固懷恩を待つこと諸將よりも加ふる有り。
 〔五〕 蕃渾。諸蕃種及び渾種を謂ふ。
 〔五〕 懷恩、備を成して而る後、光弼を見る。光弼、其情を知ると雖も、容忍して發せず。
 〔五〕 王思禮、澤潞沁三州を節度す。史或は澤潞と稱し、或は潞沁と稱す。
 〔五〕 李光弼に代らしむ。
 〔五〕 潼關の敗は、一百十八卷至徳元載に見ゆ。
 〔六〕 辛雲京は蘭州金城の人、河西路に屬す。
 〔六〕 王公。思禮をいふ。

なり。吾、子を求むること久し」と。引きて與に榻を同じくして坐し、約して兄弟と爲る。光晟因つて從容として雲京の冤を言ふ。思禮曰はく、「雲京の過は亦細ならず。今日特に故人の爲めに之を捨す」と。即日、光晟を擢でて兵馬使と爲し、金帛田宅を贈ること甚だ厚し。

辛卯、朔方節度副使殿中監僕固懷恩を以て太常卿を兼ねしめ、爵を大寧郡王に進む。懷恩、郭子儀に從つて前鋒と爲り、勇、三軍に冠たり。前後、戦功、多きに居る。故に之を賞す。

八月乙巳、襄州の將康楚元・張嘉延、州に據りて亂を作す。刺史王政、荊州に奔る。楚元自ら南楚の霸王と稱す。

回紇、寧國公主が子無きを以て、歸るを聽す。丙辰、京師に至る。

戊午、上、將軍曹日昇をして、襄州に往き、康楚元を慰諭せしむ。王政を貶して饒州の長史と爲し、司農少卿張光奇を以て襄州の刺史と爲す。楚元、從はず。

壬戌、李光弼を以て幽州の長史・河北節度等使と爲す。

九月甲午、張嘉延、襲うて荊州を破る。荆南節度使杜鴻漸、城を棄てて走る。澧・郎・郢・峽・歸等の州の官吏、之を聞き、争うて山谷に潛竄す。

戊辰、更に絳州に令して、乾元重寶大錢を鑄しむ。加ふるに重輪を以てし、一、五十に當る。在京の百官先に以へらく、「軍旅、皆、俸祿無し。宜しく新錢を以て其冬料を給すべし」と。

丁亥、太子少保崔光遠を以て荆襄招討使と爲し、山南東道處置兵馬都使に充つ。陳頴毫申節度使王仲昇を以て申河等五州節度使と爲し、淮南西道行營兵馬に知たらしむ。

史思明、其子朝清をして范陽を守らしめ、諸郡の太守に命じ、各兵三千を將る、己に從つて河南に向はしめ、分ちて四道と爲し、其將令狐彰をして、兵五千を將る、黎陽より河を濟り、滑州を取らしめ、思明は濮陽より、史朝義は白阜より、周摯は胡良より河を濟り、汴州に會す。李光弼、方に河上の諸營を巡り、之を聞き、還りて汴州に入り、汴滑節度使許叔冀に謂つて曰はく、「大夫能く汴州を守ること十五日ならば、我則ち兵を將りて來り救はん」と。叔冀・許諾す。光弼、東京に還る。思明、汴州に至る。叔冀、與に戦うて、勝たず、遂に濮州の刺史董秦及び其將梁浦・劉從諫・田神功等と與に、之に降る。思明、叔冀を以て中書令と爲し、其將李詳と與に汴州を守らし

【六〇】 胡三省曰はく、張光晟が王思禮に於けるは、君子と謂ふ可し。其後、德宗に事へ、職を失ふを以て怨望し、遂に身を朱泚に委ぬ。何ぞ前後の相違するやと。
【六一】 公主が回紇に嫁すること前卷前年に見ゆ。
【六二】 之を以て河北及び幽燕を收復せしむるなり。
【六三】 時に荆南節度使は荆・澧・郎・郢・復・夔・峽・忠・萬・歸の十州を領す。

【六四】 唐の世、錢を鑄るに、大凡天下の諸鑄九十九、而して絳州の鑄三十。其餘の諸鑄は或は江嶺を隔て、或は寇虜に没す。故に當時の鑄錢率は絳州に倚る。
【六五】 大錢は、徑一寸二分、文、亦乾元重寶と曰ふ。背の外郭、重輪を爲す。緡毎に重さ十二斤。重稜錢と號す。
【六六】 冬料。各官の冬季に當に得べき所の俸料錢なり。
【六七】 申河等五州。申・光・壽・安・河の五州。
【六八】 白阜、胡良。皆、河津の濟度の要、滑州の西北岸に在り。良或は梁に作る。
【六九】 許叔冀卒に張鎰の言の如し。

め、厚く董秦を待ち、其妻子を収め、長蘆に置きて質と爲し、其將南德信をして、梁浦・劉從諫・田神功等數十人と與に、江淮を徇へしむ。神功は南宮の人なり。思明、以て平盧兵馬使と爲す。之を頃くして、神功、徳信を襲うて之を斬る。從諫、身を脱して走る。神功、其衆を將ゐて來り降る。思明、勝に乗じ、西して鄭州を攻む。光弼、衆を整へて徐行し、洛陽に至り、留守韋陟に謂つて曰はく、「賊、勝に乗じて來る。利、兵を按ずるに在り。速かに戰ふに利あらず。洛陽、守る可からず。公に於て計るに何如」と。陟、兵を陝に留め、退きて潼關を守り。險に據りて以て其銳を挫かんと請ふ。光弼曰はく、「兩敵相當れば、進むを貴び退くを忌む。今、故無くして五百里の地を棄てば、則ち賊勢益々張らん。若かじ、軍を河陽に移し、北のかた澤潞を連ね、利あらば則ち進取し、利あらずんば則ち退守し、表裏相應じ、賊をして敢て西侵せざらしめんには。此れ猿臂の勢なり。夫れ朝廷の禮を辨するは、光弼、公に如かず。軍旅の事を論ずるは、公、光弼に如かず」と。陟、以て應ずる無し。判官韋損曰はく、「東京は帝宅なり。侍中奈何ぞ守らざる」と。光弼曰はく、「之を守らば、則ち汜水・崞嶺・龍門に、皆應に兵を置くべし。子、兵馬判官と爲り、能く之を守らんか」と。遂に留守韋陟

【七〇】長蘆。漢の參戸縣の地。今の直隸省津海道滄縣。時に滄州に屬す。

【七一】南宮。冀州に屬す。今の直隸省大名道南宮縣西北。

【七二】鄭州。滎陽郡。

【七三】猿臂の勢。猿臂は伸ばして長くす可く、縮めて短くす可し、故に以て喩と爲す。

【七四】李公弼、至徳の初め、已に司空と爲る。乾元元年、侍中と爲る、故に韋損、此を以て之を呼ぶ。

【七五】汜水に成阜の險有り、崞嶺は登封縣に在り、龍門は伊闕。

に移牒し、東京の官屬を帥ゐて西して關に入らしめ、河南の尹李若幽に牒し、吏民を帥ゐて城を出で賊を避け其城を空しくせしむ。光弼、軍士を帥ゐて、油鐵諸物を運び、河陽に詣りて守備を爲し、光弼、五百騎を以て殿す。時に思明の遊兵已に石橋に至る。諸將請うて曰はく、「今、洛陽よりして北せんか、石橋に當りて進まんか」と。光弼曰はく、「石橋に當りて進まん」と。日暮に及び、光弼、炬を乗りて徐行し、部曲堅重なり。賊、兵を引き、之を躡くれども、敢て逼らず。光弼、夜、河陽に至る。兵二萬有り。糧糲に十日を支ふ。光弼、守備を按閱し、士卒を部分し、嚴辨せざる無し。庚寅、思明、洛陽に入る。城空しくして、得る所無し。光弼が其後を拵せんことを畏れ、敢て宮に入らず、退きて白馬寺の南に屯し、月城を河陽の南に築き、以て光弼を拒ぐ。是に於て、鄭滑等の州、相繼ぎて陥没す。韋陟・李若幽、皆、陝に寓治す。

【七六】洛城石橋。水經注に、穀水、東して洛陽の廣莫門の北を逕、漢の穀門なり、東して建春門の石橋下を逕、即ち上東門なりと。此に言へる漢管の洛城の諸門は、隋唐の徙る所の洛城に非ざるなり。上東門の地、唐、鎮と爲す。

【七七】之を躡くるは、其の兇懼して自ら潰えんことを欲するなり。敢て逼らざるは、其の

【七八】胡三省曰はく、郭子儀、滏水より退きて河陽を守るや衆、數萬に及ぶ。李光弼が河陽に至るに及びて、兵二萬有り。何ぞ衆寡の相懸るや。蓋し張用濟が死するや、朔方の士卒、威を畏れて逃散する者多きなりと。

史思明、兵を引き河陽を攻む。驍將劉龍仙をして城下に詣りて挑戦せしむ。龍仙、勇を恃み、

右足を擧げて馬鬣の上に加へ、光弼を慢罵す。光弼、諸將を顧みて曰はく、「誰か能く彼を取らん者ぞ」と。僕固懷恩、行かんと請ふ。光弼曰はく、「此れ大將の爲す所に非ず」と。左右言ふ、「裨將白孝徳、往く可し」と。光弼、召して之に問ふ。孝徳、行かんと請ふ。光弼問ふ、「幾何の兵を須ふる」と。對へて曰はく、「請ふ身を挺して之を取らん」と。光弼、其志を壯とす。然も固く須ふる所を問ふ。對へて曰はく、「願はくは五十騎を選びて壘門を出でて後繼と爲せ。兼ねて請ふ、大軍助けて鼓譟し、以て氣を増せ」と。光弼、其背を撫して之を遣はす。孝徳、二矛を挟み、馬に策ち、流を亂して進む。半渉るや、懷恩・賀して曰はく、「克たん」と。光弼曰はく、「鋒未だ交はらざるに、何を以て之を知る」と。懷恩曰はく、「其の轡を攪ること安閑なるを觀、其の萬全なるを知る」と。龍仙、其の獨り來るを見、甚だ之を易る。稍近づくと、龍仙、測らずして止む。之を去ること十歩。乃ち之と言ふ。龍仙、慢罵すること初めの如し。孝徳、馬を息むること良久しく、因つて目を瞋らして謂つて曰はく、「賊、我を識るや」と。龍仙曰はく、「誰ぞや」と。曰はく、「我は白孝徳なり」と。龍仙曰はく、「是れ何の狗彘ぞ」と。孝徳、大呼し、矛を運らし馬を躍らし之を搏つ。城上鼓譟し、五十騎繼ぎて進む。龍仙、矢、

【八二】 既に其勇氣を賞し、而して其の敵を取るの方略有るを賞す。
 【八三】 横ぎりて流を渡るを、亂すと曰ふ。
 【八四】 馬を息むるは、馬力をしめて完復せしめて而る後戰ふなり。
 【八五】 狗彘。いぬとわのこ。之を罵る也。

發するに及ばず、環りて隄上に走る。孝徳、追ひ及びて首を斬り、之を攜へて以て歸る。賊衆大に駭く。孝徳は本安西の胡人なり。思明、良馬千餘匹有り。毎日、河の南渚に出して之を浴し、循環して休まず、以て多きを示す。光弼、命じて軍中の牝馬を索めしめ、五百匹を得、其駒を城内に繋ぎ、思明の馬が水際に至るを俟ち、盡く之を出す。馬嘶きて已まず。思明の馬悉く浮びて河を渡る。一時に之を驅りて城に入る。思明怒り、戰船數百艘を列ね、火船を前に泛べて之に隨ひ、流に乗じて浮橋を燒かんと欲す。光弼先づ百尺の長竿數百枚を貯へ、巨木を以て其根を承け、氈に鐵叉を裹み、其首に置き、以て火船を迎へて之を又す。船を進むを得ず。須臾にして自ら焚け盡す。又、又を以て戰船を橋上に拒ぎ、礮石を發して之を撃つ。中る者皆沈没す。賊、勝たずして去る。思明、兵を河清に見し、光弼の糧道を絶たんと欲す。光弼、野水渡に軍し、以て之に備ふ。既に夕にして、河陽に還る。兵千人を留め、部將雍希顛をして其柵を守らしめ、曰はく、「賊將高庭暉・李日越、噓文景は、皆萬人の敵なり。思明必ず一人をして來りて我を劫さしめん。我且く之を去らん。汝、此に待ち、若し賊至らば、之と戰ふ勿れ。降らば則ち之と俱に來れ」と。諸將、其意を論るもの莫く、皆竊に之を笑ふ。既にして思明、果して李日越に謂つて曰はく、「李光弼、城に憑るに長ず。今出でて野に在り。此れ擒と成らん。汝、鐵騎を以て宵濟り、我が爲めに之を取れ。得ずんば則ち返る勿れ」

【八五】 牡馬、牝を慕ひて一時に河を渡る。
 【八六】 河清縣は、南のかた黄河に臨む。
 【八七】 噓。姓なり。

と。日越、五百騎を將る、晨に柵下に至る。希顥、壕を阻て卒を休め、吟嘯して相視る。日越、(六)之を怪しみ、問うて曰はく、(七)「司空在るか。」(八)曰はく、「夜去れり。」(九)「兵幾何ぞ。」(十)曰はく、「千人。」(十一)「將は誰ぞ。」(十二)曰はく、「雍希顥」と。日越、默計すること之を久しくし、其下に謂つて曰はく、「今、李光弼を失ひ、希顥を得て歸らば、吾が死せんこと必せり。降るに如かざるなり」と。遂に降らんと請ふ。希顥、之と俱に光弼を見る。光弼厚く之を待ち、任ずるに心腹を以てす。高庭暉、之を聞き、亦降る。或るひと光弼に問ふ、「二將を降すこと何ぞ易きや」と。光弼曰はく、「此れ人情なるのみ。思明、常に野戦するを得ざるを恨む。我が外に在るを聞き、以爲へらく必ず取る可からんと。日越、我を獲ずんば、勢敢て歸らじ。庭暉は、才勇、日越に過ぐ。日越が寵任せらるるを聞き、必ず之を奪はんことを思はん」と。庭暉、時に五臺府果毅たり。己亥、庭暉を以て右武衛大將軍と爲す。思明復た河陽を攻む。光弼、鄭陳節度使李抱玉に謂つて曰はく、「將軍能く我が爲めに南城を守ること二日せんか」と。抱玉曰はく、「期を過ぎなば何如せん」と。光弼曰はく、「期を過ぎて救至らずんば、之を棄つるに任せん」と。抱玉・許諾し、兵を勸して拒ぎ守る。城且に陥らんとす。抱玉、之を給きて曰はく、「吾が糧盡きぬ。」

【六】 之を怪しむ。其の戰意無きを怪しむなり。
 【七】 李光弼、司空侍中を加へらる、故に之を稱す。
 【八】 代州に五臺府有り。
 【九】 唐の諸府の果毅は品秩猶ほ卑し。諸衛大將軍は三品なり。
 【十】 乾元二年、鄭陳節度使を置き、鄭陳毫穎四州を領せしむ。然れども此時鄭州は既に史思明に没す。

明旦當に降るべし」と。賊喜び、軍を斂めて以て之を待つ。抱玉、城の備を繕完し、明日、復た戰はんと請ふ。賊怒り、急に之を攻む。抱玉、奇兵を出し、表裏より夾撃し、殺傷甚だ衆し。董秦、思明に従つて河陽に寇す。夜、其衆五百を帥る、柵を抜き圍を突き、光弼に降る。時に光弼、自ら將とし、中潭城外に屯し、柵を置き、柵外に塹を穿ち、深廣二丈。乙巳、賊將周摯、南城を捨て、力を併せて中潭を攻む。光弼、荔非元禮に命じ、勁卒を羊馬城に出し、以て賊を拒ぐ。光弼自ら城の東北隅に於て、小朱旗を建て、以て賊を望む。賊、其衆を恃み、直に進みて城に逼り、車を以て攻具を載せて自ら隨へ、衆を督して塹を填め、三面各八道、以て兵を過ごし、又、柵を開きて門と爲す。光弼、賊が城に逼るを望み、(十三)元禮に問はしめて曰はく、「中丞、賊が塹を填め柵を開き兵を過ごすを視、晏然として動かざるは、何ぞや」と。元禮曰はく、「司空、守らんと欲するか、戰はんか」と。光弼曰はく、「戰はんと欲す」と。元禮曰はく、「戰はんと欲するならば、則ち賊吾が爲めに塹を填むるを、何爲れぞ之を禁せん」と。光弼曰はく、「善し。吾の及ばざる所なり。」(十四)之を勉めよ」と。元禮、柵開くを俟ち、敢死の士を帥る、突出して賊を撃つ。却き走ること數百步。元禮、賊陳の堅くして未だ摧陷し易からざるを度り、乃ち復た引き退き、其の怠るを須ちて之を撃たんとす。光弼、元禮が退くを

【十三】 中潭城。河に中して石潭を起し、城を築きて以て河橋を衛る。潭は沙出づる所をいふ。
 【十四】 羊馬城。城外別に短垣を築き、高さ纔に肩に及ぶ、之を羊馬城と謂ふ。
 【十五】 其の敢て戰ふを賞すと雖も、戰は危事なり、故に曰はく、之を勉めよと。

望み、怒り、左右を遣はし、召して之を斬らんと欲す。元禮曰はく、「戦正に急なり。召して何を爲す」と。乃ち退きて柵中に入る。賊も亦敢て逼らず。良久しくして鼓譟して柵門を出で、奮撃して之を破る。周摯復た兵を收めて北城に趣く。光弼遽に衆を帥ゐて北城に入り、城に登りて賊を望みて曰はく、「賊兵、多しと雖も、囂しくして、整はず。畏るるに足らざるなり。日中を過ぎずして、保して諸君の爲めに之を破らん」と。乃ち諸將に命じて出で戦はしむ。期に及びて、決せず。諸將を召し、問うて曰はく、「向來、賊陳、何の方が最も堅き」と。曰はく、「西北隅なり」と。光弼、其將郝廷玉に命じて之に當らしむ。廷玉、騎兵五百を請ふ。之に三百を與ふ。又、其次の堅き者を問ふ。曰はく、「東南隅なり」と。光弼、其將論惟貞に命じて之に當らしむ。惟貞、鐵騎三百を請ふ。之に二百を與ふ。光弼、諸將に令して曰はく、「爾が曹、吾が旗を望みて戦へ。吾、旗を馳かすこと緩ならば、爾が利を擇びて戦ふに任す。吾急に旗を馳かして三たび地に至らば、則ち萬衆齊しく入り、死生、之を以てせよ。少しも退く者は斬らん」と。又、短刀を以て、韃中に置きて曰はく、「戦は危事なり。吾は國の三公なり。賊の手に死す可からず。萬一、戦、利あらずんば、諸君は前みて敵に死せよ。我は自ら此に到ねん。諸君をして獨り死せしめざるなり」と。諸將出で戦ふ。之を頃くして、廷玉奔り還る。光弼、之を望み、驚きて曰はく、「廷玉退く。吾が事危し」と。左右に命じ、廷玉の首を取らしむ。廷玉曰はく、「馬、

【九六】 廷玉は光弼の愛將なり。
 【九七】 論。姓なり。諸論は吐蕃より來り降る。
 【九八】 韃。靴に同じ、胡履なり。

箭に中る。敢て退くに非ざるなり」と。使者馳せて報ず。光弼、馬を易へて之を遣らしむ。僕固懷恩及び其子開府儀同三司瑒、戦うて小しく却く。光弼、又、命じて其首を取らしむ。懷恩父子、顧みて使者が刀を提げて馳せ來るを見、更に前みて決戦す。光弼、連に其旗を馳かす。諸將齊しく進みて死を致す。呼聲、天地を動かす。賊衆大に潰ゆ。斬首千餘級、捕虜五百人、溺死する者千餘人。周摯、數騎を以て遁れ去る。其大將徐瑣玉、李秦授を擒にす。其河南節度使安太清、走りて懷州を保つ。思明、摯が敗れしを知らず、尙ほ南城を攻む。光弼、俘囚を驅り、河に臨みて之に示す。乃ち遁る。丁巳、李日越を以て右金吾大將軍と爲す。

【九九】 簡州。漢の牛鞞廣都の地。隋の仁壽の初め、簡州を置く。今の四川省西川道簡陽縣。
 【一〇〇】 韋見素は天寶より至徳に至るまでに相たり。

邛 簡嘉眉瀘戎等の州の蠻・反す。
 十一月甲子、殿中監董秦を以て陝西神策兩軍兵馬使と爲し、姓を李・名を忠臣と賜ふ。
 康楚元等、衆、萬餘人に至る。商州の刺史充荆襄等道租庸使韋倫、兵を發して之を討ち、鄧の境に駐まり、降る者を招諭し、厚く之を撫し、其の稍怠るを伺ひ、軍を進めて之を撃ち、楚元を生擒す。其衆遂に潰ゆ。其の掠むる所の租庸二百萬緡を得。荆襄皆平ぐ。倫は、見素の從弟なり。
 安西・北庭の兵を發し、陝に屯せしめ、以て史思明に備ふ。
 第五琦、乾元錢・重輪錢を作り、開元錢と、三品並び行ふ。民争うて盜鑄し、貨輕く物重く、穀價

騰踊し、餓殍相望む。上言する者、皆、咎を琦に歸す。庚午、琦を忠州の長史に貶す。御史大夫賀蘭進明、溱州の員外司馬に貶せらる、琦の黨に坐するなり。

十二月甲午、呂誼、度支使を領す。

乙巳、韋倫、康楚元を送り、闕に詣りて之を斬る。

史思明、其將李歸仁を遣はし、鐵騎五千を將る、陝州に寇せしむ。神策兵馬使衛伯玉、數百騎を以て、撃ちて之を。礮子阪に破り、馬六百匹を得。歸仁走る。伯玉を以て

鎮西四鎮行營節度使と爲す。李忠臣、歸仁等と、永寧、莎柵の間に

戦ひ、屢之を破る。

上元元年、春正月辛巳、李光弼を以て太尉と爲し、中書令を兼ねし

む。餘は故の如し。

丙戌、于闐王勝の弟曜を以て、四鎮節度副使に同じく、本國の事を權

知せしむ。

党項等の羌、邊鄙を吞噬し、將に京畿に逼らんとす。乃ち、邠寧等州節

度を分ち、鄜坊丹延節度と爲し、亦、之を渭北節度と謂ひ、邠州の刺史桑

知せしむ。

如珪を以て邠寧鄜州の刺史を領せしめ、杜晷をして鄜坊節度副使を領せし

め、道を分ちて招討す。戊子、郭子儀を以て、兩道節度使を領せしめ、京

師に留まり、其威名を假り、以て之を鎮す。

上、九宮貴神を祀る。

二月、李光弼、懷州を攻む。史思明、之を救ふ。癸卯、光弼、沁水の上

に逆へ戦ひ、之を破る。斬首三千餘級。

忠州の長史第五琦、既に行く。或るひと『琦、人の金二百兩を受く』と

告ぐ。御史劉期光を遣はし、追うて之を按せしむ。琦曰はく、『琦、位に

宰相に備はり、二百兩の金は、手挈す可からず。若し付受、憑有らば、

請ふ律に準じて罪を科せよ』と。期光即ち奏す、『琦已に罪に服せり』と。

庚戌、琦、坐して名を除かれ、夷州に長流せらる。

三月甲申、蒲州を改めて河中府と爲す。

庚寅、李光弼、安太清を懷州の城下に破る。夏四月壬辰、史思明を河陽の西渚に破る。斬首千五百

餘級。

襄州の將長維瑾・曹玠、節度使史翽を殺し、州に據りて反す。制して、隴州の刺史韋倫を以て

襄州の將長維瑾・曹玠、節度使史翽を殺し、州に據りて反す。制して、隴州の刺史韋倫を以て

餘級。

唐肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝上元元年

唐肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝上元元年

餘級。

襄州の將長維瑾・曹玠、節度使史翽を殺し、州に據りて反す。制して、隴州の刺史韋倫を以て

餘級。

唐肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝上元元年

餘級。

唐肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝上元元年

【一〇】忠州。漢の臨江瑩江枳縣の地。唐の初め、忠州を置く。地、巴徼に邊す。今の四川省東川道忠縣。
【一一】礮子阪。河南の永寧縣の西に在り。
【一二】永寧。漢の宜陽縣西界の地。後周、同軌郡及び熊耳縣、嶧縣を置く。隋、郡及び嶧縣を廢す。義寧元年、改めて永寧縣と爲す。今の河南省河洛道洛寧縣の東北に在り。
【一三】上元元年。是年閏四月始めて改元す。西紀七六〇年。
【一四】于闐王と四鎮節度使と、皆、行營に在り、故に其弟をして節度副使と與に國事を權せしむ。
【一五】邠寧等云云。邠寧節度は州九を領す。四州を分ちて渭北節度と爲す。
【一六】兩道。邠寧、鄜坊なり。
【一七】憑。證據なり。
【一八】夷州。京師の南四千三百八十七里、洛陽に至るまで三千八百八十里。今の貴州省鎮遠道鳳泉縣の西北。

〔五〕山南東道節度使と爲す。時に李輔國、事を用ひ、節度使、皆、其門に出づ。倫既に朝廷の除する所たり、又、輔國に謁せず。尋ぎて秦州防禦使に改む。己未、陝西節度使來瑱を以て山南東道節度使と爲す。瑱、襄州に至る。張維瑾等皆降る。閏月丁卯、河東節度使王思禮に加へて司空と爲す。武德より以來、思禮始めて宰相と爲らずして、而も三公に拜す。

甲戌、趙王係を徙して越王と爲す。

己卯、天下に赦し、改元す。

太宗望を追諡して武成王と爲し、歴代の名將を選びて、亞聖十哲と爲し、其中祀・下祀并に雜祀は、一切竝に停む。

是日、史思明、東京に入る。

五月丙午、太子太傅苗晉卿を以て侍中を行はしむ。晉卿、吏事に練達し、而して身を謹み位を固くす。時の人、之を胡廣に比す。

宦者馬上言、路を受け、人の爲めに官を兵部侍郎同中書門下三品呂誼に求む。誼、之が爲めに官に補す。事覺はれ、上言・杖死す。壬子、誼、罷めて太子賓客と爲る。

癸丑、京兆の尹 南華の劉晏を以て戸部侍郎と爲し、度支鑄錢鹽鐵等使に充つ。晏善く財利を治む。故に之を用ふ。

六月甲子、桂州經略使邢濟・奏す、〔一〕西原の蠻の二十萬の衆を破り、其帥黃乾曜等を斬る」と。

〔二〕三品の錢行はるること寢く久しく、歲荒に屬し、米斗ごとに七千錢に至り、人相食む。京兆の尹鄭叔清、私に錢を鑄る者を捕ふ。數月の間に、榜死する者八百餘人。禁する能はず。乃ち京畿に勅し、開元錢と乾元小錢と、皆十に當て、其重輪錢は、三十に當て、諸州は更に進止を俟たしむ。是時、史思明も亦 順天得一錢を鑄る。一、開元錢百に當る。賊中、物價尤も貴し。

甲申、興王侶・薨す。侶は張後の長子なり。幼なるを定王侗と曰ふ。張后、故を以て、數、太子を危くせんと欲す。太子常に恭遜を以て容を取る。會、侶・薨す。侗尙ほ幼なり。太子の位遂に定まる。

乙酉、鳳翔節度使崔光遠、党項を 普潤に破る。平盧兵馬使田神功・奏す、「史思明的兵を鄭州に破る」と。

〔七〕山南東道節度使。襄・鄧・隨・唐・安・均・房・金・商の九州を領し、襄州に治す。

〔八〕上元と改元す。

〔九〕亞聖十哲。秦の白起・漢の韓信・蜀の諸葛亮・唐の李靖・李勣を左に列し、漢の張良・齊の田穰苴・吳の孫武・魏の吳起・燕の樂毅を右に列す。

〔一〇〕早の故なり。唐六典に、昊天上帝・五方帝・皇地祇・神州・宗廟を大祀と爲し、日月星辰・社稷・先代の帝王・岳鎮・海瀆・帝社・先蠶・孔宣父・齊の太公・諸太子廟を中祀と爲し、司中・司命・風師・雨師・衆星・山林川澤・五龍祠等及び州縣の社稷・釋奠を小祀と爲す。雜祀は蓋し小鬼の神なり。

〔一〕南華。本、漢の離狐縣、歴代、名を更めず。天寶元年、名を南華縣と更む。曹州に屬す。今の直隸省大名道東明縣の東南。

〔二〕西原の蠻。廣容の南・邕桂の西に居る。

〔三〕開元錢と乾元の當十錢、重輪錢とを三品と爲す。

〔四〕史思明、得一元寶を鑄る、徑一寸四分。既にして得一は長祚の兆に非ざるを以て、其文を改めて順天元寶と曰ふ。

〔五〕普潤縣は鳳翔府に屬す、今の陝西省關中道麟遊縣の西一百二十里。

上皇、興慶宮を愛し、蜀より歸り、即ち之に居る。上時に夾城より、往きて起居す。上皇も亦間、大明宮に至る。左龍武大將軍陳玄禮・内侍監高力士、久しく上皇に侍衛す。上、又、玉眞公主・如仙媛・内侍王承恩・魏悅及び梨園の弟子に命じ、常に左右に娯侍せしむ。上皇多く長慶樓に御す。父老の過ぐる者、往往瞻拜して萬歳と呼ぶ。上皇常に樓下に於て酒食を置きて之に賜ふ。又、嘗て將軍郭英乂等を召し、樓に上らせて宴を賜ふ。劍南の奏事官有り、樓下を過ぎて拜舞す。上皇、玉眞公主・如仙媛に命じ、之が爲めに主人と作らしむ。李輔國、素微賤にして、暴に貴くして事を用ふと雖も、上皇の左右皆之を輕んず。輔國意に恨み、且つ、奇功を立てて以て其寵を固くせんと欲し、乃ち上に言つて曰はく、「上皇、興慶宮に居り、日に外人と交通す。陳玄禮・高力士、陛下に利あらざらんことを謀る。今、六軍の將士は、盡く靈武の勳臣にして、皆反仄して安んぜず。臣、曉諭すれども解く能はず。敢て以て聞せずんばあらず」と。上泣きて曰はく、「聖皇は慈仁なり。豈に此れ有る容けんや」と。對へて曰はく、「上皇固に此意無し。其れ羣小を如何せん。陛下、天下の主たり。當に社稷の大計を爲し、亂を未萌に消すべし。豈に匹夫の孝に徇ふを得んや。且つ興慶宮は、閭閻と相參はり、垣墉淺露にして、至尊の宜しく居るべき所に非ず。大内は深嚴なり。」

- 【六】 事、前卷至德二載に見ゆ。
- 【七】 夾城。開元二十年築く。
- 【八】 長慶樓は南のかた大道に臨む。
- 【九】 奏事官。諸道、官を遣はして京師に入り、事を奏せしむる者。
- 【一〇】 李輔國の此言、是れ肅宗に臨むに兵を以てする也。
- 【一一】 帝、上皇に尊號を上りて聖皇天帝と曰ふ。

(上皇)奉迎して之に居かば、彼と何ぞ殊ならん。又、小人が(上皇)聖聽を熒惑するを杜絶するを得ん。此の如くせば、上皇は萬歳の安きを享け、陛下は三朝の樂有らん。庸何ぞ傷まんや」と。上、聽かず。興慶宮、先に馬三百匹有り。輔國、勅を矯めて之を取り、纒に十匹を留む。上皇、高力士に謂つて曰はく、「吾が兒、輔國の惑はす所と爲り、孝を終るを得ざらん」と。輔國、又、六軍の將士をして、號哭叩頭し、上皇を迎へて西内に居かんと請はしむ。上泣きて應へず。輔國懼る。會、上、不豫なり。秋七月丁未、輔國、上の語と矯稱し、上皇を迎へて西内に遊ばしむ。睿武門に至る。輔國、射生五百騎を將る、刃を露して道を遮り、奏して曰はく、「皇帝、興慶宮の湫隘なるを以て、上皇を迎へ、遷りて大内に居らしむ」と。上皇驚き幾ど墜ちんとす。高力士曰はく、「李輔國、何ぞ無禮なるを得る」と。叱して馬を下らしむ。輔國、已むを得ずして下る。力士因つて上皇の語を宣して曰はく、「諸將士各好在なれ」と。將士皆刃を納め、再拜萬歳す。力士、又、輔國を叱し、己と共に上皇の馬鞍を執らしめ、侍衛して西内に如き、甘露殿に居る。輔國、衆を帥ゐて退く。留まる所の侍衛の兵、纒に庭老數十人。陳玄禮・高力士及び舊の宮人、皆、左右に留まるを得ず。上

- 【一】 文王が世子たるや王季に朝すること日に三たびす。
- 【二】 唐、大明宮を以て東内と爲し、太極宮を西内と爲し、興慶宮を南内と爲す。
- 【三】 湫は下き也。隘は狭小なり。
- 【四】 好在。猶ほ好生と言ふがごとし。兵を以て乘輿を干すを得ざれとの意。
- 【五】 西内は兩儀殿を以て内朝と爲す。兩儀殿の北に甘露門有り、甘露門の内を甘露殿と爲す。

皇曰はく、『興慶宮は吾の王地なり。吾數、以て皇帝に譲りしが、皇帝、受けざりき。今日の徒は、亦吾が志なり』と。是日、輔國、〔三六〕六軍の大將と與に、素服して上に見えて罪を請ふ。上、又、諸將に迫られ、乃ち之を勞して曰はく、『南宮、西内、亦復た何ぞ殊ならん。卿等、小人が榮惑せんことを恐れ、微を防ぎ漸を杜ぎ、以て社稷を安んず。何の懼るる所あらん』と。刑部尙書顏真卿、首として百寮を率ゐて上表し、上皇の起居を問はんと請ふ。輔國、之を惡み、奏して蓬州の長史に貶す。

癸丑、天下に勅し、重稜錢、皆、三十に當ること、畿内の如くす。

丙辰、高力士、〔三七〕巫州に流され、王承恩、〔三八〕播州に流され、魏悅、〔三九〕溱州に流さる。陳玄禮、勅して致仕し、如仙媛を、〔四〇〕歸州に置く。玉真公主出でて、玉真觀に居る。上更に後宮百餘人を選び、西内に置き、灑掃に備ふ。〔四一〕萬安・咸宜二公

【三七】 事、二百九卷睿宗景雲元年に見ゆ。
 【三八】 六軍。北門の六軍。
 【三九】 南宮。即ち興慶宮をいふ。語の便順を取り、或は南宮と言ひ、或は南内と言ふ。
 【四〇】 蓬州。漢の宕渠縣の地。今の四川省嘉陵道儀隴縣の東南六十里。京師に至るまで二千三百六十里、東都まで二千五百八十二里。
 【四一】 巫州。貞觀八年、辰州龍標縣を分ちて巫州を置く。京師の南三千一百五十八里、東都に至るまで三千八百三十三里。
 【四二】 播州。秦の夜郎郡の南境。

隋の泮柯縣。貞觀十一年、播州を置く、京師の南四千四百五十里、東都に至るまで四百九百六十里。
 【三九】 溱州。貞觀十六年、山洞を開きて溱州を置く。京師に至るまで三千四百八十里、東都まで四千二百里。
 【四〇】 歸州。漢の秭歸縣の地。武德二年、秭歸巴東二縣を分ちて歸州を置く。京師の南二千三百六十八里、東都に至るまで一千八百十三里。
 【四一】 玉真觀。睿宗が主の爲めに起す所。
 【四二】 萬安・咸宜二公主。皆上皇の女。

主をして、服膳を視しむ。四方の獻する所の珍異、先づ上皇に薦む。然れども上皇日、以て憚ばず。因つて葦を茹はず、穀を辟け、寢く以て疾を成す。上初め猶ほ往きて安を問ふ。既にして上も亦疾有り、但だ人を遣はして起居せしむ。其後、上稍悔寤し、輔國を惡み、之を誅せんと欲す。其の兵を握るを畏れ、竟に猶豫して、決する能はず。

初め哥舒翰、吐蕃を臨洮の西關磨環川に破り、其地に於て神策軍を置く。安祿山が反するに及び、軍使成如璆、其將衛伯玉を遣はし、千人を將ゐて難に赴かしむ。既にして軍地、吐蕃に淪入し、伯玉留まりて陝に屯す。累官して右羽林大將軍に至る。八月庚午、伯玉を以て神策軍節度使と爲す。

丁亥、興王佖に贈諡して恭懿太子と曰ふ。

九月甲午、南都を荊州に置き、荊州を以て江陵府と爲し、仍ほ永平軍團練兵三千人を置き、以て吳蜀の衝を扼す。節度使呂誼の請に従ふなり。

或るひと上言す、『天下未だ平がず。宜しく郭子儀を散地に置くべからず』と。乙未、子儀に命じ、出でて邠州に鎮せしむ。党項、遁れ去る。戊申、子儀に制し、諸道の兵を統べ、朔方より、直に范陽を取り、還りて河北を定めしむ。射生・英武等の禁軍及び朔方・鄜坊・寧涇・原・諸道の蕃漢の兵を發し、

【三七】 會要に、天寶十三載、哥舒翰、前年に九曲を收めしを以て、請うて其地を以て洮陽郡を置き、軍内に神策軍を置く。臨洮軍を去ること二百里。
 【三八】 通れ去る。子儀を畏るるなり。
 【三九】 射生、英武軍と號すること、前卷至德二載十月に見ゆ。

共に七萬人、皆、子儀の節度を受けしむ。制下りて旬日、復た魚朝恩の沮む所と爲り、【四〇】事、竟に・行はれず。

冬十月丙子、【四一】青沂等五州節度使を置く。

十一月壬辰、涇州、党項を破る。

御史中丞李銑・宋州の刺史劉展、皆、淮西節度副使を領す。銑は貪暴にして不法、展は剛彊にして自ら用ふ。故に其上と爲る者、多く之を惡む。節度使王仲昇、先に銑の罪を奏して之を誅す。時に謠言有り、曰はく、「手節度使王仲昇、先に銑の罪を奏して之を誅す。時に謠言有り、曰はく、「手に金刀を執りて東方に起る」と。仲昇、監軍使内左常侍邢延恩をして入りて奏せしむ、「展・僞僞にして、命を受けず。姓名、謠讖に應ず。請ふ之を除かん」と。延恩因つて上に説きて曰はく、「展と李銑とは、一體の人なり。今、銑・誅せられ、展、自ら安んぜず。苟くも之を去らざるば、恐らくは其れ亂を爲さん。然れども展方に強兵を握る。宜しく計を以て之を去るべし。請ふ展を江淮の都統に除し、李暉に代らしめ、其の兵を釋き鎮に赴くを俟ち、中道にして之を執へん。此れ一夫の力なるのみ」と。上、之に従ふ。展を以て都統淮南東江南西浙西三道節度使と爲し、密に【四二】舊都統李暉及び淮南東道節度使鄧

【四〇】 胡三省曰はく、郭子儀をして果して兵を統べて范陽に向はしめば、則ち史思明、内顧の憂有り、李光弼、夾攻の勢を成し、必ず邙山の敗無かりしならん。郭李、功を成さば、則ち又必ず河北の諸帥を擧置するの禍無かりしならんと。

【四一】 青は當に淄に作るべし。五州とは淄沂滄德棣の五州なり。

【四二】 唐の中人、出でて方鎮の軍を監し、品秩高き者は監軍使と爲し、其下は監軍と爲す。

【四三】 金刀の謠、劉姓に應ずるを謂ふ。

【四四】 李暉、浙東節度と爲り、淮南を兼ぬること、前卷元年に見ゆ。

景山に勅して之を圖らしむ。延恩、制書を以て展に授く。展、之を疑うて曰はく、「展、陳留參軍より、數年にして刺史に至れり。暴貴と謂ふ可し。江淮は、租賦の出づる所にして、今の重任なり。展、勳勞無く、又親賢に非ず。一旦恩命寵擢此の如きは、讒人の之を問する有るに非ざるを得んや」と。因つて泣下る。延恩懼れて曰はく、「公素より才望有り。主上、江淮を以て憂と爲す。故に不次に公を用ふ。公反つて以て疑と爲すは何ぞや」と。展曰はく、「事苟くも欺かずんば、印節先づ得可きか」と。延恩曰はく、「可なり」と。乃ち馳せて廣陵に詣り、暉と謀り、暉が印節を解き、以て展に授く。展、印節を得、乃ち上表して恩を謝し、牒して江淮の親舊を追うて、之を心脊に置く。三道の官屬、使を遣はして迎へ賀し、圖籍を申べ、道に相望む。展、悉く宋州の兵七千を擧げ、廣陵に趣く。【四五】延恩、展が已に其情を得たるを知り、還りて廣陵に奔り、李暉・鄧景山と與に、兵を發して之を拒ぎ、檄を州縣に移し、展が反するを言ふ。展も亦檄を移し、暉が反するを言ふ。州縣、從ふ所を知るもの莫し。暉、兵を引きて江を度り、副使潤州の刺史韋儂・浙西節度使侯令儀と與に、京口に屯し、鄧景山、萬人を將ゐて【四六】徐城に屯す。展素より威名有り、軍を御すること嚴整なり。江淮の人、風を望みて之を畏る。展、道を倍し期に先だちて至り、人をして景山に問はしめて曰はく、「吾、詔書を奉じて鎮に赴く。此れ何の兵ぞや」と。景山、應せず。展、人をして陳前

【四五】 胡三省曰はく、書に云はく、僞を作せば心勞し日に拙なり」と。邢延恩の謂なりと。

【四六】 徐城縣は潤州に屬す。漢の徐縣の地。隋、徐城縣を置く。今の安徽省淮泗道盱眙縣の西五十里。

に呼ばしめて曰はく、『汝が曹は皆吾が民なり。吾が旗鼓を干す勿れ』と。其將孫待封・張法雷をして之を撃たしむ。景山、衆潰え、延恩と與に壽州に奔る。展、兵を引ききて廣陵に入り、其將屈突孝標を遣はし、兵三千を將ゐて、濠・楚を徇へしめ、王暉をして、兵四千を將ゐて淮西を略せしむ。李暉、北固を闢きて兵場と爲し。木を挿みて以て江口を塞ぐ。展、白沙に軍し、疑兵を瓜洲に設け、多く火鼓を張り、將に北固に趣かんとする者の若くす。是の如きこと累日。暉、銳兵を悉して京口を守り以て之を待つ。展乃ち上流より濟り、下蜀を襲ふ。暉の軍、之を聞き、自ら潰ゆ。暉、宣城に奔る。甲午、展、潤州を陷る。昇州の軍士萬五千人、展に應じて金陵城を攻めんと謀り、克たずして遁る。侯令儀懼れ、後事を以て兵馬使姜昌羣に授け、城を棄てて走る。昌羣、其將宗犀を遣はし、展に詣りて降る。丙申、展、昇州を陷れ、宗犀を以て潤州の司馬。丹楊軍使と爲し、昌羣をして昇州を領せしめ、從子伯瑛を以て之を佐けしむ。李光弼、懷州を攻むること百餘日、乃ち之を抜き、安太清を生擒す。

【四七】 北固山は京口に在り。梁の武帝の登りし所は、即ち其地なり。
 【四八】 白沙。揚州揚子縣の白沙鎮。今の江蘇省淮揚道儀徵縣。
 【四九】 瓜洲。揚州江都縣（今の江蘇省淮揚道江都縣）の南三十里に瓜州鎮有り、正に京口、北固山と對す。
 【五〇】 火及び鼓を張り以て疑兵と爲す。
 【五一】 此れ白沙より江を濟る也

昇州の東北九十里にして句容縣に至る。下蜀成有り、句容縣の北に在り、江津に近し。
 【五二】 宣城。漢の宛陵縣の地。晉、宣城を置く。隋、陳を平げて郡を廢し、宛陵を改めて宣城縣と爲す。宣州を帶ぶ。李暉、宣城に奔り、鄭昊之に就く。
 【五三】 昇州。金陵に治す。
 【五四】 乾元二年、丹楊軍を潤州に置く。

史思明、其將田承嗣を遣はし、兵五千を將ゐて淮西を徇へ、王同芝をして、兵三千人を將ゐて陳を徇へ、許敬江をして、二千人を將ゐて兗・鄆を徇へ、薛鄂をして五千人を將ゐて曹州を徇へしむ。

十二月丙子、党項、美原。同官に寇し、大に掠めて去る。賊帥郭愔等、諸羌胡を引き、秦隴防禦使韋倫を敗り、監軍使を殺す。兗鄆節度使能元皓、史思明の兵を撃ち、之を破る。

李暉が潤州を去るや、副使李藏用、暉に謂つて曰はく、『人の尊位に處り、人の重祿を食み、難に臨みて之を逃るるは、忠に非ざるなり。數十州の兵食と三江五湖の險固とを以て、一矢を發せずして之を棄つるは、勇に非ざるなり。忠と勇とを失はば、何を以てか君に事へん。藏用請ふ餘兵を收め、力を竭して以て之を拒がん』と。暉乃ち悉く後事を以て藏用に授く。藏用、散卒を收め、七百人を得、東して蘇州に至り、壯士を募り、二千人を得、柵を立てて以て劉展を拒ぐ。展、其將傅子昂・宗犀を遣はし、宣州を攻む。宣歙節度使鄭昊之、城を棄てて走り、李暉、洪州に奔る。李藏用、展の將張景超・孫待封と、郁堅に戦ひ、兵敗れ、杭州に奔る。景超遂に蘇州に據り、待封進みて湖州を陷る。展、其將許嶧を以て潤州の刺史と爲し、李

【四五】 美原。咸亨二年、京兆の富平・華原及び同州の蒲城を分ちて置く。今の陝西省關中道富平縣の東北六十里。
 【四六】 同官。本、漢の銅官の地。今の陝西省關中道同官縣。
 【四七】 乾元二年、鄆齊兗三州都防禦使を升せて節度使と爲す。是年、齊州を以て青密に隸し、而して兗鄆は徐州を増し領す。
 【四八】 三江。吳淞江・錢唐江・浦陽江を謂ふ也。
 【四九】 宣歙節度使は宣歙饒三州を領す。
 【五〇】 湖州。本、漢の烏程縣の地。隋、湖州を置く。大業の初め、州を廢す。唐の武德四年、復た置く。

可封を常州の刺史と爲し、楊持璧を蘇州の刺史とし、待封は湖州の事を領す。景超進みて杭州に逼る。藏用、其將溫晁をして餘杭に屯せしむ。展、李晃を以て泗州の刺史と爲し、宗犀を宣州の刺史と爲す。傅子昂、南陵に屯し、將に江州を下り、江西を徇へんとす。是に於て屈突孝標、濠・楚州を陥れ、王暉、舒・和・滁・廬等の州を陥れ、向ふ所、摧靡せざるは無く、兵萬人・騎三千を聚め、江淮の間に横行す。壽州の刺史崔昭、兵を發して之を拒ぐ。是に由りて、暉、西するを得ず、止まりて廬州に屯す。初め上、平盧兵馬使田神功に命じて、所部の精兵三千を將りて任城に屯せしむ。鄧景山既に敗れ、邢延恩と與に奏し、神功に勅して淮南を救はしめんと乞ふ。未だ報せざるに、景山、人を遣はして之を趣し、且つ淮南の金帛子女を以て賂と爲すを許す。神功及び所部皆喜び、衆を悉して南下す。彭城に及び、神功に勅して展を討たしむ。展、之を聞き、始めて懼るる色有り、廣陵より、兵八千を將りて之を拒ぎ、精兵二千を選び、淮を度り、神功を都梁山に撃つ。展敗れ、走りて天長に至り、五百騎を以て、橋に據りて拒ぎ戦ふ。又敗る。展獨り一騎と與に亡げて江を渡る。神功、廣陵及び楚州に入り、大に掠め、商胡を殺すこと千を以て數ふ。城中

【六一】 餘杭は漢の縣、時に杭州に屬す。州の西四十五里に在り。今の浙江省錢塘道餘杭縣。
 【六二】 南陵。漢の春穀縣。梁、南陵縣及び南陵郡を置く。隋、郡を廢し、縣を以て宣州に屬す。今の安徽省蕪湖道南陵縣。
 【六三】 江西は江南西道を謂ふ。
 【六四】 田神功、彭城に至り、勅方めて下る。
 【六五】 天寶元年、江都・六合・高郵を分ちて千秋縣を置く。七載、天長と改め、揚州に屬す。今、安徽省淮泗道。
 【六六】 神功、蓋し先づ楚州に入り、而る後、廣陵に入る。
 【六七】 穿掘して、人の窖藏する所の者を求む。

の地、穿掘して略ぼ徧し。
 是歲、吐蕃、廓州を陷る。

卷の第二百二十二

唐紀三十八

肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝下

上元二年、春正月癸卯、史思明、應天と改元す。

張景超、兵を引きて杭州を攻め、李藏用の將李彊を石夷門に敗る。孫待封、武康より南に出で、將に景超に會して、杭州を攻めんとす。

溫晁、險に據り、擊ちて之を敗る。待封、身を脱して烏程に奔る。李可封、常州を以て降る。

丁未、田神功、特進楊惠元等をして、千五百人を將る、西して王暉を撃たしむ。辛亥、夜、神功、先づ特進范知新等を遣はし、四千人を將る、白沙より濟り、西して下蜀に趣かしめ、鄧景山をし

唐肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝上元二年

六六五

【一】 上元二年。西紀七六一年なり。

【二】 武康。吳、烏程、餘杭二縣を分ちて永安縣を置く。晉改めて永康と爲し、又改めて武康と爲す。唐には杭州に屬す。今の浙江省錢塘道武康縣。

【三】 武康より南に出で、狗頭嶺を過ぎ、杭州に至るまで五十里。

【四】 去年、李藏用、溫晁をして餘杭に屯せしむ。餘杭より東のかた杭州錢塘縣の界に至るまで、十八里、又東二十七里にして杭州に至る、此れ陸路なり。故に溫晁、趨りて險に據り以て孫待封を敗るを得たり。

て、千人を將ゐ、海陵より濟り、東して常州に趣かしめ、神功、邢延恩と與に、三千人を將ゐ、瓜洲に軍す。壬子、江を濟る。展、步騎萬餘を將ゐて、蒜山に陳す。神功、舟を以て兵を載せ、金山に趣く。會、大に風ふき、五舟、飄して、金山の下に抵る。展、其二舟を屠り、其三舟を沈む。神功、度るを得ず、還りて瓜洲に軍す。而して范知新等の兵、已に下蜀に至る。展、之を撃ち、勝たず。弟殷、展に兵を引かんことを勸め、「逃れて海に入らば、歲月を延ぶ可からん」といふ。展曰はく、「若し事、濟らずんば、何ぞ多く人の父子を殺すを用ひんや。死は早きも晩きも等しきのみ」と。遂に更に衆を率ゐて力戦す。將軍賈隱林、展を射る。目に中りて仆る。遂に之を斬る。劉殷、許嶧等皆死す。隱林は滑州の人なり。楊惠元等撃ちて王暉を淮南に破る。暉、兵を引きて東に走り、常熟に至りて乃ち降る。孫待封、李藏用に詣りて降る。張景超、兵を聚め、七千餘人に至る。展が死せしを聞き、悉く兵を以て張法雷に授け、杭州を攻めしむ。景超逃れて海に入る。法雷、杭州に至る。李藏用、撃ちて之を破る。餘黨皆平ぐ。平盧軍、大に掠むること十餘日。安史の亂に、亂兵、江淮に及ばず。是に至りて、其民始めて茶毒に罹る。荆南節度使呂誼・奏す、「請ふ江南の潭・岳・郴・邵・永・道・連・黔中の涪州を以て、皆、荆南に隸せ

- 【五】蒜山。潤州の城西三里に在り、其上に蒜多し、故に名づく。
- 【六】金山。大江の中に在り、南のかた西津渡口に直る。潤州城を去ること七里。
- 【七】常熟縣は蘇州に屬す。
- 【八】平盧軍。田神功が將ゐる所の平盧の兵なり。
- 【九】邵州。漢の召陵都梁の地。唐の武德四年、南梁州を置く。貞觀十年、更めて邵州と名づく。今の湖南省湘江道寶慶縣。

ん」と。之に従ふ。

二月、(一)奴刺党項、(二)寶雞に寇し、大散關を燒き、南して鳳州を侵し、刺史蕭愔を殺し、大に掠めて西す。鳳翔節度使李鼎、追撃して之を破る。戊辰、新羅王金巖・入朝し、因つて・宿衛せんと請ふ。或るひと言ふ、「洛中の將士は皆燕人にして、久しく成して・歸らんことを思ひ、上下、心を離す。之を撃たば破る可からん」と。陝州觀軍容使魚朝恩、以爲へらく信に然りと。屢、上に言ふ。上、李光弼等に勅して、進みて東京を取らしむ。光弼、奏して稱す、「賊鋒尙ほ鋭し、未だ輕しく進む可からず」と。朔方節度使僕固懷恩、勇にして復、麾下、皆、蕃漢の勁卒にして、功を恃みて多く不法なり。郭子儀、寛厚にして曲げて之を容る。兵を用ひ敵に臨む毎に、倚りて以て事を集す。李光弼、性嚴にして、一に之を裁するに法を以てし、假貸する所無し。懷恩、光弼を憚り、而して心に之を惡む。(三)乃ち朝恩に付き、「東都、取る可し」と言ふ。是に由りて、中使相繼ぎ、光弼を督し、師を出さしむ。光弼、已むを得ず、鄭陳節度使李抱玉をして河陽を守らしめ、懷恩と與に、兵を將ゐ、朝恩及び神策節度使衛伯玉に會し、洛陽を攻む。戊寅、邠山に陳す。光弼、命じて險に依りて陳せしむ。懷恩、平原に陳す。光弼曰はく、「險に依らば、則ち以て進む可く、以て退く

- 【一〇】奴刺は西羌の種落の名。
- 【一一】至德二載、陳倉縣を改めて寶雞縣と爲す。時に鳳翔府に屬す。今、陝西省關中道。
- 【一二】僕固懷恩、李光弼の軍を覆して以て其私を成さんと欲す。

可からん。若し平原にして、戦うて利あらずんば則ち盡きん。思明は忽せにす可からざるなり」と。命じて險に移らしむ。懷恩復た之を止む。史思明、其陳の未だ定まらざるに乗じ、兵を進めて之に薄る。官軍大に敗れ、死する者數千人、軍資器械、盡く之を棄つ。光弼・懷恩、河を度り、走りて聞喜を保つ。朝恩・伯玉奔りて陝に還る。抱玉も亦河陽を棄てて走る。河陽・懷州、皆、賊に没す。朝廷、之を聞き、大に懼れ、兵を益して陝に屯せしむ。

李揆、呂諲と、同じく相と爲り、相悦ばず。諲、荆南に在り、善政を以て聞ゆ。揆、其の復た入りて相たらんことを恐れ、奏して言ふ、「軍を湖南に置くは便に非ず」と。又、陰に人をして荆湖に如き、諲の過失を求めしむ。諲、上疏して揆の罪を訟ふ。癸未、揆を袁州の長史に貶す。河中節度使蕭華を以て中書侍郎・同平章事と爲す。

史思明、猜忍にして殺を好む。羣下小しく意の如くならざれば、動もすれば族誅に至る。人、自ら保んぜず。朝義は其長子なり。常に思明に従ひ、兵に將たり。頗る謙謹にして、士卒を愛す。將士多く之に附く。思明に寵無し。思明、少子朝清を愛し、范陽を守らしむ。常に朝義を殺し朝清を立てて太子と爲さんと欲す。左右頗る其謀を泄らす。思明既に李光弼を破り、勝に乗じて西して關に入らんと欲す。朝義をして兵を將りて前鋒と

【一】 乾元二年、李揆、呂諲と同じく相たり。上元元年、諲罷む。
 【二】 潭・郴・邵・永・道・連は皆洞庭湖の南に在り。呂諲、之を兼れ領せんと請ふ。故に揆、其の便に非ざるを言ふ。
 【三】 荆は荆南、湖は湖南。
 【四】 朝清が范陽を守ることに、前卷前年に始まる。
 【五】 南道は二嶠の間に由づ。
 【六】 漢の建安中、曹公、西のかた

爲り、北道より陝城を襲はしめ、思明、南道より大軍を將りて之に繼ぐ。三月甲午、朝義の兵、礪子嶺に至る、衛伯玉逆へ撃ちて之を破る。朝義、數、兵を進め、皆、陝の兵の敗る所と爲る。思明退きて永寧に屯し、朝義を以て怯と爲して曰はく、「終に吾が事を成すに足らじ」と。軍法を按じて

巴蜀を討ち、南路の險なるを惡み、更に北道を開く。
 【一】 礪子嶺は、即ち礪子坂なり。
 【二】 陝城の東に在り。
 【三】 三隅城。新唐書には三角城に作る。蓋し一角は山に依り、止だ其三角を築くなり。
 【四】 鹿橋驛。永寧の傳舍なり。貞觀十七年、嘗て永寧縣を此に徙す。
 【五】 逆旅。旅舍なり。
 【六】 當時、臣子、其君父を謂つて聖人と爲す。

朝義及び諸將を斬らんと欲す。戊戌、朝義に命じて三隅城を築かしめ、軍糧を貯へんと欲し、一日にして畢るを期す。朝義築き畢りて未だ泥せず。思明至り、詭りて之を怒り、左右をして馬を立てて泥を監せしむ。斯須にして畢る。思明又曰はく、「陝州に克つを俟ち、終に此賊を斬らん」と。朝義・憂懼し、爲す所を知らず。思明、鹿橋驛に在り、腹心曹將軍をして兵を將りて宿衛せしむ。朝義、逆旅に宿す。其部將駱悅・蔡文景、朝義に説きて曰はく、「悦等と王と、死すること日無からん。古より廢立有り。請ふ曹將軍を召して之を謀らん」と。朝義、悦等曰はく、「王苟くも許さずんば、悦等今李氏に歸せん。王も亦全からざらん」と。朝義泣きて曰はく、「諸君善く之を爲せ。聖人を驚かす勿れ」と。悦等、乃ち許叔冀の子季常をして曹將軍を召さしむ。至れば則ち其謀を以て之に告ぐ。曹將軍、諸將の盡く怨めるを知り、禍の己に及ばんことを恐れ、敢て違はず。是夕、悦等、朝義の部兵三百を以て、甲を被りて驛に詣る。宿衛の

兵、之を怪しむ。曹將軍を畏れ、敢て動かす。悦等、兵を引き、入りて思明の寢所に至る。思明が廁に如くに値ふ。左右に問ふ。未だ對ふるに及ばざるに、已に數人を殺す。左右指して之を示す。思明、變有るを聞き、垣を踰えて厩中に至り、自ら馬に〔三〕 韃して之に乗る。悦の〔四〕 僮人周子俊、之を射る。臂に中り馬より墜つ。遂に之を擒にす。思明問ふ、『亂する者は誰とか爲す』と。悦曰はく、『懷王の命を奉せり』と。思明曰はく、『我、朝來、語失せり。宜なり其の此に及べるや。然れども我を殺すこと太だ早し。何ぞ我の長安に克つを待たざる。今、事、成らじ』と。悦等、思明を〔五〕 柳泉驛に送り、之を囚ふ。還りて朝義に報じて曰はく、『事成れり』と。朝義曰はく、『聖人を驚かさざるか』と。悦曰はく、『無し』と。時に周摯・許叔冀、後軍を將ゐて〔六〕 福昌に在り。悦等、許季常をして往きて之に告げしむ。摯驚きて地に倒る。朝義、軍を引ききて還る。摯・叔冀來り迎ふ。悦等、朝義に勸めて摯を執へて之を殺さしむ。軍、柳泉に至る。悦等、衆心の未だ壹ならざらんことを恐れ、遂に思明を縊殺し、屍を以て其尸を裹み、橐駝負うて洛陽に歸る。朝義、皇帝の位に即く。顯聖と改元す。密に人をして范陽に至り、散騎常侍張通儒等に勅し、朝清及び朝清の母辛氏并に己に附かざる者數十人を殺さしむ。其黨自ら相攻撃し、城中に戰ふこと數月、死する者數千人、范陽乃ち定まる。

〔三〕 韃。馬の支度すること。
 〔四〕 僮人。從者。
 〔五〕 懷王。思明、朝義を封じて懷王と爲す。
 〔六〕 語失。朝來を斬らんと欲するをいふ。
 〔七〕 柳泉驛。鹿橋驛の東三十里に在るべし。
 〔八〕 福昌。縣の名、柳泉驛の東に在り。洛州に屬す。今の河南省河洛道宜陽縣の西六十里。

朝義、其將柳城の李懷仙を以て范陽の尹・燕京留守と爲す。時に洛陽の四面、數百里の州縣、皆丘墟と爲る。而して朝義の部する所の節度使は、皆安祿山の舊將にして、思明と等夷なり。朝義、之を召せども、多く至らず。略ば相羈縻するのみ。其用を得る能はず。

李光弼・上表し、固く自ら貶せんことを求む。制して、開府儀同三司侍中を以て河中節度使を領せしむ。

術士〔一〕 長塞の鎮將朱融、左武衛將軍竇如玠等と與に、嗣岐王珍を奉じて亂を作さんと謀る。金吾將軍邢濟、之を告ぐ。夏四月乙卯朔、珍を廢して庶人と爲し、溱州に安置す。其黨皆誅に伏す。珍は〔二〕 業の子なり。丙辰、左散騎常侍張鎬、辰州の司戸に貶せらる。鎬嘗て珍の宅を買ひしが故なり。

己未、吏部侍郎裴遵慶を以て黃門侍郎・同平章事と爲す。

乙亥、青密節度使尙衡、史朝義の兵を破る。斬首五千餘級。

丁丑、宛鄆節度使能元皓、史朝義の兵を破る。

壬午、梓州の刺史段子璋・反す。子璋は驍勇にして、上皇に從ひて蜀に在りて功有り。東川節度使李奂、奏して之に替る。子璋、兵を擧げ、奂を〔三〕 綿州に襲ふ。道、〔四〕 遂州を過ぐ。刺史虢王巨、

〔一〕 長塞鎮は當に蔚州の界に在るべし。唐の制、上鎮將は正六品下、中鎮將は正七品上、下鎮將は正七品下。
 〔二〕 岐王業は上皇の弟。
 〔三〕 辰州。盧溪郡。漢の辰陵沅陵義陵縣の地。京師の南微東三千四百五里。
 〔四〕 梓州。梓潼郡。漢の郫縣廣漢氏道の地。
 〔五〕 綿州。巴西に治す。漢の涪縣なり。
 〔六〕 遂州梓州は竝に東川節度に屬す。蓋し列郡なり。巨、屬郡の禮を修めて以て子璋を迎ふるは、卑服の意を示すなり。

蒼黃として屬郡の禮を修めて之を迎ふ。子璋、之を殺す。李奐、戰敗れ、成都に奔る。子璋自ら梁王と稱し、黃龍と改元し、綿州を以て龍安府と爲し、百官を置く。又、劍州を陷る。

五月己丑、李光弼、河中より入朝す。

初め李輔國、張后と同じく謀り、上皇を西内に遷す。是日、端午、山人李唐、上に見ゆ。上方に幼女を抱き、唐に謂つて曰はく、「朕、之を念ふ。卿、怪しむ勿れ」と。對へて曰はく、「太上皇、陛下を見んことを思ふこと、計るに亦陛下が公主を念ふ如きならん」と。上、泫然として泣下る。然れども張后を畏れ、尙ほ敢て西内に詣らず。

癸巳、党項、寶雞に寇す。

初め史思明、其博州の刺史令狐彰を以て滑鄭汴節度使と爲し、數千の兵を將めて滑臺に戌せしむ。彰、密に中使楊萬定に因り、表を通じて降

らんと請ひ、徙りて杏園度に屯す。思明、之を疑ひ、其將薛岌をして之を圍ましむ。岌、岌と戰ひ、大に之を破り、因つて萬定に隨うて入朝す。甲午、彰を以て滑衛等六州節度使と爲す。

戊戌、平盧節度使侯希逸、史朝義の范陽の兵を撃ち、之を破る。

乙未、西川節度使崔光遠、東川節度使李奐と、共に綿州を攻む。庚子、之を拔き、段子璋を斬る。復た李光弼を以て河南副元帥・太尉・兼侍中・都統河南淮南南東西山南東荆南江南西浙江東西八道行營

【三】 劍州。普安に治す。漢の梓潼縣なり。
【四】 上皇を遷すこと前卷前年に見ゆ。
【五】 滑州は古の滑臺なり。
【六】 六州。滑・衛・相・貝・魏・博の六州。

節度と爲し、出でて臨淮に鎮せしむ。

六月甲寅、青密節度使能元皓、史朝義の將李元遇を破る。

江淮都統李恒、守を失ふの罪を畏れ、咎を浙西節度使侯令儀に歸す。

丙子、令儀、坐して名を除き、康州に長流せらる。田神功に開府儀同三司を加へ、徐州の刺史に徙し、李恒・鄧景山を徴して京師に還らしむ。

戊寅、党項、好時に寇す。

秋七月癸未朔、日、之を食する有り、既く。大星皆見ゆ。

試少府監李藏用を以て浙西節度副使と爲す。

八月癸丑朔、開府儀同三司李輔國に兵部尚書を加ふ。乙未、輔國、赴上す。宰相朝臣、皆、之を送る。御厨、饌を具し太常、樂を設く。輔國、驕縱なること日に甚だしく、宰相と爲らんことを求む。上曰はく、「卿の功を以てせば、何の官か爲る可からざらん。其れ朝望未だ允はざるを如何せん」と。輔國乃ち僕射裴冕等に諷し、己を薦めしむ。上密に蕭華に謂つて曰はく、「輔國、宰相と爲らんことを求む。若し公卿の表來らば、與へざるを得ざらん」と。華出で、冕に問ふ。曰はく、「初めより此事無し。吾が臂は斷つ可くも、宰相は得可からず」と。華入りて

【一】 臨淮郡は泗州。
【二】 青密は恐らくは當に兗郡に作るべからん。
【三】 守を失ふこと、前卷前年に見ゆ。
【四】 康州。晉康郡に因りて名づく。端溪縣に治す。京師に至るまで五千七百五十里、東都まで五千一百五十里。
【五】 劉展を平げし功を賞する也。
【六】 平盧兵馬使より徙りて徐州に刺たり。
【七】 好時縣は今の陝西省關中道乾縣の西北三十五里。
【八】 僕射尚書、省に赴き職に供するを赴上と曰ふ。

之を言ふ。上、大に悦ぶ。輔國、之を銜む。

己巳、李光弼、河南行營に赴く。

辛巳、殿中監李若幽を以て、鎮西北庭興平陳鄭等節度行營及び河中節度使と爲し、絳州に鎮せしめ、名を國貞と賜ふ。

九月甲申、天成地平節、上、三殿に於て道場を置き、宮人を以て佛菩薩と爲し、武士を金剛神王と爲し、大臣を召し、膜拜圍繞せしむ。

壬寅、制し、尊號を去りて但だ皇帝と稱し、年號を去りて但だ元年と稱し、建子の月を以て歲首と爲し、月は皆建する所を以て數と爲し、因つて

天下に赦し、京兆・河南・太原・鳳翔の四京及び江陵の南都の號を停め、

今より、五品以上の清望官及び郎官・御史・刺史を除する毎に、一人を擧げて自ら代らしめ、其の擧ぐる所を觀、以て殿最を行ふ。

江淮大に饑ゑ、人相食む。

冬十月、江淮都統崔圓、李藏用を署して楚州の刺史と爲す。會、支度

租庸使、劉展の亂に、諸州・倉庫の物を用ふること準無かりしを以て、奏して、徵驗せんと請ふ。時

に倉猝に兵を募り、物多く散亡し、之を徵すれども足らず。諸將往往に産を賣りて以て之を償ふ。藏

用、其の己に及ばんことを恐れ、嘗て人と語り、頗る悔恨する有り。其牙將高幹、故の怨を挾み、人

をして廣陵に詣りて「藏用・反す」と告げしめ、先づ兵を以て之を襲ふ。藏用走る。幹追うて之を斬

る。崔圓遂に藏用の將吏を簿責し、以て之を驗す。將吏畏れ、皆、其狀を附成す。獨り孫待封、堅

く「反せず」と言ふ。圓、命じ、引き出して之を斬らしむ。或るひと曰は

く、「子何を衆に従つて以て生を求めざる」と。待封曰はく、「吾、始め

劉大夫に従ひ、詔書を奉じて來りて鎮に赴く。人謂へらく、吾、李公に反

し、兵を起して劉大夫を滅ぼせりと。今、又、李公を以て反すと爲す。此

の如くば、誰か則ち反に非ざる者ぞ。庸ぞ極まり有らんや。吾寧ろ死に就

くとも、人を誣ふるに罪に非ざるを以てする能はず」と。遂に之を斬る。

建子の月壬午朔、上、朝賀を受くること、正旦の儀の如し。

或るひと告ぐ、「鴻臚卿康謙、史朝義と通ず」と。事、司農卿嚴莊に連な

る。俱に獄に下る。京兆の尹劉晏、吏を遣はし、莊の家を防守せしむ。上、尋ぎて勅し、莊を出して

引見す。莊、晏を怨み、因つて言ふ、「晏、臣と言ふに、常に禁中の語を道ひ、功に矜り上を怨む」と。

丁亥、晏を通州の刺史に、莊を難江の尉に貶す。謙、誅に伏す。戊子、御史中丞元載を戶部侍

郎と爲し、句當度支鑄錢鹽鐵兼江淮轉運等使に充つ。載初め度支郎中と爲り、敏悟にして善く奏對す。

唐肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝上元二年

六七五

【四七】 李光弼に代らしむる也。

【四八】 上、景雲二年九月三日に生る。九月三日を以て天成地平節と爲す。

【四九】 大明宮中に麟德殿有り、仙居殿の西北に在り、此殿三面、亦、三殿を以て名と爲す。

【五〇】 范成大曰はく、在處の寺門に兩金剛神有り、是れ千佛數中最後の者。一を婁至德と名づけ、一を青葉誓と名づく。

【五一】 四京は二百二十卷至德元載に見え、南都は前卷前年に見ゆ。

【五二】 此支度租庸使は蓋し之を以て江淮の租庸を支度せしむる者なり。

【五三】 高幹の言に付き、以て李藏用の反狀を成す。

【五四】 劉大夫は劉展を謂ふ。鎮に赴く事、前卷前年に見ゆ。

【五五】 其月を以て歲首と爲すなり。

【五六】 通州、通川郡、漢の宕渠縣の地。京師の西南二千五百里。

【五七】 難江縣は漢の宕渠の地。唐の初め、集州を置き、難江を以て治所と爲す。

上、其才を愛し、委ぬるに江淮の漕運を以てす。數月にして、遂に劉晏に代り、専ら財利を掌る。

戊戌、冬至、己亥、上、上皇に西内に朝す。

神策節度使衛伯玉、史朝義を攻め、永寧を抜き、澠池・福昌・長水等の縣を破る。

己酉、上、太清宮に朝獻す。庚戌、太廟・元獻廟に享す。建丑の月、辛亥朔、圓丘の太一壇を祀る。

平盧節度使侯希逸、范陽と相攻むること連年、救援既に絶え、又、奚の侵す所と爲る。乃ち悉く其軍二萬餘人を擧げ、李懷仙を襲うて之を破り、因つて兵を引ききて南す。

寶應元年、建寅の月、甲申、靖德太子、琮を追尊して奉天皇帝と爲し、妃竇氏を恭應皇后と爲す。丁酉、齊陵に葬る。

甲辰、吐蕃、使を遣はして和を請ふ。

李光弼、許州を抜き、史朝義が署する所の潁川の太守李春を擒にす。朝義の將史參、之を救ふ。

- 【五】 永寧・澠池・福昌の三縣、時に河南府に屬す。長水縣は洛州に屬す。本、盧氏の地。
- 【五】 太清宮、丹鳳門の左、南第二坊に在り。
- 【六】 太廟は朱雀街の東第二街北來第二坊に在り。
- 【六】 元獻廟、上の母元獻楊后の廟なり。
- 【六】 乾元元年、太一壇を立つること、二百二十卷に見ゆ。
- 【一】 寶應元年、四月改元す。西紀七六二年。
- 【二】 去年九月、勅して建子の月を以て歲首と爲す。而るに通鑑仍ほ建寅の月を以て歲首と爲すは、是年四月制して月數を復して皆其舊の如くするを以てなり。
- 【三】 琮は上皇の長子、天寶十載、薨す、諡して靖德太子と曰ふ。
- 【四】 齊陵、京兆昭應縣の東十六里に在り。
- 【五】 許州は潁川郡。唐已に郡を復して州と爲す。安史、猶ほ天寶の舊名に仍る。

丙午、城下に戦ひ、又之を破る。

戊申、平盧節度使侯希逸、青州の北に於て河を度り、而して田神功・能元皓に兗州に會す。

租庸使元載以へらく、江淮は兵荒を経たりと雖も、其民、諸道に比し、猶ほ贖産有りと。乃ち籍を按じ、八年の租調の違負し及び遁逃せる者を擧げ、其大數を計りて之を徴し、豪吏を擇びて縣令と爲して之を督せしめ、負の有無・贖の高下を問はず、民の粟帛を有する者を察し、徒を發して之を圍み、其の有する所を籍し、而して之を中分し、甚だしき者は什に八九を取る。之を白著と謂ふ。服せざる者有れば、嚴刑以て之を威す。民、穀十斛を蓄ふる者有れば、則ち足を重ねて以て命を待つ。或は山澤に相聚まりて羣盜を爲す。州縣、制する能はず。

建卯の月、辛亥朔、天下に赦す。復た京兆を以て上都と爲し、河南を東都と爲し、鳳翔を西都と爲し、江陵を南都と爲し、太原を北都と爲す。

奴刺、成固に寇す。

初め王思禮、河東節度使と爲り、資儲豐衍にして、軍を贍らすの外、米百萬斛を積み、奏して、五

- 【六】 八年。天寶十三載より、上元二年に止まる。天寶十三載は、天下未だ亂れず、租調の入、盛と爲す。十四載にして祿山反し、始めて違負遁逃有り。是より去年に至るまで、大難未だ平がず、戦兵息まず、違負遁逃、年、一年よりも甚だし。今、有無を問はず、其大數を計りて之を徴す。
- 【七】 白著。故無くして財物を費散する者を謂つて白著と爲す。
- 【八】 去年、四京及び南都を罷む。
- 【九】 成固縣は、漢より以來、漢中に屬す。

十萬斛を京師に輸さんと請ふ。(10) 思禮・薨じ、管崇嗣、之に代る。政を爲すこと寛弛にして、左右を信任す。數月の間に、耗散して殆ど盡き、惟だ陳腐の米萬餘斛在るのみ。上、之を聞き、鄧景山を以て之に代らしむ。景山至れば、則ち出入する所を鈎校す。將士輩、多く・隱没する有り、皆懼る。裨將有り、罪に抵り死に當る。諸將、之を請ふ。許さず。其弟、兄に代りて死せんと請ふ。亦、許さず。一馬を入れて以て死を贖はんと請ふ。乃ち之を許す。諸將怒りて曰はく、「我が輩は會ち一馬にも及ばざるか」と。遂に亂を作す。癸丑、景山を殺す。上以へらく、景山、撫御すること所を失ひ、以て亂を致せりと。復た亂者を推究せず、使を遣はして慰諭し、以て之を安んず。諸將請うて、都知兵馬使代州の刺史辛雲京を以て節度使と爲す。雲京、(11) 張光晟を奏して代州の刺史と爲す。

絳州素より儲蓄無く、民間饑乏、賦斂す可からず。將士の糧賜、充たず。朔方等諸道行營都統李國貞、屢、狀を以て聞す。朝廷未だ報せず。軍中(12) 咨怨す。(13) 突將王元振、將に亂を作さんとし、衆に矯令して曰はく、「來日、都統の宅を修む。各、(14) 舂鍤を具し、命を門に待て」と。士卒皆怒りて曰はく、「朔方の健兒は、豈に宅を修むる夫ならんや」と。乙丑、元振、其徒を帥めて亂を作し、牙城門を燒く。國貞、獄に逃る。元振、之を執へ、卒の食

〔一〇〕 乾元元年、王思禮、太原に鎮す。其の薨するは當に去年に在るべし。

〔一一〕 張光晟、辛雲京に德有ること、前卷乾元二年に見ゆ。

〔一二〕 咨怨。憂愁して上を怨む也。

〔一三〕 突將は以て驍勇馳突の士を領す。

〔一四〕 舂鍤。舂は竹を織りて爲りたる器。鍤は鋤なり。もつこ、すき。

を前に置きて曰はく、「此を食はせて其力を役するは、可ならんか」と。國貞曰はく、「宅を修むるは、則ち之れ無し。軍食は則ち屢、奏せしが、未だ報せざるは、諸君の知る所なり」と。衆、退かんと欲す。元振曰はく、「今日の事。何ぞ必ずしも更に問はん。都統、死せずんば、則ち我が輩死せん」と。遂に刃を抜きて之を殺す。鎮西北庭行營の兵、(15) 翼城に屯し、亦、節度使荔非元禮を殺し、裨將白孝德を推して節度使と爲す。朝廷因りて之を授く。戊辰、淮西節度使王仲昇、史朝義の將謝欽讓と、申州の城下に戦ひ、賊の虜にする所と爲る。淮西・震駭す。會、侯希逸・田神功・能元皓、汴州を攻む。朝義、欽讓の兵を召し、之を救はしむ。

〔一五〕 翼城縣は絳州に屬す。本、漢の絳縣。今の山西省河東道翼城縣の東南三十五里。

絳州の諸軍、剽掠すること已まず。朝廷、其の太原の亂軍と合從して賊に連なるを憂へ、「新進の諸將の能く鎮服する所に非ず」と。辛未、郭子儀を以て汾陽王と爲し、朔方河中北庭潞澤節度行營に知たり、興平定國等軍副元帥を兼ねしめ、京師の絹四萬匹・布五萬端・米六萬石を發し、以て絳の軍に給す。建辰の月庚寅、子儀、將に行かんとす。時に上、不豫なり。羣臣、進見するを得るもの莫し。子儀請うて曰はく、「老臣、命を受け、將に外に死せんとす。陛下を見ずんば、目、瞑せじ」と。上召して臥内に入れ、謂つて曰はく、「河東の事、一に以て卿に委ぬ」と。史朝義、兵を遣はし、李抱玉を澤州に圍ましむ。子儀、定國の軍を發して之を救ふ。乃ち去る。

上、山南東道節度使來瑱を召し、京師に赴かしむ。瑱、襄陽に在るを樂しむ。其の將士も亦之を愛す。乃ち所部の將吏に諷し、上表して之を留めしむ。行きて鄧州に及ぶ。復た鎮に還らしむ。荆南節度使呂誼、淮西節度使王仲昇及び中使の往來する者言はく、「瑱曲げて衆心を收む。恐らくは久しくして制し難からん」と。上乃ち商・金・均・房を割き、別に觀察使を置き、瑱をして止だ六州を領せしむ。會、謝欽讓、王仲昇を申州に圍むこと數月。瑱、之を怨み、兵を按じて救はず。仲昇竟に敗没す。行軍司馬裴茂、瑱の位を奪はんと謀り、密に表す、「瑱、偏疆にして制し難し。請ふ兵を以て襲うて之を取らん」と。上、以て然りと爲す。癸巳、瑱を以て淮西河南十六州節度使と爲し、外は寵任を示し、實は之を圖らんと欲し、密に勅し、茂を以て瑱に代り、襄鄧等州防禦使と爲す。

甲午、奴刺、梁州に寇す。觀察使李勉、城を棄てて走る。邠州の刺史河西の臧希讓を以て、山南西道節度使と爲す。

丙申、党項、奉天に寇す。

李輔國、宰相を求むれども得ざるを以て、蕭華を怨む。庚午、戶部侍郎元載を以て京兆の尹と爲す。載、輔國に詣りて固辭す。輔國、其意を識る。壬寅、司農卿陶銳を以て京兆の尹と爲す。輔國言

【一六】 山南東道節度使は襄・鄧・隨・唐・安・均・房・金・商の九州を領す。今、四州を分てば、五州を餘すのみ。今、六州を領すと曰へば、亦、鄧・復の二州に於て一州を増し領するならんか。

【一七】 時に山南西道觀察使、司を梁州に置く。

【一八】 山南西道節度使は、梁・洋・集・壁・文・通・巴・興・鳳・利・開・渠・蓬十三州を領す。

【一九】 奉天縣は雍州に屬す。

【二〇】 相を求むれども得ざる、こ、上の上元二年八月に見ゆ。

ふ、「蕭華、權を専らにす。請ふ其相を罷めん」と。上、許さず。輔國、固く請うて已まらず。乃ち之に従ふ。仍ち元載を引きて華に代らしむ。戊申、華罷めて禮部尙書と爲る。載を以て同平章事とし、度支轉運使を領すること故の如し。

建巳の月、庚戌朔、澤州の刺史李抱玉、史朝義の兵を城下に破る。

壬子、楚州の刺史崔旉、表して稱す、「尼眞如有り、恍惚として天に登り、上帝に見ゆ。賜ふに、寶玉十三枚を以てして云ふ、「中國、災有らば、此を以て之を鎮めよ」と。」羣臣、表して賀す。

【二一】 建巳の月、四月なり。

【二二】 寶玉十三枚。一に曰はく玄黃天符、二に曰はく玉雞、三に曰はく穀璧、四に曰はく西王母の白環二枚、五に曰はく碧色寶、六に曰はく如意寶珠、七に曰はく紅鞞鞞、八に曰はく琅玕珠二枚、九に曰はく玉珖、十に曰はく玉印、十一に曰はく皇后探桑鉤、十二に曰はく雷公石斧、十三は缺く。凡そ十三寶、日中に置けば、皆、白氣、天に連なると云ふ。

【二三】 神龍殿。蓋し中宗、神龍の間に於て之に居る。遂に以て殿に名づく。

【二四】 坐。神坐なり。

【二五】 寶應と改元す。

甲寅、上皇、神龍殿に崩す。年七十八。乙卯、坐を太極殿に遷す。上、疾に寢ぬるを以て、哀を内殿に發し、羣臣、哀を太極殿に發し、蕃官、面を撻き耳を割く者四百餘人。丙辰、苗晉卿に命じて冢宰を攝せしむ。上、仲春より疾に寢ね、上皇の登遐せしを聞き、哀慕して疾轉た劇し。乃ち太子に命じて國を監せしむ。甲子、制して、改元し、復た建寅を以て正月と爲し、月數、皆、其舊の如くし、天下に赦す。

初め 張后、李輔國と、相表裏し、權を専らにし事を用ふ。晩年、更に隙有り。内射生使三原の程元振、輔國に黨す。上、疾篤きや、后、太子を召し、謂つて曰はく、「李輔國久しく禁兵を典り、制勅皆之より出で、擅に逼りて、聖皇を遷せり。其罪甚だ大なり。忌む所の者は、吾と太子とのみ。今主上、彌留す。輔國、陰に程元振と、亂を作さんと謀る。誅せざる可からず」と。太子泣きて曰はく、「陛下疾甚だ危し。二人は皆陛下の勳舊の臣なり。一旦、告げずして之を誅せば、必ず震驚を致さん。恐らくは堪ふる能はざらん」と。后曰はく、「然らば則ち太子姑く歸れ。吾更に徐ろに之を思はん」と。太子出づ。越王係を召し、謂つて曰はく、「太子は仁弱にして、賊臣を誅する能はず。汝、之を能くせんか」と。對へて曰はく、「能くせん」と。係乃ち内調者監段恒俊に命じ、宦官の勇力有る者二百餘人を選び、甲を長生殿の後に授く。乙丑、后、上の命を以て太子を召す。元振、其謀を知り、密に輔國に告げ、兵を陵霄門に伏せ、以て之を俟つ。太子至る。難を以て告ぐ。太子曰はく、「必ず是事無からん。主上疾亟かにして我を召す。我豈に死を畏れて赴かざる可けんや」と。元振曰はく、「社稷の事大なり。太子、必ず入る可からず」と。乃ち兵を以て太子を飛龍廡に送り、且つ甲卒を以て之を守る。是夜、輔國、元振、兵を三殿に勸し、越王係、段恒俊及び知内侍省事朱光輝等百餘人を收

- 【二六】 前卷乾元二年に見ゆ。
- 【二七】 宦官を以て射生手を領す故に内射生使と曰ふ。
- 【二八】 聖皇。玄宗の尊號を聖皇天帝と曰ふ。
- 【二九】 彌留。疾危篤なるをいふ。
- 【三〇】 陵霄門は宮城の北面玄武門の西に在り。
- 【三一】 飛龍廡。仗内の六閑の一なり。玄武門の外に在り。

捕し、之を繋ぐ。太子の命を以て后を別殿に遷す。時に上、長生殿に在り、使者、后に逼りて殿を下らしめ、左右數十人を并せて、後宮に幽す。宦官、宮人、皆驚駭して逃れ散す。丁卯、上、崩す。輔國等、后并に係及び兗王儻を殺す。是日、輔國、始めて太子を引き、九仙門に素服し、宰相と相見、上皇の晏駕せるを敘し、拜哭し、始めて監國の令を行ふ。戊辰、大行皇帝の喪を發し、兩儀殿に於て遺詔を宣す。己巳、代宗、位に即く。高力士、赦に遇うて還り、朗州に至る。上皇、崩せりと聞き、號慟して血を嘔きて卒す。甲戌、皇子、奉節王适を以て天下兵馬元帥と爲す。李輔國、功を恃みて益横なり。明かに上に謂つて曰はく、「大家は但だ禁中に居れ。外事は老奴の處分するに聽せよ」と。上、内、平かなる能はざれども、其の方に禁兵を握るを以て、外は之を尊禮す。乙亥、輔國を號して尙父と爲して、名はせず、事、大小と無く、皆之に咨る。羣臣出入するに、皆先づ輔國に詣る。亦、晏然として之に處る。内飛龍廡副使程元振を以て左監門衛將軍と爲す。知内侍省事朱光輝及び内常侍啖庭

- 【三二】 肅宗崩するとき、年五十五。
- 【三三】 宮城の西面右銀臺門の北に九仙門有り、又、北轉して東すれば、凌雲門なり。
- 【三四】 太子に命じて國を監せしむるは、甲子前に在り、而して乙丑即ち内變有り。既に定まり、乃ち始めて令を行ふ。
- 【三五】 高力士、流さるること前卷上元元年に見ゆ。高力士、巫州に流され、赦に遇うて還りて朗州に至る。朗州より京師に至るまで、尙ほ二千二百五十九里。赦は甲子の赦なり。
- 【三六】 奉節。縣名、今の四川省東川道奉節縣。
- 【三七】 上の前に於て之を明言し忌憚する所無し。
- 【三八】 齊の太公、周の武王を輔け、師尙父と號せらる。今、其號を以て中人を寵す。
- 【三九】 朱光輝より以下は皆大行の左右なり。

瑤・山人李唐等二十餘人、皆、黔中に流さる。

初め李國貞、軍を治むること嚴なり。朔方の將士、樂します。皆、郭子儀を思ふ。故に王元振、之に

因つて亂を作す。子儀、軍に至る。元振自ら以て功と爲す。子儀曰はく、

「汝、賊境に臨み、輒ち主將を害せり。若し賊、其翼に乗せば、絳州無

かりしならん。吾、宰相と爲り、豈に一卒の私を受けんや」と。五月庚辰、

元振及び其同謀四十人を收へ、皆之を殺す。辛雲京、之を聞き、亦、鄧

景山を殺せる者數十人を推按し、之を誅す。是に由りて、河東の諸鎮、率

ね皆法を奉す。

壬午、李輔國を以て司空と爲し、中書令を兼ねしむ。

党項、同官・華原に寇す。

甲申、平盧節度使侯希逸を以て平盧青淄等六州節度使と爲す。是に

由りて、青州節度に、平盧の號有り。

乙酉、奉節王迺を徙して魯王と爲す。

上の母吳妃を追尊して皇太后と爲す。

壬辰、禮部尚書蕭華を貶して峽州の司馬と爲す。元載、李輔國の意を希ひ、罪を以て之を誣ふ

【四〇】絳州は東のかた河南と界を接し、時に賊、又、河陽・河内に據る、故に然云ふ。

【四一】胡三省曰はく、郭子儀、王元振を誅して、河東の諸鎮、皆、法を奉す。僕固懷恩、河北諸州を分ちて田承嗣等に授け、以て藩鎮の勢を成せり。人を用ふることに慎まざる可けんやと。

【四二】青・淄・齊・沂・密・海の六州。淄州は淄川に治す。今の山東省濟南道淄川縣。

【四三】吳妃、肅宗に東宮に事へ、上を生みて薨す。

【四四】輔國、相たらざるを以て華を銜む。

るなり。

勅して、乾元の大小錢、皆、一、一に當つ。民始めて之に安んず。

史朝義、宋州を圍みしより數月、城中、食盡き、將に陥らんとす。刺史李岑、爲す所を知らず。

遂城果毅 開封の劉昌曰はく、「倉中猶ほ麴數千斤有り。請ふ之を屑食せ

ん。二十日に過ぎずして、李太尉必ず我を救はん。城の東南隅最も危し。

昌請ふ之を守らん」と。李光弼、臨淮に至る。諸將、朝義の兵尙ほ彊きを

以て、南して揚州を保たんと請ふ。光弼曰はく、「朝廷、我に倚り、以て安

危と爲す。我復た退縮せば、朝廷何をか望まん。且つ吾、其不意に出でば、

賊安んぞ吾の衆寡を知らん」と。遂に徑に徐州に趣く。兗節度使田神功

をして進みて朝義を撃たしめ、大に之を破る。是より先、田神功既に劉

展に克ち、揚州に留連し、未だ還らず。太子賓客尚衡、左羽林大將軍殷

仲卿と、兗軍に相攻む。光弼至ると聞き、其威名を憚り、神功遽に河

南に還り、衡・仲卿相繼ぎて入朝す。光弼、徐州に在り、惟だ軍旅の事のみ、自ら之を決し、自餘の

衆務は、悉く判官張儉に委ぬ。儉、吏事精敏にして、區處すること流るるが如し。諸將、事を白せば、光弼多く(之ヲ)儉と之を議せしむ。諸將、儉に事ふること光弼の如し。是に由りて軍中肅然たり。

【四五】民、乾元の二品錢を便とせざること、前卷乾元二年に見ゆ。

【四六】易州に遂城府有り。

【四七】開封。漢の縣、唐、汴州に屬す。今の河南省開封道開封縣の南五十里。

【四八】李太尉は光弼を謂ふ。

【四九】去年正月、神功、劉展に克つ。

【五〇】此河南は總べて河南道を言ふ。

東夏以て寧し。是より先、【五二】田神功、偏裨より起りて節度使と爲り、前使の判官劉位等を幕府に留む。神功、皆、其拜を平受す。光弼が慘と【五三】抗禮するを見るに及び、乃ち大に驚き、偏く位等を拜して曰はく、「神功、行伍より出で、禮儀を知らず。諸君も亦胡爲れぞ言はずして神功の過を成せるや」と。

丁酉、天下に赦す。

【五四】皇子益昌王邈を立てて鄭王と爲し、延を慶王と爲し、迴を韓王と爲す。

來瑱、淮西に徙さると聞き、大に懼れ、上言す、「淮西は糧無し。請ふ麥を收むるを俟ちて行かん」と。又、將吏に諷して己を留めしむ。上、姑息無事ならんことを欲し、壬寅、復た瑒を以て山南東道節度使と爲す。

飛龍副使程元振、李輔國の權を奪はんと謀り、密に上に言ふ、「請ふ稍裁制を加へん」と。六月己未、輔國の行軍司馬及び兵部尚書を解き、餘は故の如し。元振を以て代りて元帥行軍司馬に判たらしめ、仍ほ輔國を遷し、【五五】出でて外第に居らしむ。是に於て道路相賀す。輔國始めて懼れ、上表して位を遜る。辛酉、輔國の兼中書令を罷め、爵を博陸王に進む。輔國入りて謝し、噴咽して言つて曰はく、「老奴、郎君に事へて了せず。請ふ地下に歸して先帝に事へん」と。上猶ほ慰諭して之を遣る。

壬戌、兵部侍郎嚴武を以て、西川節度使と爲す。

襄鄧防禦使裴茂、【五六】穀城に屯す。既に密勅を得、即ち麾下二千人を帥る、漢に沿うて襄陽に趣く。己巳、穀水の北に陳す。瑒、兵を以て之を逆へ、其の來る所以を問ふ。對へて曰はく、「尙書、朝命を受けず、故に來る。若し代を受けば、謹みて當に兵を釋くべし」と。瑒曰はく、「吾已に恩を蒙り、復た留まりて此に鎮す。何ぞ代を受くこと之れ有らん」と。因つて勅及び告身を取りて之に示す。茂驚き惑ふ。瑒、副使薛南陽と與に、兵を縱ちて夾撃し、大に之を破り、追うて茂を申口に擒にし、京師に送る。死を賜ふ。

乙亥、【五七】通州の刺史劉晏を以て戶部侍郎と爲し、京兆の尹を兼ねしめ、度支轉運鹽鐵鑄錢等使に充つ。

秋七月壬辰、郭子儀を以て、【五八】都知朔方河東北庭潞儀澤沁陳鄭等節度行營及び興平等軍副元帥とす。

癸巳、劍南兵馬使徐知道、反し、兵を以て要害を守り、嚴武を拒ぐ。武、進むを得ず。

八月、桂州の刺史邢濟、西原の賊帥吳功曹等を討ち、之を平ぐ。

【五六】穀城。漢の筑陽縣の地。

晉、義成郡及び義城縣を置く。隋の開皇十六年、郡を廢し、縣を改めて穀城と曰ふ。今の湖北省襄陽道穀城縣。

【五七】去年十一月、晏、通州に貶せらる。

【五八】時に潞儀澤沁陳鄭を以て一鎮と爲し、李抱玉を以て節度使と爲す。蓋し抱玉、先に陳鄭節度使を以て賊を討ち、行營に在り。李光弼の邙山の敗に、抱玉、澤州に奔る。陳鄭、賊の隔つる所と爲る。朝廷因つて之をして潞儀澤沁四州を節度せしむ。

己未、徐知道、其將李忠厚の殺す所と爲り、劔南悉く平ぐ。
 乙丑、山南東道節度使來瑱、入朝して罪を謝す。上、之を優待す。
 己巳、郭子儀、河東より入朝す。時に程元振、事を用ひ、子儀の功高く任重きを忌み、數之を上
 に譖す。子儀、自ら安んぜず。表して、副元帥節度使を解かんと請ふ。上、之を慰撫す。子儀遂に京
 師に留まる。

台州の賊帥袁晁、攻めて浙東の諸州を陥れ、寶勝と改元す。民、賦斂に
 疲るる者、多く之に歸す。李光弼、兵を遣はして晁を、衢州に撃たしめ、
 之を破る。

乙亥、魯王适を徙して雍王と爲す。

九月庚辰、來瑱を以て兵部尚書・同平章事と爲し、山南東道節度使に
 知たらしむ。

乙未、程元振に驃騎大將軍を加へ、内侍監を兼ねしむ。

左僕射裴冕、山陵使と爲り、事を議し、程元振と相違ふ者有り。丙申、冕を施州の刺史に貶す。
 上、中使劉清潭を遣はし、回紇に使し、舊好を修め、且つ兵を徵して史朝義を討たしむ。清潭、其
 庭に至る。回紇の登里可汗、已に朝義の誘ふ所と爲る。云はく、『唐室、繼ぎて大喪有り。今、中

【五〇】衢州。春秋の時の越の姑
 蔑の地。秦、以て太末縣と爲
 す。漢分ちて新安縣を立つ。
 晉、信安と改む。唐、衢州を置
 く。今の浙江省金華道衢縣。
 【六一】山陵使。方上の役、唐、
 山陵使を置き、宰相を以て之
 と爲す。
 【六二】連りに玄宗・肅宗の喪有
 るに因り、遂に詭くに中原に
 主無きを以てす。

原、主無し。可汗宜しく速かに來り、共に其府庫を收む可し』と。可汗、之を信す。清潭、勅書を致
 して曰はく、『先帝、天下を棄つと雖も、今上、統を繼ぐ。乃ち昔日の廣平王にして、葉護と共に
 西京を收めし者なり』と。回紇、業已に兵を起して、三城に至り、州縣皆丘墟と爲るを見、唐を輕ん
 ずるの志有り。乃ち清潭を困辱す。清潭、使を遣はして狀を言ひ、且つ曰はく、『回紇、國の十萬の
 衆を擧げて至る』と。京師大に駭く。上、殿中監藥子昂を遣はし、往きて之を忻州の南に勞せしむ。
 初め毗伽可汗、登里の爲めに婚を永む。肅宗、僕固懷恩の女を以て之に
 妻はす。登里可敦と爲す。可汗、懷恩と相見んと請ふ。懷恩時に汾州に在
 り。上、往きて之を見しむ。懷恩、可汗の爲めに唐家の恩信負く可からざ
 るを言ふ。可汗悦び、使を遣はして上表し、國を助けて朝義を討たんと請
 ふ。可汗、蒲關より入り、沙苑に由り、潼關を出でて東向せんと欲す。藥子

【六一】事、二百二十卷至德二載
 に見ゆ。
 【六二】三城。朔方の三受降城。
 【六三】陝縣の北に太陽關有り。
 黄河の津濟の要なり。

昂、之に説きて曰はく、『關中數、兵荒に遭ひ、州縣蕭條として、以て供擬する無し。恐らくは可汗、
 望を失はん。賊兵盡く洛陽に在り。請ふ士門より、邢洛懷衛を略して南し、其資財を得、以て軍裝
 に充てん』と。可汗、從はず。又、太行より南下し、河陰に據り、賊の咽喉を扼せんと請ふ。亦、從は
 ず。又、陝州の太陽津より、河を度り、太原の倉粟を食し、諸道と俱に進まんと請ふ。乃ち之に從
 ふ。

袁晁、信州を陷る。

冬十月、袁晁、温州、明州を陷る。

雍王适を以て天下兵馬元帥と爲す。辛酉、辭して行く。兼御史中丞藥子昂、魏琚を以て左右廂の兵

馬使と爲し、中書舍人韋少華を以て判官と爲し、給事中李進を行軍司馬と

爲し、諸道節度使及び回紇に陝州に會し、進みて史朝義を討たしむ。上、

郭子儀を以て适の副と爲さんと欲す。程元振、魚朝恩等、之を沮みて止む。

朔方節度使僕固懷恩に同平章事を加へ、絳州の刺史を兼ね、諸軍節度行

營を領し、以て适に副たらしむ。

上、東宮に在るとき、李輔國が專横なるを以て、心甚だ平かならず。

位を嗣ぐに及び、輔國が張后を殺すの功有るを以て、顯かに之を誅するを

欲せず。壬戌夜、盜、其第に入り、輔國の首及び一臂を竊みて去る。有司

に勅して盜を捕へしめ、中使を遣はして其家を存問し、爲めに木首を刻し

て之を葬り、仍ほ太傅を贈る。

丙寅、上、僕固懷恩に命じ、母妻と俱に行營に詣らしむ。雍王适、陝州に至る。回紇の可汗、

河北に屯す。适、僚屬と與に、數十騎を従へ、往きて之を見る。可汗、适が拜舞せざるを責む。藥子

昂對ふるに、禮當に然るべからざるを以てす。回紇の將軍車鼻曰はく、「唐の天子、可汗と、約して

兄弟と爲る。可汗は雍王に於て叔父なり。何ぞ拜舞せざるを得ん」と。子昂曰はく、「雍王は天子の長

子にして、今、元帥と爲る。安んぞ中國の儲君の外國の可汗に向つて拜舞する有らんや。且つ

宮、殯に在り。應に舞踏すべからず」と。力爭すること之を久しくす。車

鼻遂に子昂、魏琚、韋少華、李進を引き、各鞭うつこと一百、适が年少に

して未だ事を諳せざるを以て、遣りて營に歸らしむ。琚、少華、一夕にして

死す。戊辰、諸軍、陝州を發す。僕固懷恩、回紇の左殺と與に、前鋒と爲

り、陝西節度使郭英父、神策觀軍容使魚朝恩、殿と爲り、灑池より入

り、潞澤節度使李抱玉、河陽より入り、河南等道副元帥李光弼、陳留より

入り、雍王、陝州に留まる。辛未、懷恩等、同軌に軍す。史朝義、官軍

將に至らんとするを聞き、諸將に謀る。阿史那承慶曰はく、「唐若し獨り

漢の兵と與に來らば、宜しく衆を悉して與に戰ふべし。若し回紇と俱に來

らば、其鋒、當る可からず。宜しく退きて河陽を守り、以て之を避くべし」と。朝義、從はず。壬申、

官軍、洛陽の北郊に至り、兵を分ちて懷州を取り、癸酉、之を拔く。乙亥、官軍、横水に陳す。賊

衆數萬、柵を立てて自ら固む。懷恩、西原に陳し、以て之に當り、驍騎及び回紇を遣はし、南山に竝

り、

唐肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝寶應元年

【六四】信州。上饒縣に治す。今の江西省豫章道上饒縣。
【六五】温州。永嘉郡、永嘉縣に治す。今、浙江省瓊海道。
【六六】明州。餘姚郡、鄞縣に治す。今の浙江省會稽道鄞縣。
【六七】絳州。絳郡。時に朔方軍、朔州に屯す。故に懷恩を以て刺史を領せしむ。
【六八】時に登里、懷恩の女と俱に來る、故に懷恩の母妻をして行營に詣らしめ、以て之を親結す。
【六九】河北。陝州の河北なり。

【七〇】兩宮。上皇、先帝を謂ふ。時に皆未だ葬らず。
【七一】上元元年、陝西節度使を改めて陝西節度使と爲す。
【七二】道を分ちて竝に入り、以て洛陽を攻む。
【七三】河南の永寧縣は、後周の同軌縣の地、同軌城有り。
【七四】去年、邙山の敗に、河陽、懷州、皆、賊に陷る。洛陽の北郊は邙山の外に在り。
【七五】横水。洛陽の北郊に在り。

うて柵の東北に出でしめ、表裏合撃し、大に之を破る。朝義、其精兵十萬を悉して之を救ひ、昭覺寺に陳す。官軍、驟之を撃ち、殺傷甚だ衆し。而れども賊陳、動かす。魚朝恩、射生五百人を遣はして力戦す。賊、死する者多しと雖も、陳亦初めの如し。鎮西節度使馬璘曰はく、『事急なり』と。遂に單騎奮撃し、賊の兩牌を奪ひ、萬衆の中に突入す。賊の左右披靡す。大軍、之に乗じて入る。賊衆大に敗る。石榴園・老君廟に轉戦す。賊又敗れ、人馬相蹂踐し、尙書谷を填む。斬首六萬級、捕虜二萬人。朝義、輕騎數百を將ゐて東に走る。懷恩進みて東京及び河陽城に克ち、其中書令許叔冀・王仙等を獲、制を承けて之を釋す。懷恩、回紇の可汗を留め、河陽に營せしめ、其子右廂兵馬使瑒及び朔方兵馬使高輔成をして、步騎萬餘を帥る、勝に乗じて朝義を逐はしむ。鄭州に至り、再び戦ひ皆捷つ。朝義、汴州に至る。其陳留節度使張獻誠、門を閉ちて之を拒む。朝義、濮州に奔る。獻誠、門を開きて出で降る。回紇、東京に入り、肆に殺略を行ふ。死する者萬計。火、累旬、滅えず。朔方神策軍も亦、東京・鄭・汴・汝州は皆賊の境たるを以て、過ぐる所虜掠し、三月にして乃ち已む。比屋蕩盡し、士民皆紙を衣る。回紇、悉く掠むる所の寶貨を河陽に置き、其將安恪を留めて之を守らしむ。十一月丁丑、露布、京師に至る。朝義、濮州より北して河を度る。懷恩進みて滑州を攻めて之を抜き、追うて朝義を衛州に敗る。朝義の

【六】 陳を犯せども陥るる能はず、引き退かば必ず敗れん、故に曰はく事急なりと。
【七】 牌、古、之を楯といふ。晉宋の間、之を彭排と謂ふ。南方は皮を以て竹を編みて之を爲り、以て敵を捍ぐ。北人は木を以て之を爲る。

睢陽節度使田承嗣等、兵四萬餘人を將ゐて、朝義と合し、復た來りて拒ぎ戦ふ。僕固瑒撃ちて之を破り、長驅して昌樂の東に至る。朝義、魏州の兵を帥ゐて來り戦ふ。又敗走す。是に於て鄴郡節度使薛嵩、相・衛・洛・邢・四州を以て、陳鄭澤潞節度使李抱玉に降る。恒陽節度使張忠志、趙・恒・深・定・易・五州を以て、河東節度使辛雲京に降る。嵩は楚玉の子なり。抱玉等已に軍を進めて其營に入り、其部伍を按ず。嵩等皆代を受く。居ること何くも無く、僕固懷恩、皆、位に復せしむ。是に由りて、抱玉・雲京、懷恩が貳心有るを疑ひ、各表して之を言ふ。朝廷密に之が備を爲す。懷恩も亦上疏して自ら理す。上、之を慰勉す。

【七】 昌樂縣は魏州に屬す。今の直隸省大名道南樂縣。
【七九】 楚玉、薛嵩の弟。

辛巳、制して、東京及び河南北の僞官を受くる者、一切、問はず。
己丑、戸部侍郎劉晏を以て河南道水陸轉運都使を兼ねしむ。
丁酉、張忠志を以て成徳軍節度使と爲し、恒・趙・深・定・易・五州を統べしめ、姓を李、名を寶臣と賜ふ。初め辛雲京、兵を引き、將に井陘に出でんとす。常山の裨將王武俊、寶臣に説きて曰はく、『今、河東の兵精銳なり。境を出でて遠く鬪はば、敵す可からざるなり。且つ吾、寡を以て衆に當り、曲を以て直に遇ふ。戦はば則ち必ず離れ、守らば則ち必ず潰えん。公其れ之を圖れ』と。寶臣乃ち守備を撤し、五州を擧げて來り降る。復た節度使と爲るに及び、武俊の策を以て善しと爲し、擢でて先鋒兵馬使と爲す。武俊は本契丹なり。初めの名は沒諾干。

郭子儀、僕固懷恩が河朔を平ぐる功有るを以て、副元帥を以て之に譲らんと請ふ。己亥、懷恩を以て河北副元帥と爲し、左僕射を加へ、中書令・單于鎮北大都護・朔方節度使を兼ねしむ。史朝義走りて貝州に至り、其大將薛忠義等兩節度と合ふ。僕固瑒、之を追ひ、臨清に至る。朝義、衡水より、兵三萬を引き、還りて之を攻む。瑒、伏を設け、撃ちて之を走らす。回紇又至り、官軍益振ふ。遂に之を逐ひ、大に下博の東南に戦ふ。賊大に敗れ、積尸、流に擁がりて下る。朝義、莫州に奔る。懷恩の都知兵馬使薛兼訓・兵馬使郝庭玉、田神功・辛雲京と、下博に會し、進みて朝義を莫州に圍む。青淄節度使侯希逸繼ぎて至る。

十二月庚申、初めて 太祖を以て天地に配す。

代宗睿文孝武皇帝上の上

廣德元年、春正月己卯、吳太后を追諡して章敬皇后と曰ふ。

癸未、國子祭酒劉晏を以て吏部尚書・同平章事と爲す。度支等使は故の如し。

初め來瑱、襄陽に在るとき、程元振、請託する所有れども、從はず。

相と爲るに及び、元振、瑒を譖す、「言、不順に渉る」と。王仲昇、賊中に

【八〇】 臨清。漢の清淵縣。後魏、臨清と改む。唐、貝州に屬す。魏州の北一百五十里。今の山東省東臨道臨清縣の南。
 【八一】 下博。漢の縣、時に深州に屬す。今の直隸省保定道深縣の南。
 【八二】 太祖。景皇帝。
 【八一】 代宗。初めの名は假、後、名を豫と改む。肅宗の長子なり。登遐の後、議して廟號を上りて世宗と曰ふ。太宗の諱を避け、改めて代宗と曰ふ。

在り、屈服するを以て、全きをを得、賊平ぎて、歸るを得、元振と善く、「瑒、賊と謀を合はせ、仲昇が賊に陥るを致せり」と奏す。壬寅、瑒、坐して官爵を削り、播州に流さる。死を路に賜ふ。是に由りて、藩鎮、皆、元振に切齒す。

史朝義、屢、出で戦ひ、皆敗る。田承嗣、朝義に説き、親ら幽州に往きて兵を發し、還りて莫州を救はしめ、承嗣、自ら莫州を留守せんと請ふ。

朝義、之に従ひ、精騎五千を選び、北門より圍を犯して出づ。朝義既に去るや、承嗣即ち城を以て降り、朝義の母妻子を官軍に送る。是に於て、僕固瑒・侯希逸・薛兼訓等、衆三萬を帥ゐて之を追ふ。

歸義に及び、與に戦ふ。朝義、敗走す。時に朝義の范陽節度使李懷仙、已に中使駱奉仙に因りて、降らんと請ふ。兵馬使李抱忠を遣はし、兵三千を將ゐて、范陽縣に鎮せしむ。朝義、范陽に至り、入るを得ず。官軍將に至らんとす。朝義、人を遣はし、抱忠に諭すに、大軍、莫州に留まり、輕騎にて來りて兵を發し救援するの意を以てし、因つて責むるに君臣の義を以てす。抱忠對へて曰はく、「天、燕に祚せず、唐室復た興る。今既に唐に歸す。豈に更に反覆を爲す可けんや。獨り二軍に愧ぢざらんや。大丈夫、詭計を以て相圖るを恥づ。願はくは早く去就を擇び、以て自ら全きを謀れ、且つ田承嗣必ず已に叛きしならん。然らずんば官軍何を以て此に至るを得ん」と。朝義大

【二】 廣德元年。是年七月方めて改元す。西紀七六三年。
 【三】 吳太后は上の生母なり。
 【四】 去年、來瑒に同平章事を加ふ。
 【五】 歸義。幽州に屬す。今の直隸省保定道雄縣の西北三十里。
 【六】 范陽縣は涿郡の治所なり。今の京兆涿縣。

に懼れて曰はく、「吾、朝來未だ食せず。獨り一餐を以て相餉する能はざるか」と。抱忠乃ち人をして食を城東に設けしむ。是に於て、范陽の人、朝義の麾下に在る者、竝に拜辭して去る。朝義涕泣するのみ。獨り胡騎數百と與に、既に食して去り、東して廣陽に奔る。廣陽、受けず。北して奚・契丹に入らんと欲し、溫泉柵に至る。李懷仙、兵を遣はし、追うて之に及ぶ。朝義・窮蹙し、林中に縊る。懷仙、其首を取りて以て獻す。僕固懷恩、諸軍と皆還る。甲辰、朝義の首、京師に至る。

閏月己酉夜、回紇十五人有り、含光門を犯し、鴻臚寺に突入す。門司、敢て遏めず。癸亥、史朝義の降將薛嵩を以て相衛那洛貝、磁六州節度使と爲し、田承嗣を魏博、德滄瀛五州都防禦使と爲し、李懷仙は、故地に仍り、幽州盧龍節度使と爲す。時に河北の諸州、皆已に降る。嵩等、僕固懷恩を迎へて馬首に拜し、行間に自ら効さんと乞ふ。懷恩も亦、賊平ぎ寵衰へんことを恐れ、故に奏し、嵩等及び李寶臣を留め、分ちて河北に帥たらしめ、自ら黨援と爲す。朝廷も亦兵革を厭苦し、苟くも無事を冀ひ、因り

て之を授く。回紇の登里可汗、國に歸り、其部衆、過ぐる所抄掠す。麋給小しく意の如くならざれば、輒ち人を殺し、忌憚する所無し。陳鄭澤潞節度使李抱玉、官屬を遣はして置頓せしめんと欲す。人人辭し憚る。(四)趙城の尉馬燧、獨り、行かんと請ふ。回紇將に至らんとするに比べて、燧先づ人を遣はして其渠帥に賂ひ、「暴掠する母れ」と約す。帥、之に旗を遣りて曰はく、「令を犯す者有らば、君自ら之を戮せよ」と。燧、死囚を取りて左右と爲し、小しく令に違ふ有れば、立ちどころに之を斬る。回紇相顧みて色を失ふ。其境を渉る者、皆手を拱きて約束に遵ふ。抱玉、之を奇とす。燧因つて抱玉に説きて曰はく、「燧、回紇と言ひ、頗る其情を得たり。僕固懷恩、功を恃みて驕蹙、其子場、勇を好みて輕し、今、内は四帥を樹て、外は回紇に交はる。必ず、河東澤潞を窺ふの志有らん。宜しく深く之に備ふべし」と。抱玉、之を然りとす。

初め長安の人梁崇義、羽林射生を以て、來瑱が襄陽に鎮するに従ひ、右兵馬使に累遷す。崇義、勇力有り、能く鐵を卷き鉤を舒べ、沈毅寡言にして、衆の心を得たり。瑒が入朝するや、諸將に命じ、分ちて諸州に戍せしむ。瑒が死するや、戍者皆奔りて襄陽に歸る。(七)行軍司馬龐充、兵二千を將ゐて

【七】 檀州燕樂縣に、後魏、廣陽郡を置く。後齊、郡を廢す。而して舊の郡名猶ほ存す。
【八】 溫泉柵。平州の界、石城縣の東北に在り。
【九】 唐の太極宮の南面の三門、中なるを朱雀門と曰ひ、東なるを安上門と曰ひ、西なるを含光門と曰ふ。
【一〇】 磁州は漢の廣平縣の地。周の武帝、此に於て滏陽縣及び成安郡を置く、隋の開皇十

年、郡を廢して磁州を置く。唐の武德元年、相州を分ちて磁州を置く。貞觀元年、州廢す。薛嵩既に節を得、復た表して相州の滏陽・洛州の邯鄲・武安を以て磁州を置く。
【一】 魏州は漢の魏郡の地。
【二】 博州は漢の東郡聊城縣。
【三】 德州は漢の平原郡の地。
【四】 范陽節度使を改めて幽州節度使と爲す。時に平盧已に陷る。又、盧龍節度使を兼ね。

【五】 趙城。隋の義寧元年、霍邑を分ちて趙城縣を置き、晉州に屬す。今の山西省河東道趙城縣の西南。
【六】 四帥。田承嗣・李寶臣・李懷仙・薛嵩を謂ふ。
【七】 蓋し是より先、來瑒、龐充をして河南行營に赴き、史朝義を討つに會せしめしなり。

河南に赴く。汝州に至り、瑱が死するを聞き、兵を引きて還りて襄州を襲ふ。左兵馬使李昭、之を拒ぐ。充、房州に奔る。崇義、鄧州より、戍兵を引きて歸り、昭及び副使薛南陽と、長と爲るを相讓る。之を久しくして、決せず。衆皆曰はく、「兵は梁卿が之を主るに非ざれば不可なり」と。遂に崇義を推して帥と爲す。崇義尋ぎて昭及び南陽を殺し、其狀を以て聞す。上、討つ能はず。三月甲辰、崇義を以て襄州の刺史。〔二六〕山南東道節度留後と爲す。崇義、奏し、瑱を改葬し、之が爲めに祠を立つ。瑱の聽事及び正堂に居らす。

辛酉、至道大聖大明孝皇帝を〔二七〕泰陵に葬り、廟を玄宗と號す。庚午、文明武德大聖大宣孝皇帝を〔二八〕建陵に葬り、廟を肅宗と號す。

夏四月庚辰、李光弼、奏す、「袁晁を擒にし、浙東皆平ぐ」と。時に晁、衆を聚むること二十萬に近く、轉じて州縣を攻む。光弼、部將張伯儀をして、兵を將ゐて討ちて之を平げしむ。伯儀は魏州の人なり。

郭子儀數、上言す、「吐蕃・党項は、忽せにす可からず。宜しく早く之が備を爲すべし」と。辛丑、兼御史大夫李之芳等を遣はし、吐蕃に使せしむ。虜の留むる所と爲る。〔二九〕二年にして乃ち歸るを得たり。

羣臣三たび上表し、太子を立てんと請ふ。五月癸卯、詔して、秋成を俟ちて之を議するを許す。

〔二六〕 唐の藩鎮、帥を命じ、未だ旌節を授けざる者は、先づ以て節度留後と爲す。

〔二七〕 泰陵。同州奉先縣の東北二十里金粟山に在り。

〔二八〕 建陵。京兆醴泉縣の東北十八里武將山に在り。

〔二九〕 史、之を究言す。

丁卯、制して、河北の諸州を分ち、幽・莫・嬾・檀・平・薊を以て幽州の管と爲し、恒・定・趙・深・易を成徳軍の管と爲し、相・貝・邢・洺を相州の管と爲し、魏・博・徳を魏州の管と爲し、滄・棣・冀・瀛を青淄の管と爲し、懷・衛・河陽を澤潞の管と爲す。

六月癸酉、禮部侍郎華陰の楊綰、上疏して以爲はく、「古の士を選ぶは、必ず行實を取る。近世専ら文辭を尙ぶ。隋の煬帝が始めて進士科を置きしより、猶ほ策を試みるのみ。高宗の時に至り、考功員外郎劉思立、始めて奏し、進士に雜文を加へ、明經に帖を加ふ。此より弊を積み、轉じて俗を成す。朝の公卿は、此を以て士を待ち、家の長老は、此を以て子に訓ふ。其明經は則ち〔三〇〕帖括を誦し、以て僥幸を求む。又、人を擧ぐるに、皆、牒を投じて自ら應せしむ。此の如くにして、其の淳朴に返り廉讓を崇ばんことを欲するも、何ぞ得可けんや。請ふ縣令をして孝廉を察し、行は郷閭に著はれ、學は經術を知る者を取り、之を州に薦めしめ、刺史・考試して、之を省に升せ、各一經を占するに任せ、朝廷、儒學の士を擇ぶに、經義二十條を問ひ、策三道を對し、上第は即ち官を注し、中第は出身するを得、下第は罷め歸らしめん。又、

〔三〇〕 道舉を置くこと、二百二十四卷開元二十五年に見ゆ。

道舉は亦國を理むるに非ず。望むらくは明經進士と竝に停めんことを」と。上、諸司に命じて通議せしむ。給事中李栖筠・左丞賈至・京兆の尹嚴武、竝に縮と同じ。至、議して以爲はく、「今、學を試す

るには、帖字を以て精通と爲す。文を考するには、〔四〕聲病を以て是非を爲し、風流類徹す。誠に當に釐改すべし。然れども東晉より以來、人、僑寓多く、士、郷土に居るもの、百に一二も無し。請ふ兼ねて學校を廣め、桑梓を保つ者は、郷里焉を擧げ、流寓に在る者は、庠序焉を推さん」と。禮部に勅し、條目を具して以て聞せしむ。縮、又、五經秀才科を置かんと請ふ。

庚寅、魏博都防禦使田承嗣を以て節度使と爲す。承嗣、管内の戸口の壯者を擧げ、皆籍して兵と爲し、惟だ老弱なる者をして耕稼せしむ。數年の間に、衆十萬有り。又、其曉健なる者萬人を選びて自ら衛る。〔五〕之を牙兵と謂ふ。

〔三〕 聲病。平上去入の四聲を以て辨めて文を成し、音從ひ文順なるを聲と謂ひ、是に反するを病と謂ふ。
〔四〕 魏の牙兵、此に始まる。
〔五〕 梁唐に至るまで、魏、之を以て強く、亦之を以て亡ぶ。
〔六〕 乾元元年、陝虢華節度使を置く。上元元年、陝西節度使と改め、河中の同州と華州とを分ちて同華節度使と爲す。

國譯資治通鑑第十二終

資治通鑑卷第二百四

唐紀二十

則天順聖皇后上之下

垂拱三年。春。閏正月。丁卯。封皇子成美爲恒王。隆基爲楚王。隆範爲衛王。隆業爲趙王。○二月。丙辰。突厥骨篤祿等寇昌平。命左鷹揚大將軍黑齒常之帥諸軍討之。○三月。乙丑。納言韋思謙以太中大夫致仕。○夏。四月。命蘇良嗣留守西京。時尙方監裴匪躬檢校京苑。將鬻苑中蔬果。以收其利。良嗣曰。昔公儀休相魯。猶能拔葵去織婦。未聞萬乘之主鬻蔬果也。乃止。○庚戌。裴居道爲納言。五月。丙寅。夏官侍郎京兆張光輔爲鳳閣侍郎。同平章事。○鳳閣侍郎同鳳閣鸞臺三品劉禕之竊謂鳳閣舍人永年賈大隱曰。太后既廢昏立明。安用臨朝稱制。不如返政。以安天下之心。大隱密奏之。太后不悅。謂左右曰。禕之我所引。乃復叛我。或誣禕之。受歸誠州都督孫萬榮金。又與許敬宗妾有私。太后命肅州刺史王本立推之。本立宣勅示之。禕之曰。不經鳳閣鸞臺。何名爲勅。太后大怒。以爲拒捍。制使庚午。賜死于家。禕之初下獄。睿宗爲之上疏申理。親友皆賀之。禕之曰。此乃所以速吾死也。臨刑沐浴。神色自若。自草謝表。立成數紙。麟臺郎郭翰。太子文學周思鈞。稱歎其文。太后聞之。左遷翰巫州司馬。思鈞播州司倉。○秋。七月。壬辰。魏玄同檢校納言。○嶺南俚戶。舊輸半課。交趾都護劉延祐使之全輸。俚戶不從。延祐誅其魁首。其黨李思慎等作亂。攻破安南府城。殺延祐。桂州司馬曹玄靜將兵討思慎等。斬之。○突厥骨篤祿元珍寇朔州。遣燕然道大總管黑齒常之擊之。

以右鷹揚大將軍李多祚為之副。大破突厥於黃花堆。追奔四十餘里。突厥皆散走。積北多祚世為靺鞨酋長。以軍功得入宿衛。黑齒常之每得賞賜。皆分將士。有善馬。為軍士所損。官屬請答之。常之曰。奈何以私馬答官兵乎。卒不問。○九月。己卯。魏州人楊初成。詐稱郎將。矯制於都市募人。迎廬陵王於房州。事覺伏誅。○冬。十月。庚子。右監門衛中郎將襲寶璧與突厥骨篤祿元珍戰。全軍皆沒。寶璧輕騎遁歸。寶璧見黑齒常之有功。表請窮追餘寇。詔與常之計議。遂為聲援。寶璧欲專其功。不待常之。引精兵萬三千人先行。出塞二千餘里。掩擊其部落。既至。又先遣人告之。使得嚴備。與戰遂敗。太后誅寶璧。改骨篤祿曰不卒祿。○命魏玄同留守西京。○武承嗣又使人誣李孝逸。自云名中有兔。兔月中物。當有天分。太后以孝逸有功。十一月。戊寅。減死。除名流儋州而卒。○太后欲遣韋待價將兵擊吐蕃。鳳閣侍郎韋方質奏。請如舊制。遣御史監軍。太后曰。古者明君遣將。闔外之事。悉以委之。比聞御史監軍。軍中事無大小。皆須承稟。以下制上。非令典也。且何以責其有功。遂罷之。○是歲。天下大飢。山東關內尤甚。

四年春正月甲子。於神都立高祖太宗高宗三廟。四時享祀。如西廟之儀。又立崇先廟。以享武氏祖考。太后命有司議崇先廟室數。司禮博士周悰請為七室。又減唐太廟為五室。春官侍郎賈大隱奏。禮天子七廟。諸侯五廟。百王不易之義。今周悰別引浮議。廣述異聞。直崇臨朝權儀。不依國家常度。皇太后親承顧託。光顯大猷。其崇先廟室。應如諸侯之數。國家宗廟。不應輒有變移。太后乃止。○太宗高宗之世。屢欲立明堂。諸儒議其制度。不決而止。及太后稱制。獨與北門學士議其制。不問諸儒。諸儒以為明堂當在國陽丙己之地。三里之外。七里之內。太后以為去宮太遠。二月庚午。毀乾元殿於其地。作明堂。以僧懷義為之使。凡役數萬人。○夏四月戊戌。殺太子通事舍人郝象賢。象賢處俊之孫也。初太后有憾於處俊。會奴誣

告象賢反。太后命周興鞠之。致象賢族罪。象賢家人詣朝堂。訟冤於監察御史樂安任玄殖。玄殖奏。象賢無反狀。玄殖坐免官。象賢臨刑。極口罵太后。發揚宮中隱慝。奪市人柴。以擊刑者。金吾兵共格殺之。太后命支解其尸。發其父祖墳。毀棺焚尸。自是終太后之世。法官每刑人。先以木丸塞其口。○武承嗣使鑿白石為文曰。聖母臨人。永昌帝業。末紫石雜藥物填之。庚午。使雍州人唐同泰奉表獻之。稱獲之於洛水。太后喜。命其石曰寶圖。擢同泰為遊擊將軍。五月戊辰。詔當親拜洛。受寶圖。有事南郊。告謝昊天。禮畢御明堂。朝羣臣。命諸州都督刺史。及宗室外戚。以拜洛前十日。集神都。乙亥。太后加尊號為聖母神皇。○六月丁亥朔。日有食之。○壬寅。作神皇三廩。○東陽大長公主削封邑。并二子徙巫州。公主適高履行。太后以高氏長孫無忌之舅族。故惡之。○江南道巡撫大使冬官侍郎狄仁傑。以吳楚多淫祠。奏焚其一千七百餘所。獨留夏禹吳太伯季札伍員四祠。○秋七月丁巳。赦天下。更命寶圖為天授聖圖。洛水為永昌洛水。封其神為顯聖侯。加特進。禁漁釣。祭祀比四瀆。名圖所出曰聖圖。泉。泉側置永昌縣。又改嵩山為神嶽。封其神為天中王。拜太師。使持節神嶽大都督。禁芻牧。又以先於汜水得瑞石。改汜水為廣武。太后潛謀革命。稍除宗室。絳州刺史韓王元嘉。青州刺史霍元王軌。邢州刺史魯王靈夔。豫州刺史越王貞。及元嘉子通州刺史黃公譔。元軌子金州刺史江都王緒。魏王鳳子申州刺史東莞公融。靈夔子范陽王藹。貞子博州刺史琅邪王冲。在宗室中。皆以才行有美名。太后尤忌之。元嘉等內不自安。密有匡復之志。譔為書與貞云。內人病浸重。當速療之。若至今冬。恐成痼疾。及太后召宗室朝明堂。諸王因遞相驚曰。神皇欲於大饗之際。使人告密。盡收宗室。誅之無遺。譔詐為皇帝璽書與冲云。朕遭幽繫。諸王宜各發兵救我。冲又詐為皇帝璽書云。神皇欲移李氏社稷。以授武氏。八月壬寅。冲召長史蕭德琮等。令募兵。分告韓霍魯越。及貝州刺史紀王慎。令各起兵。共趣神都。太后聞

之。以左金吾將軍丘神勣爲清平道行軍大總管。以討之。冲募兵得五千餘人。欲度河取濟州。先擊武水。武水令郭務悌詣魏州求救。幸令馬玄素將兵千七百人。中道邀冲。恐力不敵。入武水。閉門拒守。冲推草車塞其南門。因風縱火焚之。欲乘火突入。火作而風回。冲軍不得進。由是氣沮。堂邑董玄寂爲冲將兵。擊武水。謂人曰。琅邪王與國家交戰。此乃反也。冲聞之。斬玄寂以徇。衆懼而散。入草澤。不可禁止。惟家僮左右數十人在。冲還走博州。戊申。至城門。爲守門者所殺。凡起兵七日而敗。丘神勣至博州。官吏素服出迎。神勣盡殺之。凡破千餘家。越王貞開冲起。亦舉兵於豫州。遣兵陷上蔡。九月丙辰。命左豹韜大將軍麴崇裕爲中軍大總管。岑長倩爲後軍大總管。將兵十萬以討之。又命張光輔爲諸軍節度。削冲屬籍。更姓虺氏。貞聞冲敗。欲自鑠詣闕謝罪。會所署新蔡令傅延慶募得勇士二千餘人。貞乃宣言於衆曰。琅邪已破。魏相數州有兵二十萬。朝夕至矣。發屬縣兵。共得五千。分爲五營。使汝南縣丞裴守德等將之。署九品以上官五百餘人。所署官皆受迫脅。莫有鬪志。惟守德與之同謀。貞以其女妻之。署大將軍。委以腹心。貞使道士及僧誦經以求事成。左右及戰士皆帶辟兵符。麴崇裕等軍至豫州城東四十里。貞遣少子規及裴守德拒戰。兵潰而歸。貞大懼。閉閣自守。闕下。初范陽王諒遣使語貞及冲曰。若四方諸王一時竝起。事無不濟。諸王往來相約。結未定而冲先發。惟貞狼狽應之。諸王皆不敢發。故貞之將起兵也。遣使告壽州刺史趙瓌。瓌妻常樂長公主。謂使者曰。爲我語越王。昔隋文帝將篡周室。尉遲迴周之甥也。猶能舉兵匡救社稷。功雖不成。威震海內。足爲忠烈。況汝諸王先帝之子。豈得不以社稷爲心。今季氏危若朝露。汝諸王不捨生取義。尙猶豫不發。欲何須邪。禍且至矣。大丈夫當爲忠義鬼。無爲徒死也。及貞敗。太后欲悉誅韓魯等諸王。命監察御史藍田蘇珣按其密狀。珣訊問。皆無明驗。

或告珣與韓魯通謀。太后召珣詰之。珣抗論不同。太后曰。卿大雅之士。朕當別有任使。此獄不必卿也。乃命珣於河西監軍。更使周興等按之。於是收韓王元嘉。魯王靈夔。黃公譔。常樂公主於東都。迫脅皆自殺。更其姓曰虺。親黨皆誅。以文昌左丞狄仁傑爲豫州刺史。時治越王貞黨與。當坐者六七百家。籍沒者五千口。司刑趣使行刑。仁傑密奏。彼皆誑誤。臣欲顯奏。似爲逆人。申理知而不言。恐乖陛下仁恤之旨。太后特原之。皆流豐州。道過寧州。寧州父老迎勞之曰。我狄使君活汝邪。相攜哭於德政碑下。設齋三日。而後行。時張光輔尙在豫州。將士恃功。多所求取。仁傑不之應。光輔怒曰。州將輕元帥邪。仁傑曰。亂河南者一越王貞耳。今一貞死。萬貞生。光輔詰其語。仁傑曰。明公總兵三十萬。所誅者止於越王貞。城中聞官軍至。踰城出降者四面成蹊。明公縱將士暴掠。殺已降以爲功。流血丹野。非萬貞而何。恨不得尙方斬馬劍。加於明公之頸。雖死如歸耳。光輔不能詰。歸奏仁傑不遜。左遷復州刺史。○丁卯。左肅政大夫篤味道。夏官侍郎王本立。竝同平章事。○太后之召宗室朝明堂也。東莞公融密遣使問成均助教高子貢。子貢曰。來必死。融乃稱疾不赴。越王貞起兵。遣使約融。融倉猝不能應。爲官屬所逼。執使者以聞。擢拜右贊善大夫。未幾。爲支黨所引。冬十月己亥。戮於市。籍沒其家。高子貢亦坐誅。濟州刺史薛顓。顓弟緒。緒弟駙馬都尉紹。皆與琅邪王冲通謀。顓聞冲起兵。作兵器募人。冲敗。殺錄事參軍高纂。以滅口。十一月辛酉。顓緒伏誅。紹以太平公主故。杖一百。餓死於獄。十二月乙酉。司徒青州刺史霍王元軌。坐與越王連謀。廢徙黔州。載以檻車。行至陳倉而死。江都王緒。殿中監郕公裴承先。皆戮於市。承先。寂之孫也。○命裴居道留守西京。○左肅政大夫同平章事篤味道。素不禮於殿中侍御史周矩。屢言其不能了事。會有羅告味道者。勅矩按之。矩謂味道曰。公常責矩不了事。今日爲公了之。己亥。味道及其子辭玉。皆伏誅。○己酉。太后拜洛受圖。皇帝皇太子皆從。內外文武百官蠻夷。各依方敘。

立珍禽奇獸雜寶列於壇前。文物鹵簿之盛唐興以來未之有也。○辛亥明堂成。高二百九十四尺。方三百尺。凡三層。下層法四時。各隨方色。中層法十二辰。上爲圓蓋。九龍捧之。上層法二十四氣。亦爲圓蓋。上施鐵鳳。高一丈。飾以黃金。中有巨木十圍。上下通貫。栴檀檉槐。籍以爲本。下施鐵渠。爲辟雍之象。號曰萬象神宮。宴賜羣臣。赦天下。縱民入觀。改河南爲合宮縣。又於明堂北起天堂五級。以貯大像。至三級。則俯視明堂矣。僧懷義以功拜左威衛大將軍。梁國公侍御史王求禮上書曰。古之明堂。茅茨不翦。采椽不斲。今者飾以珠玉。塗以丹青。鐵鑿入雲。金龍隱霧。昔殷辛瓊臺。夏癸瑤室。無以加也。太后不報。○太后欲發梁鳳巴。自雅州開山通道。出擊生羌。因襲吐蕃。正字陳子昂上書。以爲雅州邊羌。自國初以來。未嘗爲盜。今一旦無罪戮之。其怨必甚。且懼誅滅。必蜂起爲盜。西山盜起。則蜀之邊邑。不得不連兵備守。兵久不解。臣愚以爲西蜀之禍。自此結矣。臣聞吐蕃愛蜀富饒。欲盜之久矣。徒以山川阻絕。障隘不通。勢不能動。今國家乃亂邊羌。開隘道。使其收奔亡之種。爲鄉導以攻邊。是借寇兵。爲賊除道。舉全蜀以遺之也。蜀者國家之寶庫。可以兼濟中國。今執事者。乃圖僥幸之利。以事西羌。得其地。不足以稼穡。財不足以富國。徒爲糜費。無益聖德。況其成敗未可知哉。夫蜀之所恃者險也。人之所以安者無役也。今國家乃開其險。役其人。險開則便寇。人役則傷財。臣恐未見羌戎。已有奸盜在其中矣。且蜀人地劣。不習兵戰。山川阻曠。去中夏遠。今無故生西羌吐蕃之患。臣見其不及百年。蜀爲戎矣。國家近廢安北。拔單于。奔龜茲。放疎勒。天下翕然謂之盛德者。蓋以陛下務在養人。不在廣地也。今山東飢。關隴弊。而狗貪夫之議。謀動甲兵。興大役。自古國亡家敗。未嘗不由黷兵。願陛下熟計之。既而役不果興。

永昌元年春正月乙卯朔。大饗萬象神宮。太后服袞冕。擗大圭。執鎮圭。爲初獻。皇帝爲亞獻。太子爲終獻。先詣昊天上帝座。次高祖太宗高宗。次魏國先王。次五方帝座。太后御則天門。赦天下。改元。丁巳。太后御明堂。受朝賀。戊午。布政于明堂。頒九條。以訓百官。己未。御明堂。饗羣臣。○二月丁酉。尊魏忠孝王曰周忠孝。太皇妣曰忠孝太后。文水陵曰章德陵。咸陽陵曰明義陵。置崇先府官。戊戌。尊魯公曰太原靖王。北平王曰趙肅恭王。金城王曰魏義康王。太原王曰周安成王。○三月甲子。張光輔守納言。○壬申。太后問正字陳子昂。當今爲政之要。子昂退上疏。以爲宜緩刑崇德。息兵革。省賦役。撫慰宗室。各使自安。辭婉意切。其論甚美。凡三千言。○癸酉。以天官尙書武承嗣爲納言。張光輔守內史。○夏四月甲辰。殺辰州別駕汝南王煒。連州別駕鄱陽公譔等宗室十二人。徙其家於雋州。煒之子譔。元慶之子也。己酉。殺天官侍郎藍田鄧玄挺。玄挺女爲譔妻。又與煒善。譔謀迎中宗於廬陵。以問玄挺。煒又嘗謂玄挺曰。欲爲急計。何如。玄挺皆不應。故坐知反不告。同誅。○五月丙辰。命文昌右相韋待價。爲安息道行軍大總管。擊吐蕃。○浪穹州蠻酋傍時。昔等二十五部。先附吐蕃。至是來降。以傍時昔爲浪穹州刺史。令統其衆。○己巳。以僧懷義爲新平軍大總管。北討突厥。行至紫河。不見虜。於單于臺刻石紀功而還。○諸王之起兵也。貝州刺史紀王慎。獨不預謀。亦坐繫獄。秋七月丁巳。檻車徙巴州。更姓庀氏。行及蒲州而卒。八男。徐州刺史東平王續等。相繼被誅。家徙嶺南。女東光縣主楚媛。幼以孝謹稱。適司議郎裴仲將。相敬如賓。姑有疾。親嘗藥膳。接遇娣姒。皆得歡心。時宗室諸女。皆以驕奢相尙。請楚媛獨儉素。曰。所貴於富貴者。得適志也。今獨守勤苦。將以何求。楚媛曰。幼而好禮。今而行之。非適志歟。觀自古女子。皆以恭儉爲美。縱侈爲惡。辱親是懼。何所求乎。富貴儻來之物。何足驕人。衆皆慙服。及慎凶問至。楚媛既無將領之才。狼狽失據。士卒凍餒。死亡甚衆。乃引軍還。太后大怒。丙子。待價除名。流繡州。斬副大總管安西大都護閻溫古。安西副都護唐林璟。收其餘衆。撫安西土。太后以休璟爲西

州都督。○戊寅。以王本立同鳳閣鸞臺三品。○徐敬業之敗也。弟敬真流繡州。逃歸。將奔突厥。過洛陽。洛州司馬弓嗣業。洛陽令張嗣明資遣之。至定州。為史所獲。嗣業縊死。嗣明敬真多引海內知識。云有異圖。冀以免死。於是朝野之士。為所連引。坐死者甚眾。嗣明誣內史張光輔。云征豫州。日私論圖讖天文。陰懷兩端。八月甲申。光輔與敬真嗣明等同誅。籍沒其家。乙未。秋。官尚書太原張楚金。陝州刺史郭正一。鳳閣侍郎元萬頃。洛陽令魏元忠。竝免死。流嶺南。楚金等皆為敬真所引。云與敬業通謀。臨刑。太后使鳳閣舍人王隱客。馳騎傳聲赦之。聲達於市。當刑者皆喜躍歡呼。宛轉不已。元忠獨安坐自如。或使之起。元忠曰。虛實未知。隱客至。又使起。元忠曰。俟宣勅已。既宣勅。乃徐起。舞蹈再拜。竟無憂喜之色。是日。陰雲四塞。既釋楚金等。天氣晴霽。○九月壬子。以僧懷義為新平道行軍大總管。將兵二十萬討突厥骨篤祿。○初。高宗之世。周興以河陽令召見。上欲加擢用。或奏以為非清流。罷之。興不知。數於朝堂。俟命。諸相皆無言。地官尚書檢校納言魏玄同。時同平章事。謂之曰。周明府可去矣。興以為玄同沮己。銜之。玄同素與裴炎善。時人以其終始不渝。謂之耐久朋。周興奏。誣玄同言太后老矣。不若奉嗣君為耐久。太后怒。閏月甲午。賜死於家。監刑御史房濟。謂玄同曰。大人何不告密。冀得召見。可以自直。玄同歎曰。人殺鬼殺。亦復何殊。豈能作告密人邪。乃就死。又殺夏官侍郎崔管於隱處。自餘內外大臣坐死及流貶者甚眾。彭州長史劉易從。亦為徐敬真所引。戊申。就州誅之。易從為人仁孝忠謹。將刑於市。吏民憐其無辜。遠近奔赴。競解衣投地。曰。為長史求冥福。有司平準。直十餘萬。周興等誣右武衛大將軍燕公黑齒常之謀反。徵下獄。冬十月戊午。常之縊死。己未。殺宗室鄂州刺史嗣鄭王璵等六人。庚申。嗣滕王脩琦等六人。免死。流嶺南。○丁卯。春。官尚書范履冰。鳳閣侍郎刑文偉。竝同平立事。○己卯。詔。太穆神皇后。文德聖皇后。宜配皇地祇。忠孝太后從配。○右衛胄曹參軍陳子昂。上疏。以為周頌

成康。漢稱文景。皆以能措刑故也。今陛下之政。雖盡善矣。然太平之朝。上下樂化。不宜有亂臣賊子。日犯天誅。比者大獄增多。逆徒滋廣。愚臣頑昧。初謂皆實。乃去月十五日。陛下特察繫囚李珍等無罪。百僚慶悅。皆賀聖明。臣乃知亦有無罪之人。挂於疎網者。陛下務在寬典。獄官務在急刑。以傷陛下之仁。以誣太平之政。臣竊恨之。又九月二十一日。勅免楚金等死。初有風雨。變為景雲。臣聞陰慘者刑也。陽舒者德也。聖人法天。天亦助聖。天意如此。陛下豈可不承順之哉。今又陰雨。臣恐過在獄官。凡繫獄之囚。多在極法。道路之議。或是或非。陛下何不悉召見之。自詰其罪。罪有實者。顯示明刑。濫者嚴懲。獄吏使天下咸服。人知政刑。豈非至德克明哉。

天授元年十一月庚辰朔。日南至。太后享萬象神宮。赦天下。始用周正。改永昌元年十一月為載初元年正月。以十二月為臘月。夏正月為一月。以周漢之後為二。王後舜禹成湯之後為三。格周隋之嗣。同列國。○鳳閣侍郎河東宗秦客。改造天地等十二字。以獻。丁亥。行之。太后自名墨。改詔曰制。秦客。太后從父姊之子也。○乙未。司刑少卿周興奏。除唐親屬籍。○臘月。辛未。以僧懷義為右衛大將軍。賜爵鄂國公。○春。一月。戊子。武承嗣遷文昌左相。岑長倩遷文昌右相。同鳳閣鸞臺三品。鳳閣侍郎武攸寧為納言。邢文偉守內史。左肅政大夫同鳳閣鸞臺三品。王本立。罷為地官尚書。攸寧。士護之兄孫也。時武承嗣三思用事。宰相皆下之地。地官尚書同鳳閣鸞臺三品。韋方質。有疾。承嗣三思往問之。方質據牀不為禮。或諫之。方質曰。死生有命。大丈夫安能曲事近戚。以求苟免乎。尋為周興等所構。甲午。流儋州。籍沒其家。○二月辛酉。太后策貢士於洛城殿。貢士殿試自此始。○丁卯。地官尚書王本立薨。○三月丁亥。特進同鳳閣鸞臺三品蘇良嗣薨。○夏四月丁巳。春官尚書同平章事范履冰。坐嘗舉犯逆者。下獄死。○醴泉人侯思止。始以賣餅為業。後事游擊將軍高元禮。為僕。素詭譎無賴。恒

州刺史裴貞。杖一判司。判司使思止告貞與舒王元名謀反。秋七月辛巳。元名坐廢。徙和州。壬午。殺其子豫章王。貞亦族滅。擢思止爲游擊將軍。時告密者往往得五品。思止求爲御史。太后曰。卿不識字。豈堪御史。對曰。獬豸何嘗識字。但能觸邪耳。太后悅。卽以爲朝散大夫。侍御史。它日。太后以先所籍沒宅賜之。思止不受。曰。臣惡反逆之人。不願居其宅。太后益賞之。衡水人王弘義。素無行。嘗從鄰舍乞瓜。不與。乃告縣官。瓜田中有白兔。縣官使人搜捕。踐踐瓜田立盡。又遊趙貝。見閭里耆老作邑齋。遂告以謀反。殺二百餘人。擢授游擊將軍。俄遷殿中侍御史。或告勝州都督王安仁謀反。勅弘義按之。安仁不服。弘義卽於枷上刎其首。又捕其子適至。亦刎其首。函之以歸。道過汾州。司馬毛公與之對食。須臾。叱毛公下階。斬之。槍揭其首入洛。見者無不震栗。時置制獄於麗景門內。入是獄者。非死不出。弘義戲呼曰。例竟門。朝士人人自危。相見莫敢交言。道路以目。或因入朝。密遭掩捕。每朝。輒與家人訣曰。未知復相見否。時法官競爲深酷。唯司刑丞徐有功。杜景儉。獨存平恕。被告者皆曰。遇來侯必死。遇徐杜必生。有功。文遠之孫也。名弘敏。以字行。初爲蒲州司法。以寬爲治。不施敲朴。吏相約。有犯徐司法杖者。衆共斥之。道官滿。不杖一人。職事亦修。累遷司刑丞。酷吏所誣構者。有功皆爲直之。前後所活。數十百家。嘗廷爭獄事。太后厲色詰之。左右爲戰栗。有功神色不撓。爭之彌切。太后雖好殺。知有功正直。甚敬憚之。景儉。武邑人也。司刑丞榮陽李日知。亦尚平恕。少卿胡元禮。欲殺一囚。日知以爲不可。往復數四。元禮怒曰。元禮不離刑曹。此囚終無生理。日知曰。日知不離刑曹。此囚終無死法。竟以兩狀列上。日知果直。○東魏國寺僧法明等。撰大雲經四卷。表上之。言太后乃彌勒佛下生。當代唐爲閻浮提主。制頒於天下。○武承嗣使周興羅告隋州刺史澤王上金。舒州刺史許王素節謀反。徵詣行在。素節發舒州。聞遭喪。哭者歎曰。病死何可得。乃更哭邪。丁亥。至龍門。縊殺之。上金自殺。悉誅其諸子及支黨。○太后

欲以太平公主妻其伯父士讓之孫。攸暨時爲右衛中郎將。太后潛使人殺其妻。而妻之。公主方額。廣頤。多權略。太后以爲類己。寵愛特厚。常與密議天下事。舊制。食邑。諸王不過千戶。公主不過三百五十戶。太平食邑。獨累加至三千戶。○八月甲寅。殺太子少保納言裴居道。癸亥。殺尚書左丞張行廉。辛未。殺南安王穎等宗室十二人。又鞭殺故太子賢二子。唐之宗室於是殆盡矣。其幼弱存者。亦流嶺南。又誅其親黨數百家。惟千金長公主以巧媚得全。自請爲太后女。仍改姓武氏。太后愛之。更號延安長公主。○九月丙子。侍御史汲人傅遊藝。帥關中百姓九百餘人。詣闕上表。請改國號曰周。賜皇帝姓武氏。太后不許。擢遊藝爲給事中。於是百官及帝室宗戚。遠近百姓。四夷酋長。沙門道士。合六萬餘人。俱上表。如遊藝所請。皇帝亦上表。自請賜姓武氏。戊寅。羣臣上言。有鳳皇。自明堂飛入上陽宮。還集左臺。梧桐之上。久之。飛東南去。及赤雀數萬集朝堂。庚辰。太后可皇帝及羣臣之請。壬午。御則天樓。赦天下。以唐爲周。改元乙酉。上尊號曰聖神皇帝。以皇帝爲皇嗣。賜姓武氏。以皇太子爲皇孫。丙戌。立武氏七廟于神都。追尊周文王曰始祖文皇帝。妣妣氏曰文定皇后。平王少子武孫。曰睿祖。康皇帝。妣姜氏曰康睿皇后。太原靖王曰嚴祖。成皇帝。妣曰成莊皇后。趙肅恭王曰肅祖。章敬皇帝。魏義康王曰烈祖。昭安皇帝。周安成王曰顯祖。文穆皇帝。忠孝太皇曰太神。孝明高皇帝。妣皆如考。諡稱皇后。立武承嗣爲魏王。三思爲梁王。攸寧爲建昌王。士護兄孫攸歸。重規。載德。攸暨。懿宗。嗣宗。攸宜。攸望。攸緒。攸止。皆爲郡王。諸姊妹皆爲長公主。又以司賓卿溧陽史務滋爲納言。鳳閣侍郎宗秦客。檢校內史給事中。傅遊藝。爲鸞臺侍郎。平章事。遊藝與岑長倩。右玉鈐衛大將軍張虔勗。左金吾大將軍丘神勣。侍御史來子均等。竝賜姓武。秦客潛勸太后革命。故首爲內史。遊藝暮年之中。歷衣青綠朱紫。時人謂之四時仕宦。勸改州爲郡。或謂太后曰。陛下始革命。而廢州不祥。太后遽追止之。命史務滋等十人。巡撫諸

道太后立兄孫延基等六人爲郡王。○冬十月甲子。檢校內史宗秦客坐賊貶遵化尉。弟楚客亦以奸賊流嶺外。○丁卯。殺流人韋方質。○辛未。內史邢文偉坐附會宗秦客貶珍州刺史。頃之有制使至州。文偉以爲誅己。遽自縊死。○壬申。勅兩京諸州各置大雲寺一區。臧大雲經。使僧升高坐講解。其撰疏僧雲宣等九人皆賜爵縣公。仍賜紫袈裟銀龜袋。○制天下武士咸蠲課役。○西突厥十姓自垂拱以來爲東突厥所侵掠。散亡略盡。濛池都護繼往絕可汗斛瑟羅收其餘衆六七萬人入居內地。拜左衛大將軍。改號竭忠事主可汗。○道州刺史李行褒兄弟爲酷吏所陷。當族。秋。官郎中徐有功固爭不能得。秋。官侍郎周興奏有功。故出反囚。當斬。太后雖不許。亦免有功官。然太后雅重有功。久之復起爲侍御史。有功伏地流涕。固辭曰。臣聞鹿走山林而命懸庖厨。勢使之然也。陛下以臣爲法官。臣不敢枉陛下法。必死是官矣。太后固授之。遠近聞者相賀。○是歲。以右衛大將軍泉獻誠爲左衛大將軍。太后出金寶命選南北牙善射者五人賭之。獻誠第一。以讓右玉鈐衛大將軍薛咄摩。咄摩復讓獻誠。獻誠乃奏言。陛下令選善射者。今多非漢官。竊恐四夷輕漢。請停此射。太后善而從之。二年正月癸酉朔。太后始受尊號於萬象神宮。旗幟尙赤。甲戌。改置社稷於神都。辛巳。納武氏神主于太廟。唐太廟之在長安者。更命曰享德廟。四時唯享高祖已下。餘四室皆閉不享。又改長安崇先廟爲崇尊廟。乙酉。日南至。大享明堂。祀昊天上帝。百神從祀。武氏祖宗配饗。唐三帝亦同配。○御史中丞知大夫事李嗣真以酷吏縱橫。上疏以爲今告事紛紜。虛多實少。恐有凶慝陰謀。離間陛下君臣。古者獄成。公卿參聽。王必三宥。然後行刑。比日獄官單車奉使。推鞠既定。法家依斷。不令重推。或臨時專決。不復聞奏。如此則權由臣下。非審慎之法。儻有冤濫。何由可知。況以九品之官。專命推覆。操殺生之柄。竊人主之威。案覆既不在秋官。省審復不由門下。國之利器。輕以假人。恐爲社稷之禍。太后不聽。○饒陽尉姚貞亮等數百

人表請。上尊號曰上聖大神皇帝。不許。○侍御史來子珣誣尙衣奉御劉行感兄弟謀反。皆坐誅。○春。一月。地官尙書武思文及朝集使二千八百人表請封中嶽。○己亥。廢唐興寧永康隱陵署官。唯量置守戶。○左金吾大將軍丘神勣以罪誅。○納言史務滋與來俊臣同鞫劉行感獄。俊臣奏。務滋與行感親密。意欲寢其反狀。太后命俊臣與與方推事對食。謂與曰。囚或告文昌右丞周興與丘神勣通謀。太后命來俊臣鞫之。俊臣與與方推事對食。謂與曰。囚多不承。當爲何法。與曰。此甚易耳。取大甕。以炭四周炙之。令囚入中。何事不承。俊臣乃索大甕。火圍如輿法。因起謂與曰。有內狀推兄請兄入此甕。興惶恐叩頭伏罪。法當死。太后原之。二月。流興嶺南。在道。爲仇家所殺。興與索元禮來俊臣競爲暴刻。興元禮所殺各數千人。俊臣所破千餘家。元禮殘酷尤甚。太后亦殺之。以慰人望。○徙左衛大將軍千乘王武攸暨爲定王。○立故太子賢之子光順爲義豐王。○甲子。太后命始祖墓曰德陵。睿祖墓曰喬陵。嚴祖墓曰節陵。肅祖墓曰簡陵。烈祖墓曰靖陵。顯祖墓曰永陵。改章德陵爲吳陵。顯義陵爲順陵。○追復李君羨官爵。○夏四月壬寅朔。日有食之。○癸卯。制以釋教開革命之階。升於道教之上。○命建安王攸宜留守長安。○丙辰。鑄大鐘。置北闕。○五月。以岑長倩爲武威道行軍大總管。擊吐蕃。中道召還。軍竟不出。○六月。以左肅政大夫格輔元爲地官尙書。與鸞臺侍郎樂思晦。鳳閣侍郎任知古。竝同平章事。思晦。彥暉之子也。○秋七月。徙關內戶數十萬以實洛陽。○八月。戊申。殺玉鈐衛大將軍張虔勗。來俊臣鞫虔勗獄。虔勗自訟於徐有功。俊臣怒。命納言事。○庚申。殺玉鈐衛大將軍張虔勗。來俊臣鞫虔勗獄。虔勗自訟於徐有功。俊臣怒。命衛士以刀亂斫殺之。梟首于市。○義豐王光順嗣雍王守禮。永安王守義。長信縣主等皆賜姓武氏。與睿宗諸子皆幽閉宮中。不出門庭者十餘年。守禮守義光順之弟也。○或告地官尙書武思文初與徐敬業通謀。甲子。流思文於嶺南。復姓徐氏。○九月乙亥。殺岐州刺史雲

通治通鑑卷第二百五

唐紀二十一

則天順聖皇后中之上

長壽元年正月戊辰朔太后享萬象神宮。○臘月立故于闐王尉遲伏闍雄之子瑕為于闐王。春一月丁卯太后引見存撫使所舉人無問賢愚悉加擢用高者試鳳閣舍人給事中次試員外郎侍御史補闕拾遺校書郎試官自此始時人為之語曰補闕連車載拾遺平斗量權推侍御史盤脫校書郎有舉人沈全交續之曰翻心存撫使眯目聖神皇為御史紀先知所禽劾其誹謗朝政請杖之朝堂然後付法太后笑曰但使卿輩不濫何恤人言宜釋其罪先知大慙太后雖濫以祿位收天下人心然不稱職者尋亦黜之或加刑誅挾刑賞之柄以駕御天下政由己出明察善斷故當時英賢亦競為之用寧陵丞廬江郭霸以諂諛干太后拜監察御史中丞魏元忠病霸往問之因嘗其糞喜曰大夫糞甘則可憂今苦無傷也元忠大惡之遇人輒告之。○戊辰以夏官尚書楊執柔同平章事執柔恭仁弟之孫也太后以外族用之。○初隋煬帝作東都無外城僅有短垣而已至是鳳閣侍郎李昭德始築之。○左臺中丞來俊臣羅告同平章事任知古狄仁傑裴行本司禮卿崔宣禮前文昌左丞盧獻御史中丞魏元忠潞州刺史李嗣真謀反先是來俊臣奏請降敕一問即承反者得減死及知古等下獄俊臣以此誘之仁傑對曰大周革命萬物惟新唐室舊臣甘從誅戮反是實俊臣乃少寬之判官王德壽謂仁傑曰尚書定減死矣德壽業受驅策欲求少階級煩尚書引楊執

柔可乎仁傑曰皇天后土遣狄仁傑為如此事以頭觸柱血流被面德壽懼而謝之侯思止鞠魏元忠元忠辭氣不屈思止怒命倒曳之元忠曰我薄命譬如墜驢足絀於鏡為所曳耳思止愈怒更曳之元忠曰侯思止汝若須魏元忠頭則截取何必使承反也狄仁傑既承反有司待報行刑不復嚴備仁傑裂衾帛書冤狀置綿衣中謂王德壽曰天時方熱請授家人去其綿德壽許之仁傑子光遠得書持之告變得召見則天覽之以問俊臣對曰仁傑等下獄臣未嘗褫其巾帶寢處甚安苟無事實安肯承反太后使通事舍人周繚往視之俊臣暫假仁傑等巾帶羅立於西使繚視之繚不敢視惟東顧唯諾而已俊臣又詐為仁傑等謝死表使繚奏之樂思晦男未十歲沒入司農上變得召見太后問狀對曰臣父已死臣家已破但惜陛下法為俊臣等所弄陛下不信臣言乞擇朝臣之忠清陛下素所信任者為反狀以付俊臣無不承反矣太后意稍寤召見仁傑等問曰卿承反何也對曰不承則已死於拷掠矣太后曰何為作謝死表對曰無之出表示之乃知其詐於是出此七族庚午貶知古江夏令仁傑彭澤令宣禮夷陵令元忠涪陵令獻西鄉令流行本嗣真于嶺南俊臣與武承嗣等固請誅之太后不許俊臣乃獨稱行本罪尤重請誅之秋官郎中徐有功駁之以為明主有更生之恩俊臣不能將順虧損恩信殿中侍御史貴鄉霍獻可宣禮之甥也言於太后曰陛下不殺崔宣禮臣請隕命於前以頭觸殿階血流霑地以示為人臣者不私其親太后皆不聽獻可常以綠帛裹其傷微露之於幞頭下冀太后見之以為忠。○甲戌補闕薛謙光上疏以為選舉之法宜得實才取捨之間風化所繫今之選人咸稱覓舉奔競相尚諠訴無慙至于才應經邦惟令試策武能制敵止驗彎弧昔漢武帝見司馬相如賦恨不同時及置之朝廷終文園令知其不堪公卿之任故也吳起將戰左右進劔起曰將者提鼓揮桴臨敵決疑一劔之任非將事也然則虛文豈足以佐時善射豈足以克敵要在文吏察其行能武吏觀

其勇略考居官之臧否行舉者賞罰而已。○來俊臣求金於左衛大將軍泉獻誠不得誣以謀反下獄。乙亥。縊殺之。○庚辰。司刑卿檢校陝州刺史李游道爲冬官尚書。同平章事。二月。己亥。吐蕃黨項部落萬餘人內附。分置十州。○戊午。以秋官尚書袁知弘同平章事。○夏。四月。丙申。赦天下。改元如意。○五月。丙寅。禁天下屠殺。及捕魚蝦。江淮旱飢。民不得采魚蝦。餓死者甚衆。右拾遺張德生男三日。私殺羊。會同僚補闕杜肅懷一餽。上表告之。明日。太后對仗。謂德曰。聞卿生男甚喜。德拜謝。太后曰。何從得肉。德叩頭服罪。太后曰。朕禁屠宰。吉凶不預。然卿自今召客。亦須擇人。出肅表示之。肅大慙。舉朝欲唾其面。○吐蕃會長曷蘇帥部落請內附。以右玉鈐衛將軍張玄遇爲安撫使。將精卒二萬迎之。六月。軍至大渡水西。曷蘇事洩。爲國人所禽。別部會長咎捶帥羌蠻八千餘人內附。玄遇以其部落置萊州而還。○辛亥。萬年主簿徐堅上疏以爲書有五聽之道。令著三覆之奏。竊見比有敕。推按反者。令使者得實。卽行斬決。人命至重。死不再生。萬一懷枉。吞聲赤族。豈不痛哉。此不足肅姦逆而明典刑。適所以長威福而生疑懼。臣望絕此處分。依法覆奏。又法官之任宜加簡擇。有用法寬平。爲百姓所稱者。願親而任之。有處事深酷。不允人望者。願疎而退之。堅齊聃之子也。○夏。官侍郎李昭德密言於太后曰。魏王承嗣權太重。太后曰。吾姪也。故委以腹心。昭德曰。姪之於姑。其親何如子之於父。子猶有篡弑其父者。況姪乎。今承嗣既陛下之姪。爲親王。又爲宰相。權侔人主。臣恐陛下不得久安天位也。太后矍然曰。朕未之思。秋。八月。戊寅。以文昌左相同鳳閣鸞臺三品武承嗣爲特進。納言武攸寧爲冬官尚書。夏官尚書同平章事。楊執柔爲地官尚書。竝罷政事。以秋官侍郎新鄭崔元綜爲鸞臺侍郎。夏官侍郎李昭德爲鳳閣侍郎。檢校天官侍郎姚璿爲文昌左丞。檢校地官侍郎李元素爲文昌右丞。與司賓卿崔神基竝同平章事。璿。思廉之孫。元素。敬玄之弟也。辛巳。以營繕大匠王濬爲夏官尚書。同平章事。承嗣亦

毀昭德於太后。太后曰。吾任昭德。始得安眠。此代吾勞。汝勿言也。是時。酷吏恣橫。百官畏之側足。昭德獨廷奏其奸。太后好祥瑞。有獻白石赤文者。執政詰其異。對曰。以其赤心。昭德怒曰。此石赤心。它石盡反邪。左右皆笑。襄州人胡慶。以丹漆書龜腹曰。天子萬萬年。詣闕獻之。昭德以刀刮盡。奏請付法。太后曰。此心亦無惡。命釋之。太后習貓。使與鸚鵡共處。出示百官。傳觀未遍。貓飢。搏鸚鵡食之。太后甚慙。○太后自垂拱以來。任用酷吏。先誅唐宗室貴戚數百人。次及大臣數百家。其刺史郎將以下。不可勝數。每除一官。戶婢竊相謂曰。鬼扑又來矣。不旬月。輒遭掩捕。族誅。監察御史朝邑嚴善思。公直敢言。時告密者不可勝數。太后亦厭其煩。命善思按問。引虛伏罪者八百五十餘人。羅織之黨。爲之不振。乃相與構陷善思。坐流驩州。太后知其枉。尋復召爲渾儀監丞。善思名譔。以字行。右補闕新鄭朱敬則。以太后本任威刑。以禁異議。今既革命。衆心已定。宜省刑尙寬。乃上疏。以爲李斯相秦。用刻薄變詐。以屠諸侯。不知易之以寬和。卒至土崩。此不知變之禍也。漢高祖定天下。陸賈。叔孫通。說之以禮義。傳世十二。此知變之善也。自文明草昧。天地屯蒙。三叔流言。四凶構難。不設鉤距。無以應天。順人。不切刑名。不可摧奸息暴。故置神器。開告端。曲直之影必呈。包藏之心盡露。神道助直。無罪不除。蒼生晏然。紫宸易主。然而急趨無善迹。促柱少和聲。向時之妙策。乃當今之芻狗也。伏願覽秦漢之得失。考時事之合宜。審糟粕之可遺。覺蘊蘆之須毀。去萋菲之牙角。頓紆險之鋒芒。窒羅織之源。掃朋黨之迹。使天下蒼生坦然大悅。豈不樂哉。太后善之。賜帛三百段。侍御史周矩上疏曰。推劾之吏。皆相矜以虐。泥耳籠頭。枷研楔。搯膺。鑿爪。懸髮薰耳。號曰獄持。或累日節食。連宵緩問。晝夜搖撼。使不得眠。號曰宿囚。此等既非木石。且救目前。苟求除死。臣竊聽輿議。皆稱天下太平。何苦須反。豈被告者盡是英雄。欲求帝王邪。但不勝楚毒自誣耳。願陛下察之。今滿朝側息不安。皆以爲陛下朝與之密。夕與之讐。不可保也。周用

仁而昌。秦用刑而亡。願陛下緩刑用仁。天下幸甚。太后頗采其言。制獄稍衰。○太后春秋雖高。善自塗澤。雖左右不覺其衰。丙戌。敕以齒落更生。九月。庚子。御則天門。赦天下。改元。更以九月爲社。○制於并州置北都。○癸丑。同平章事李道宗。王疇。袁智弘。崔神基。李元素。春官侍郎孔思元。益州長史任令輝。皆爲王弘義所陷。流嶺南。○左羽林中郎將來子珣。坐事流愛州。尋卒。○初。新豐王孝傑。從劉審禮擊吐蕃。爲副總管。與審禮皆沒於吐蕃。贊普見孝傑。泣曰。貌類吾父。厚禮之。後竟得歸。累遷右鷹揚衛將軍。孝傑久在吐蕃。知其虛實。會西州都督唐休璟。請復取龜茲。于闐。疎勒。碎葉。四鎮。敕以孝傑爲武威軍總管。與左武衛大將軍阿史那忠節。將兵擊吐蕃。冬。十月。丙戌。大破吐蕃。復取四鎮。置安西都護府於龜茲。發兵戍之。二年。正月。壬辰朔。太后享萬象神宮。以魏王承嗣爲亞獻。梁王三思爲終獻。太后自制神宮樂。用舞者九百人。○戶婢團兒爲太后所寵信。有憾於皇嗣。乃譖皇嗣妃劉氏。德妃竇氏爲厭呪。癸巳。妃與德妃朝。太后於嘉豫殿。既退。同時殺之。瘞於宮中。莫知所在。德妃抗之。曾孫也。皇嗣畏。忤旨。不敢言。居太后前。容止自如。團兒復欲害皇嗣。有言其情於太后者。太后乃殺團兒。是時。告密者皆誘人奴婢告其主。以求功賞。德妃父孝謹。爲潤州刺史。有奴。妄爲妖異。以恐德妃。母龐氏。龐氏懼。奴請夜祠禱解。因發其事。下監察御史龍門薛季昶。按之。季昶誣奏。以爲與德妃同祝詛。先涕泣不自勝。乃言曰。龐氏所爲。臣子所不忍道。太后擢季昶爲給事中。龐氏當斬。其子希城。詣侍御史徐有功。訟冤。有功牒所司。停刑。上奏論之。以爲無罪。季昶奏。有功阿黨惡逆。請付法。法司處有功罪當絞。令史以白。有功歎曰。豈我獨死。諸人永不死邪。既食。掩扇而寢。人以爲有功苟自強。必內憂懼。密伺之。方熟寢。太后召有功。迎謂曰。卿比按獄。失出何多。對曰。失出人臣之小過。好生聖人之大德。太后默然。由是龐氏得減死。與其三子。皆流嶺南。孝謹貶羅州司馬。有功亦除名。○戊申。姚璹奏。請令宰相撰時政。

記。月送史館。從之。時政記自此始。○臘月。丁卯。降皇孫成器爲壽春王。恒王成義爲衡陽王。楚王隆基爲臨淄王。衛王隆範爲巴陵王。趙王隆業爲彭城王。皆睿宗之子也。○春。一月。庚子。以夏官侍郎婁師德同平章事。師德寬厚清慎。犯而不校。與李昭德俱入朝。師德體肥行緩。昭德屢待之不至。怒罵曰。田舍夫。師德徐笑曰。師德不爲田舍夫。誰當爲之。其弟除代州刺史。將行。師德謂曰。吾備位宰相。汝復爲州牧。榮寵過盛。人所疾也。將何以自免。弟長跪曰。自今雖有人唾某面。某拭之而已。庶不爲兄憂。師德愀然曰。此所以爲吾憂也。人唾汝面。怒汝也。汝拭之。乃逆其意。所以重其怒。夫唾不拭。自乾。當笑而受之。○甲寅。前尚方監裴匪躬。內常侍范雲仙。坐私謁皇嗣。腰斬于市。自是公卿以下。皆不得見。又有告皇嗣潛有異謀者。太后命來俊臣。鞠其左右。左右不勝楚毒。皆欲自誣。太常工人京兆安金藏大呼謂俊臣曰。公既不信金藏之言。請剖心以明。皇嗣不反。卽引佩刀自剖其胸。五藏皆出。流血被地。太后聞之。令輦入宮中。使醫內五藏。以桑皮線縫之。傅以藥。經宿始蘇。太后親臨視之。歎曰。吾有子不能自明。使汝至此。卽命俊臣停推。睿宗由是得免。○罷舉人習老子。更習太后所造臣軌。○二月。丙子。新羅王政明卒。遣使立其子理洪爲王。○乙亥。禁人間錦。侍御史侯思止私畜錦。李昭德按之。杖殺於朝堂。○或告嶺南流人謀反。太后遣司刑評事萬國俊。攝監察御史。就按之。國俊至廣州。悉召流人。矯制賜自盡。流人號呼不服。國俊驅就水曲。盡斬之。一朝殺三百餘人。然後詐爲反狀還奏。因言諸道流人。亦必有怨望。謀反者不可不早誅。太后喜。擢國俊爲朝散大夫。行侍御史。更遣右翊衛兵曹參軍劉光業。司刑評事王德壽。苑南面監丞鮑思恭。尙輦直長王大貞。右武威衛兵曹參軍遺真。筠。皆攝監察御史。詣諸道按流人。光業等以國俊多殺蒙賞。爭効之。光業殺七百人。德壽殺五百人。自餘少者不減百人。其遠年雜犯流人亦與之俱斃。太后頗知其濫制。六道流人未死者。并家屬皆聽還鄉里。國俊等亦

繼死。或得罪流竄。○來俊臣誣冬官尚書蘇幹云在魏州與琅邪王冲通謀。夏四月乙未殺之。○五月癸丑。棣州河溢。○秋九月丁亥朔。日有食之。○魏王承嗣等五千人表請加尊號。曰金輪聖神皇帝。乙未。太后御萬象神宮受尊號。赦天下。作金輪等七寶。每朝會陳之殿庭。○庚子。追尊昭安皇帝曰渾元昭安皇帝。文穆皇帝曰立極文穆皇帝。孝明高皇帝曰無上孝明高皇帝。皇后從帝號。○辛丑。以文昌左丞同平章事姚璩為司賓卿。罷政事。以司賓卿萬年豆盧欽望為內史。文昌右丞韋巨源同平章事。秋。官侍郎吳人陸元方為鸞臺侍郎。同平章事。巨源。孝寬之玄孫也。

延載元年正月丙戌。太后享萬象神宮。○突厥可汗骨篤祿卒。其子幼。弟默啜自立為可汗。臘月甲戌。默啜寇靈州。○室韋反。遣右鷹揚衛大將軍李多祚擊破之。○春一月。以婁師德為河源等軍檢校營田大使。○二月。武威道總管王孝傑破吐蕃敦論贊。突厥可汗俊子等於冷泉及大嶺各三萬餘人。碎葉鎮守使韓思忠破泥熟俟斤等萬餘人。○庚午。以僧懷義為代北道行軍大總管。以討默啜。○三月甲申。以鳳閣舍人蘇味道為鳳閣侍郎。同平章事。李昭德檢校內史。更以僧懷義為朔方道行軍大總管。以李昭德為長史。蘇味道為司馬。帥契苾明。曹仁師。沙吒忠義等十八將軍。以討默啜。未行。虜退而止。昭德嘗與懷義議事。失其旨。懷義撻之。昭德惶懼請罪。○夏四月壬戌。以夏官尚書武威道大總管王孝傑同鳳閣鸞臺三品。○五月。魏王承嗣等二萬六千餘人。上尊號曰越古金輪聖神皇帝。甲午。御則天門樓。受尊號。赦天下。改元。○天授中。遣監察御史壽春裴懷古。安集西南蠻。六月發丑。永昌蠻酋薰期。帥部落二十餘萬戶內附。○河內有老尼。居神都麟趾寺。與嵩山人韋什方等。以妖妄惑眾。尼自號淨光如來。云能知未然。什方自云吳赤烏年生。又有老胡。亦自言五百歲。云見薛師。已二百年矣。容貌愈少。太后甚信重之。賜什方姓武氏。秋七月癸未。以什方為正

諫大夫。同平章事。制云。邁軒代之廣成。逾漢朝之河上。八月。什方乞還山。制罷遣之。○戊辰。以王孝傑為瀚海道行軍總管。仍受朔方道行軍大總管。薛懷義節度。○己巳。以司賓少卿姚璩為納言。左肅政中丞原武楊再思為鸞臺侍郎。洛州司馬杜景儉為鳳閣侍郎。並同平章事。豆盧欽望請京官九品已上。輸兩月俸。以贍軍。轉帖百官。令拜表。百官但赴拜。不知何事。拾遺王求禮謂欽望曰。明公祿厚。輸之無傷。卑官貧迫。奈何不使其知。而欺奪之乎。欽望正色拒之。既上表。求禮進言曰。陛下富有四海。軍國有儲。何藉貧官九品之俸。而欺奪之。姚璩曰。求禮不識大體。求禮曰。如姚璩為識大體者邪。事遂寢。○戊寅。鸞臺侍郎同平章事崔元綜。坐事流振州。○武三思帥四夷酋長。請鑄銅鐵為天樞。立於端門之外。銘紀功德。黜唐頌。周以姚璩為督。使諸胡聚錢百萬億。以銅鐵不能足。賦民間農器以足之。○九月壬午朔。日有食之。○殿中丞來俊臣。坐賊貶同州參軍。王弘義流瓊州。詐稱救還。至漢北。侍御史胡元禮遇之。按驗。得其姦狀。杖殺之。內史李昭德。恃太后委遇。頗專權。使氣。人多疾之。前魯王府功曹參軍丘悅。上疏攻之。其略曰。陛下天授以前。萬機獨斷。自長壽以來。委任昭德。參奉機密。獻可替否。事有便利。不預諮謀。要待晝日。將行。方乃別生駁異。揚露擅顯。示於人。歸美引愆。義不如。此。又曰。臣觀其膽。乃大於身。鼻息所衝。上拂雲漢。又曰。蟻穴壞隄。針芒寫氣。權重一去。收之極難。長上。果毅鄧注。又著石論數千言。述昭德專權之狀。鳳閣舍人逢弘敏取奏之。太后由是惡昭德。壬寅。貶昭德為南賓尉。尋又免死流竄。○太后出梨花一枝。以示宰相。宰相皆以為瑞。杜景儉獨曰。今艸木黃落。而此更發榮。陰陽不時。咎在臣等。因拜謝。太后曰。卿真宰相也。○冬十月壬申。以文昌右丞李元素為鳳閣侍郎。左肅政中丞周允元。檢校鳳閣侍郎。並同平章事。允元。豫州人也。○嶺南獠反。以容州都督張玄遇為桂永等州經略大使。以討之。

天冊萬歲元年正月辛巳朔太后加號慈氏越古金輪聖神皇帝赦天下改元證聖○周允元與司刑少卿皇甫文備奏內史豆盧欽望同平章事韋巨源杜景儉蘇味道陸元方附會李昭德不能匡正欽望貶趙州巨源貶麟州景儉貶溱州味道貶集州元方貶綏州刺史○初明堂既成太后命僧懷義作夾紵大像其小指中猶容數十人於明堂北構天堂以貯之堂始構爲風所催更構之日役萬人采木江嶺數年之間所費以萬億計府藏爲之耗竭懷義用財如糞土太后一聽之無所問每作無遮會用錢萬緡士女雲集又散錢十車使之爭拾相蹈踐有死者所在公私田宅多爲僧有懷義頗厭入宮多居白馬寺所度力士爲僧者滿千人侍御史周矩疑有姦謀固請按之太后曰卿姑退朕卽令往矩至臺懷義亦至乘馬就階而下坦腹於床矩召吏將按之遽躍馬而去矩具奏其狀太后曰此道人病風不足詰所度僧惟卿所處悉流遠州遷矩天官員外郎乙未作無遮會於明堂鑿地爲阬深五丈結綵爲宮殿佛像皆於阬中引出之云自地涌出又殺牛取血畫大像首高二百尺云懷義刺膝血爲之丙申張像於天津橋南設齋時御醫沈南璆亦得幸于太后懷義心慍是夕密燒天堂延及明堂火照城中如晝比明皆盡暴風裂血像爲數百段太后恥而諱之但云內作工徒誤燒麻主遂涉明堂時方酺宴左拾遺劉承慶請輟朝停酺以答天譴太后將從之姚璿曰昔成周宣榭卜代愈隆漢武建章盛德彌永今明堂布政之所非宗廟也不應自貶損太后乃御端門觀酺如平日命更造明堂天堂仍以懷義充使又鑄銅爲九州鼎及十二神皆高一丈各置其方先是河內老尼晝食一麻一米夜則烹宰宴樂畜弟子百餘人淫穢靡所不爲武什方自言能合長年藥太后遣乘驛於嶺南采藥及明堂火尼入唁太后太后怒叱之曰汝常言能前知何以不言明堂火因斥還河內弟子及老胡等皆逃散又有發其姦者太后乃復召尼還麟趾寺弟子畢集敕給使掩捕盡獲之皆沒爲官婢什方還至偃師聞

事露自絞死庚子以明堂火告廟下制求直言劉承慶上疏以爲火發旣從麻主後及總章所營佛舍恐勞無益請罷之又明堂所以統和天人一旦焚毀臣下何心猶爲酺宴憂喜相爭傷於情性又陛下垂制博訪許陳至理而左史張鼎以爲今旣火流王屋彌顯大周之祥通事舍人逢敏奏稱彌勒成道時有天魔燒宮七寶臺須臾散壞斯實諂妄之邪言非君臣之正論伏願陛下乾乾翼翼無戾天人之心而興不急之役則兆人蒙賴福祿無窮獲嘉王簿彭城劉知幾表陳四事其一以爲皇業權輿天地開闢嗣君卽位黎元更始時則藉非常之慶以申再造之恩今六合清晏而赦令不息近則一年再降遠則每歲無遺至于違法悖禮之徒無賴不仁之輩編戶則寇攘爲業當官則贓賄是求而元日之朝指期天澤重陽之節佇降皇恩如其忖度咸果釋免或有名垂結正罪將斷決竊行貨賄方便規求故致稽延畢霑寬宥用使俗多頑悖時罕廉隅爲善者不預恩光作惡者獨承微幸古語曰小人之幸君子之不幸斯之謂也望陛下而今而後願節於赦使黎氓知禁姦宄肅清其二以爲海內具僚九品以上每歲逢赦必賜階勳至于朝野宴集公私聚會緋服衆於青衣象板多於木笏皆榮非德舉位罕才升不知何者爲研蚩何者爲美惡臣望自今以後稍息私恩使有善者逾効忠勤無才者咸知勉勵其三以爲陛下臨朝踐極取士大廣六品以下職事清官遂乃方之士芥比之沙礫若遂不加沙汰臣恐有穢皇風其四以爲今之牧伯遷代太速倏來忽往蓬轉萍流旣懷苟且之謀何暇循良之政望自今刺史非三歲以上不可遷官仍明察功過尤甄賞罰疏奏太后頗嘉之是時官爵易得而法網嚴峻故人競爲趨進而多陷刑戮知幾乃著思慎賦以刺時見志焉○丙午以王孝傑爲朔方道行軍總管擊突厥○春二月己酉朔日有食之○僧懷義益驕恣太后惡之旣焚明堂心不自安言多不順太后密選宮人有力者百餘人以防之壬子執之於瑤光殿前樹下使建昌王武攸寧帥壯士毆殺之送

尸白馬寺焚之。以造塔。○甲子。太后去慈氏越古之號。○三月。丙辰。鳳閣侍郎同平章事周允元薨。○夏。四月。天樞成。高一百五尺。徑十二尺。八面各徑五尺。下爲鐵山。周百七十尺。以銅爲蟠龍。麒麟縈繞之。上爲騰雲。承露盤。徑三丈四龍人立捧火珠。高一丈。工人毛婆羅造模。武三思爲文。刻百官及四夷酋長名。太后自書其榜。曰。大周萬國頌復天樞。○秋。七月。辛酉。吐蕃寇臨洮。以王孝傑爲肅邊道行軍大總管。以討之。○九月。甲寅。太后合祭天地於南郊。加號天冊金輪大聖皇帝。赦天下。改元。○冬。十月。突厥默啜遣使請降。太后喜。冊授左衛大將軍。歸國公。

萬歲通天元年。臘月。甲戌。太后發神都。甲申。封神嶽。赦天下。改元萬歲登封。天下百姓無出今年租稅。大酺九日。丁亥。禪于少室。己丑。御朝觀壇。受賀。癸巳。還宮。甲午。謁太廟。○右千牛衛將軍安平王武攸緒。少有志行。恬澹寡欲。扈從封中嶽還。即求棄官。隱於嵩山之陽。太后疑其詐。許之以觀其所爲。攸緒遂優游巖壑。冬。居茅椒。夏。居石室。一如山林之士。太后所賜及王公所遺野服器玩。攸緒一皆置之不用。塵埃凝積。買田使奴耕種。與民無異。○春。一月。甲寅。以婁師德爲肅邊道行軍副總管。擊吐蕃。己巳。以師德爲左肅政大夫。知政事如故。○改長安崇尊廟爲太廟。○二月。辛巳。尊神嶽。天中王爲神嶽。天中黃帝。靈妃爲天中黃后。啓爲齊聖皇帝。封啓母神爲玉京太后。○三月。壬寅。王孝傑。婁師德。與吐蕃將論欽陵贊婆戰於素羅汗山。唐兵大敗。孝傑坐免爲庶人。師德貶原州員外司馬。師德因署移牒。驚曰。官爵盡無邪。既而曰。亦善。亦善。不復介意。○丁巳。新明堂成。高二百九十四尺。方三百尺。規模率小於舊。上施金塗鐵鳳。高二丈。後爲大風所損。更爲銅火珠。羣龍捧之。號曰通天宮。赦天下。改元萬歲通天。○大食請獻師子。姚璿上疏。以爲師子專食肉。遠道傳致。肉既難得。極爲勞費。陛下鷹犬不蓄。漁獵悉停。豈容菲薄於身。而厚給於獸。乃却之。○以檢校夏官侍郎孫元

亨同平章事。○夏。五月。壬子。營州契丹松漠都督李盡忠。歸誠州刺史孫萬榮。舉兵反。攻陷營州。殺都督趙文翽。盡忠。萬榮之妹夫也。皆居於營州城側。文翽剛愎。契丹飢不加賑。給視會長如奴僕。故二人怨而反。乙丑。遣左鷹揚將軍曹仁師。右金吾衛大將軍張玄遇。左威衛大將軍李多祚。司農少卿麻仁節等二十八將討之。秋。七月。辛亥。以春官尙書梁王武三思爲榆關道安撫大使。姚璿副之。以備契丹。改李盡忠爲李盡滅。孫萬榮爲孫萬斬。盡忠尋自稱無上可汗。據營州。以萬榮爲前鋒。略地所向皆下。旬日。兵至數萬。進圍檀州。清邊前軍副總管張九節擊却之。八月。丁酉。曹仁師。張玄遇。麻仁節。與契丹戰于硤石谷。唐兵大敗。先是。契丹破營州。獲唐俘數百。囚之地牢。聞唐兵將至。使守牢。曹給之曰。吾輩家屬飢寒。不能自存。唯俟官軍至。即降耳。既而契丹引出其俘。飼以糠粥。慰勞之曰。吾養汝則無食。殺汝又不忍。今縱汝去。遂釋之。俘至幽州。具言其狀。諸軍聞之。爭欲先入。至黃臺谷。虜又遣老弱迎降。故遺老牛瘦馬於道側。仁師等三軍棄步卒。將騎兵先進。契丹設伏橫擊之。飛索以縶玄遇。仁節。生獲之。將卒死者填山谷。鮮有脫者。契丹得軍印。詐爲牒。令玄遇等署之。牒總管燕匪石。宗懷昌等云。官軍已破賊。若至營州。軍將皆斬。兵不叙勳。匪石等得牒。晝夜兼行。不遑寢食。以赴之。士馬疲弊。契丹伏兵於中道。邀之。全軍皆沒。九月。制天下繫囚。及士庶家奴驍勇者。官償其直。發以擊契丹。又令山東近邊諸州。置武騎團兵。以同州刺史建安王武攸宜爲右武威衛大將軍。充清邊道行軍大總管。以討契丹。右拾遺陳子昂爲攸宜府參謀。上疏曰。恩制免天下罪人。及募諸色奴充兵。討擊契丹。此乃捷急之計。非天子之兵。且比來刑獄久清。罪人全少。奴多怯弱。不慣征行。縱其募集。未足可用。況今天下忠臣義士。萬分未用。其一契丹小孽。假命待誅。何勞免罪。贖奴損國大體。臣恐此策不可。威示天下。○丁巳。突厥寇涼州。執都督許欽明。欽明。紹之曾孫也。時出按部。突厥數萬。奄至城下。欽明拒戰。爲所虜。欽

明兄欽寂。時爲龍山軍討擊副使。與契丹戰於崇州。軍敗被擒。虜將圍安東。令欽寂說其屬城未下者。安東都護裴玄珪在城中。欽寂謂曰。狂賊天殃。滅在朝夕。公但勵兵謹守。以全忠節。虜殺之。○吐蕃復遣使請和親。太后遣右武衛曹參軍貴鄉郭元振往察其宜。吐蕃將論欽陵請罷安西四鎮戍兵。并求分十姓突厥之地。元振曰。四鎮十姓與吐蕃種類本殊。今請罷唐兵。豈非有兼并之志乎。欽陵曰。吐蕃苟貪土地。欲爲邊患。則東侵甘涼。豈肯規利於萬里之外邪。乃遣使者隨元振入請之。朝廷疑未決。元振上疏。以爲欽陵求罷兵割地。此乃利害之機。誠不可輕舉措也。今若直拒其善意。則爲邊患必深。四鎮之利遠。甘涼之害近。不可不深圖也。宜以計緩之。使其和望未絕。則善矣。彼四鎮十姓。吐蕃之所甚欲也。而青海吐谷渾亦國家之要地也。今報之宜曰。四鎮十姓之地。本無用於中國。所以遣兵戍之。欲以鎮撫西域。分吐蕃之勢。使不得併力東侵也。今若果無東侵之志。當歸我吐谷渾諸部。及青海故地。則五俟斤部亦當以歸吐蕃。如此。則足以塞欽陵之口。而亦未與之絕也。若欽陵小有乖違。則曲在彼矣。且四鎮十姓。款附日久。今未察其情之向背。事之利害。遙割而棄之。恐傷諸國之心。非所以御四夷也。太后從之。元振又上言。吐蕃百姓疲於徭戍。早願和親。欽陵利於統兵專制。獨不欲歸款。若國家歲發和親使。而欽陵常不從命。則彼國之人怨欽陵日深。望國恩日甚。欲大舉其徒。固亦難矣。斯亦離間之漸。可使其上下猜阻。禍亂內興矣。太后深然之。元振名震。以字行。○庚申。以并州長史王方慶爲鸞臺侍郎。與殿中監萬年李道廣。並同平章事。○突厥默啜請爲太后子。并爲其女求婚。悉歸河西降戶。帥其部衆。爲國討契丹。太后遣豹韜衛大將軍閻知微。左衛郎將攝司賓卿田歸道。冊授默啜左衛大將軍。遷善可汗。知微立德之孫。歸道仁會之子也。冬十月辛卯。契丹李盡忠卒。孫萬榮代領其衆。突厥默啜乘間襲松漠。虜盡忠萬榮妻子而去。太后進拜默啜爲頡跌利施大單于。立功報國可汗。孫

萬榮收合餘衆。軍教復振。遣別帥駱務整。何阿小。爲前鋒。攻陷冀州。殺刺史陸寶積。屠吏民數千人。又攻瀛州。河北震動。制起彭澤令狄仁傑。爲魏州刺史。前刺史獨孤思莊畏契丹猝至。悉驅百姓入城。繕修守備。仁傑至。悉遣還農。曰。賊猶在遠。何煩如是。萬一賊來。吾自當之。百姓大悅。時契丹入寇。軍書填委。夏官郎中硤石姚元崇。剖析如流。皆有條理。太后奇之。擢爲夏官侍郎。○太后思徐有功用。法平。擢拜左臺殿中侍御史。聞者無不相賀。鹿城主簿宗城潘好禮。著論稱有功。蹈道依仁。固守誠節。不以貴賤死生易其操履。設客問曰。徐公於今誰與爲比。主人曰。四海至廣。人物至多。或匿迹韜光。僕不敢誣。若所聞見。則一人而已。當於古人中求之。客曰。何如張釋之。主人曰。釋之所行者甚易。徐公所行者甚難。難易之間。優劣見矣。張公逢漢文之時。天下無事。至如盜高廟。玉環。及渭橋。驚馬。守法而已。豈不易哉。徐公逢革命之秋。屬惟新之運。唐朝遺老。或包藏禍心。使人主有疑。如周興來俊臣。乃堯年之四凶也。崇飾惡言。以誣盛德。而徐公守死善道。深相明白。幾陷囹圄。數挂網羅。此吾子所聞。豈不難哉。客曰。使爲司刑卿。乃得展其才矣。主人曰。吾子徒見徐公用法平允。謂可置司刑。僕視其人。方寸之地。何所不容。若其用之。何事不可。豈直司刑而已哉。

資治通鑑卷第二百五

唐紀 則天順聖皇后中之上萬歲通天元年

資治通鑑卷第一百六

唐紀二十一

則天順聖皇后中之下

神功元年正月己亥朔太后享通天宮。○突厥默啜寇靈州以許欽明自隨欽明至城下大呼求美醬梁米及墨意欲城中選良將引精兵夜襲虜營而城中無諭其意者。○箕州刺史劉思禮學相人於術士張憬藏憬藏謂思禮當歷箕州位至太師思禮念太師人臣極貴非佐命無以致之乃與洛州錄事參軍綦連耀謀反陰結朝士託相術許入富貴俟其意悅因說以綦連耀有天命公必因之以得富貴鳳閣舍人王勳兼天官侍郎事用思禮為箕州刺史明堂尉吉頊聞其謀以告合宮尉來俊臣使上變告之太后使河內王武懿宗推之懿宗令思禮廣引朝士許免其死凡小忤意皆引之於是思禮引鳳閣侍郎同平章事李元素夏官侍郎同平章事孫元亨知天官侍郎事石抱忠劉奇給事中周譙及王勳兄涇州刺史勔弟監察御史助等凡三十六家皆海內名士窮楚毒以成其獄壬戌皆族誅之親黨連坐流竄者千餘人初懿宗寬思禮於外使誣引諸人諸人既誅然後收思禮思禮悔之懿宗自天授以來太后數使之鞠獄喜誣陷人時人以為周來之亞來俊臣欲擅其功復羅告吉頊項上變得召見僅免俊臣由是復用而頊亦以此得進俊臣黨人羅告司刑府史樊恭誨謀反誅之恭誨子訟寃於朝堂無敢理者乃援刀自刎其腹秋官侍郎上邽劉如璿見之竊歎而泣俊臣奏如璿黨惡逆下獄處以絞刑制流瀼州。○尚乘奉御張易之行成之族孫也年少美姿

容善音律太平公主薦易之弟昌宗入侍禁中昌宗復薦易之兄弟皆得幸於太后常傳朱粉衣錦繡昌宗累遷散騎常侍易之為司衛少卿拜其母韋氏臧氏為太夫人賞賜不可勝紀仍勅鳳閣侍郎李迥秀為臧氏私夫迥秀大亮之族孫也武承嗣三思懿宗宗楚客晉卿皆候易之門庭爭執鞭轡謂易之為五郎昌宗為六郎。○癸亥突厥默啜寇勝州平狄軍副使安道買擊破之。○甲子以原州司馬婁師德守鳳閣侍郎同平章事。○春三月戊申清邊道總管王孝傑蘇宏暉等將兵十七萬與孫萬榮戰于東硤石谷唐兵大敗孝傑死之孝傑遇契丹帥精兵為前鋒力戰契丹引退孝傑追之行背懸崖契丹回兵薄之宏暉先遁孝傑墜崖死將士死亡殆盡管記洛陽張說馳奏其事太后贈孝傑官爵遣使斬宏暉以狗使者未至宏暉以立功得免武攸宜軍漁陽聞孝傑等敗沒軍中震恐不敢進契丹乘勝寇幽州攻陷城邑剽掠吏民攸宜遣將擊之不克。○閏知微田歸道同使突厥冊默啜為可汗知微中道遇突厥使者輒與之緋袍銀帶且上言虜使至都宜大為供張歸道上言突厥背誕積年今方悔過宜待聖恩寬宥今知微擅與之袍帶使朝廷無以復加宜令反初服以俟朝恩又小虜使臣不足大為供張太后然之知微見默啜舞蹈吮其靴鼻歸道長揖不拜默啜囚歸道將殺之歸道辭色不撓責其無厭為陳禍福阿波達干元珍曰大國使者不可殺也默啜怒稍解但拘留不遣初咸亨中突厥有降者皆處之豐勝靈夏朔代六州至是默啜求六州降戶及單于都護府之地并穀種繒帛農器鐵太后不許默啜怒言辭悖慢姚璿楊再思以契丹未平請依默啜所求給之璿臺少監知鳳閣侍郎贊皇李嶠曰戎狄貪而無信此所謂借寇兵資盜糧也不如治兵以備之璿再思固請與之乃悉驅六州降戶數千帳以與默啜并給穀種四萬斛雜綵五萬段農器三千事鐵四萬斤并許其昏默啜由是益彊田歸道始得還與閏知微爭論於太后前歸道以為默啜必負約不可恃和親宜為之備知微以為

和親必可保。○夏四月。鑄九鼎成。徙置通天宮。豫州鼎高丈八尺。受千八百石。餘州高丈四尺。受千二百石。各圖山川物產於其上。共用銅五十六萬七百餘斤。太后欲以黃金千兩塗之。姚璹曰。九鼎神器。貴於天質自然。且臣觀其五采。煥炳相雜。不待金色。以爲炫耀。太后從之。自玄武門曳入。令宰相諸王。帥南北牙宿衛兵十餘萬人。并仗內大牛白象。共曳之。○前益州長史王及善。已致仕。會契丹作亂。山東不安。起爲滑州刺史。太后召見。問以朝廷得失。及善陳治亂之要十餘條。太后曰。外州末事。此爲根本。卿不可出。癸酉。留爲內史。○癸未。以右金吾衛大將軍武懿宗爲神武軍大總管。右武威衛將軍沙吒忠義爲前軍總管。將兵二十萬。擊契丹。先是有朱前疑者。上書云。臣夢陛下壽滿八百。卽拜拾遺。又自言。夢陛下髮白再玄。齒落更生。遷駕部郎中。出使還。上書曰。聞嵩山呼萬歲。賜以緋筭袋。時未五品。於綠衫上佩之。會發兵討契丹。敕京官出馬一匹供軍。酬以五品。前疑買馬輸之。屢抗表。求進階。太后惡其貪鄙。六月乙丑。敕還其馬。斥歸田里。○右司郎中馮翊喬知之。有美妾曰碧玉。知之爲之不昏。武承嗣借以教諸姬。遂留不還。知之作綠珠怨詩。以寄之。碧玉赴井死。承嗣得詩於裙帶。大怒。諷酷吏羅告。族誅之。○司僕少卿來俊臣。倚救貪淫。士民妻妾有美者。百方取之。或使人羅告其罪。矯稱敕。以取其妻。前後羅織誅人。不可勝計。自宰相以下。籍其姓名而取之。自言才比石勒。監察御史李昭德。素惡俊臣。又嘗庭辱秋官侍郎皇甫文備。二人共誣昭德謀反。下獄。俊臣欲羅告武氏諸王。及太平公主。又欲誣皇嗣。及廬陵王。與南北牙同反。冀因此盜國權。河東人衛遂忠告之。諸武及太平公主恐懼。共發其罪。繫獄。有司處以極刑。太后欲赦之。奏上。三日不出。王及善曰。俊臣凶狡貪暴。國之元惡。不去之。必動搖朝廷。太后遊苑中。吉頊執轡。太后問以外事。對曰。外人唯怪來俊臣奏不下。太后曰。俊臣有功於國。朕方

思之。頊曰。于安遠告虺貞反。既而果反。今止爲成州司馬。俊臣聚結不逞。誣構良善。贓賄如山。冤魂塞路。國之賊也。何足惜哉。太后乃下其奏。丁卯。昭德俊臣同棄市。時人無不痛昭德而快俊臣。仇家爭噉俊臣之肉。斯須而盡。抉眼剝面。披腹出心。騰踢成泥。太后知天下惡之。乃下制數其罪惡。且曰。宜加赤族之誅。以雪蒼生之憤。可準法籍沒其家。士民皆相賀於路。曰。自今眠者。背始帖席矣。俊臣以告綦連耀。功賞奴婢十人。俊臣閱司農婢。無可者。以西突厥可汗斛瑟羅家有細婢善歌舞。欲得爲賞口。乃使人誣告斛瑟羅反。諸酋長詣闕。割耳勢面。訟冤者數千人。會俊臣誅。乃得免。俊臣方用事。選司受其屬請。不次除官者。每銓數百人。俊臣敗。侍郎皆自首。太后責之。對曰。臣負陛下死罪。臣亂國家法。罪止一身。違俊臣語。立見滅族。太后乃赦之。上林令侯敏。素諂事俊臣。其妻董氏諫之曰。俊臣國賊。指日將敗。君宜遠之。敏從之。俊臣怒。出爲武龍令。敏欲不往。妻曰。速去。勿留。俊臣敗。其黨皆流嶺南。敏獨得免。太后徵于安遠爲尙食奉御。擢吉頊爲右肅政中丞。○以檢校夏官侍郎宗楚客同平章事。○武懿宗軍至趙州。聞契丹將路務整數千騎。將至冀州。懿宗懼。欲南遁。或曰。虜無輜重。以抄掠爲資。若按兵拒守。執必離散。從而擊之。可有大功。懿宗不從。退據相州。委棄軍資器仗甚衆。契丹遂屠趙州。甲午。孫萬榮爲奴所殺。萬榮之破王孝傑也。於柳城西北四百里。依險築城。留其老弱婦女。所獲器仗資財。使妹夫乙窵羽守之。引精兵寇幽州。恐突厥默啜襲其後。遣五人至黑沙。語默啜曰。我已破王孝傑百萬之衆。唐人破膽。請與可汗乘勝共取幽州。三人先至。默啜喜。賜以緋袍。二人後至。默啜怒。其稽緩。將殺之。二人曰。請一言而死。默啜問其故。二人以契丹之情告。默啜乃殺前三人。而賜二人緋。使爲鄉導。發兵取契丹新城。殺所獲涼州都督許欽明。以祭天。圍新城三日。克之。盡俘以歸。使乙窵羽馳報萬榮。時萬榮方與唐兵相持。軍中聞之。懼。奚人叛萬榮。神兵道總管楊玄基擊其前。奚兵擊其後。獲其將

何阿小萬榮軍大潰帥輕騎數千東走前軍總管張九節遣兵邀之於道萬榮窮蹙與其奴逃至潞水東息於林下歎曰今欲歸唐罪已大歸突厥亦死歸新羅亦死將安之乎奴斬其首以降梟之四方館門其餘衆及奚霫皆降於突厥○戊子特進武承嗣春官尙書武三思竝同鳳閣鸞臺三品○辛卯制以契丹初平命河內王武懿宗婁師德魏州刺史狄仁傑分道安撫河北懿宗所至殘酷民有爲契丹所脇從復來歸者懿宗皆以爲反生劊取其膽先是何阿小嗜殺人河北人爲之語曰唯此兩何殺人最多○秋七月丁酉昆明內附置寶州○武承嗣武三思竝罷政事○庚午武攸宜自幽州凱旋武懿宗奏河北百姓從賊者請盡族之左拾遺王求禮庭折之曰此屬素無武備力不勝賊苟從之以求生豈有叛國之心懿宗擁彊兵數十萬望風退走賊徒滋蔓又欲委罪於草野誣誤之人爲臣不忠請先斬懿宗以謝河北懿宗不能對司刑卿杜景儉亦奏此皆脅從之人請悉原之太后從之○八月丙戌納言姚璿坐事左遷益州長史以太子宮尹豆盧欽望爲文昌右相鳳閣鸞臺三品○九月壬寅大享通天宮大赦改元○庚戌婁師德守納言○甲寅太后謂侍臣曰頃者周興來俊臣按獄多連引朝臣云其謀反國有常法朕安敢違中間疑其不實使近臣就獄引問得其手狀皆自承朕不以爲疑自與俊臣死不復聞有反者然則前死者不有冤邪夏官侍郎姚元崇對曰自垂拱以來坐謀反死者率皆與等羅織自以爲功陛下使近臣問之近臣亦不自保何敢動搖所問者若有翻覆懼遭慘毒不若速死賴天啓聖心興等伏誅臣以百口爲陛下保自今內外之臣無復反者若微有實狀臣請受知而不告之罪太后悅曰竊時宰相皆順成其事陷朕爲淫刑之主聞卿所言深合朕心賜元崇錢千緡時人多爲魏元忠訟冤者太后復召爲肅政中丞元忠前後坐棄市流竄者四嘗侍宴太后問曰卿往者數負謗何也對曰臣猶鹿耳羅織之徒欲得臣肉爲羹臣安所避之○冬閏十月甲寅以幽州都

督狄仁傑爲鸞臺侍郎司刑卿杜景儉爲鳳閣侍郎竝同平章事仁傑上疏以爲天生四夷皆在先王封略之外故東距滄海西阻流沙北橫大漠南阻五嶺此天所以限夷狄而隔中外也自典籍所紀聲教所及三代不能至者國家盡兼之矣詩人矜薄伐於太原美化行於江漢則三代之遠裔皆國家之域中也若乃用武方外邀功絕域竭府庫之實以爭不毛之地得其人不足增賦獲其土不可耕織苟求冠帶遠夷之稱不務固本安人之術此秦皇漢武之所行非五帝三王之事業也始皇窮兵極武務求廣地死者如麻致天下潰叛漢武征伐四夷百姓困窮盜賊蜂起末年悔悟息兵罷役故能爲天所祐近者國家頻歲出師所費滋廣西戍四鎮東戍安東調發日加百世虛弊今關東飢饉蜀漢逃亡江淮已南徵求不息人不復業相率爲盜本根一搖憂患不淺其所以然者皆以爭蠻貊不毛之地乖子養蒼生之道也昔漢元納賈捐之之謀而罷朱崖郡宣帝用魏相之策而棄車師之田豈不欲慕尙虛名蓋憚勞人力也近貞觀中克平九姓立李思摩爲可汗使統諸部者蓋以夷狄叛則伐之降則撫之得推亡固存之義無遠戍勞人之役此近日之令典經邊之故事也竊謂宜立阿史那斛瑟羅爲可汗委之四鎮繼高氏絕國使守安東省軍費於遠方并甲兵於塞上使夷狄無侵侮之患則可矣何必窮其窟穴與螻蟻較長短哉但當救邊兵謹守備遠斥候聚資糧待其自致然後擊之以逸待勞側戰士力倍以主禦客則我得其便堅壁清野則寇無所得自然二賊深入則有顛躓之慮淺入必無寇獲之益如此數年可使二虜不擊而服矣事雖不行識者是之○鳳閣舍人李嶠知天官選事始置員外官數千人○先是曆官以是月爲正月以臘月爲閏太后欲正月甲子朔冬至乃下制以爲去晦仍見月有爽天經可以聖曆元年正月甲子朔冬至太后享通天宮赦天下改元○夏官侍郎宗楚客罷政事○春

二月乙未。文昌右相同鳳閣鸞臺三品豆盧欽望罷爲太子賓客。○武承嗣三思營求爲太子。數使人說太后曰。自古天子未有以異姓爲嗣者。太后意未決。狄仁傑每從容言於太后曰。文皇帝櫛風沐雨。親冒鋒鏑。以定天下。傳之子孫。大帝以二子託陛下。陛下今乃欲移之他族。無乃非天意乎。且姑姪之與母子孰親。陛下立子。則千秋萬歲後。配食太廟。承繼無窮。立姪。則未聞姪爲天子。而祔姑於廟者也。太后曰。此朕家事。卿勿預知。仁傑曰。王者以四海爲家。四海之內。孰非臣妾。何者不爲陛下家事。君爲元首。臣爲股肱。義同一體。況臣備位宰相。豈得不預知乎。又勸太后召還廬陵王。王方慶。王及善。亦勸之。太后意稍寤。它日。又謂仁傑曰。朕夢大鸚鵡。兩翼皆折。何也。對曰。武者陛下之姓。兩翼二子也。陛下起二子。則兩翼振矣。太后由是無立承嗣三思之意。孫萬榮之圍幽州也。移檄朝廷曰。何不歸我廬陵王。吉頊與張易之。昌宗皆爲控鶴監供奉。易之兄弟親狎之。頊從容說二人曰。公兄弟貴寵如此。非以德業取之也。天下側目。切齒多矣。不有大功於天下。何以自全。竊爲公憂之。二人懼。流涕問計。頊曰。天下士庶未忘唐德。咸復思廬陵王。主上春秋高。大業須有所付。武氏諸王非所屬意。公何不從容勸上立廬陵王。以繫蒼生之望。如此。非徒免禍。亦可以長保富貴矣。二人以爲然。承間。屢爲太后言之。太后知謀出於頊。乃召問之。頊復爲太后具陳利害。太后意乃定。三月己巳。託言廬陵王有疾。遣職方員外郎瑕丘徐彥伯召廬陵王。及其妃諸子。詣行在療疾。戊子。廬陵王至神都。○夏四月庚寅朔。太后祀太廟。○辛丑。以婁師德充隴右諸軍大使。仍檢校營田事。○六月甲午。命淮陽王武延秀入突厥。納默啜女爲妃。豹韜衛大將軍閻知微攝春官尙書。右武衛郎將楊齊莊攝司賓卿。齎金帛巨億。以送之。延秀承嗣之子也。鳳閣舍人襄陽張柬之諫曰。自古未有中國親王娶夷狄女者。由是忤旨。出爲合州刺史。○秋七月。鳳閣侍郎同平章事杜景儉罷爲秋官尙書。○八月戊子。武延秀至黑沙南庭。突厥默

啜謂閻知微等曰。我欲以女嫁李氏。安用武氏兒邪。此豈天子之子乎。我突厥世受李氏恩。聞李氏盡滅。唯兩兒在。我今將兵輔立之。乃拘延秀於別所。以知微爲南面可汗。言欲使之主唐民也。遂發兵襲靜難平狄清夷等軍。靜難軍使慕容玄崱以兵五千降之。虜執大振。進寇檀州。前從閻知微入突厥者。默啜皆賜之五品三品之服。太后悉奪之。默啜移書數朝廷曰。與我蒸穀種。種之不生。一也。金銀器皆行濫。非真物。二也。我與使者緋紫。皆奪之。三也。繒帛皆疎惡。四也。我可汗女。當嫁天子兒。武氏小姓。門戶不敵。罔冒爲昏。五也。我爲此起兵。欲取河北耳。監察御史裴懷古從閻知微入突厥。默啜欲官之。不受。囚將殺之。逃歸抵晉陽。形容羸悴。突騎譟聚。以爲間諜。欲取其首以求功。有果毅嘗爲人所枉。懷古按直之。大呼曰。裴御史也。救之得全。至都。引見。遷祠部員外郎。時諸州聞突厥入寇。方秋。爭發民修城。衛州刺史太平敬暉謂僚屬曰。吾聞金湯非粟不守。奈何捨收穫而事城郭乎。悉罷之。使歸田。百姓大悅。○甲午。鸞臺侍郎同平章事王方慶罷爲麟臺監。○太子太保魏宣王武承嗣恨不得爲太子。意怏怏。戊戌。病薨。庚子。以春官尙書武三思檢校內史。狄仁傑兼納言。太后命宰相各舉尙書郎一人。仁傑舉其子司府丞光嗣。拜地官員外郎。已而稱職。太后喜曰。卿足繼祁奚矣。通事舍人河南元行冲博學多通。仁傑重之。行冲數規諫仁傑。且曰。凡爲家者。必有儲蓄。脯醢以適口。參朮以攻疾。僕竊計明公之門。珍味多矣。行冲請備藥物之末。仁傑笑曰。吾藥籠中物。何可一日無也。行冲名澹。以字行。○以司屬卿武重規爲天兵中道大總管。右武衛將軍沙吒忠義爲天兵西道總管。幽州都督下邳張仁愿爲天兵東道總管。將兵三十萬。以討突厥。默啜又以左羽林衛大將軍閻敬容爲天兵西道後軍總管。將兵十五萬。爲後援。癸丑。默啜寇飛狐。乙卯。陷定州。殺刺史孫彥高。及吏民數千人。○九月甲子。以夏官尙書武攸寧同鳳閣鸞臺三品。○改突厥默啜爲斬啜。默啜使閻知微招諭趙州。知微與虜連

手。蹋萬歲樂於城下。將軍陳令英在城上。謂曰。尙書位任非輕。乃爲虜蹋歌。獨無慙乎。知微微吟曰。不得已萬歲樂。戊辰。默啜圍趙州。長史唐般若翻城應之。刺史高叡與妻秦氏。仰藥詐死。虜輿之詣默啜。默啜以金獅子帶紫袍示之曰。降則拜官。不降則死。叡顧其妻。妻曰。酬報國恩。正在今日。遂俱閉目不言。經再宿。虜知不可屈。乃殺之。唐般若族誅。贈叡冬官尙書。諡曰節。叡之孫也。○皇嗣固請遜位於廬陵王。太后許之。壬申。立廬陵王哲爲皇太子。復名顯。赦天下。甲戌。命太子爲河北道元帥。以討突厥。先是。募人月餘。不滿千人。及聞太子爲元帥。應募者雲集。未幾數盈五萬。戊寅。以狄仁傑爲河北道行軍副元帥。右丞宋元爽爲長史。右臺中丞崔獻爲司馬。左臺中丞吉頊爲監軍使。時太子不行。命仁傑知元帥事。太后親送之。藍田令薛訥。仁貴之子也。太后擢爲左威衛將軍。安東道經略將行。言於太后曰。太子雖立。外議猶疑未定。苟此命不易。醜虜不足平也。太后深然之。王及善請太子赴外朝。以慰人心。從之。○以天官侍郎蘇味道爲鳳閣侍郎。同平章事。味道前後在相位數歲。依阿取容。嘗謂人曰。處事不宜明白。但摸稜持兩端可矣。時人謂之蘇摸稜。○癸未。突厥默啜盡殺所掠趙定等州男女萬餘人。自五回道去。所過殺掠。不可勝紀。沙吒忠義等但引兵躡之。不敢逼。狄仁傑將兵十萬追之。無所及。默啜還漠北。擁兵四十萬。據地萬里。西北諸夷皆附之。基有輕中國之心。○冬十月。制都下屯兵。命河內王武懿宗。九江王武攸歸。領之。○癸卯。以狄仁傑爲河北道安撫大使。時北人爲突厥所驅逼者。虜退懼誅。往往亡匿。仁傑上疏。以爲朝廷議者。皆罪契丹突厥所脅從之人。言其迹雖不同。心則無別。誠以山東近緣軍機。調發傷重。家道悉破。或至逃亡。重以官典侵漁。因事而起。枷杖之下。痛切肌膚。事迫情危。不循禮義。愁苦之地。不樂其生。有利則歸。且圖賒死。此乃君子之愧辱。小人之常行也。又諸城入僞。或待天兵。將士求功。皆云攻得。臣憂濫賞。亦恐非辜。以經與賊同。是爲惡地。至於汚辱妻

子。劫掠貨財。兵士信知不仁。簪笏未能以免。乃是賊平之後。爲惡更深。且賊務招攜。秋毫不犯。今之歸正。卽是平人。翻被破傷。豈不悲痛。夫人猶水也。壅之則爲泉。疏之則爲川。通塞隨流。豈有常性。今負罪之伍。必不在家。露宿草行。潛鼠山澤。赦之則出。不赦則狂。山東羣盜。緣茲聚結。臣以邊塵暫起。不足爲憂。中土不安。此爲大事。罪之則衆情恐懼。恕之則反側自安。伏願曲赦河北諸州。一無所問。制從之。仁傑於是撫慰百姓。得突厥所驅掠者。悉遞還本貫。散糧運以賑貧乏。修郵驛。以濟旋師。恐諸將及使者。妄求供頓。乃自食疏糲。禁其下。無得侵擾百姓。犯者必斬。河北遂安。○以夏官侍郎姚元崇。祕書少監李嶠。竝同平章事。○突厥默啜離趙州。乃縱閻知微。使還。太后命磔于天津橋南。使百官共射之。旣乃髡其肉。剉其骨。夷其三族。疎親有先未相識而死者。褒公段瓚。志玄之子也。先沒於突厥。突厥在趙州。瓚邀楊齊莊與之俱逃。齊莊畏懦不敢發。瓚先歸。太后賞之。齊莊尋至。赦河內王武懿宗鞠之。懿宗以爲齊莊意懷猶豫。遂與閻知微同誅。旣射之如蝟。氣殫。未死。乃決其腹。剖心投於地。猶趙趙然躍不止。擢田歸道爲夏官侍郎。甚見親委。○蜀州每歲遣兵五百人。戍姚州。路險遠。死亡者多。蜀州刺史張柬之上言。以爲姚州本哀牢之國。荒外絕域。山高水深。國家開以爲州。未嘗得其鹽布之稅。甲兵之用。而空竭府庫。驅率平人受役蠻夷。肝腦塗地。臣竊爲國家惜之。請廢姚州。以隸瀾州。歲時朝覲同之。蕃國瀘南諸鎮。亦皆廢省。於瀘北置關。百姓非奉使。無得交通往來。疏奏。不納。

二年正月。丁卯朔。告朔於通天宮。○壬戌。以皇嗣爲相王。領太子右衛率。○甲子。置控鶴監丞主簿等官。率皆嬖寵之人。頗用才能文學之士。以參之。以司衛卿張易之爲控鶴監。銀青光祿大夫。張昌宗。左臺中丞吉頊。殿中監田歸道。夏官侍郎李迥秀。鳳閣舍人薛稷。正諫大夫。臨汾員半千。皆爲控鶴監內供奉。稷。元超之從子也。半千以古無此官。且所聚多輕薄之

士上疏請罷之。由是忤旨。左遷水部郎中。○臘月。戊子。以左臺中丞吉頊爲天官侍郎。右臺中丞魏元忠爲鳳閣侍郎。竝同平章事。○文昌左丞宗楚客與弟司農卿晉卿坐贓賄滿萬餘緡。及第舍過度。楚客貶播州司馬。晉卿流峰州。太平公主觀其第。歎曰。見其居處。吾輩乃虛生耳。○辛亥。賜太子姓武氏。赦天下。○太后生重眉。成八字。百官皆賀。○河南北置武騎團。以備突厥。○春。一月。庚申。夏官尙書同鳳閣鸞臺三品武攸寧罷爲冬官尙書。○二月。己丑。太后幸嵩山。過緱氏。謁升仙太子廟。壬辰。太后不豫。遣給事中樊城閣朝隱。禱少室山。朝隱自爲犧牲。沐浴伏俎上。請代太后命。太后疾小愈。厚賞之。丁酉。自緱氏還。○初。吐蕃贊普器弩悉弄尙幼。論欽陵兄弟用事。皆有勇略。諸胡畏之。欽陵居中秉政。諸弟握兵。分據方面。贊婆常居東邊。爲中國患者三十餘年。器弩悉弄浸長。陰與大臣論巖謀誅之。會欽陵出外。贊普詐云出敗。集兵。執欽陵親黨二千餘人。遣使召欽陵兄弟。欽陵等舉兵不受命。贊普將兵討之。欽陵兵潰自殺。夏。四月。贊婆帥所部千餘人來降。太后命左武衛鎧曹參軍郭元振與河源軍大使夫蒙令卿將騎迎之。以贊婆爲特進歸德王。欽陵子弓仁以所統吐谷渾七千帳來降。拜左玉鈐衛將軍。酒泉郡公。○壬辰。以魏元忠檢校并州長史。充天兵軍大總管。以備突厥。婁師德爲天兵軍副大總管。仍充隴右諸軍大使。專掌懷撫吐蕃降者。○太后春秋高。慮身後太子與諸武不相容。壬寅。命太子相王太平公主與武攸暨等爲誓文。告天地於明堂。銘之鐵券。藏于史館。○秋。七月。命建安王武攸宜留守西京。代會稽王武攸望。○丙辰。吐谷渾部落一千四百帳內附。○八月。癸巳。突騎施烏質勒遣其子遮弩入見。遣侍御史元城解琬安撫烏質勒及十姓部落。○制州縣長吏。非奉有勅旨。毋得擅立碑。○內史王及善雖無學術。然清正難奪。有大臣之節。張易之兄弟每待內宴。無復人臣禮。及善屢奏以爲不可。太后不悅。謂及善曰。卿既年高。不宜更侍遊宴。但檢校閣中可也。及善因稱病。謁

假月餘。太后不問。及善歎曰。豈有中書令而天子可一日不見乎。事可知矣。乃上疏乞骸骨。太后不許。庚子。以及善爲文昌左臺。太子宮尹豆盧欽望爲文昌右相。仍竝同鳳閣鸞臺三品。鸞臺侍郎同平章事。楊再思罷爲左臺大夫。丁未。相王兼檢校安北大都護。以天官侍郎陸元方爲鸞臺侍郎。同平章事。○納言隴右諸軍大使婁師德薨。師德在河隴前後四十餘年。恭勤不怠。民夷安之。性沈厚寬恕。狄仁傑之入相也。師德實薦之。而仁傑不知。意頗輕。師德數擠之於外。太后覺之。嘗問仁傑曰。師德賢乎。對曰。爲將能謹守邊陲。賢則臣不知。又曰。師德知人乎。對曰。臣嘗同僚。未聞其知人也。太后曰。朕之知卿。乃師德所薦也。亦可謂知人矣。仁傑既出。歎曰。婁公盛德。我爲其所包容。久矣。吾不得窺其際也。是時。羅織紛紜。師德久爲將相。觸能以功名終。人以是重之。○戊申。以武三思爲內史。○九月。乙亥。太后幸福昌。戊寅。還神都。○庚子。邢貞公王及善薨。○河溢。漂濟源百姓廬舍千餘家。○冬。十月。丁亥。論贊婆至都。太后寵待。賞賜甚厚。以爲右衛大將軍。使其衆守洪源谷。○太子相王諸子復出閣。○太后自稱制以來。多以武氏諸王及駙馬都尉爲成均祭酒。博士助教。亦多非儒士。又因郊丘明堂拜洛封嵩。取弘文國子生爲齋郎。因得選補。由是。學生不復習業。二十年間。學校殆廢。而羈時酷吏所誣諂者。其親友流離。未獲厚宥。鳳閣舍人韋嗣立上疏。以爲時俗浸輕儒學。先王之道弛廢。不講。宜令王公以下子弟皆入國學。不聽以它岐仕進。又自揚豫以來。制獄漸繁。酷吏乘間。專欲殺人。以求進。賴陛下聖明。周丘王來。相繼誅殛。朝野慶泰。若再觀陽和。至如仁傑元忠。往遭案鞫。亦皆自誣。非陛下明察。則已爲菹醢矣。今陛下升而用之。皆爲良輔。何乃前非而後是哉。誠由枉陷與甄明耳。臣恐羈之負。寃得罪者甚衆。亦皆如是。伏望陛下弘天地之仁。廣雷雨之施。自垂拱以來。罪無輕重。一皆昭洗。死者追復官爵。生者聽還鄉里。如此。則天下知昔之枉濫。非陛下之意。皆獄吏之罪。幽明歡欣。感通和氣。太后不能

從嗣立承慶之異母弟也。母王氏遇承慶甚酷。每杖承慶。嗣立必解衣請代。每不許。輒私自杖。母乃爲之漸寬。承慶爲鳳閣舍人。以疾去職。嗣立時爲萊蕪令。太后召謂曰。卿父嘗言。臣有兩兒。堪事陛下。卿兄弟在官。誠如父言。朕今以卿代兄。更不用它人。即日拜鳳閣舍人。○是歲。突厥默啜立其弟咄悉。爲左廂察。骨篤祿子默矩爲右廂察。各主兵二萬餘人。其子匄俱爲小可汗。位在兩察上。主處木昆等十姓兵四萬餘人。又號爲拓西可汗。久視元年。正月。戊寅。內史武三思罷。爲特進。太子少保。天官侍郎。同平章事。吉頊。貶安固尉。太后以頊有幹略。故委以腹心。頊與武懿宗爭趙州之功於太后前。頊魁岸辯口。懿宗短小。偃僂。頊視懿宗。聲氣陵厲。太后由是不悅。曰。頊在朕前。猶卑我。諸武。況異時。詎可倚邪。它日。頊奏事。方援古引今。太后怒。曰。卿所言。朕飲聞之。無多言。太宗有馬。名師子驄。肥逸無能。調馭者。朕爲宮女侍側。言於太宗。曰。妾能制之。然須三物。一鐵鞭。二鐵撻。三匕首。鐵鞭擊之。不服。則以撻撻其首。又不服。則以匕首斷其喉。太宗壯朕之志。今日卿豈足污朕匕首邪。頊惶懼流汗。拜伏求生。乃止。諸武怨其附太子。共發其弟冒官事。由是坐貶。辭曰。得召見。涕泣言曰。臣今遠離闕庭。永無再見之期。願陳一言。太后命之坐。問之。頊曰。合水土爲泥。有爭乎。太后曰。無之。又曰。分半爲佛。半爲天尊。有爭乎。曰。有爭矣。頊頓首曰。宗室外戚。各當其分。則天下安。今太子已立。而外戚猶爲王。此陛下驅之。使它日必爭。兩不得安也。太后曰。朕亦知之。然業已如是。不可何如。○臘月。辛巳。立故太孫重潤爲邵王。其弟重茂爲北海王。○太后問鸞臺侍郎陸元方以外事。對曰。臣備位宰相。有大事。不敢以不聞。人間細事。不足煩聖聽。由是忤旨。庚寅。罷爲司禮卿。元方爲人清謹。再爲宰相。太后每有遷除。多訪之。元方密封以進。未嘗漏露。臨終。悉取奏藁焚之。曰。吾於人多陰德。子孫其未衰乎。○以西突厥竭忠事。主可汗斛瑟羅爲平西軍大總管。鎮碎葉。○丁酉。以狄仁傑爲內史。○庚子。以文昌左丞韋巨源

爲納言。○乙巳。太后幸嵩山。春。一月。丁卯。幸汝州之溫湯。戊寅。還神都。作三陽宮於告成之石淙。○二月。乙未。同鳳閣鸞臺三品豆盧欽望罷。爲太子賓客。○三月。以吐谷渾青海王宣超爲烏地也拔勤忠可汗。○夏。四月。戊申。太后幸三陽宮避暑。有胡僧邀車駕觀葬舍利。太后許之。狄仁傑跪于馬前。曰。佛者夷狄之神。不足以屈天下之主。彼胡僧詭譎。直欲邀致萬乘。以惑遠近之人耳。山路險狹。不容侍衛。非萬乘所宜臨也。太后中道而還。曰。以成吾直臣之氣。○五月。己酉朔。日有食之。○太后使洪州僧胡超。合長生藥。三年而成。所費巨萬。太后服之。疾小瘳。癸丑。赦天下。改元久視。去天冊金輪大聖之號。○六月。改控鶴爲奉宸府。以張易之爲奉宸令。太后每內殿曲宴。輒引諸武。易之及弟祕書監昌宗。飲博嘲謔。太后欲掩其迹。乃命易之。昌宗。與文學之士李嶠等。修三教殊英於內殿。武三思奏。昌宗乃王子晉後身。太后命昌宗。衣羽衣。吹笙。乘木鶴於庭中。文士皆賦詩以美之。太后又多選美少年。爲奉宸內供奉。右補闕朱敬則諫曰。陛下內寵。有易之。昌宗足矣。近聞左監門衛長史侯祥等。明自媒街。醜慢不恥。求爲奉宸內供奉。無禮無儀。溢于朝聽。臣職在諫諍。不敢不奏。太后勞之曰。非卿直言。朕不知此。賜綵百段。易之。昌宗競以豪侈相勝。弟昌儀爲洛陽令。請屬無不從。嘗早朝。有選人姓薛。以金五十兩并狀。邀其馬而賂之。昌儀受金。至朝堂。以狀授天官侍郎張錫。數日。錫失其狀。以問昌儀。昌儀罵曰。不了事人。我亦不記。但姓薛者。即與之。錫懼。退索在銓姓薛者六十餘人。悉留注官。錫文瓘之兄子也。○初。契丹將李楷固。善用繩索。及騎射。舞槊。每陷陳。如鶻入鳥羣。所向披靡。黃臺之戰。張玄遇。麻仁節。皆爲所縶。又有駱務整者。亦爲契丹將。屢敗唐兵。及孫萬榮死。二人皆來降。有司責其後。至。奏請族之。狄仁傑曰。楷固等竝驍勇絕倫。能盡力於所事。必能盡力於我。若撫之以德。皆爲我用矣。奏請赦之。所親皆止之。仁傑曰。苟利於國。豈爲身謀。太后用其言。赦之。又請與之官。太后以楷固爲左鈐衛將軍。務

整為右武威衛將軍使將兵擊契丹餘黨悉平之

久視元年秋七月獻俘於含樞殿太后以楛固為左玉鈐衛大將軍燕國公賜姓武氏召公卿合宴舉觴屬仁傑曰公之功也將賞之對曰此乃陛下威靈將帥盡力臣何功之有固辭不受○閏月戊寅車駕還宮○己丑以天官侍郎張錫為鳳閣侍郎同平章事鸞臺侍郎同平章事李嶠罷為成均祭酒錫嶠之舅也故罷嶠政事○丁酉吐蕃將麴莽布支寇涼州圍昌松隴右諸軍大使唐休璟與戰於洪源谷趨莽布支兵甲鮮華休璟謂諸將曰諸論既死麴莽布支新為將不習軍事望之雖如精銳實易與耳請為諸君破之乃被甲先陷陳六戰皆捷吐蕃大奔斬首二千五百級獲二裨將而還○司府少卿楊元亨尚食奉御楊元禕皆弘武之子也元禕嘗忤張易之易之言於太后元禕楊素之族素父子隋之逆臣子孫不應供奉太后從之壬寅制楊素及其兄弟子孫皆不得任京官左遷元亨陸州刺史元禕貝州刺史○八月庚戌以魏元忠為隴右諸軍大使擊吐蕃○庚申太后欲造大像使天下僧尼日出一錢以助其功狄仁傑上疏諫其略曰今之伽藍制過宮闕功不使鬼止在役人物不天來終須地出不損百姓將何以求又曰游僧皆託佛法誑誤生人里陌動有經坊闌闔亦立精舍化誘所急切於官徵法事所須嚴於制敕又曰梁武簡文捨施無限及三淮沸浪五嶺騰烟列刹盈衢無救危亡之禍緇衣蔽路豈有勤王之師又曰雖斂僧錢百未支一尊容

資治通鑑卷第二百六

資治通鑑卷第二百七

唐紀二十三

則天順聖皇后下

久視元年秋七月獻俘於含樞殿太后以楛固為左玉鈐衛大將軍燕國公賜姓武氏召公卿合宴舉觴屬仁傑曰公之功也將賞之對曰此乃陛下威靈將帥盡力臣何功之有固辭不受○閏月戊寅車駕還宮○己丑以天官侍郎張錫為鳳閣侍郎同平章事鸞臺侍郎同平章事李嶠罷為成均祭酒錫嶠之舅也故罷嶠政事○丁酉吐蕃將麴莽布支寇涼州圍昌松隴右諸軍大使唐休璟與戰於洪源谷趨莽布支兵甲鮮華休璟謂諸將曰諸論既死麴莽布支新為將不習軍事望之雖如精銳實易與耳請為諸君破之乃被甲先陷陳六戰皆捷吐蕃大奔斬首二千五百級獲二裨將而還○司府少卿楊元亨尚食奉御楊元禕皆弘武之子也元禕嘗忤張易之易之言於太后元禕楊素之族素父子隋之逆臣子孫不應供奉太后從之壬寅制楊素及其兄弟子孫皆不得任京官左遷元亨陸州刺史元禕貝州刺史○八月庚戌以魏元忠為隴右諸軍大使擊吐蕃○庚申太后欲造大像使天下僧尼日出一錢以助其功狄仁傑上疏諫其略曰今之伽藍制過宮闕功不使鬼止在役人物不天來終須地出不損百姓將何以求又曰游僧皆託佛法誑誤生人里陌動有經坊闌闔亦立精舍化誘所急切於官徵法事所須嚴於制敕又曰梁武簡文捨施無限及三淮沸浪五嶺騰烟列刹盈衢無救危亡之禍緇衣蔽路豈有勤王之師又曰雖斂僧錢百未支一尊容

既廣不可露居。覆以百層。尙憂未遍。自餘廊宇。不得全無。如來設教。以慈悲爲主。豈欲勞人以存虛飾。又曰。比來水旱不節。當今邊境未寧。若費官財。又盡人力。一隅有難。將何以救之。太后曰。公教朕爲善。何得相違。遂罷其役。○阿悉吉薄露叛。遣左金吾將軍田揚名。殿中侍御史封思業討之。軍至碎葉。薄露夜於城傍。剽掠而去。思業將騎追之。反爲所敗。揚名引西突厥斛瑟羅之衆。攻其城。旬餘不克。九月。薄露詐降。思業誘而斬之。遂俘其衆。○太后信重內史梁文惠公狄仁傑。羣臣莫及。常謂之國老。而不名。仁傑好面引廷爭。太后每屈意從之。嘗從太后遊幸。遇風吹仁傑巾墜。而馬驚不能止。太后命太子追執其鞵而繫之。仁傑屢以老疾乞骸骨。太后不許。入見常止其拜曰。每見公拜。朕亦身痛。仍免其宿直。戒其同僚曰。自非軍國大事。勿以煩公。辛丑。薨。太后泣曰。朝堂空矣。自是朝廷有大事。衆或不能決。太后輒歎曰。天奪吾國老。何太早邪。太后嘗問仁傑。朕欲得一佳士用之。誰可者。仁傑曰。未審陛下欲何所用之。太后曰。欲用爲將相。仁傑對曰。文學縉籍。則蘇味道。李嶠。固其選矣。必欲取卓犖奇才。則有荊州長史張柬之。其人雖老。宰相才也。太后擢柬之爲洛州司馬。數日又問。仁傑對曰。前薦柬之。尙未用也。太后曰。已遷矣。對曰。臣所薦者。可爲宰相。非司馬也。乃遷秋官侍郎。久之。卒用爲相。仁傑又嘗薦夏官侍郎姚元崇。監察御史曲阿桓彥範。太州劉史敬暉。等數十人。率爲名臣。或謂仁傑曰。天下桃李。悉在公門矣。仁傑曰。薦賢爲國。非爲私也。初。仁傑爲魏州刺史。有惠政。百姓爲之立生祠。後其子景暉。爲魏州司功參軍。貪暴爲人患。人遂毀其像焉。○冬。十月。辛亥。以魏元忠爲蕭關道大總管。以備突厥。○甲寅。制復以正月爲十一月。一月爲正月。赦天下。○丁巳。納言韋巨源罷。以文昌右丞韋安石爲鸞臺侍郎。同平章事。安石。津之孫也。時武三思。張易之兄弟用事。安石數面折之。嘗侍宴禁中。易之引蜀商宋霸子等數人。在座。同博。安石跪奏曰。商賈賤類。不應得預此會。願左右逐出之。座中皆失色。

太后以其言直。勞勉之。同列皆歎服。○丁卯。太后幸新安。壬申。還宮。○十二月。甲寅。突厥掠隴右諸監馬萬餘匹而去。○時屠禁尙未解。鳳閣舍人全節崔融上言。以爲割烹犧牲。弋獵禽獸。聖人著之典禮。不可廢闕。又江南食魚。河西食肉。一日不可無。富者未革。貧者難堪。況貧賤之人。仰屠爲生。日戮一人。終不能絕。但資恐喝。徒長姦欺。爲政者苟順月令。合禮經。自然物遂其生。人得其性矣。戊午。復開屠禁。祠祭用牲。牢如故。

長安元年。春。正月。丁丑。以成州言佛迹見。改元大足。○二月。己酉。以鸞臺侍郎柏人李懷遠。同平章事。○三月。鳳閣侍郎同平章事張錫。坐知選漏泄禁中語。賊滿數萬。當斬。臨刑釋之。流循州。時蘇味道亦坐事。與錫俱下。司刑獄。錫乘馬。意氣自若。舍于三品院。帷屏食飲。無異平居。味道步至繫所。席地而臥。蔬食而已。太后聞之。赦味道。復其位。○是月。大雪。蘇味道以爲瑞。帥百官入賀。殿中侍御史王求禮止之曰。三月雪爲瑞。雪臘月雷爲瑞。雷乎。味道不從。既入。求禮獨不賀。進言曰。今陽和布氣。艸木發榮。而寒雪爲災。豈得誣以爲瑞。賀者皆諂諛之士也。太后爲之罷朝。時又有獻三足牛者。宰相復賀。求禮颺言曰。凡物反常。皆爲妖。此鼎足非其人。政教不行之象也。太后爲之愀然。○夏。五月。乙亥。太后幸三陽宮。○以魏元忠爲靈武道行軍大總管。以備突厥。○天官侍郎鹽官顧琮。同平章事。○六月。庚申。以夏官尙書李迥秀。同平章事。迥秀性至孝。其母本微賤。妻崔氏。常叱媵婢。母聞之不悅。迥秀即時出之。或曰。賢室雖不避嫌疑。然過非七出。何遽如是。迥秀曰。娶妻本以養親。今乃違忤顏色。安敢留也。竟出之。○秋。七月。甲戌。太后還宮。○甲申。李懷遠罷。爲秋官尙書。○八月。突厥默啜寇邊。命安北大都護相王爲天兵道元帥。統諸軍擊之。未行而虜退。○丙寅。武邑人蘇安恒上疏曰。陛下欽先聖之顧託。受嗣子之推讓。敬天順人。二十年矣。豈不聞帝舜褰裳。周公復辟。舜之於禹。事祇族親。且與成王不離叔父。族親何如子之愛。叔父何如母之恩。今太子孝敬

是崇。春秋既壯。若使統臨宸極。何異陛下之身。陛下年德既尊。寶位將倦。機務煩重。浩蕩心神。何不禪位東宮。自怡聖體。自昔理天下者。不見二姓而俱王也。當今梁定河內。建昌諸王。承陛下之蔭。覆竝得封王。臣謂千秋萬歲之後。於事非便。臣請黜為公侯。任以閑簡。臣又聞陛下有二十餘孫。今無尺寸之封。此非長久之計也。臣請分土而王之。擇立師傅。教其孝敬之道。以來輔周室。屏藩皇家。斯為美矣。疏奏。太后召見。賜食慰諭而遣之。○太后春秋高。政事多委。張易之兄弟。邵王重潤。與其妹永泰郡主。主婿魏王武延基。竊議其事。易之訴於太后。九月壬申。太后皆逼令自殺。廷基承嗣之子也。○丙申。以相王知左右羽林衛大將軍事。○冬十月壬寅。太后西入關。辛酉。至京師。赦天下。改元。○十一月戊寅。改含元宮為大明宮。○天官侍郎安平崔玄暉。性介直。未嘗請謁。執政惡之。改文昌左丞。月餘。太后謂玄暉曰。自卿改官以來。聞令史設齋自慶。此欲盛為姦貪耳。今還卿舊任。乃復拜天官侍郎。仍賜綵七十段。○以主客郎中郭元振為涼州都督。隴右諸軍大使。先是涼州南北境。不過四百餘里。突厥吐蕃。頻歲奄至城下。百姓苦之。元振始於南境峽口。置和戎城。北境磧中。置白亭軍。控其衝要。拓州境千五百里。自是寇不復至。城下。元振又令甘州刺史李漢通。開置屯田。盡水陸之利。舊涼州粟麥。斛至數千。及漢通收率之後。一縑糴數十斛。積軍糧支數十年。元振善於撫御。在涼州五年。夷夏畏慕。令行禁止。牛羊被野。路不拾遺。

二年春正月乙酉。初設武舉。○突厥寇鹽夏二州。三月庚寅。突厥破石嶺。寇并州。以雍州長史薛季昶攝右臺大夫。充山東防禦軍大使。滄瀛幽易恒定等州諸軍。皆受季昶節度。夏四月。以幽州刺史張仁愿。專知幽平媯檀防禦。仍與季昶相知。以拒突厥。○五月壬申。蘇安恒復上疏曰。臣聞天下者神堯文武之天下也。陛下雖居正統。實因唐氏舊基。當今太子追廻年德俱盛。陛下貪其實位。而忘母子深恩。將何聖顏以見唐家宗廟。將何誥命以謁大帝墳

陵。陛下何故日夜積憂。不知鍾鳴漏盡。臣愚以為天意人事。還歸李家。陛下雖安天位。殊不知物極則反。器滿則傾。臣何惜一朝之命。而不安萬乘之國哉。太后亦不之罪。○乙未。以相王為并州牧。充安北道行軍元帥。以魏元忠為之副。○六月壬戌。召神都留守韋巨源詣京師。以副留守李嶠代之。○秋七月甲午。突厥寇代州。○司僕卿張昌宗兄弟貴盛。執傾朝野。八月戊午。太子相王太平公主上表。請封昌宗為王。制不許。壬戌。又請。乃賜爵鄴國公。○敕自今。有告言楊州及豫博餘黨。一無所問。內外官司。無得為理。○九月乙丑朔。日有食之。不盡如鉤。神都見其既。○壬申。突厥寇忻州。○己卯。吐蕃遣其臣論彌薩來求和。○庚辰。以太子賓客武三思為大谷道大總管。洛州長史敬暉為副。辛巳。又以相王且為并州道元帥。三思與武攸宜。魏元忠為之副。姚元崇為長史。司禮少卿鄭杲為司馬。然竟不行。○癸未。宴論彌薩於麟德殿。時涼州都督唐休璟入朝。亦預宴。彌薩屢窺之。太后問其故。對曰。洪源之戰。此將軍猛厲無敵。故欲識之。太后擢休璟為右武威金吾二衛大將軍。休璟練習邊事。自碣石以西。踰四鎮。綿互萬里。山川要害。皆能記之。○冬十月甲辰。天官侍郎同平章事顧琮薨。○戊申。吐蕃贊普將萬餘人寇茂州。都督陳大慈與之四戰。皆破之。斬首千餘級。○十一月辛未。監察御史魏靖上疏。以為陛下既知來俊臣之姦。處以極法。乞詳覆俊臣等所推大獄。伸其枉濫。太后乃命監察御史蘇頲。按覆俊臣等舊獄。由是雪免者甚衆。頲之曾孫也。○戊子。太后祀南郊。赦天下。○十二月甲午。以魏元忠為安東道安撫大使。羽林衛大將軍李多祚檢校幽州都督。右羽林衛將軍薛訥。左武衛將軍駱務整為之副。○戊申。置北庭都護府於庭州。侍御史張循憲為河東採訪使。有疑事不能決。病之。問侍吏曰。此有佳客可與議事者乎。吏言前平鄉尉猗氏張嘉貞。有異才。循憲具見。詢以事。嘉貞為條析理分。莫不洗然。循憲因請為奏。皆意所未及。循憲還見太后。太后善其奏。循憲具言嘉貞所為。且請以己之

官授之。太后曰：朕寧無一官自進賢邪？因召嘉貞入見內殿，與語大悅，即拜監察御史，擢循憲司勳郎中，賞其得人也。

三年春三月壬戌朔，日有食之。○夏四月，吐蕃遣使獻馬千匹，金二千兩，以求昏。○閏月丁丑，命韋安石留守神都。○己卯，改文昌臺爲中臺，以中臺左丞李嶠知納言事。○新羅王金理洪卒，遣使立其弟崇基爲王。○六月辛酉，突厥默啜遣其臣莫賀于來，請以女妻皇太子之子。○寧州大水，溺殺二千餘人。○秋七月癸卯，以正諫大夫朱敬則同平章事。○戊申，以相王旦爲雍州牧。○庚戌，以夏官尙書檢校涼州都督唐休璟同鳳閣鸞臺三品，時突騎施酋長烏質勒與西突厥諸部相攻。○安西道絕，太后命休璟與諸宰相議其事，頃之奏上。太后即依其議施行。後十餘日，安西諸州請兵應接，程期一如休璟所畫。太后謂休璟曰：恨用卿晚，謂諸宰相曰：休璟練習邊事，卿曹十不當一。時西突厥可汗斛瑟羅用刑殘酷，諸部不服，烏質勒本隸斛瑟羅，號莫賀達干，能撫其衆，諸部歸之，斛瑟羅不能制，烏質勒置都督二十員，各將兵七千人屯碎葉西北，後攻陷碎葉，徙其牙帳居之，斛瑟羅部衆離散，因入朝，不敢復還，烏質勒悉併其地。○九月庚寅朔，日有食之。○初，左臺大夫同鳳閣鸞臺三品魏元忠爲洛州長史，洛陽令張昌儀恃諸兄之執，每牙直上長史聽事，元忠到官叱下之，張易之奴暴亂都市，元忠杖殺之，及爲相，太后召易之弟岐州刺史昌期，欲以爲雍州長史，對仗問宰相曰：誰堪雍州者？元忠對曰：今之朝臣無以易薛季昶，太后曰：季昶久任京府，朕欲別除一官，昌期何如？諸相皆曰：陛下得人矣。元忠獨曰：昌期不堪，太后問其故，元忠曰：昌期少年不閑吏事，曩在岐州戶口逃亡且盡，雍州帝京事任繁劇，不若季昶彊幹習事，太后默然而止。元忠又嘗面奏，臣自先帝以來蒙被恩渥，今承乏宰相，不能盡忠死節，使小人在側，臣之罪也。太后不悅，由是諸張深怨之。司禮丞高戡，太平公主之所愛也，會太后不豫，張昌宗

恐太后一日晏駕，爲元忠所誅，乃譖元忠與戡私議云：太后老矣，不若挾太子爲久長。太后怒，下元忠獄，將使與昌宗廷辨之。昌宗密引鳳閣舍人張說，賂以美官，使證元忠，說許之。明日太后召太子相王及諸宰相，使元忠與昌宗參對，往復不決。昌宗曰：張說聞元忠言，請召問之。太后召說，說將入，鳳閣舍人南和宋璟謂說曰：名義至重，鬼神難欺，不可黨邪陷正，以求苟免，若獲罪流竄，其榮多矣。若事有不測，璟當叩閣力爭，與子同死，努力爲之。萬代瞻仰，在此舉也。殿中侍御史濟源張廷珪曰：朝聞道夕死可矣。左史劉知幾曰：無污青史，爲子孫累。及入，太后問之，說未對，元忠懼，謂說曰：張說欲與昌宗共羅織魏元忠邪？說叱之曰：元忠爲宰相，何乃效委巷小人之言？昌宗從傍迫趣說，使速言，說曰：陛下視之，在陛下前，猶逼臣如是，況在外乎？臣今對廣朝，不敢不以實對，臣實不聞元忠有是言，但昌宗逼臣，使誣證之耳。易之昌宗遽呼曰：張說與魏元忠同反。太后問其狀，對曰：說嘗謂元忠爲伊周，伊尹放太甲，周公攝王位，非欲反而何？說曰：易之兄弟小人，徒聞伊周之語，安知伊周之道？曰者元忠初衣紫，臣以郎官往賀，元忠語客曰：無功受寵，不勝慙懼。臣實言曰：明公居伊周之任，何愧三品？彼伊尹周公皆爲臣至忠，古今慕仰，陛下用宰相，不使學伊周，當使學誰邪？且臣豈不知今日附昌宗，立取台衡，附元忠，立致族滅，但臣畏元忠冤魂，不敢誣之耳。太后曰：張說反覆小人，宜并繫治之。它日更引問，說對如前。太后怒，命宰相與河內王武懿宗共鞠之。說所執如初。朱敬則抗疏理之曰：元忠素稱忠正，張說所坐無名，若令抵罪，失天下望。蘇安恒亦上疏，以爲陛下革命之初，人以爲納諫之主，暮年以來，人以爲受佞之主，自元忠下獄，里巷恟恟，皆以爲陛下委信姦宄，斥逐賢良，忠臣烈士皆撫髀於私室，而箝口於公朝，畏廷易之等意，徒取死而無益，方今賦役煩重，百姓凋弊，重以讒慝專恣，刑賞失中，竊恐人心不安，別生它變，爭鋒於朱雀門內，問鼎於大明殿前，陛下將何以謝之？何以禦之？易之等見其疏，

大怒欲殺之。賴朱敬則及鳳閣舍人桓彥範著作郎陸澤魏知古保救得免。丁酉，貶魏元忠爲高要尉。戡說皆流嶺表。元忠辭曰：言於太后曰：臣老矣，今向嶺南，十死一生，陛下它日必有思臣之時。太后問其故。時易之、昌宗皆侍側，元忠指之曰：此二小兒，終爲亂階，易之等下殿叩膺自擲，稱冤。太后曰：元忠去矣。殿中侍御史景城王峻復奏申理元忠，宋璟謂之曰：魏公幸已得全，今子復冒威怒，得無狼狽乎？峻曰：魏公以忠獲罪，峻爲義所激，顛沛無恨。璟歎曰：璟不能申魏公之枉，深負朝廷矣。太子僕崔貞慎等八人，餞元忠於郊外，易之詐爲告密人，柴明狀稱貞慎等與元忠謀反。太后使監察御史丹徒馬懷素鞫之，謂懷素曰：茲事皆實，略問速以聞。頃之中使督趣者數四，曰：反狀昭然，何稽留如此？懷素請柴明對質，太后曰：我自不知柴明處，但據狀鞫之。安用告者？懷素據實以聞，太后怒曰：卿欲縱反者邪？對曰：臣不敢縱反者，元忠以宰相謫官，貞慎等以親故追送，若誣以爲反，臣實不敢。昔欒布奏事，彭越頭下，漢祖不以爲罪，況元忠之刑未如彭越，而陛下欲誅其送者乎？且陛下操生殺之柄，欲加之罪，取決聖衷，可矣。若命臣推鞫，臣不敢不以實聞。太后曰：汝欲全不罪邪？對曰：臣智識愚淺，實不見其罪。太后意解，貞慎等由是獲免。太后嘗命朝貴宴集，易之兄弟皆位在宋璟上，易之素憚璟，欲悅其意，虛位揖之曰：公方今第一人，何乃下坐？璟曰：才劣位卑，張卿以爲第一，何也？天官侍郎鄭杲謂璟曰：中丞奈何卿五郎？璟曰：以官言之，正當爲卿，足下非張卿家奴，何郎之有？舉坐悚惕。時自武三思以下，皆謹事易之兄弟，璟獨不爲之禮。諸張積怒，常欲中傷之。太后知之，故得免。○丁未，以左武衛大將軍武攸宜充西京留守。○冬十月丙寅，車駕發西京，乙酉至神都。○十一月，突厥遣使謝許昏，丙申，宴於宿羽臺。太子預焉，宮尹崔神慶上疏，以爲今五品以上，所以佩龜者，爲別救徵召，恐有詐妄，內出龜合，然後應命，況太子國本，古來徵召，皆用玉契，此誠重慎之極也。昨緣突厥使見太子應預朝參，直有文符下

宮，曾不降敕處分。臣愚謂太子非朔望朝參，應別召者，望降墨敕及王契，太后甚然之。○始安獠歐陽倩，擁衆數萬，攻陷州縣，朝廷思得良吏以鎮之，朱敬則稱司封郎中裴懷古有文武才，制以懷古爲桂州都督，仍充招慰討擊使。懷古纔及嶺上，飛書示以禍福，倩等迎降。且言爲吏所侵逼，故舉兵自救耳。懷古輕騎赴之，左右曰：夷獠無信，不可忽也。懷古曰：吾仗忠信，可通神明，而況人乎？遂詣其營，賊衆大喜，悉歸所掠貨財，諸洞酋長素持兩端者，皆來疑附。嶺外悉定。○是歲，分命使者以六條察州縣。○吐蕃南境諸部皆叛，贊普器弩悉弄自將擊之。卒於軍中，諸子爭立，久之，國人立其子棄隸，踏贊爲贊普，生七年矣。四年春正月丙申，冊拜右武衛將軍阿史那懷道爲西突厥十姓可汗。懷道，斛瑟羅之子也。○丁未，毀三陽宮，以其材作興泰宮於萬安山。二宮皆武三思建議爲之，請太后，每歲臨幸，功費甚廣，百姓苦之。左拾遺盧藏用上疏，以爲左右近臣，多以順意爲忠，朝廷具僚，皆以犯忤爲戒，致陛下不知百姓失業，傷陛下之仁。陛下誠能以勞人爲辭，發制罷之，則天下皆知陛下苦己而愛人也，不從。藏用承慶之弟孫也。○壬子，以天官侍郎韋嗣立爲鳳閣侍郎，同平章事。○夏，官侍郎鳳閣鸞臺三品李迥秀，頗受賄賂，監察御史馬懷素劾奏之。二月癸亥，迥秀貶廬州刺史。○壬申，正諫大夫同平章事朱敬則，以老疾致仕，敬則爲相，以用人爲先，自餘細務，不之視。○太后嘗與宰相議，及刺史縣令，三月己丑，李嶠、唐休璟等奏，竊見朝廷物議，遠近人情，莫不重內官，輕外職，每除授收伯，皆再三披訴，比來所遣外任，多是貶累之人，風俗不澄，寔由於此。望於臺閣寺監，妙簡賢良，分典大州，共康庶績。臣等請輟近侍，率先具僚，太后命書名探之，得韋嗣立及御史大夫楊再思等二十人。癸巳，制各以本官檢校刺史，嗣立爲汴州刺史，其後政績可稱者，唯常州刺史薛謙光、徐州刺史司馬鍾而已。○丁亥，徙平恩王重福爲譙王。○以夏官侍郎宗楚客同平章事。○鳳閣侍郎同鳳閣鸞臺三品

蘇味道謁歸葬其父制州縣供葬事味道因之侵毀鄉人墓田役使過度監察御史蕭至忠劾奏之左遷坊州刺史至忠引之玄孫也○夏四月壬戌同鳳閣鸞臺三品韋安石知納言李嶠知內史事○太后幸興泰宮○太后復稅天下僧尼作大像於白司馬阪令春官尙書武收寧檢校糜費巨億李嶠上疏以爲天下編戶貧弱者衆造像錢見有一十七萬餘緡若將散施人與一千濟得一十七萬餘戶拯飢寒之弊省勞役之勤順諸佛慈悲之心善聖君亭育之意人神胥悅功德無窮方作過後因緣豈如在果報監察御史張廷珪上疏諫曰臣以時政論之則宜先邊境蓄府庫養人力以釋教論之則宜救苦厄滅諸相崇無爲伏願陛下察臣之愚行佛之意務以理爲上不以人廢言太后爲之罷役仍召見廷珪深賞慰之○鳳閣侍郎同鳳閣鸞臺三品姚元崇以母老固請歸侍六月辛酉以元崇行相王府長史秩位竝同三品○乙丑以天官侍郎崔玄暉同平章事○召鳳閣侍郎同平章事檢校汴州刺史韋嗣立赴興泰宮○丁丑以李嶠同鳳閣鸞臺三品嶠自請解內史○壬午以相王府長史姚元崇兼知夏官尙書同鳳閣鸞臺三品○秋七月丙戌以神都副留守楊再思爲內史再思爲相專以諂媚取容司禮少卿張同休易之之兄也嘗召公卿宴集酒酣戲再思曰楊內史面似高麗再思欣然卽剪紙帖巾反披紫袍爲高麗舞舉坐大笑時人或譽張昌宗之美曰六郎面似蓮花再思獨曰不然昌宗問其故再思曰乃蓮花似六郎耳○甲午太后還宮○乙未司禮少卿張同休汴州刺史張昌期尙方少監張昌儀皆坐贓下獄命左右臺共鞠之丙申敕張易之張昌宗作威作福亦命同鞠辛丑司刑正賈敬言奏張昌宗強市人田應徵銅二十斤制可乙巳御史大夫李承嘉中丞桓彥範奏張同休兄弟贓共四千餘緡張昌宗法應免官昌宗奏臣有功於國所犯不至免官太后問諸宰相昌宗有功乎楊再思曰昌宗合神丹聖躬服之有驗此莫大之功太后悅敕昌宗罪復其官左補闕戴令言作兩

脚狐賦以譏再思再思出令言爲長社令○丙午夏官侍郎同平章事宗楚客有罪左遷原州都督充靈武道行軍大總管○癸丑張同休貶岐山丞張昌儀貶博望丞鸞臺侍郎知納言事同鳳閣鸞臺三品韋安石舉奏張易之等罪敕付安石及右庶子同鳳閣鸞臺三品唐休璟鞠之未竟而事變八月甲寅以安石兼檢校揚州刺史庚申以休璟兼幽營都督安東都護休璟將行密言於太子曰一張恃寵不臣必將爲亂殿下宜備之○相王府長史兼知夏官尙書事同鳳閣鸞臺三品姚元崇上言臣事相王不宜典兵馬臣不敢愛死恐不益於王辛酉改春官尙書餘如故元崇字元之時突厥叱列元崇反太后命元崇以字行○突厥默啜旣和親戊寅始遣淮陽王武延秀還○九月壬子以姚元之充靈武道行軍大總管辛酉以元之爲靈武道安撫大使元之將行太后令舉外司堪爲宰相者對曰張柬之沈厚有謀能斷大事且其人已老惟陛下急用之冬十月甲戌以秋官侍郎張柬之同平章事時年且八十矣○乙亥以韋嗣立檢校魏州刺史餘如故○壬午以懷州長史河南房融同平章事○太后命宰相各舉堪爲員外郎者韋嗣立薦廣武令岑羲曰但恨其伯父長倩爲累太后曰苟或有才此何所累遂拜天官員外郎由是諸緣坐者始得進用○十一月丁亥以天官侍郎韋承慶爲鳳閣侍郎同平章事○癸卯成均祭酒同鳳閣鸞臺三品李嶠罷爲地官尙書○十二月甲寅敕大足已來新置官竝停○丙辰鳳閣侍郎同平章事韋嗣立罷爲成均祭酒檢校魏州刺史如故以兄承慶入相故也○太后寢疾居長生院宰相不得見者累月惟張易之昌宗侍側疾少閒崔玄暉奏言皇太子相王仁明孝友足侍湯藥宮禁事重伏願不令異姓出入太后曰德卿厚意易之昌宗見太后疾篤恐禍及己引用黨援陰爲之備屢有人爲飛書及勝其書於通衢云易之兄弟謀反太后皆不問辛未許州人楊元嗣告昌宗嘗召術士李弘泰占相弘泰言昌宗有天子相勸於定州造佛寺則天下歸心太后命韋承

慶及司刑卿崔神慶。御史中丞宋璟。鞠之神慶。神慶之弟也。承慶神慶。奏言。昌宗欺稱弘泰之語。尋已奏聞。準法首原。弘泰妖言。請收行法。璟與大理丞封全禎奏。昌宗寵榮如是。復召術士占相。志欲何求。弘泰稱。筮得純乾天子之卦。昌宗儻以弘泰為妖妄。何不執送有司。雖云奏聞。終是包藏禍心。法當處斬。破家請收付獄。窮理其罪。太后久之不應。璟又曰。儻不即收繫。恐其搖動衆心。太后曰。卿且停推。俟更檢詳文狀。璟退。左拾遺江都李邕進曰。向觀宋璟所奏。志安社稷。非為身謀。願陛下可其奏。太后不聽。尋敕璟。楊州推按。又敕璟。按幽州都督屈突仲翔。賊污。又敕璟。副李嶠。安撫隴蜀。璟皆不肯行。奏曰。故事。州縣官有罪。品高則侍御史。卑則監察御史。按之中丞。非軍國大事。不當出使。今隴蜀無變。不識陛下遣臣出外。何也。臣皆不敢奉制。司刑少卿桓彥範上疏。以為昌宗無功。荷寵而包藏禍心。自招其咎。此乃皇天降怒。陛下不忍加誅。則違天不祥。且昌宗既云奏訖。則不當更與弘泰往還。使之求福。禳災。是則初無悔心。所以奏者。擬事發則云先已奏陳。不發則俟時為逆。此乃奸臣詭計。若云可捨。誰為可刑。況事已再發。陛下皆釋不問。使昌宗益自負得計。天下亦以為天命不死。此乃陛下養成其亂也。苟逆臣不誅。社稷亡矣。請付鸞臺鳳閣三司。考竟其罪。疏奏。不報。崔玄暉亦屢以為言。太后令法司議其罪。玄暉弟司刑少卿昇處以大辟。宋璟復奏。收昌宗下獄。太后曰。昌宗已自奏聞。對曰。昌宗為飛書所逼。窮而自陳。執非得已。且謀反大逆。無容首免。若昌宗不伏大刑。安用國法。太后溫言解之。璟聲色逾厲曰。昌宗分外承恩。臣知言出禍從。然義激於心。雖死不恨。楊再思恐其忤旨。遽宣敕令出。璟曰。聖主在此。不煩宰相。擅宣敕命。太后乃可其奏。遣昌宗詣臺。璟庭立而按之。事未畢。太后遣中使召昌宗。特赦赦之。璟歎曰。不先擊小子。腦裂負此恨矣。太后乃使昌宗詣璟謝。璟拒不見。左臺中丞桓彥範。右臺中丞東光袁恕己。共薦詹事司直陽嶠為御史。楊再思曰。嶠不樂搏擊之任。如何。彥範曰。為官

擇人。豈必待其所欲。所不欲者。尤須與之。所以長難進之風。抑躁求之路。乃擢為右臺侍御史。嶠休之。之玄孫也。先是。李嶠。崔玄暉。奏往屬革命之時。人多逆節。遂致刻薄之吏。恣行酷法。其周興等所劾。破家者。竝請雪免。司刑少卿桓彥範。又奏陳之。表疏前後十上。太后乃從之。

中宗大和大聖大昭孝皇帝上

神龍元年春正月壬午朔。赦天下。改元。自文明以來。得罪者。非楊豫博三州。及諸反逆魁首。咸赦除之。○太后疾甚。麟臺監張易之。春官侍郎張昌宗。居中用事。張東之。崔玄暉。與中臺右丞敬暉。司刑少卿桓彥範。相王府司馬袁恕己。謀誅之。東之謂右羽林衛大將軍李多祚曰。將軍今日富貴。誰所致也。多祚泣曰。大帝也。東之曰。今大帝之子。為二豎所危。將軍不思報大帝之德乎。多祚曰。苟利國家。惟相公處分。不敢顧身及妻子。因指天地以自誓。遂與定謀。初東之與荆府長史閔鄉楊元琰相代。同泛江至中流。語及太后革命事。元琰慨然有匡復之志。及東之為相。引元琰為右羽林將軍。謂曰。君頗記江中之言乎。今日非輕授也。東之又用彥範。暉。及右散騎侍郎李湛。皆為左右羽林將軍。委以禁兵。易之等疑懼。乃更以其黨武攸宜為右羽林大將軍。易之等乃安。俄而姚元之自靈武至。東之彥範。相謂曰。事濟矣。遂以其謀告之。彥範以事白其母。母曰。忠孝不兩全。先國後家。可也。時太子於北門起居。彥範暉謁見。密陳其策。太子許之。癸卯。東之。玄暉。彥範。與左威衛將軍薛思行等。帥左右羽林兵五百餘人。至玄武門。遣多祚。湛。及內直郎駙馬都尉安陽王同皎。詣東宮。迎太子。太子疑不。出。同皎曰。先帝以神器付殿下。橫遭幽廢。人神同憤。二十三年矣。今天誘其衷。北門南牙。同心協力。以誅凶豎。復李氏社稷。願殿下。至玄武門。以副衆望。太子曰。凶豎誠當夷滅。然上

體不安。得無驚惶。諸公更為後圖。李湛曰。諸將相不顧家族。以狗社稷。殿下奈何欲納之。鼎鑊乎。請殿下自出止之。太子乃出。同皎扶抱太子。上馬。從至玄武門。斬關而入。太后在迎仙宮。東之等。斬易之。昌宗於廡下。進至太后所寢長生殿。環繞侍衛。太后驚起。問曰。亂者誰邪。對曰。張易之。昌宗謀反。臣等奉太子令。誅之。恐有漏洩。故不敢以聞。稱兵宮禁。罪當萬死。太后見太子曰。乃汝邪。小子既誅。可還東宮。彥範進曰。太子安得更歸。昔天皇以愛子。託陛下。今年齒已長。久居東宮。天意人心。久思李氏羣臣。不忘太宗天皇之德。故奉太子誅賊臣。願陛下傳位太子。以順天人之望。李湛義府之子也。太后見之。謂曰。汝亦為誅易之將軍邪。我於汝父子。不薄。乃有今日。湛慙不能對。又謂崔玄暉曰。它人皆因人以進。惟卿朕所自擢。亦在此邪。對曰。此乃所以報陛下之大德。於是收張昌期。同休。昌儀。皆斬之。與易之。昌宗。梟首天津南。是日。袁恕己從相王。統南牙兵。以備非常。收韋承慶。房融。及司禮卿崔神慶。繫獄。皆易之之黨也。初。昌儀新作第。甚美。逾於王主。或夜書其門曰。一日絲能作幾日。絡滅去。復書之。如是六七。昌儀取筆。注其下曰。一日亦足。乃止。甲辰。制太子監國。赦天下。以袁恕己為鳳閣侍郎。同平章事。分遣十使齎璽書。宣慰諸州。乙巳。太后傳位於太子。丙午。中宗即位。赦天下。惟張易之黨不原。其為周興等所枉者。咸令清雪。子女配沒者。皆免之。相王加號安國相。王拜太尉。同鳳閣鸞臺三品。太平公主加號鎮國太平公主。皇族先配沒者。子孫皆復屬籍。仍量敍官爵。○丁未。太后徙居上陽宮。李湛留宿衛。戊申。帝帥百官詣上陽宮。上太后尊號。曰則天大聖皇帝。庚戌。以張柬之為夏官尚書。同鳳閣鸞臺三品。崔玄暉為內史。袁恕己同鳳閣鸞臺三品。敬暉。桓彥範。皆為納言。竝賜爵郡公。李多祚。賜爵遼陽郡王。王同皎為右千牛將軍。琅邪郡公。李湛為右羽林大將軍。趙國公。自餘官賞有差。張柬之等之討張易之也。殿中監田歸道將千騎宿玄武門。敬暉遣使就索千騎。歸道先不預謀。拒而不與。事寧。暉欲

誅之。歸道以理自陳。乃免歸私第。帝嘉其忠壯。召拜太僕少卿。

資治通鑑卷第二百七 唐紀 中宗大和大聖大昭孝皇帝上神龍元年

資治通鑑卷第二百七

資治通鑑卷第二百八

唐紀二十四

中宗大和大聖大昭孝皇帝中

神龍元年二月辛亥帝帥百官詣上陽宮問太后起居自是每十日一往○甲寅復國號曰唐郊廟社稷陵寢百官旗幟服色文字皆如永淳以前故事復以神都爲東都北都爲并州老君爲玄元皇帝○乙卯鳳閣侍郎同平章事韋承慶貶高要尉正諫大夫同平章事房融除名流高州司禮卿崔神慶流欽州楊再思爲戶部尚書同中書門下三品西京留守太后之遷上陽宮也太僕卿同中書門下三品姚元之獨嗚咽流涕桓彥範張柬之謂曰今日豈公涕泣時邪恐公禍由此始元之曰元之事則天皇帝久作此辭遠悲不能忍且元之前日從公誅姦逆人臣之義也今日別舊君亦人臣之義也雖獲罪實所甘心是日出爲亳州刺史○甲子立妃韋氏爲皇后赦天下追贈后父玄貞爲上洛王母崔氏爲妃左拾遺賈虛己上疏以爲異姓不王古今通制今中興之始萬姓喁喁以觀陛下之政而先王后族非所以廣德美於天下也且先朝贈后父太原王殷鑒不遠須防其漸若以恩制已行宜令皇后固讓則益增謙沖之德矣不聽初韋后生邵王重潤長寧安樂二公主上之遷房陵也安樂公主生於道中上特愛之上在房陵與后同幽閉備嘗艱危情愛甚篤上每聞敕使至輒惶恐欲自殺后止之曰禍福無常寧失一死何遽如是上嘗與后私誓曰異時幸復見天日當惟卿所欲不相禁禦及再爲皇后遂干預朝政如武后在高宗之世桓彥範上表以爲易稱無攸遂

在中饋貞吉書稱牝雞之辰惟家之索伏見陛下每臨朝皇后必施帷幔坐殿上預聞政事臣竊觀自古帝王未有與婦人共政而不破國亡身者也且以陰乘陽遠天也以婦陵夫違入也伏願陛下覽古今之戒以社稷蒼生爲念令皇后專居中宮治陰教勿出外朝干國政先是胡僧慧範以妖妄遊權貴之門與張易之兄弟善韋后亦重之及易之誅復稱慧範預其謀以功加銀青光祿大夫賜爵上庸縣公出入宮掖上數微行幸其舍彥範復表言慧範執左道以亂政請誅之上皆不聽○初武后誅唐宗室有才德者先死惟吳王恪之子鬱林侯千里編躁無才又數獻符瑞故獨得免上即位立爲成王拜左金吾大將軍武后所誅唐諸王妃主駙馬等皆無人葬埋子孫或流竄嶺表或拘囚歷年或逃匿民間爲人傭保至是制州縣求訪其柩以禮改葬追復官爵召其子孫使之承襲無子孫者爲擇後置之既而宗室子孫相繼而至皆召見涕泣舞蹈各以親疎襲爵拜官有差○二張之誅也洛州長史薛季昶謂張柬之敬暉曰二凶雖除產祿猶在去艸不去根終當復生二人曰大事已定彼猶机上肉耳夫何能爲所誅已多不可復益也季昶歎曰吾不知死所矣朝邑尉武強劉幽求亦謂桓彥範敬暉曰武三思尚存公輩終無葬地若不早圖噬臍無及不從上女安樂公主適三思子崇訓上官婉兒儀之女孫也儀死沒入掖庭辯慧善屬文明習吏事則天愛之自聖曆以後百司表奏多令參決及上即位又使專掌制命益委任之拜爲婕妤用事於中三思通焉故黨於武氏又薦三思於韋后引入禁中上遂與三思圖議政事張柬之等皆受制於三思矣上使韋后與三思雙陸而自居傍爲之點籌三思遂與后通由是武氏之執復振張柬之等數勸上誅諸武上不聽柬之等曰革命之際宗室諸李誅夷略盡今賴天地之靈陛下反正而武氏濫官僭爵安堵如故豈遠近所望邪願頗抑損其緣位以慰天下又不聽柬之等或撫牀歎憤或彈指出血曰主上昔爲英王時稱勇烈吾所以不誅諸武者欲使上

自誅之。以張天子之威耳。今反如此。事執已去。知復奈何。上數微服。幸武三思第。監察御史清河崔皎。密疏諫曰。國命初復。則天皇帝在西宮。人心猶有附會。周之舊臣。列居朝廷。陛下奈何輕有外遊。不察豫且之禍。上洩之。三思之黨切齒。丙寅。以太子賓客武三思為司空。同中書門下三品。○左散騎常侍譙王重福。上之庶子也。其妃張易之之甥。韋后惡之。譖於上。曰。重潤之死。重福為之也。由是貶濮州員外刺史。又改均州刺史。常令州司防守之。○丁卯。以右散騎常侍安定王武攸暨為司徒。定王。○辛未。相王固讓太尉。及知政事。許之。又立為皇太弟。相王固辭而止。○甲戌。以國子祭酒始平祝欽明同中書門下三品。黃門侍郎知侍中事。韋安石為刑部尚書。罷知政事。○丁丑。武三思。武攸暨。固辭新官爵。及政事。許之。並加開府儀同三司。○立皇子義興王重俊為衛王。北海重茂為溫王。仍以重俊為洛州牧。○三月。甲申。制。文明已來。破家子孫。皆復舊資。廢唯徐敬業。裴炎。不在免限。○丁亥。制。酷吏周興。來俊臣等。已死者。追奪官爵。存者。皆流嶺南惡地。○己丑。以袁恕己為中書令。○以安車徵鄭普思。尚衣奉御葉靜能。皆以妖妄。為上所信重。夏四月。墨敕。以普思為祕書監。靜能為國子祭酒。桓彥範。崔玄暉。固執不可。上曰。已用之。無容遽改。彥範曰。陛下初即位。下制云。政令皆依貞觀故事。貞觀中。魏徵。虞世南。顏師古。為祕書監。孔穎達為國子祭酒。豈普思靜能之比乎。庚戌。左拾遺李邕。上疏。以為詩三百。一言以蔽之。曰。思無邪。若有神仙。能令人不死。則秦始皇漢武帝得之矣。佛能為人福利。則梁武帝得之矣。堯舜所以為帝王首者。亦修人事而已。尊寵此屬。何補於國。上皆不聽。○上即位之日。驛召魏元忠於高要。丁卯。至都。拜衛尉卿。同平章事。○甲戌。以魏元忠為兵部尚書。韋安石為吏部尚書。李懷遠為右散騎常侍。唐休璟為輔國大將軍。崔玄暉。檢校益府長史。楊再思。檢校楊府長史。祝欽明為刑部尚書。並

同中書門下三品。元忠等皆以東宮舊僚。褒之也。○乙亥。以張柬之為中書令。○戊寅。追贈故邵王重潤為懿德太子。○五月壬午。遷周廟七主於西京崇尊廟。制武氏三代諱。奏事者皆不得犯。○乙酉。立太廟社稷於東都。○以張柬之等及武攸暨。武三思。鄭普思等十六人。皆為立功之人。賜以鐵券。自非反逆。各恕十死。○癸巳。敬暉等帥百官上表。以為五運迭興。事不兩大。天投革命之際。宗室誅竄殆盡。豈得與諸武並封。今天命惟新。而諸武封建如舊。竝居京師。開闢以來。未有斯理。願陛下為社稷計。順遐邇心。降其王爵。以安內外。上不許。敬暉等畏武三思之讒。以考功員外郎崔湜為耳目。伺其動靜。湜見上親三思而忌暉等。乃悉以暉等謀告三思。反為三思用。三思引為中書舍人。湜。仁師之孫也。先是。殿中侍御史南皮鄭愔。諸事二張。貶宣州司士參軍。坐賊亡入東都。私謁武三思。初見三思。哭甚哀。既而大笑。三思素貴重。甚怪之。愔曰。始見大王而哭。哀大王將戮死而滅族也。後乃大笑。喜大王之得愔也。大王雖得天子之意。彼五人。皆據將相之權。膽略過人。廢太后如反掌。大王自視。孰位與太后孰重。彼五人。日夜切齒。欲噬大王之肉。非盡大王之族。不足以快其志。大王不。去此五人。危如朝露。而晏然尚自以為泰山之安。此愔所以為大王寒心也。三思大悅。與之登樓。問自安之策。引為中書舍人。與崔湜。皆為三思謀主。三思與韋后。日夜譖暉等云。恃功專權。將不利於社稷。上信之。三思等因為上畫策。不若封暉等為王。罷其政事。外不失尊寵。功臣內實奪之權。上以為然。甲午。以侍中齊公敬暉為平陽王。桓彥範為扶陽王。中書令漢陽公張柬之為漢陽王。南陽公袁恕己為南陽王。特進同中書門下三品博陵公崔玄暉為博陵王。罷知政事。賜金帛鞍馬。令朝朔望。仍賜彥範姓韋氏。與皇后同籍。尋又以玄暉。檢校益州長史。知都督事。又改梁州刺史。三思令百官復修則天之政。不附武氏者。斥之。為五王所逐者。復之。大權盡歸三思矣。五王之請削武氏諸王也。求人為表。眾莫肯為。中書舍人岑

義爲之語甚激切。中書舍人偃師畢構次當讀表。辭色明厲。三思既得志。義改祕書少監。出構爲潤州刺史。易州刺史趙履溫。桓彥範之妻兄也。彥範之誅。二張稱履溫預其謀。召爲司農少卿。履溫以二婢遺彥範。及彥範罷政事。履溫復奪其婢。上嘉宋璟忠直。屢遷黃門侍郎。獨不見產祿之事乎。○以韋安石兼檢校中書令。魏元忠兼檢校侍中。又以李湛爲右散騎常侍。趙承恩爲光祿卿。楊元琰爲衛尉卿。先是。元琰知三思浸用事。請棄官爲僧。上不許。敬暉聞之。笑曰。使我早知勸上許之。髡去胡頭。豈不妙哉。元琰多鬚類胡。故暉戲之。元琰曰。功成名遂。不退將危。此乃由衷之請。非徒然也。暉知其意。瞿然不悅。及暉等得罪。元琰獨免。○上官婕妤勸韋后。襲則天故事。上表請天下士庶爲出母服喪三年。又請百姓年二十三爲丁。五十九免役。改易制度。以收時望。制皆許之。○癸卯。制降諸武。梁王三思爲德靜王。定王攸暨爲樂壽王。河內王懿宗等十二人。皆降爲公。以厭人心。○甲辰。以唐休璟爲左僕射。同中書門下三品。如故。豆盧欽望爲右僕射。○六月壬子。以左驍衛大將軍裴思說充靈武軍大總管。以備突厥。○癸亥。命右僕射豆盧欽望有軍國重事。中書門下可共平章。先是。僕射爲二宰相。其後多兼中書門下之職。午。前決朝政。午後決省事。至是。欽望專爲僕射。不敢預政事。故有是命。是後。專拜僕射者。不復爲宰相矣。又以韋安石爲中書令。魏元忠爲侍中。楊再思爲檢校中書令。○丁卯。耐孝敬皇帝於太廟。號義宗。○戊辰。洛水溢。流二千餘家。○秋七月辛巳。以太子賓客韋巨源同中書門下三品。西京留守如故。○特進漢陽王張柬之。表請歸襄州養疾。乙未。以柬之爲襄州刺史。不知州事。給全俸。○河南北十七州大水。八月戊申。以水災求直言。右衛騎曹參軍西河宋務光。上疏。以爲水陰類臣妾之象。恐後庭有干外朝之政者。宜杜絕其萌。今霖雨不止。乃閉坊門以禳之。至使里巷謂坊門爲宰相。言朝廷使之

燮。理陰陽也。又太子國本。宜早擇賢能而立之。又外戚太盛。如武三思等。宜解其機要。厚以祿賜。又鄭普思。葉靜能。以小技竊大位。亦朝政之蠹也。疏奉不省。○壬戌。追立妃趙氏爲恭皇后。孝敬皇帝妃裴氏爲哀皇后。○九月壬午。上祀昊天上帝。皇地祇于明堂。以高宗配。○初。上在房陵。州司制約甚急。刺史河東張知謇。靈昌崔敬嗣。獨待遇以禮。供給豐贍。上德之。擢知謇自貝州刺史爲左衛將軍。賜爵范陽公。敬嗣已卒。求得其子汪。嗜酒不堪釐職。除五品散官。○改葬上洛王韋玄貞。其儀皆如太原王故事。○癸巳。太子賓客同中書門下三品韋巨源。罷爲禮部尚書。以其從父安石爲中書令。故也。○以左衛將軍上邽紀處訥兼檢校太府卿。處訥娶武三思之妻姊。故也。○冬十月。命唐休璟留守京師。○癸亥。上幸龍門。乙丑。獵於新安而還。○辛未。以魏元忠爲中書令。楊再思爲侍中。○十一月戊寅。羣臣上皇帝尊號曰應天皇帝。皇后曰順天皇后。壬午。上與后謁太廟。赦天下。相王太平公主。加實封。皆滿萬戶。○己丑。上御洛城南樓。觀潑寒胡戲。清源尉呂元泰上疏。以爲謀時寒若。何必裸身揮水。鼓舞衢路。以索之。疏奏。不納。○壬寅。則天崩於上陽宮。年八十二。遺制。去帝號。稱則天大聖皇后。王蕭二族。及褚遂良。韓瑗。柳奭親屬。皆赦之。上居諒陰。以魏元忠攝冢宰三日。元忠素負忠直之望。中外賴之。武三思憚之。矯太后遺制。慰諭元忠。賜實封百戶。元忠捧制。感咽涕泗。見者曰。事去矣。○十二月丁卯。上始御同明殿。見羣臣。○太后將合葬乾陵。給事中嚴善思上疏。以爲乾陵玄宮。以石爲門。鐵錮其縫。今啓其門。必須鑄鑿。神明之道。體尚幽玄。動衆加功。恐多驚駭。況合葬非古。漢時諸陵。皇后多不合葬。魏晉已降。始有合葬者。望於乾陵之傍。更擇吉地爲陵。若神道有知。幽塗自當通會。若其無知。合之何益。不從。○是歲戶部奏。天下戶六百一十五萬。口三千七百一十四萬有奇。○二年春正月戊戌。以吏部尚書李嶠同中書門下三品。中書侍郎于惟謙同平章事。○閏月。

丙午制。太平。長寧。安樂。宣城。新都。定安。金城公主。竝開府置官屬。○武三思以敬暉桓彥範袁恕己尙在京師。忌之。乙卯。出爲滑洛豫三州刺史。○賜閩鄉僧萬回號法雲公。○甲戌。以突騎施酋長烏質勒爲懷德郡王。○二月。乙未。以刑部尙書韋巨源同中書門下三品。仍與皇后敘宗族。○丙申。僧慧範等九人。竝加五品階。賜爵郡縣公。道士史崇恩等。加五品階。除國子祭酒。同正。葉靜能。加金紫光祿大夫。○選左右臺及內外五品以上官二十人。爲十道巡察使。委之察吏撫人。薦賢直獄。二年一代。考其功罪。而進退之。易州刺史魏人姜師度。禮部員外郎馬懷素。殿中侍御史臨漳源乾曜。監察御史靈昌盧懷慎。衛尉少卿滎陽李傑。皆預焉。○三月。甲辰。中書令韋安石。罷爲戶部尙書。戶部尙書蘇瓌。爲侍中西京留守。瓌之父也。唐休璟致仕。○初。少府監丞弘農宋之問。及弟兗州司倉之遜。皆坐附會張易之。貶嶺南。逃歸東都。匿於友人光祿卿駙馬都尉王同皎家。同皎疾。武三思及韋后所爲。每與所親言之。輒切齒。之遜於簾下聞之。密遣其子曇。及甥校書郎李俊。告三思。欲以自贖。三思使曇。及撫州司倉冉祖雍。上書告同皎。與洛陽人張仲之。祖延慶。武當丞壽春周憬等。潛結壯士。謀殺三思。因勒兵詣闕。廢皇后。上命御史大夫李承嘉。監察御史姚紹之。按其事。又命楊再思。李嶠。韋巨源。參驗仲之。言三思罪狀。事連宮壺。再思。巨源。陽寐不聽。嶠與紹之。命反接送獄。仲之。還。顧言不已。紹之。命搃之。折其臂。仲之大呼曰。吾已負汝。死當訟汝於天。庚戌。同皎等皆坐斬。籍沒其家。周憬亡入比干廟中。大言曰。比干古之忠臣。知吾此心。三思與皇后淫亂。傾危國家。行當梟首都市。恨不及見耳。遂自剄。之問。之遜。曇。俊。祖雍。竝除京官。加朝散大夫。○武三思與韋后。日夜譖敬暉等不已。復左遷暉爲朗州刺史。崔玄暉爲均州刺史。桓彥範爲亳州刺史。袁恕己爲郢州刺史。與暉等同立功者。皆以爲黨與。坐貶。○大置員外官。自京司及諸州。凡二千餘人。宦官超遷七品以上。員外官者。又將千人。魏元忠自端州還。爲

相。不復彊諫。惟與時俯仰。中外失望。酸棗尉袁楚客。致書元忠。以爲主上新服厥命。惟新厥德。當進君子。退小人。以興大化。豈可安其榮寵。循默而已。今不早建太子。擇師傅而輔之。一失也。公主開府置僚屬。二失也。崇長緇衣。使遊走權門。借執納賂。三失也。俳優小人。盜竊品秩。四失也。有司選進賢才。皆以貨取。執求。五失也。寵進宦者。殆滿千人。爲長亂之階。六失也。王公貴戚。賞賜無度。競爲侈靡。七失也。廣置員外官。傷財害民。八失也。先朝宮女。得自便居外。出入無禁。交通請謁。九失也。左道之人。熒惑主聽。盜竊祿位。十失也。凡此十失。君侯不正。誰與正之哉。元忠得書。愧謝而已。○夏。四月。改贈后父韋玄貞爲鄴王。后四弟皆贈郡王。○己丑。左散騎常侍同中書門下三品李懷遠。致仕。○處士韋月將。上書告武三思。潛通宮掖。必爲逆亂。上大怒。命斬之。黃門侍郎宋璟奏。請推按。上益怒。不及整巾。屣履出側門。謂璟曰。朕謂已斬。乃猶未邪。命趨斬之。璟曰。人言中宮私於三思。陛下不問而誅之。臣恐天下必有竊議。固請按之。上不許。璟曰。必欲斬月將。請先斬臣。不然。臣終不敢奉詔。上怒少解。左御史大夫蘇珣。給事中徐堅。大理卿長安尹思貞。皆以爲方夏行戮。有違時令。上乃命與杖流嶺南。過秋分一日。平曉。廣州都督周仁軌。斬之。○御史大夫李承嘉。附武三思。詆尹思貞於朝。思貞曰。公附會奸臣。將圖不軌。先除忠臣。邪承嘉怒。劾奏思貞。出爲青州刺史。或謂思貞曰。公平日訥於言。及廷折承嘉。何其敏邪。思貞曰。物不能鳴者。激之則鳴。承嘉恃威權相陵。僕義不受屈。亦不知言之從何而至也。○武三思惡宋璟。出之。檢校貝州刺史。○五月。庚申。葬則天大聖皇后於乾陵。○武三思使鄭愔告朗州刺史敬暉。亳州刺史韋彥範。襄州刺史張柬之。郢州刺史袁恕己。均州刺史崔玄暉。與王同皎通謀。六月。戊寅。貶暉崖州司馬。彥範瀧州司馬。柬之新州司馬。恕己竇州司馬。玄暉白州司馬。竝員外置。仍長任。削其勳封。復彥範姓桓氏。○初。韋玄貞流欽州而卒。蠻酋審承基兄弟。逼取其女。妻崔氏。不與。承基等殺之。及

其四男洵、浩、洞、泚。上命廣州都督周仁軌使將兵二萬討之。承基等亡入海。仁軌追斬之。以其首祭崔氏墓。殺掠其部衆殆盡。上喜。加仁軌鎮國大將軍。充五府大使。賜爵汝南郡公。韋后隔簾拜仁軌。以父事之。及韋后敗。仁軌以黨與誅。○秋七月。戊申。立衛王重俊爲皇太子。太子性明果。而官屬率貴遊子弟。所爲多不法。左庶子姚珽屢諫不聽。珽璫之弟也。○丙寅。以李嶠爲中書令。○上將還西京。辛未。左散騎常侍李懷遠同中書門下三品。充東都留守。○武三思陰令人疏皇后穢行。勝於天津橋。請加廢黜。上大怒。命御史大夫李承嘉窮覈其事。承嘉奏言。敬暉。桓彥範。張柬之。袁恕己。崔玄暉。使人爲之。雖云廢后。實謀大逆。請族誅之。三思又使安樂公主。譖之於內侍御史鄭愷。言之於外。上命法司結竟。大理丞三原李朝隱。奏稱。暉等未經推鞠。不可遽就誅夷。大理丞裴談。奏稱。暉等宜據制書。處斬籍沒。不應更加推鞠。上以暉等嘗賜鐵券。許以不死。乃長流暉於瓊州。彥範於瀘州。柬之於瀧州。恕己於環州。玄暉於古州。子弟年十六以上。皆流嶺外。擢承嘉爲金紫光祿大夫。進爵襄武郡公。談爲刑部尚書。出李朝隱爲開喜令。三思又諷太子。上表。請夷暉等三族。上不許。中書舍人崔湜。說三思曰。暉等異日北歸。終爲後患。不如遣使。矯制殺之。三思問誰可使者。湜薦大理正周利用。利用先爲五王所惡。貶嘉州司馬。乃以利用攝右臺侍御史。奉使嶺外。比至。柬之玄暉已死。遇彥範於貴州。令左右縛之。曳於竹槎之上。肉盡至骨。然後杖殺。得暉。尚而殺之。恕己素服黃金。利用逼之。使飲野葛汁。盡數升不死。不勝毒憤。培地。爪甲殆。盡仍捶殺之。利用還。擢拜御史中丞。薛季昶累貶儋州司馬。飲藥死。三思既殺五王。權傾人主。常言。我不知代間。何者謂之善人。何者謂之惡人。但於我善者。則爲善人。於我惡者。則爲惡人耳。時兵部尚書宗楚客。將作大匠宗晉卿。太府卿紀處訥。鴻臚卿甘元東。皆爲三思羽翼。御史中丞周利用。侍御史冉祖雍。太僕丞李俊。光祿丞宋之遜。監察御史姚紹之。皆爲三思耳目。時人謂之五

狗。○九月。戊午。左散騎常侍同中書門下三品李懷遠薨。○初。李嶠爲吏部侍郎。欲樹私恩。再求入相。奏大置員外官。廣引貴教親識。既而爲相。銓衡失序。府庫減耗。乃更表言。濫官之弊。且請遜位。上慰諭不許。○冬十月。己卯。車駕發東都。以前檢校并州長史張仁愿。檢校左屯衛大將軍。兼洛州長史。戊戌。車駕至西京。十一月。乙巳。赦天下。○丙辰。以蒲州刺史竇從一爲雍州刺史。從一。德玄之子也。初名懷貞。避皇后父諱。更名從一。多諂附權貴。太平公主與僧寺爭碾磑。雍州司戶李元紘判歸僧寺。從一大懼。亟命元紘改判。元紘大署判後曰。南山可移。此判無動。從一不能奪。元紘道廣之子也。○初。祕書監鄭普思。納其女於後宮。監察御史靈昌崔日用。劾奏之。上不聽。普思聚黨於雍岐二州。謀作亂。事覺。西京留守蘇瓌。收繫窮治之。普思妻第五氏。以鬼道得幸於皇后。上敕瓌勿治。及車駕還西京。瓌廷爭之。上抑瓌而佑普思。侍御史范獻忠進曰。請斬蘇瓌。上曰。何故。對曰。瓌爲留守大臣。不能先斬普思。然後奏聞。使之熒惑聖聽。其罪大矣。且普思反狀明白。而陛下曲爲申理。臣聞王者不死。殆謂是乎。臣願先賜死。不能北面事普思。魏元忠曰。蘇瓌長者。用刑不枉。普思法當死。上不得已。戊午。流普思於儋州。餘黨皆伏誅。○十二月。己卯。突厥默啜寇鳴沙。靈武軍大總管沙吒忠義。與戰軍敗。死者六千餘人。辛巳。突厥進寇原會等州。掠隴右牧馬萬餘匹而去。免忠義官。○安西大都護郭元振。詣突騎施烏質勒牙帳。議軍事。天大風雪。元振立於帳前。與烏質勒語。久之。雪深。元振不移足。烏質勒老不勝寒。會罷而卒。其子娑葛勒兵將攻元振。副使御史中丞解琬知之。勸元振夜逃去。元振曰。吾以誠心待人。何所疑懼。且深在寇庭。逃將安適。安臥不動。明旦。入哭甚哀。娑葛感其義。待元振如初。戊戌。以娑葛襲嘔鹿州都督。懷德王。○安樂公主恃寵驕恣。賣官鬻獄。教傾朝野。或自爲制敕。掩其文。令上署之。上笑而從之。竟不視也。自請爲皇太女。上雖不從。亦不譴責。

景龍元年春正月庚戌制以突厥默啜寇邊命內外官各進平突厥之策右補闕盧備上疏以爲郤縠悅禮樂敦詩書爲晉元帥杜預射不穿札建平吳之勳是知中權制謀不取一夫之勇如沙吒忠義驍將之材本不足以當大任又鳴沙之役主將先逃宜正邦憲賞罰既明敵無不服又邊州刺史宜精擇其人使之蒐卒乘積資糧來則禦之去則備之去歲四方旱災未易興師當理內以及外綏近以來遠俟倉廩實士卒練然後大舉以討之上善之○二月丙戌上遣武攸暨武三思詣乾陵祈雨既而雨降上喜制復武氏崇恩廟及吳陵順陵因名鄴王廟曰褒德陵曰榮先又詔崇恩廟齋郎取五品子充太常博士楊孚曰太廟皆取七品已下子爲齋郎今崇恩廟取五品子未知太廟當如何上命太廟亦準崇恩廟孚曰以臣準君猶爲僭逆況以君準臣乎上乃止庚寅敕改諸州中興寺觀爲龍興自今奏事不得言中興右補闕權若訥上疏以爲天地日月等字皆則天能事賊臣敬暉等輕紊前規今削之無益於淳化存之有光於孝理又神龍元年制書一事以上竝依貞觀故事豈可近捨母儀遠尊祖德疏奏手制褒美○三月庚子吐蕃遣其大臣悉薰熱入貢○夏四月辛巳以上所養雍王守禮女金城公主妻吐蕃贊普○五月戊戌以左屯衛大將軍張仁愿爲朔方道大總管以備突厥○上以歲早穀貴召太府卿紀處訥謀之明日武三思使知太史事迦葉志忠奏是夜攝提入太微宮至帝坐主大臣宴見納忠於天子上以爲然敕稱處訥忠誠徹於玄象賜衣一襲帛六十段○六月丁卯朔日有食之○姚弋鞬道討擊使監察御史晉昌唐九徵擊姚州叛蠻破之斬獲三千餘人○皇后以太子重俊非其所生惡之特進德靜王武三思尤忌太子上官婕妤以三思故每下制敕推尊武氏安樂公主與駙馬左衛將軍武崇訓常陵侮太子或呼爲奴崇訓又教公主言於上請廢太子立己爲皇太女太子積不能平秋七月辛丑太子與左羽林大將軍李多祚將軍李思冲李承況獨孤禱之沙吒忠義等矯制

發羽林千騎兵三百餘人殺三思崇訓于其第并親黨十餘人又使左金吾大將軍成王千里及其子天水王禧分兵守宮城諸門太子與多祚引兵自肅章門斬關而入叩閣索上官婕妤好婕妤大言曰觀其意欲先索婉兒次索皇后次及大家上乃與韋后安樂公主上官婕妤登玄武門樓以避兵鋒使右羽林大將軍劉景仁帥飛騎百餘人屯於樓下以自衛楊再思蘇瓌李嶠與兵部尚書宗楚客左衛將軍紀處訥擁兵二千餘人屯太極殿前閉門自守多祚先至玄武樓下欲升樓宿衛拒之多祚與太子狐疑按兵不戰冀上問之宮闈令石城楊思勗在上側請擊之多祚壻羽林中郎將野呼利爲前鋒總管思勗挺刃斬之多祚軍奪氣上據檻俯謂多祚所將千騎曰汝輩皆朕宿衛之士何爲從多祚反苟能斬反者勿患不富貴於是千騎斬多祚承況禕之忠義餘衆皆潰成王千里天水王禧攻右延明門將殺宗楚客紀處訥不克而死太子以百騎走終南山至鄠西能屬者纔數人憩於林下爲左右所殺上以其首獻太廟及祭三思崇訓之柩然後梟之朝堂更成王千里姓曰蝮氏同黨皆伏誅東宮僚屬無敢近太子尸者唯永和縣丞竇嘉勗解衣裹太子首號哭貶興平丞太子兵所經諸門守者皆坐流韋氏之黨奏請悉誅之上更命法司推斷大理卿宋城鄭惟忠曰大獄始決人心未安若復有改推則反仄者衆矣上乃止以楊思勗爲銀青光祿大夫行內常侍癸卯赦天下贈武三思太尉梁宣王武崇訓開府儀同三司魯忠王安樂公主請用永泰手敕曰安樂與永泰無異同穴之義今古不殊祭又奏陛下以膝下之愛施及其夫豈可使上下無辨君臣一貫哉上乃從之公主怒出祭爲陳州刺史襄邑尉襄陽席豫聞安樂公主求爲太女歎曰梅福譏切王氏獨何人哉乃上書請立太子言甚深切太平公主欲表爲諫官豫恥之逃去○八月戊寅皇后及王公已下表上尊號曰應天神龍皇帝改玄武門爲神

武門樓爲制勝樓。宗楚客又帥百官表請加皇后尊號曰順天翊聖皇后。上竝許之。○初右臺大夫蘇珣治太子重俊之黨。囚有引相王者。荆密爲之申理。上乃不問。自是安樂公主及兵部尚書宗楚客。日夜謀譖相王。使侍御史冉祖雍誣奏相王。及太平公主云。與重俊通謀。請收付制獄。上召吏部侍郎兼御史中丞蕭至忠。使鞫之。至忠泣曰。陛下富有四海。不能容一弟一妹。而使人羅織害之乎。相王昔爲皇嗣。固請於則天。以天下讓陛下。累日不食。此海內所知。奈何以祖雍一言而疑之。上素友愛。遂寢其事。右補闕浚儀吳兢聞祖雍之謀。上疏以爲自文明以來。國之祚胤。不絕如綫。陛下龍興。恩及九族。求之瘴海。升之闕庭。況相王同氣至親。六合無貳。而賊臣日夜連謀。乃欲陷之極法。禍亂之根。將由此始。夫任以權。則雖疎必重。奪其勢。則雖親必輕。自古委任異姓。猜忌骨肉。以覆國亡家者。幾何人矣。況國家枝葉無幾。陛下登極未久。而一子以弄兵受誅。一子以愆違遠竄。惟餘一弟。朝夕左右。尺布斗粟之譏。不可不慎。青蠅之詩。良可畏也。相王寬厚恭謹。安恬好讓。故經武韋之世。竟免於難。○初右僕射中書令魏元忠。以武三思擅權。意常憤鬱。及太子重俊起兵。遇元忠子太僕少卿升於永安門。脅以自隨。太子死。升爲亂兵所殺。元忠揚言曰。元惡已死。雖鼎鑊何傷。但惜太子隕沒耳。上以其有功。且爲高宗武后所重。故釋不問。兵部尚書宗楚客。太府卿紀處訥等。其證元忠云。與太子通謀。請夷其三族。制不許。元忠懼。表請解官爵。以散秩還第。丙戌。上手敕聽解僕射。以特進齊公致仕。仍朝朔望。○九月。丁酉。以吏部侍郎蕭至忠爲黃門侍郎。兵部尚書宗楚客爲左衛將軍。兼太府卿。紀處訥爲太府卿。竝同中書門下三品。中書侍郎同中書門下三品。子惟謙。罷爲國子祭酒。○庚子。赦天下。改元。○宗楚客等引右衛郎將姚廷筠爲御史中丞。使劾奏魏元忠。以爲侯君集社稷元勛。及其謀反。太宗就羣臣乞其命。而不得。竟流涕斬之。其後房遺愛。薛萬徹。齊王祐等爲逆。雖復懿親。皆從國法。元忠功不逮君集。

身又非國戚。與李多祚等謀反。男入逆徒。是宜赤族汚宮。但有朋黨。飾辭營救。以惑聖聽。陛下仁恩欲掩其過。臣所以犯龍鱗。忤聖意者。正以事關宗社耳。上頗然之。元忠坐繫大理。貶渠州司馬。宗楚客令給事中冉祖雍奏言。元忠既犯大逆。不應出佐渠州。楊再思。李嶠亦贊之。上謂再思等曰。元忠驅使日久。朕特矜容。制命已行。豈宜數改。輕重之權。應自朕出。卿等頻奏。殊非朕意。再思等惶懼拜謝。監察御史袁守一。復表彈元忠曰。重俊乃陛下之子。猶加昭憲。元忠非勳非戚。焉得獨漏嚴刑。甲辰。又貶元忠務川尉。頃之。楚客又令袁守一奏言。則天昔在三陽宮。不豫。狄仁傑奏。請陛下監國。元忠密奏。以爲不可。此則元忠懷逆日久。請加嚴誅。上謂楊再思等曰。以朕思之。人臣事主。必在一心。豈有主上小疾。遽請太子知事。此乃仁傑欲樹私恩。未見元忠有失。守一欲借前事。以陷元忠。其可乎。楚客乃止。元忠行至涪陵而卒。○銀青光祿大夫上庸公聖善。中。西。明。三。寺。主。慧。範。於。東。都。作。聖。善。寺。長。樂。坡。作。大。像。府。庫。爲。之。虛。耗。上。及。韋。后。皆。重。之。勢。傾。內。外。無。敢。指。目。者。戊。申。侍。御。史。魏。傳。弓。發。其。姦。賊。四十餘萬。請寘極法。上欲宥之。傳弓曰。刑賞國之大事。陛下賞已妄加。豈宜刑所不及。上乃削黜慧範。放于家。宦官左監門大將軍薛簡等。有寵於安樂公主。縱暴不法。傳弓奏請誅之。御史大夫竇從一懼。固止之。時宦官用事。從一爲雍州刺史。及御史大夫。誤見訟者。無須。必曲加承接。○以楊再思爲中書令。韋巨源。紀處訥。竝爲侍中。○壬戌。改左右羽林千騎爲萬騎。○冬。十月。丁丑。命左屯衛將軍張仁愿充朔方道大總管。以擊突厥。比至虜已退。追擊大破之。○習藝館內教蘇安恒。矜高好奇。太子重俊之誅。武三思也。安恒自言。此我之謀。太子敗。或告之。戊寅。伏誅。○十二月。乙丑朔。日有食之。○是歲。上遣使者分道詣江淮。贖生。中書舍人房子李义上疏諫曰。江南鄉人。采捕爲業。魚鼈之利。黎元所資。雖雲雨之私。有霑於末類。而生成之惠。未洽於平人。何則。江湖之饒。生育無限。府庫之用。支供易殫。費之若少。則所

濟何成。用之儻多。則常支有闕。在其拯物。豈若憂人。且鬻生之徒。惟利是視。錢刀日至。網罟年滋。施之一朝。營之百倍。未若迴救贖之錢物。減貧無之徭賦。活國愛人。其福勝彼。

資治通鑑卷第二百八

資治通鑑卷第二百九

唐紀二十五

中宗大和大聖大昭孝皇帝下

景龍二年春二月庚寅宮中言皇后衣笥裙上有五色雲起上令圖以示百官韋巨源請布之天下從之仍赦天下迦葉志忠奏昔神堯皇帝未受命天下歌桃李子文武皇帝未受命天下歌秦王破陣樂天皇帝未受命天下歌堂堂則天后未受命天下歌娥媚娘應天皇帝未受命天下歌英王石州順天后未受命天下歌桑條韋蓋天意以為順天后后宜為國母主蠶桑之事謹上桑歌十二篇請編之樂府皇后祀先蠶則奏之太常卿鄭愷又引而申之上悅皆受厚賞右補闕趙延禧上言周唐一統符命同歸故高宗封陛下為周王則天時唐同泰獻洛水圖孔子曰其或繼周者雖百代可知也陛下繼則天子孫當百代王天下上悅擢延禧為諫議大夫○丁亥蕭至忠上疏以為恩倖者止可富之金帛食以梁肉不可以公器為私用今列位已廣冗員倍之干求未厭日月增數陛下降不貲之澤近戚有無涯之請賣官利己鬻法徇私臺寺之內朱紫盈滿忽事則不存職務恃勢則公違憲章徒忝官曹無益時政上雖嘉其意竟不能用○三月丙辰朔方道大總官張仁愿築三受降城於河上初朔方軍與突厥以河為境河北有拂雲祠突厥將入寇必先詣祠祈禱牧馬料兵而後度河時默啜悉眾西擊突騎施仁愿請乘虛奪取漠南地於河北築三受降城首尾相應以絕其南寇之路太子少師唐休璟以為兩漢以來皆北阻大河今築城寇境恐勞人費

功終為虜有。仁愿固請不已。上竟從之。仁愿表留歲滿鎮兵。以助其功。咸陽兵二百餘人逃歸。仁愿悉擒之。斬於城下。軍中股慄。六旬而成。以拂雲祠為中城。距東西兩城各四百餘里。皆據津要。拓地三百餘里。於牛頭朝那山北置烽候千八百所。以左玉鈐衛將軍論弓仁為朔方軍前鋒遊奕使。戎諾真水為邏衛。自是突厥不敢度山。畋牧朔方。無復寇掠。減鎮兵數萬人。仁愿建三城。不置壅門。及備守之具。或問之。仁愿曰。兵貴進取。不利退守。寇至當併力出戰。回首望城者。猶應斬之。安用守備。生其退惡之心也。其後常元楷為朔方軍總管。始築壅門。人是以重仁愿而輕元楷。○夏四月癸未。置修文館。大學士四員。直學士八員。學士十二員。選公卿以下善為文者。李嶠等為之。每遊幸禁苑。或宗戚宴集。學士無不畢從。賦詩屬和。使上官昭容第其甲乙。優者賜金帛。同預宴者。惟中書門下及長參王公親貴數人而已。至大宴。方召八座。九列。諸司五品以上預焉。於是天下靡然。爭以文華相尚。儒學忠讜之士莫得進矣。○秋七月癸巳。以左屯衛大將軍朔方道大總管張仁愿同中書門下三品。○甲午。清源尉呂元泰上疏。以為邊境未寧。鎮戍不息。士卒困苦。轉輸疲弊。而營建佛寺。日廣月滋。勞人費財。無有窮極。昔黃帝堯舜禹湯文武。惟以儉約仁義立德垂名。晉宋以降。塔廟競起。而喪亂相繼。由其好尚失所。奢靡相高。人不堪命。故也。伏願回營造之資。充疆場之費。使烽燧永息。羣生富庶。則如來慈悲之施。平等之心。孰過於此。疏奏不省。○安樂長寧公主及皇后妹鄴國夫人上官婕妤。婕妤母沛國夫人鄭氏。尚宮柴氏。賀婁氏。女巫第五英兒。隴西夫人趙氏。皆依敕用事。請謁受賕。雖屠沽臧獲。用錢三十萬。則別降墨敕。除官。斜封付中書。時人謂之斜封官。錢三萬。則度為僧尼。其員外同正試攝檢校判官。凡數千人。西京東都各置兩吏部侍郎。為四銓。選者歲數萬人。上官婕妤及後宮多立外第。出入無節。朝士往往從之遊處。以求進達。安樂公主尤驕橫。宰相以下多出其門。與長寧公主競起第舍。以侈麗

相高。擬於官掖。而精巧過之。安樂公主請昆明池。上以百姓蒲魚所資。不許。公主不悅。乃更奪民田。作定昆池。延袤數里。累石象華山。引水象天津。欲以勝昆明。故名定昆。安樂有織成裙。直錢一億。花卉鳥獸。皆如粟粒。正視旁視。日中影中。各為一色。上好擊毬。由是風俗相尚。駙馬武崇訓。楊慎交。洒油以築毬場。慎交。恭仁曾孫也。上及皇后公主多營佛寺。左拾遺京兆辛替否上疏諫。略曰。臣聞古之建官。員不必備。士有完行。家有廉節。朝廷有餘俸。百姓有餘食。伏惟陛下。百倍行賞。十倍增官。金銀不供其印。束帛不充於錫。遂使富商豪賈。盡居纓冕之流。鬻伎行巫。或涉膏腴之地。又曰。公主陛下之愛女。然而用不合於古義。行不根於人心。將恐變愛成憎。翻福為禍。何者。竭人之力。費人之財。奪人之家。愛數子而取三怨。使邊疆之士不盡力。朝廷之士不盡忠。人之散矣。獨持所愛。何所恃乎。君以人為本。本固則邦寧。邦寧則陛下之夫婦母子長相保也。又曰。若以造寺必為理體。養人不足。經邦則殷周已往。皆暗亂。漢魏已降。皆聖明。殷周已往。為不長。漢魏已降。為不短矣。陛下緩其所急。急其所緩。親未來而疎。見在。失真實而冀虛無。重俗人之為。輕天子之業。雖以陰陽為炭。萬物為銅。役不食之人。使不衣之士。猶尚不給。況資於天地。養風動雨。潤而後得之乎。一旦風塵再擾。霜電荐臻。沙彌不可操干戈。寺塔不足攘飢饉。臣竊惜之。疏奏。不省。時斜封官皆不由兩省而授。兩省莫敢執奏。即宣示所司。吏部員外郎李朝隱。前後執破一千四百餘人。怨謗紛然。朝隱一無所顧。○冬十月己酉。修文館直學士起居舍人武平一。上表請抑損外戚權寵。不敢斥言韋氏。但請抑損己家。上優制不許。平一名甄。以字行。載德之子也。○十一月庚申。突騎施酋長娑葛自立為可汗。殺唐使者御史中丞馮嘉賓。遣其弟遮努等帥眾犯塞。初娑葛既代烏質勒統眾。父時故將闕啜忠節不服。數相攻擊。忠節眾弱不能支。金山道行軍總管郭元振奏。追忠節入朝宿衛。忠節行至播仙城。經略使右威衛將軍周以悌說之曰。國家不愛

高官顯爵以待君者。以君有部落之衆故也。今脫身入朝。一老胡耳。豈惟不保寵祿。死生亦制於人手。方今宰相宗楚客。紀處訥。用事。不若厚賂二公。請留不行。發安西兵。及引吐蕃。以擊娑葛。求阿史那獻爲可汗。以招十姓。使郭虔瓘發拔汗那兵。以自助。既不失部落。又得報仇。比於入朝。豈可同日語哉。郭虔瓘者。歷城人。時爲西邊將。忠節然其言。遣間使。賂楚客。處訥。請如以悌之策。元振聞其謀。上疏。以爲往歲吐蕃所以犯邊。正爲求十姓四鎮之地。不獲故耳。比者息兵請和。非能慕悅中國之禮義也。直以國多內難。人畜疫癘。恐中國乘其弊。故且屈志求自昵。使其國小安。豈能忘取十姓四鎮之地哉。今忠節不論國家大計。直欲爲吐蕃鄉導。恐四鎮危機將從此始。頃緣默啜憑陵。所應者多。兼四鎮兵疲敵。勢未能爲忠節。復事唐也。往年吐蕃無恩於中國。猶欲求十姓四鎮之地。今若破娑葛有功。請分子闡疎勒。不知以何理抑之。又其所部諸蠻。及婆羅門等。方不服。若借唐兵助討之。亦不知以何詞拒之。是以古之智者。皆不願受夷狄之惠。蓋豫憂其求請無厭。終爲後患故也。又彼請阿史那獻者。豈非以獻爲可汗子孫。欲依之以招懷十姓乎。按獻父元慶。叔父僕羅。兄倭子。及斛瑟羅。懷道等。皆可汗子孫也。往者唐及吐蕃。徧曾立之。以爲可汗。欲以招撫十姓。皆不能致。尋自破滅。何則。此屬非有過人之才。恩威不足以動衆。雖復可汗舊種。衆心終不親附。況獻又疏遠於其父兄乎。若使忠節兵力。自能誘脅十姓。則不必求立可汗子孫也。又欲令郭虔瓘入拔汗那發其兵。虔瓘前此已嘗與忠節擅入拔汗那發兵。不能得其片甲匹馬。而拔汗那不勝侵擾。南引吐蕃。奉倭子還侵四鎮。時拔汗那四旁。無疆寇爲援。虔瓘等恣爲侵掠。如獨行無人之境。猶引倭子爲患。今北有娑葛。急則與之并力。內則諸胡。堅壁拒守。外則突厥。伺隙邀遮。臣料虔瓘等此行。必不能如往年之得志。內外受敵。自陷危亡。徒與虜結隙。令四鎮

不安。以臣愚揣之。實爲非計。楚客等不從。建議遣馮嘉賓。持節安撫忠節。侍御史呂守素。處置四鎮。以將軍牛師獎爲安西副都護。發甘涼以西兵。兼徵吐蕃。以討娑葛。娑葛遣使娑臘。獻馬在京師。聞其謀。馳還報娑葛。於是娑葛發五千騎出安西。五千騎出撥換。五千騎出焉耆。五千騎出疎勒。入寇。元振在疎勒。柵于河口。不敢出。忠節逆嘉賓於計舒河口。娑葛遣兵襲之。生禽忠節。殺嘉賓。禽呂守素於僻城。縛於驛柱。高而殺之。○上以安樂公主將適左衛中郎將武延秀。遣使召太子賓客武攸緒於嵩山。攸緒將至上。敕禮官於兩儀殿設別位。欲行問道之禮。聽以山服葛巾入見。不名不拜。仗入。通事舍人引攸緒就位。攸緒趨立。辭見班中。再拜如常儀。上愕然。竟不成所擬之禮。上屢延之內殿。頻煩寵錫。皆謝不受。親貴謁候。寒溫之外。不交一言。初武崇訓之尙公主也。延秀數得侍宴。延秀美姿儀善歌舞。公主悅之。及崇訓死。遂以延秀尙焉。己卯。成禮。假皇后仗。分禁兵。以盛其儀衛。命安國相王障。車。庚辰。赦天下。以延秀爲太常卿。兼右衛將軍。辛巳。宴羣臣于兩儀殿。命公主出拜公卿。公卿皆伏地稽首。○癸未。牛師獎與突騎施娑葛戰于火燒城。師獎兵敗沒。娑葛遂陷安西。斷四鎮路。遣使上表。求宗楚客頭。楚客又奏。以周以悌代郭元振統衆。徵元振入朝。以阿史那獻爲十姓可汗。置軍焉耆。以討娑葛。娑葛遣元振書稱。我與唐初無惡。但讐闕啜。宗尙書受闕啜金。欲枉破奴部落。馮中丞。牛都護相繼而來。奴豈得坐而待死。又聞史獻欲來。徒擾軍州。恐未有寧日。乞大使商量處置。元振奏。娑葛書。楚客怒。奏言。元振有異圖。召將罪之。元振使其子鴻。開道具奏其狀。乞留定西土。不敢歸。周以悌竟坐流白州。復以元振代以悌。赦娑葛罪。冊爲十四姓可汗。以婕妤上官氏爲昭容。○十二月。御史中丞姚延筠奏稱。比見諸司。不遵律令格式。事無大小。皆悉聞奏。臣聞。爲君者任臣。爲臣者奉法。萬機叢委。不可徧覽。豈有修一水竇。伐一枯木。皆取斷宸衷。自今若軍國大事。及條式無文者。聽奏取進止。自餘各準法處分。

其有故生疑滯致有稽失望令御史糾彈從之。○丁巳晦敕中書門下與學士諸王駙馬入閣守歲設庭燎置酒奏樂酒酣上謂御史大夫竇從一曰聞卿久無伉儷朕甚憂之今夕歲除爲卿成禮從一但唯唯拜謝俄而內侍引燭籠步障金縷羅扇自西廊而上扇後有人衣禮衣花釵令與從一對坐上命從一誦却扇詩數首扇却去花易服而出徐視之乃皇后乳母王氏本蠻婢也上與侍臣大笑詔封莒國夫人嫁爲從一妻俗謂乳母之婿曰阿翁從一每謁見及進表狀自稱翊聖皇后阿翁時人謂之國翁從一欣然有自負之色

三年春正月丁卯制廣東都聖善寺居民失業者數十家○長寧安樂諸公主多縱僮奴掠百姓子女爲奴婢侍御史袁從之收繫獄治之公主訴于上手制釋之從之奏稱陛下縱奴掠良人何以理天下上竟釋之○二月己丑上幸玄武門與近臣觀宮女拔河又命宮女爲市肆公卿爲商旅與之交易因爲忿爭言辭褻慢上與后臨觀爲樂○丙申監察御史崔琬對仗彈宗楚客紀處訥潛通戎狄受其貨賂致生邊患故事大臣被彈俯僂趨出立於朝堂待罪至是楚客更憤怒作色自陳忠鯁爲琬所誣上竟不窮問命琬與楚客結爲兄弟以和解之時人謂之和事天子○壬寅以韋巨源爲左僕射楊再思爲右僕射竝同中書門下三品○上數與近臣學士宴集令各效伎藝以爲樂工部尚書張錫舞談容娘將作大匠宗晉卿舞渾脫左衛將軍張洽舞黃鸞左金吾將軍杜元談誦婆羅門呪中書舍人盧藏用效道士上章國子司業河東郭山暉獨曰臣無所解請歌古詩上許之山暉乃歌鹿鳴蟋蟀明日上賜山暉敕嘉美其意賜時服一襲上又嘗宴侍臣使各爲迴波辭衆皆爲諂語或自求榮祿諫議大夫李景伯曰迴波爾持酒卮微臣職在箴規侍宴既過三爵諛譁竊恐非儀上不悅蕭至忠曰此真諫官也○三月戊午以宗楚客爲中書令蕭至忠爲侍中太府卿韋嗣立爲中書侍郎同中書門下三品中書侍郎崔湜趙彥昭竝同平章事崔湜通於上官昭容

故昭容引以爲相彥昭張掖人也時政出多門濫官充溢人以爲三無坐處謂宰相御史及員外官也韋嗣立上疏以爲比者造寺極多務取崇麗大則用錢百數十萬小則三五萬無慮所費千萬以上人力勞弊怨嗟盈路佛之爲教要在降伏身心豈彫畫土木相誇壯麗萬一水旱爲災戎狄構患雖龍象如雲將何救哉又食封之家其數甚衆昨問戶部云用六十六萬丁一丁絹兩匹凡百二十餘萬匹臣頃在太府每歲庸絹多不過百萬少則六七十萬匹比之封家所入殊少夫有佐命之勳始可分茅胙土國初功臣食封者不過三二十家今以恩澤食封者乃踰百數國家租賦大半私門私門有餘徒益奢侈公家不足坐致憂危制國之方豈謂爲得封戶之物諸家自徵僮僕依執陵轅州縣多索裏頭轉行貿易煩擾驅迫不勝其苦不若悉計丁輸之太府使封家於左藏受之於事爲愈又員外置官數倍正闕曹署典吏困於祗承府庫倉儲竭於資奉又刺史縣令近年以來不存簡擇京官有犯及聲望下者方遣刺州吏部選人衰耄無手筆者方補縣令以此理人何望率化望自今應除三省兩臺及五品以上清望官皆先於刺史縣令中選用則天下理矣上弗聽○戊寅以禮部尚書韋溫爲太子少保同中書門下三品太常卿鄭愔爲吏部尚書同平章事溫皇后之兄也○太常博士唐紹以武氏吳陵順陵置守戶五百與昭陵數同梁宣王魯忠王墓守戶多於親王五倍韋氏褒德廟衛兵多於太廟上疏請量裁減不聽紹臨之孫也○中書侍郎兼知吏部侍郎同平章事崔湜吏部侍郎同平章事鄭愔俱掌銓衡傾附勢要賄賂狼籍數外留人授擬不足逆用三年闕選法大壞湜父挹爲司業受選人錢湜不之知長名放之其人訴曰公所親受某賂奈何不與官湜怒曰所親爲誰當擒取杖殺之其人曰公勿杖殺將使公遭憂湜大慙侍御史靳恒與監察御史李尙隱對仗彈之上下湜等獄命監察御史裴濯按之安樂公主諷濯寬其獄濯復對仗彈之夏五月丙寅愔免死流吉州湜貶江州司馬上官

昭容密與安樂公主武延秀曲爲申理。明日以湜爲襄州刺史。愔爲江州司馬。○六月。右僕射同中書門下三品楊再思薨。○秋七月。突騎施娑葛遣使請降。庚辰。拜欽化可汗。賜名守忠。○八月。己酉。以李嶠同中書門下三品。韋安石爲侍中。蕭至忠爲中書令。至忠女適皇后舅子崔無誡。成昏日。上主蕭氏。后主崔氏。時人謂之天子嫁女。皇后娶婦。○上將祀南郊。丁酉。國子祭酒祝欽明。國子司業郭山暉。建言古者大祭祀。后裸獻以瑤爵。皇后當助祭。天地太常博士貞紹。蔣欽緒。駁之。以爲鄭玄注。周禮內司服。惟有助祭先王先公。無助祭天地之文。皇后不當助祭。南郊。國子司業鹽官褚無量議。以爲祭天。惟以始祖爲主。不配以祖妣。故皇后不應預祭。韋巨源定儀注。請依欽明議。上從之。以皇后爲亞獻。仍以宰相女爲齋娘。助執豆籩。欽明又欲以安樂公主爲終獻。紹欽緒固爭。乃止。以巨源攝太尉。爲終獻。欽緒膠水人也。○乙巳。上幸定昆池。命從官賦詩。黃門侍郎李日知詩曰。所願躋思居者逸。勿使時稱作者勞。及睿宗卽位。謂日知曰。當是時。朕亦不敢言之。○九月。戊辰。以蘇瓌爲右僕射。同中書門下三品。○太平安樂公主。各樹朋黨。更相黨毀。上患之。冬十一月。癸亥。上謂修文館直學士武平一曰。比聞內外親貴。多不輯睦。以何法和之。平一以爲。此由讒諂之人。陰爲離間。宜深加誨諭。斥逐姦險。若猶未已。伏願捨近圖遠。抑慈存嚴。示以知禁。無令積惡。上賜平一帛。而不能其言。○上召前修文館學士崔湜。鄭愔。入陪大禮。乙丑。上祀南郊。赦天下。并十惡咸赦除之。流人竝放還。齋娘有婿者。皆改官。○甲戌。開府儀同三司平章軍國重事豆盧欽望薨。○乙亥。吐蕃贊普遣其大臣尙贊咄等千餘人。逆金城公主。○河南道巡察使監察御史宋務光。以於時食實封者。凡一百四十餘家。應出封戶者。凡五十四州。皆割上腴之田。或一封分食數州。而太平安樂公主。又取高貲多丁者。刻剝過苦。應充封戶者。甚於征役。滑州地出綾緜。人多趨射。尤受其弊。人多流亡。請稍分封戶。散配餘州。又徵封使者。煩擾公私。

請附租庸。每年送納。上弗聽。○時流人皆放還。均州刺史譙王重福。獨不得歸。乃上表。自陳曰。陛下焚柴展禮。郊祀上玄。蒼生竝得赦除。赤子偏加擯棄。皇天平分之道。固若此乎。天下之人。聞者爲臣流涕。況陛下慈念。豈不感臣栖遑。表奏不報。○前右僕射致仕唐休璟。年八十餘。進取彌銳。娶賀婁尙宮養女爲其子婦。十二月。壬辰。以休璟爲太子少師。同中書門下三品。○甲午。上幸驪山溫湯。庚子。幸韋嗣立莊舍。以嗣立與周高士韋夔同族。賜爵道遙公。嗣立。皇后之疎屬也。由是。顧賞尤重。乙巳。還宮。○是歲。關中飢。米斗百錢。運山東江淮穀輸京師。牛死什八九。羣臣多請車賀。復幸東都。韋后家本杜陵。不樂東遷。乃使巫覡彭君卿等說上云。今歲不利東行。後復有言者。上怒曰。豈有逐糧天子邪。乃止。

睿宗玄真大聖大興孝皇帝上

景雲元年。春正月。丙寅夜。中宗與韋后微行。觀燈於市里。又縱宮女數千人出遊。多不歸者。○上命紀處訥送金城公主。適吐蕃。處訥辭。又命趙彥昭。彥昭亦辭。丁丑。命左驍衛大將軍楊矩送之。己卯。上自送公主。至始平。二月。癸未。還宮。公主至吐蕃。贊普爲之別築城。以居之。○庚戌。上御梨園毬場。命文武三品以上。拋毬。及分朋拔河。韋巨源。唐休璟。衰老。隨。絙踏地。久之。不能興。上及皇后。妃主。臨觀大笑。○夏四月。丙戌。上遊芳林園。命公卿。馬上摘櫻桃。○初。則天之世。長安城東隅。民王純家。井溢。浸成大池。數十頃。號隆慶池。相王子五王。列第於其北。望氣者言。常鬱鬱有帝王氣。比日尤盛。乙未。上幸隆慶池。結綵爲樓。宴侍臣。泛舟戲象。以厭之。○定州人郎岌。上言。韋后淫亂。干預國政。宗族彊盛。安樂公主。武延秀。宗楚客。圖危宗社。上召欽融。面詰之。欽融頓首抗言。神色不撓。上默然。宗楚客。矯制。令飛騎撲殺之。投於殿。

庭石上折頸而死。楚客大呼稱快。上雖不窮問，意頗快，不悅。由是，韋后及其黨始憂懼。○己卯，上宴近臣，國子祭酒祝欽明自請作八風舞，搖頭轉目，備諸醜態，上笑。欽明素以儒學著名，吏部侍郎盧藏用私謂諸學士曰：「祝公五經掃地盡矣。」○散騎常侍馬秦客以醫術光祿少卿楊均，以善烹調，皆出入宮掖，得幸于韋后。恐事泄被誅，安樂公主欲韋后臨朝，自為皇太女，乃相與合謀，於餅餠中進毒。六月壬午，中宗崩于神龍殿。韋后祕不發喪，自總庶政。癸未，召諸宰相入禁中，徵諸府兵五萬人屯京城，使駙馬都尉韋捷、韋灌衛尉卿韋璿、左千牛中郎將韋錡、長安令韋播、郎將高嵩分領之。璿之族弟播從子嵩，其甥也。中書舍人韋元微、巡六街，又命左監門大將軍兼內侍薛思簡等將兵五百人馳驛戍均州，以備譙王重福。以刑部尚書裴談、工部尚書張錫、竝同中書門下三品，仍充東都留守。吏部尚書張嘉福、中書侍郎岑義、吏部侍郎崔湜、竝同平章事。義、長倩之從子也。太平公主與上官昭容謀，草遺制，立溫王重茂為皇太子。皇后知政事，相王旦參謀政事。宗楚客密謂韋溫曰：「相王輔政，於理非宜。且於皇后嫂叔不通問，聽朝之際，何以為禮？遂帥諸宰相表請皇后臨朝，罷相王政事。」蘇瓌曰：「遺詔豈可改邪？」溫楚客怒，瓌懼而從之。乃以相王為太子太師，甲申，梓宮遷御太極殿。集百官發喪，皇后臨朝攝政。赦天下，改元唐隆。進相王旦、太尉雍王守禮為關王、壽春王，成器為宋王。以從人望，命韋溫總知內外守捉兵馬事。丁亥，殤帝即位。時年十六，尊皇后為皇太后，立妃陸氏為皇后。壬辰，命紀處訥持節巡撫關內道。岑義河南道，張嘉福河北道。宗楚客與太常卿武延秀、司農卿趙履溫、國子祭酒葉靜能及諸韋共勸韋后，遵武后故事。南北衛軍臺閣要司皆以韋氏子弟領之。廣聚黨衆，中外連結。楚客又密上書稱引圖讖，謂韋氏宜革唐命，謀害殤帝。深忌相王及太平公主，密與韋溫、安樂公主謀去之。相王子臨淄王隆基先罷潞州別駕，在京師陰聚才勇之士，謀匡復社稷。初，太宗選官戶及蕃口驍勇

者，著虎文衣，跨豹文韉，從遊獵於馬前，射禽獸，謂之百騎。則天時稍增為千騎，隸左右羽林。中宗謂之萬騎，置使以領之。隆基皆厚結其豪傑，兵部侍郎崔日用、素附韋武與宗楚客善。知楚客謀，恐禍及己，遣寶昌寺僧普潤密詣隆基告之，勸其速發。隆基乃與太平公主及公主子衛尉卿薛崇暕、苑總監瀨人鍾紹京、尚衣奉御王崇暉、前朝邑尉劉幽求、利仁府折衝麻嗣宗謀，先事誅之。韋播高嵩數榜捶萬騎，欲以立威。萬騎皆怨，果殺萬福、順陳、玄禮。見隆基訴之，隆基諷以誅諸韋，皆踴躍請以死。自效。萬騎果殺李仙舟，亦預其謀。或謂隆基當啓相王，隆基曰：「我曹為此以狗社稷事成，福歸于王，不成以身死之，不以累王也。今啓而見從，則王預危事，不從將敗大計，遂不啓。庚子晡時，隆基微服與幽求等入苑中，會鍾紹京、麻舍、紹京悔欲拒之，其妻許氏曰：「忘身殉國，神必助之。」且同謀素定，今雖不行，庸得免乎？紹京乃趨出拜謁隆基，執其手與坐。時羽林將士皆屯玄武門，連夜，萬福、順、李仙舟皆至，隆基所請號而行。向二鼓，天星散落如雪。劉幽求曰：「天意如此，時不可失。」福順拔劍直入羽林營，斬韋璿、韋播、高嵩，以徇。曰：「韋后醜殺先帝，謀危社稷，今夕當共誅諸韋，馬鞭以上皆斬之。」立相王以安天下。敢有懷兩端，助逆黨者，罪及三族。羽林之士皆欣然聽命。乃送璿等首於隆基。隆基取火視之，遂與幽求等出苑南門，紹京帥丁匠二百餘人，執斧鋸以從。使福順將左萬騎，攻玄武門。仙舟將右萬騎，攻白獸門。約會於凌烟閣前，即大譟。福順等共殺守門將，斬關而入。隆基勒兵玄武門外，三鼓聞譟聲，帥總監及羽林兵而入，諸衛兵在太極殿宿衛梓宮者，聞譟聲皆被甲應之。韋后惶惑走入飛騎營，有飛騎斬其首，獻於隆基。安樂公主方照鏡，畫眉，軍士斬之。斬武延秀於肅章門外，斬內將軍賀婁氏於太極殿西。初，上官昭容引其從母之子王昱為左拾遺，昱說昭容母鄭氏曰：「武氏天之所廢，不可與也。今婕妤附於三思，此滅族之道也。願姨思之。」鄭氏以戒昭容。昭容弗聽。及太子重俊起兵討三思，索昭容，昭容始懼。

思昱言自是心附帝室與安樂公主各樹朋黨及中宗崩昭容草遺制立溫王以相王輔政宗章改之及隆基入宮昭容執燭帥宮人迎之以制草示劉幽求幽求為之言隆基不許斬于旗下時少帝在太極殿劉幽求曰衆約今夕共立相王何不早定隆基遽止之捕索諸韋在宮中及守諸門并素為韋后所親信者皆斬之比曉內外皆定辛巳隆基出見相王叩頭謝不先啓之罪相王抱之泣曰社稷宗廟不墜于地汝之力也遂迎相王入輔少帝閉宮門及京城門分遣萬騎收捕諸韋親黨斬太子少保同中書門下三品韋溫於東市之北中書令宗楚客衣斬衰乘青驢逃出至通化門門者曰公尚書也去布帽執而斬之并斬其弟晉卿相王奉少帝御安福門慰諭百姓初趙履溫傾國資以奉安樂公主為之起第舍築臺穿池無休已攝紫衫以項挽公主轎車公主死履溫馳詣安福樓下舞蹈稱萬歲聲未絕相王令萬騎斬之百姓怨其勞役爭割其肉立盡祕書監汴王邕娶韋后妹崇國夫人與御史大夫竇從一各手斬其妻首以獻邕鳳之孫也左僕射同中書門下三品韋巨源聞亂家人勸之逃匿巨源曰吾位大臣豈可聞難不赴出至都街為亂兵所殺時年八十於是梟馬秦客楊均葉靜能等首尸韋后于市崔日用將兵誅諸韋於杜曲襁褓兒無免者諸杜濫死非一是日赦天下云逆賊魁首已誅自餘支黨一無所問以臨淄王隆基為平王兼知內外閑廐押左右廂萬騎薛崇暉賜爵立節王以鍾紹京守中書侍郎劉幽求守中書舍人竝參知機務麻嗣宗行右金吾衛中郎將武氏宗屬誅死流竄殆盡侍中紀處訥行至華州吏部尚書同平章事張嘉福行至懷州皆收斬之王寅劉幽求在太極殿有宮人與宦官令幽求作制書立太后幽求曰國有大難人情不安山陵未畢遽立太后不可平王隆基曰此勿輕言遣十道使齋璽書宣撫及詣均州宣慰譙王重福貶竇從一為濠州司馬罷諸公主府官癸卯太平公主傳少帝命請讓位於相王相王固辭以平王隆基為殿中監同中書門下三品

以宋王成器為左衛大將軍衡陽王成義為右衛大將軍巴陵王隆範為左羽林大將軍彭城王隆業為右羽林大將軍光祿少卿嗣道王徽檢校右金吾衛大將軍微元慶之孫也以黃門侍郎季日知中書侍郎鍾紹京竝同中書門下三品太平公主之子薛崇訓為右千牛衛將軍隆基有二奴王毛仲李守德皆趨勇善騎射常侍衛左右隆基之入苑中也毛仲避匿不從事定數日方歸隆基不之責仍超拜將軍毛仲本高麗也汴王邕貶沁州刺史左散騎常侍駙馬都尉楊慎交貶巴州刺史中書令蕭至忠貶許州刺史兵部尚書同中書門下三品韋嗣立貶宋州刺史中書侍郎同平章事趙彥昭貶絳州刺史吏部侍郎同平章事崔湜貶華州刺史劉幽求言於宋王成器平王隆基曰相王疇昔已居宸極羣望所屬今人心未安家國事重相王豈得尙守小節不早即位以鎮天下乎隆基曰王性恬淡不以代事嬰懷雖有天下猶讓於人況親兄之子安肯代之乎幽求曰衆心不可違王雖欲高居獨善其如社稷何成器隆基入見相王極言其事相王乃許之甲辰少帝在太極殿東隅西向相王立于梓宮旁太平公主曰皇帝欲以此位讓叔父可乎幽求跪曰國家多難皇帝仁孝追蹤堯舜誠合至公相王之任重慈愛尤厚矣乃以少帝制傳位相王時少帝猶在御坐太平公主進曰天下之心已歸相王此非兒座遂提下之睿宗即位御承天門赦天下復以少帝為溫王以鍾紹京為中書令鍾紹京少為司農錄事既典朝政縱情賞罰衆皆惡之太常少卿薛稷勸其上表禮讓紹京從之稷入言於上曰紹京雖有勳勞素無才德出自胥徒一旦超居元宰恐失聖朝具瞻之美上以為然丙午改除戶部尚書尋出為蜀州刺史○上將立太子以宋王成器嫡長而平王隆基有大功疑不能決成器辭曰國家安則先嫡長國家危則先有功苟違其宜四海失望臣死不敢居平王之上涕泣固請者累日大臣亦多言平王功大宜立劉幽求曰臣聞除天下之禍者當享天下之福平王拯社稷之危救君親之難論